

587-203



1200501524632

7

203





寫枝金



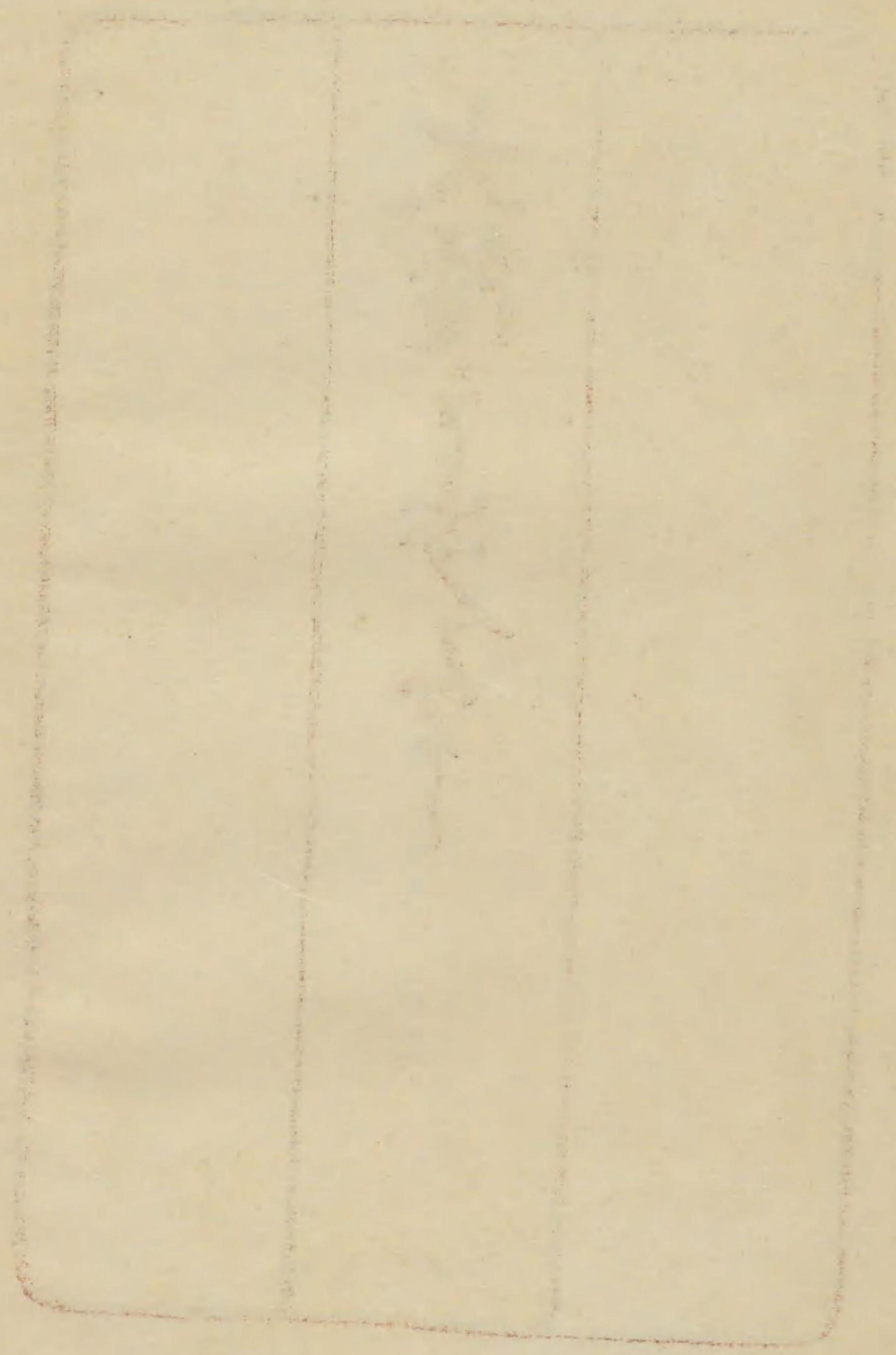
大陸

を歩み



大陸を歩み

金



金枝新次

奉天宮殿

(吉順 絲房より)

587-203

序

産業界の將來を揣り滿蒙及南支に留意し生徒の視察旅行を實施して十年相當の實績を擧げ得たり噫これ往古聖人の國も今や人に乏しく木偶土梗徒に陸梁生民塗炭にあり而して保隣の任にある我が經綸の大策は炳焉として齊しく世界の推服する所洵に正義と平和を基調とせる我が國民踊躍命に配するの秋なり頃日該方面に關する著書棟に充つる中に本書は記事裝幀悉く本校昭和六年旅行生の作に係り年少の識亦傾聽すべきものあり乃ち將來の東亞に卓立すべき青年諸君の一粲を得ば他山の石に止まらざるべきことを信じ今茲にこれが上梓を見るに方り一言を題する所以なり

昭和六年十一月

東京府立第一商業學校長 羽田又永

序

七月紀行が成り九月研究が纏まり、上梓をしてゐる中に、滿洲事變が勃發した。この事變以後滿洲の事情は急轉するであらうから、學校にとつてもこの版行は紀念となり、この書を社會に提出することも意義なしとしない。偶然、時局に際會し、何人も深く滿洲へ關心を持つやうになつて、滿蒙に關する著述は日を逐うて發刊される時、時局を當てゝの著述でないだけに、正に價値あるものと信ずる。もとより匆々たる船車の旅、而も年少の觀察である、決して誤りなしとはしないが、八十の眼に映じた支那、各人各様の觀察は亦讀み來るに面白く、中々よい研究もあると信ずる。敢て推薦する所以である。

昭和六年十二月

東京府立第一商業學校
第七回中華民國視察團長

岡田潤一郎

目次

第一編 紀行(記録係)……………	一頁—二二二頁
朝鮮(釜山、慶州、金剛山、京城、平壤)	
滿洲(安東、撫順、奉天、長春、ハルピン、旅順、大連、青島)	
南支(上海、杭州、南京、蘇州)	
第二編 研究(團員八十人各々一編を認む)……………	一二三頁—三八八頁
朝鮮——滿洲——南支——支那一般	
第三編 餘録……………	三八九頁—四四六頁
講演集(安東、ハルピン、青島、上海)	
北京遊記	
チ、ハル遊記	
第一回以來の日程と團員及芳名録	
挿入寫眞——三百八十。岡田團長及團員撮影	
裝幀——字：羽佐田、繪：清水、見返し：金枝	

一三	一二	一一	一〇	九
三日	二日	六月一日	卅一日	三十日
湯崗子 長春	哈爾濱	哈爾濱 長春	奉天	奉天 撫順 奉天
着後 發前 着前	發後	着後 發前 着前	發後	着後 發後 着前 發前
八、一〇 九、二〇 六、四〇 四	一〇、四五	二、二〇 七、四九 七、〇〇	九、二〇	五、二〇 三、五五 八、一〇 六、三五 六、二〇
溫泉入浴 市場、長春商業學校、紀念公園、運動場	商品陳列館、松花江、傅家甸、東支鐵道俱樂部、公園、市街、松浦及チウリソ商會	滿鐵公所、日露協會學校、沖橫川兩志士ノ碑、領事館、三井物産會社	北陵	炭坑事務所、露天堀、大山坑、選鑛場 オイルセイル工場 忠魂碑、醫大、領事館、城内、同善堂 舊宮殿、吉順絲房
湯崗子 (對翠閣)	車 中	哈爾濱 (名古屋館)	車 中	奉天 (瀋陽館)

八	七	六	五		
廿九日	廿八日	廿七日	廿六日		
安東	安東 平壤	京城	京城	鐵原	鐵原
發後	着後 發前 着前	發後	着後 發後 着後	發後 着前 發前	着前 發前
八、四五	八、五五 三、一八 六、一〇	一、〇〇	一〇、四五 八、三五 八、一八	四、〇五 三、三〇 六、三〇	六、〇二 二、四〇 二、一八
探木公司、大鐵橋、鴨綠江、市街、鎮江山公園、製紙、製材工場	博物館、箕子廟、乙密臺、玄武門、牡丹臺、浮碧樓、練光亭、大同門、市街	府品陳列場、朝鮮神宮、景福宮、總督府、博物館、昌德宮、秘苑、動物園、南大門、市街	長安寺、表訓寺、萬瀑洞、萬瀑八潭、普德窟、摩珂衍、明鏡臺		
車 中	安東 (元寶館)	車 中	京 城 (大東館)		

二五	二四	二三	二二	二一	二〇
十五日	十四日	十三日	十二日	十一日	十日
上海 蘇州	南京	上海	杭州 上海	杭州 上海	上海
着後 發前 四、三五	着前 發後 一七、〇〇	發後 一一、〇〇	着後 發前 二、〇五	着後 發前 一、五五	着後 四、〇〇
太湖、虎邱、楓橋、寒山寺、城內、北寺塔、	孝陵、寶院、秦淮、孔子廟、中央、政府、明、中山、墓、		正金銀行、三井物産會社、碼頭、パブリックガーデン、日本公園、黃浦灘、パノンド、銀行街、取引所、中央市場、城內、大馬路(南京路)四馬路(福州路)競馬場	大運河、葛嶺、靈隱寺、玉泉寺、岳飛、孤山、三潭印月、西湖	市街
上海	車中	車中	上海	杭州(新々旅館)	上海(萬歲館)

一九	一八	一七	一六	一五	一四
九日	八日	七日	六日	五日	四日
青島	大連	大連	大連	大連 旅順	大連 大石橋 湯崗子
着前 發正 七、〇〇 午	發前 一一、〇〇	滯在	滯在	着後 發前 七、四五	着後 發前 一、〇五
埠頭、取引所、測候所、屠獸所、總領事館、會姓岬、イルチス砲壘	小崗子市場、星ヶ浦、老虎灘、市街、滿蒙資源館	埠頭、取引所、油房、碧山莊、沙河口、中央公園	紀念館、東鷄冠山北堡壘、水師營、博物館、二〇三高地、白玉山神社、表忠塔、市街	娘々廟、車中ヨリ日露戰跡(金州、南山、得利寺)及普蘭店附近塩田	
船中	船中(奉天丸)	大連	大連	大連	大連(鎮西旅館)

第 三 班 第 二 班

大内健吉 池田虎雄 莊司晃道 浦田至 柴田正 片山道徳 川端捨三 羽佐田揚一 外山小太郎 大野清 神戶長一郎 小島邦治 伊藤寛造 平井武夫 中村秀雄 水原茂三 松永幸助 高木幸一 稻垣金一

第 四 班 第 五 班 第 六 班

奧山一夫 金枝新次 野々垣秀一 柳川竹次郎 木村清太郎 櫻井芳雄 土居一郎 大野重藏 織内七郎 田口順三 上野秀司 岩崎虎猛 梶浦信夫 石橋信道 安田實 鈴井眞一 稻垣贊郎 前田榮次郎 川本虎雄

引 率 者

三〇	二九	二八	二七	二六
二十日	十九日	十八日	十七日	十六日
東京	京都	京都 三ノ宮 神戸	長崎	上海
着前 八、三〇	發後 九、四五	着後 七、三五	着後 六、〇一	着後 三、〇〇
	桃山御陵	湊川神社	大徳寺、諏訪神社、居留地跡、天主堂	
	車中	京都 (伏見屋旅館)	船中	船中 (上海丸)

岡田潤一郎 鴉飼尙 渡部實一 坂本壽男 川端嘉一郎

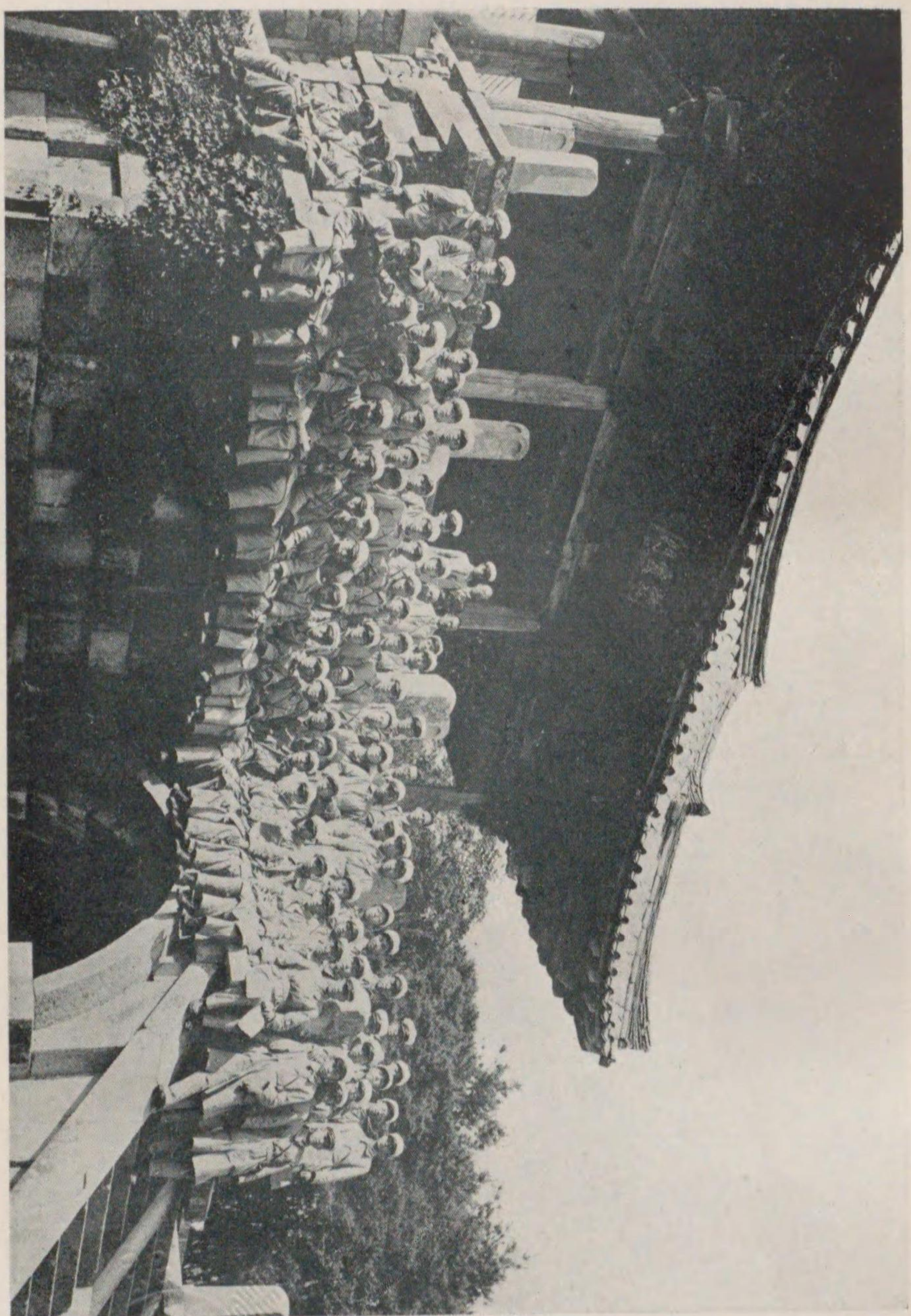
第 一 班

五 A
鈴井新次郎 岩本彰夫 石田善治 加藤精一 岩瀬和男

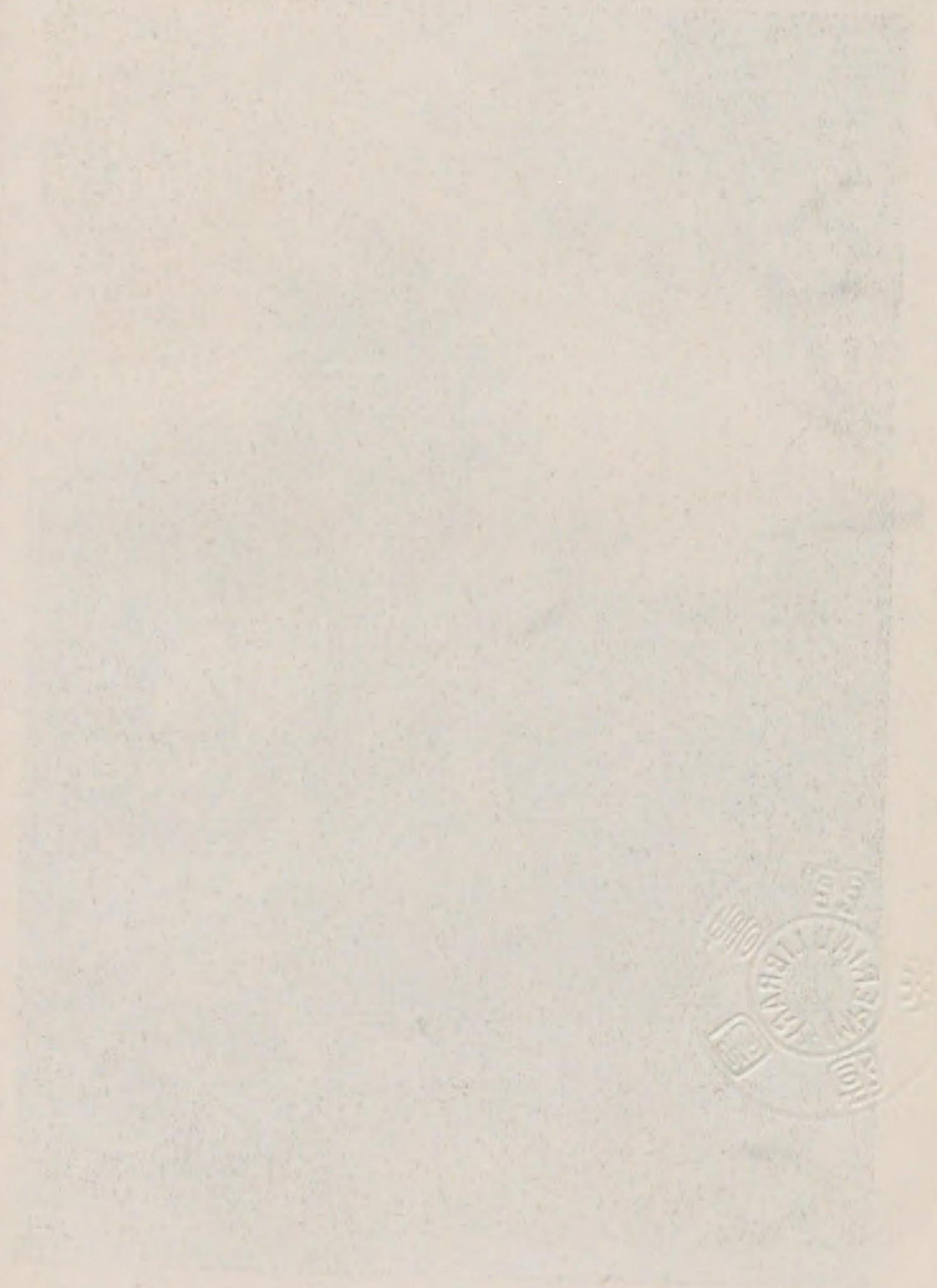


羽田校長 (海上にて)





慶州佛國寺にて



Handwritten text on the right edge of the book, possibly a page number or title, written in a cursive style.

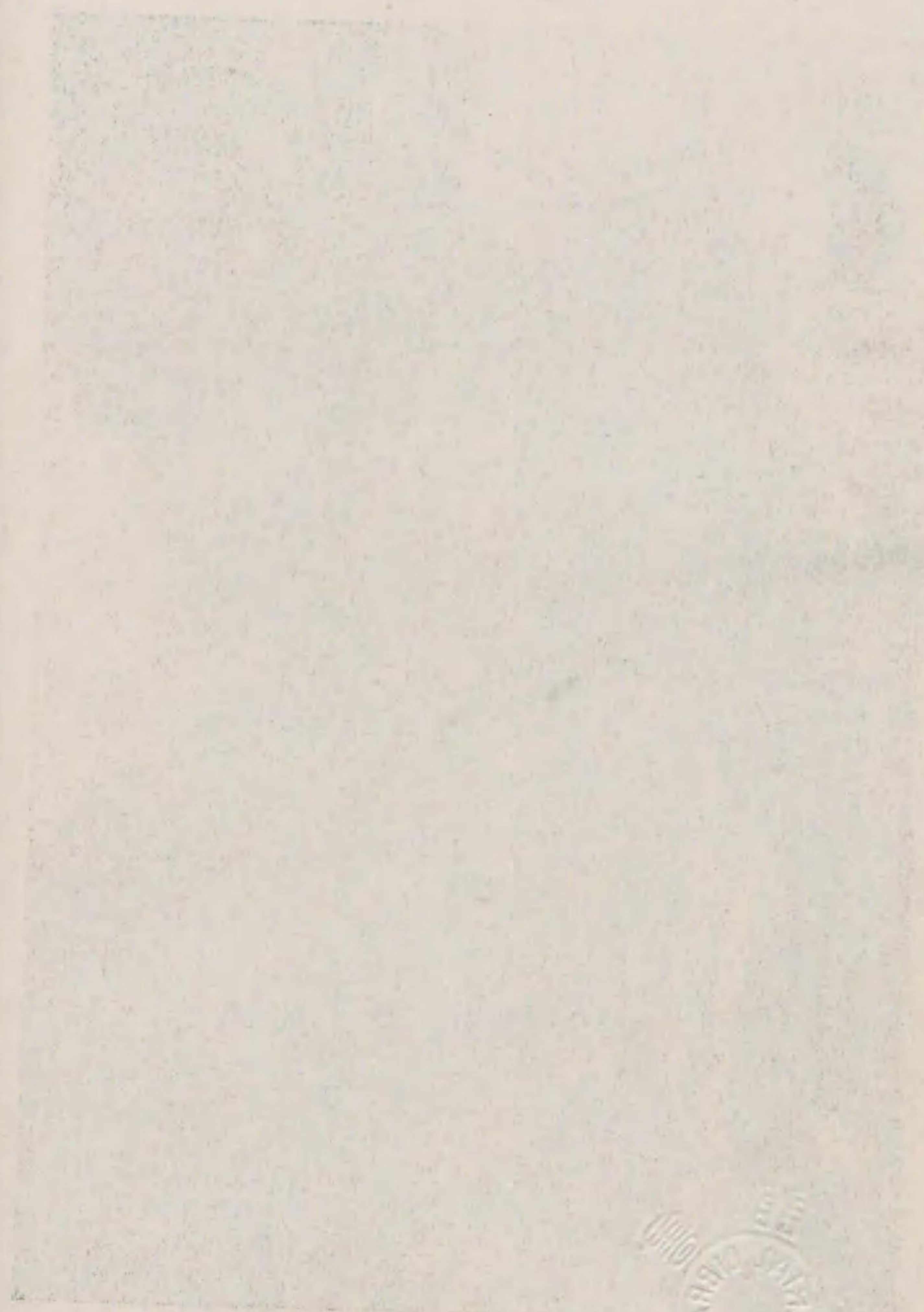


七に洞瀑萬山剛金

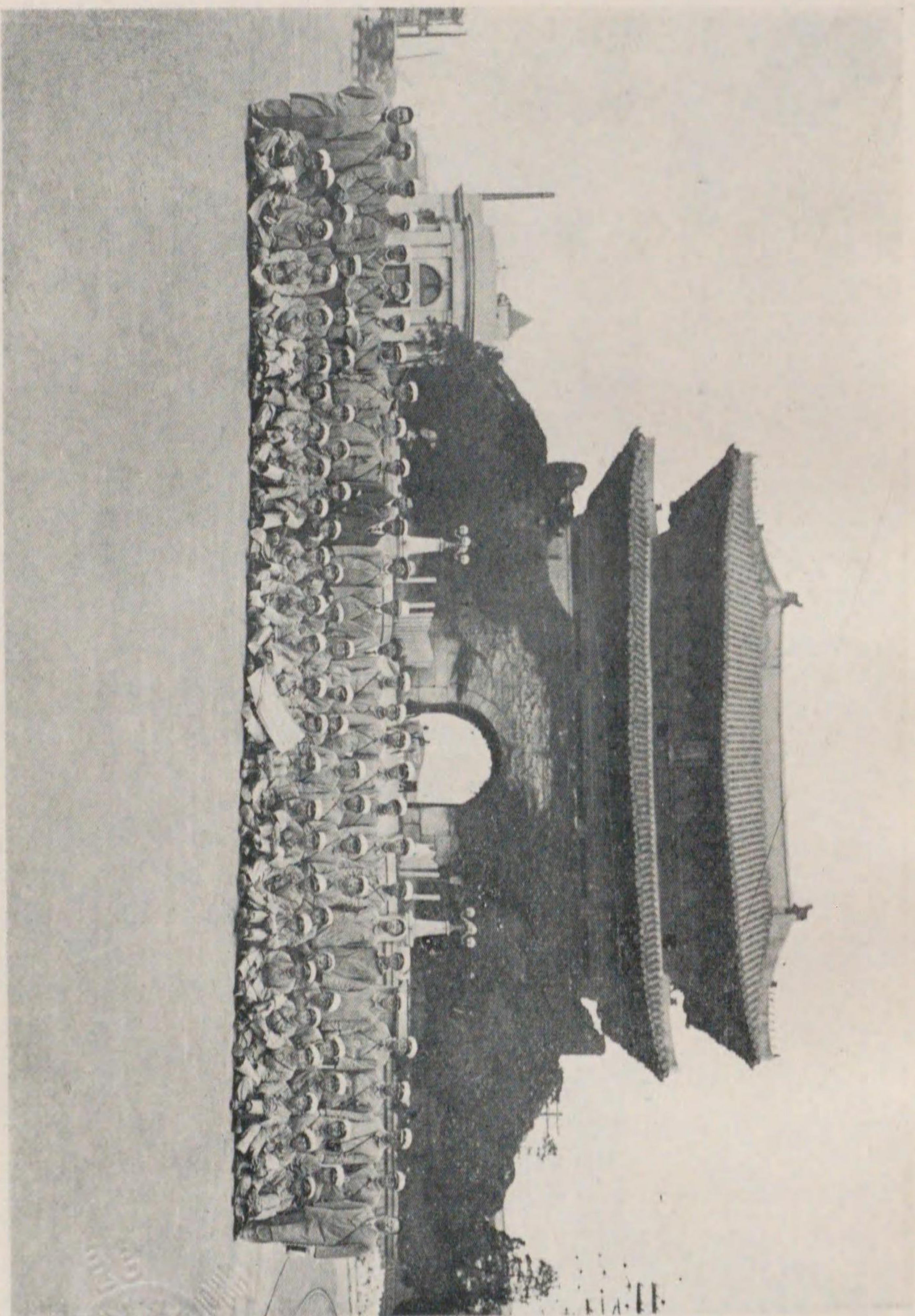




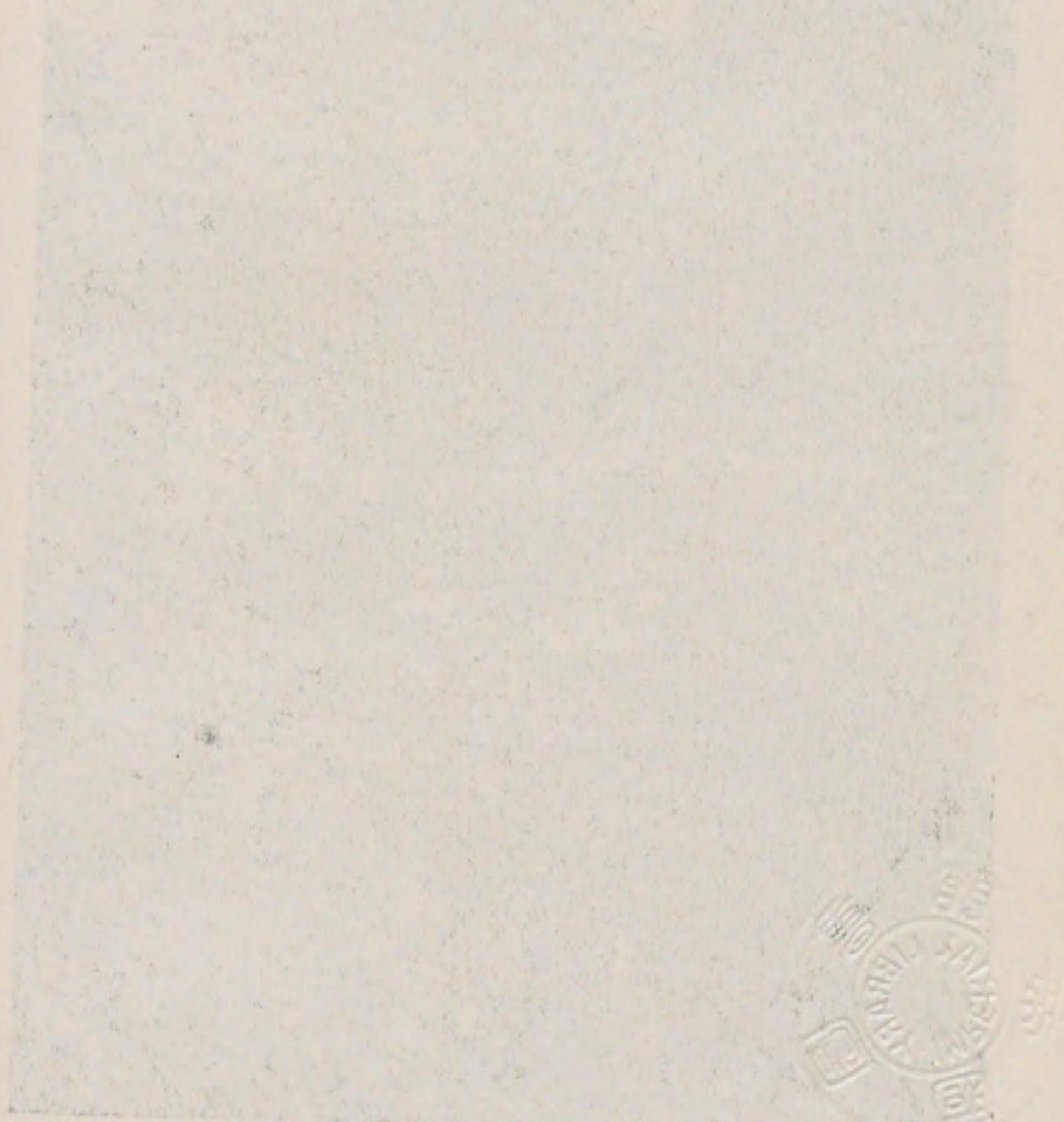
てに 窟 德 普 山 剛 金



Handwritten text in Japanese characters, likely a title or page number, written vertically on the right edge of the page.

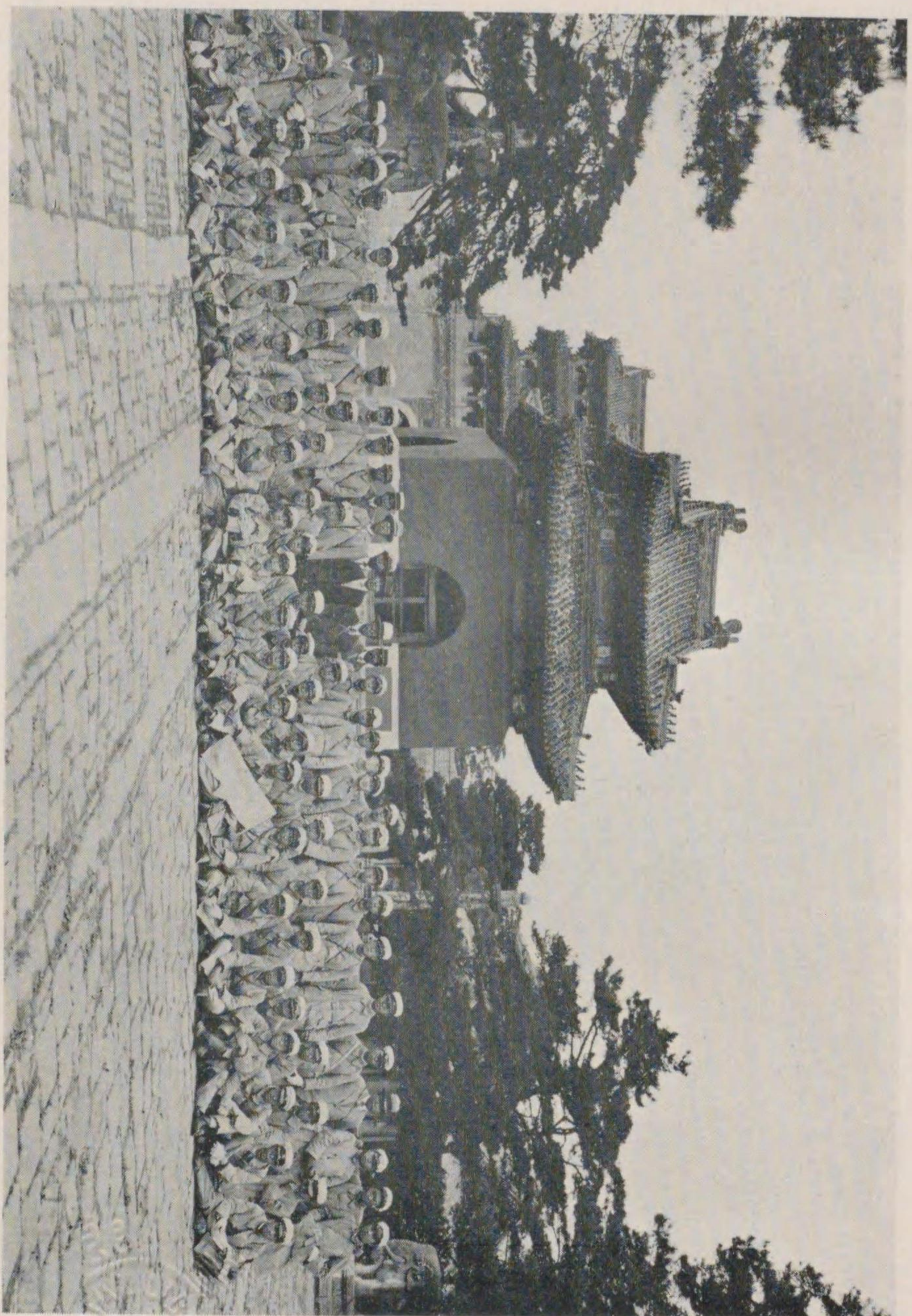


朝鮮京城南大門に於て



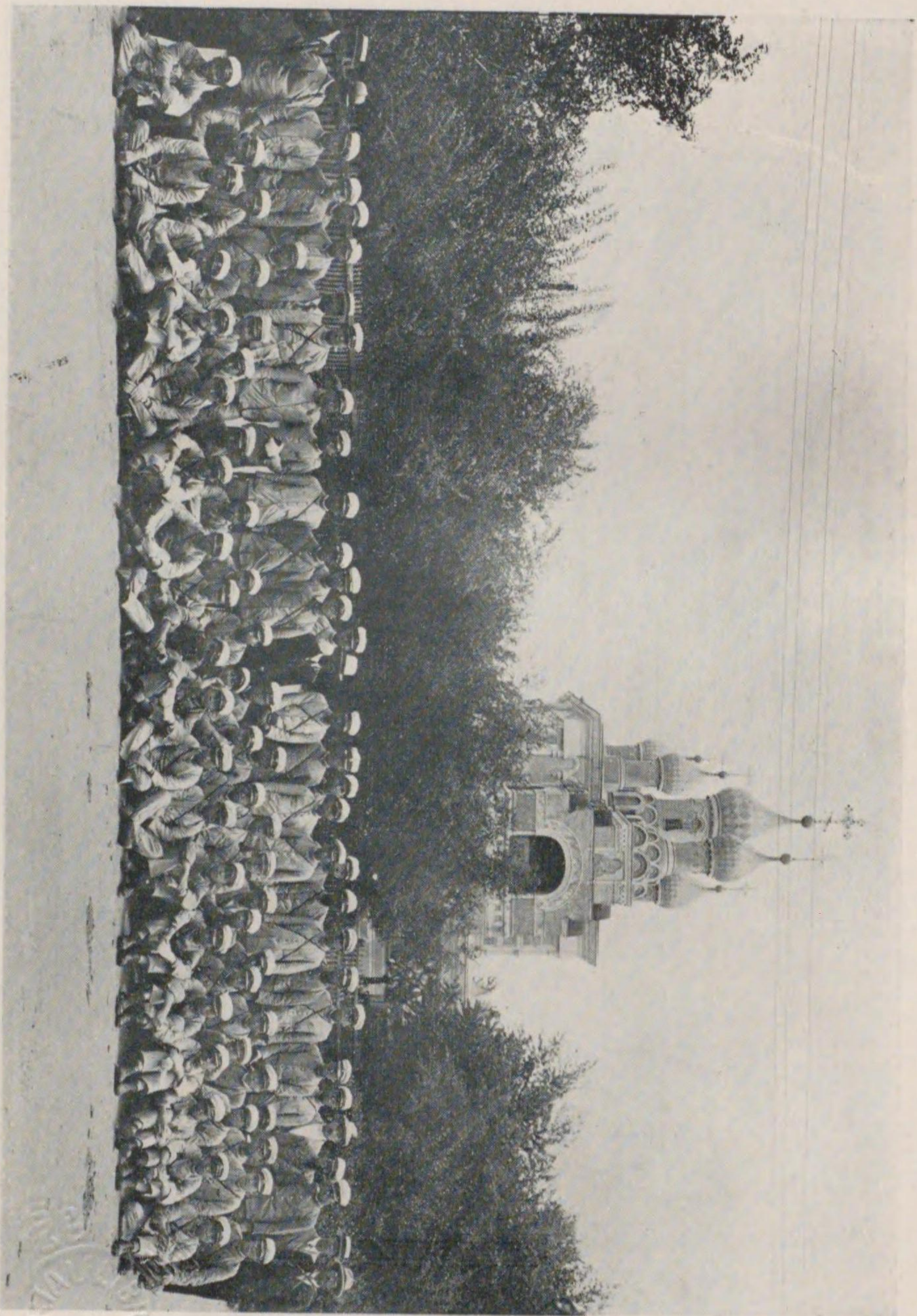
朝鮮京城南大門

Handwritten text in the right margin, possibly a library or collection identifier.



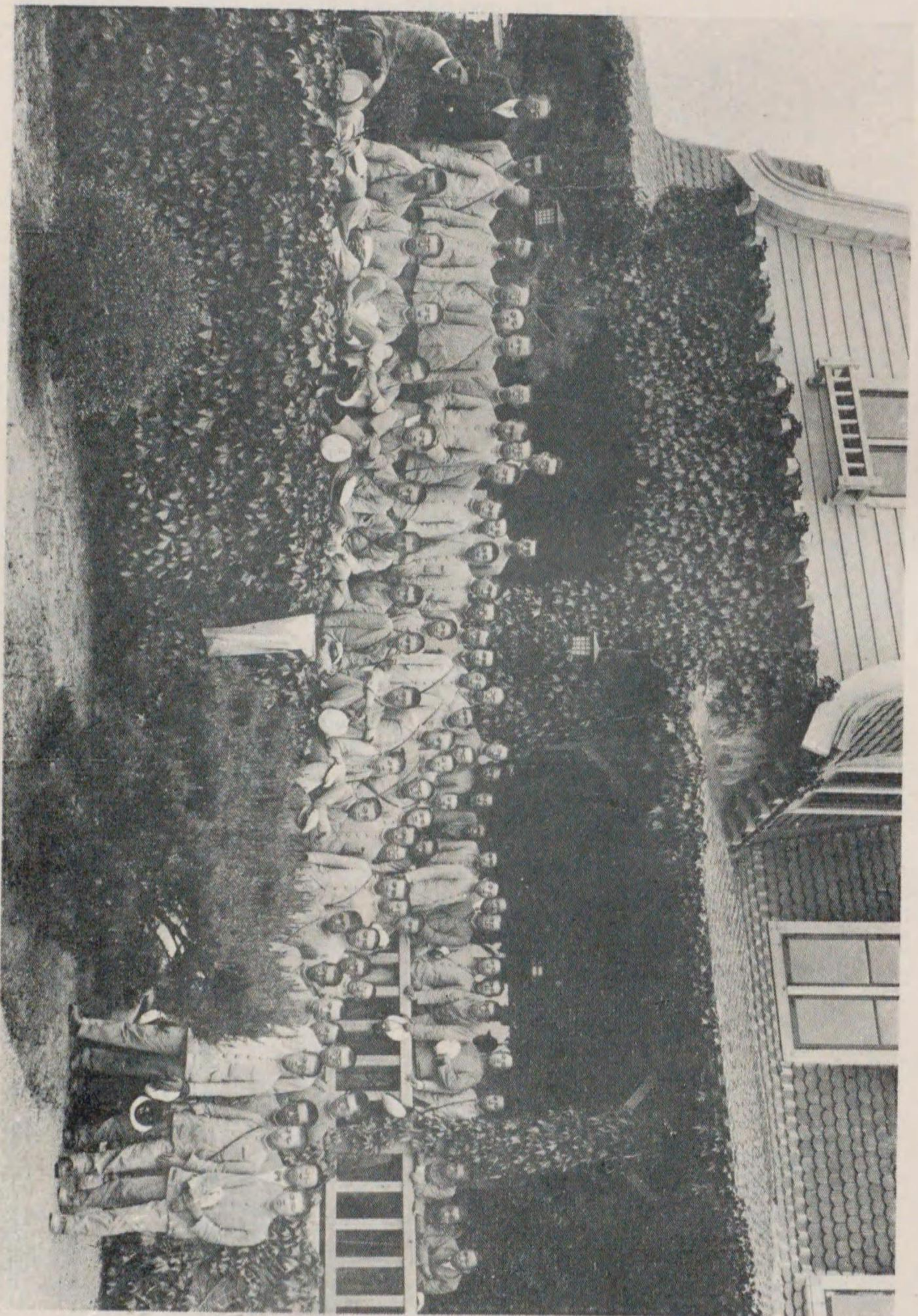
奉天城北に於て





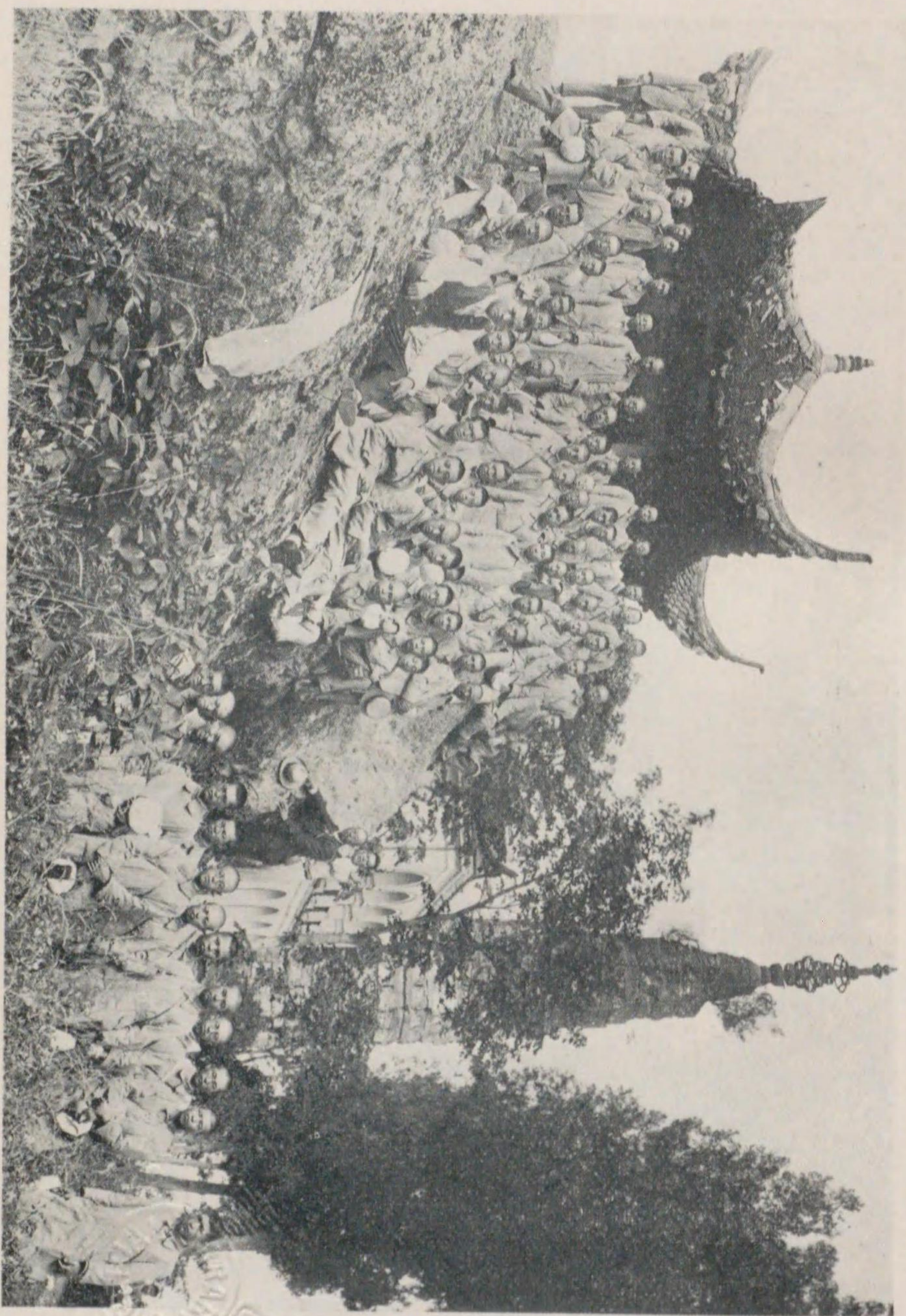
哈爾賓中央教會前之





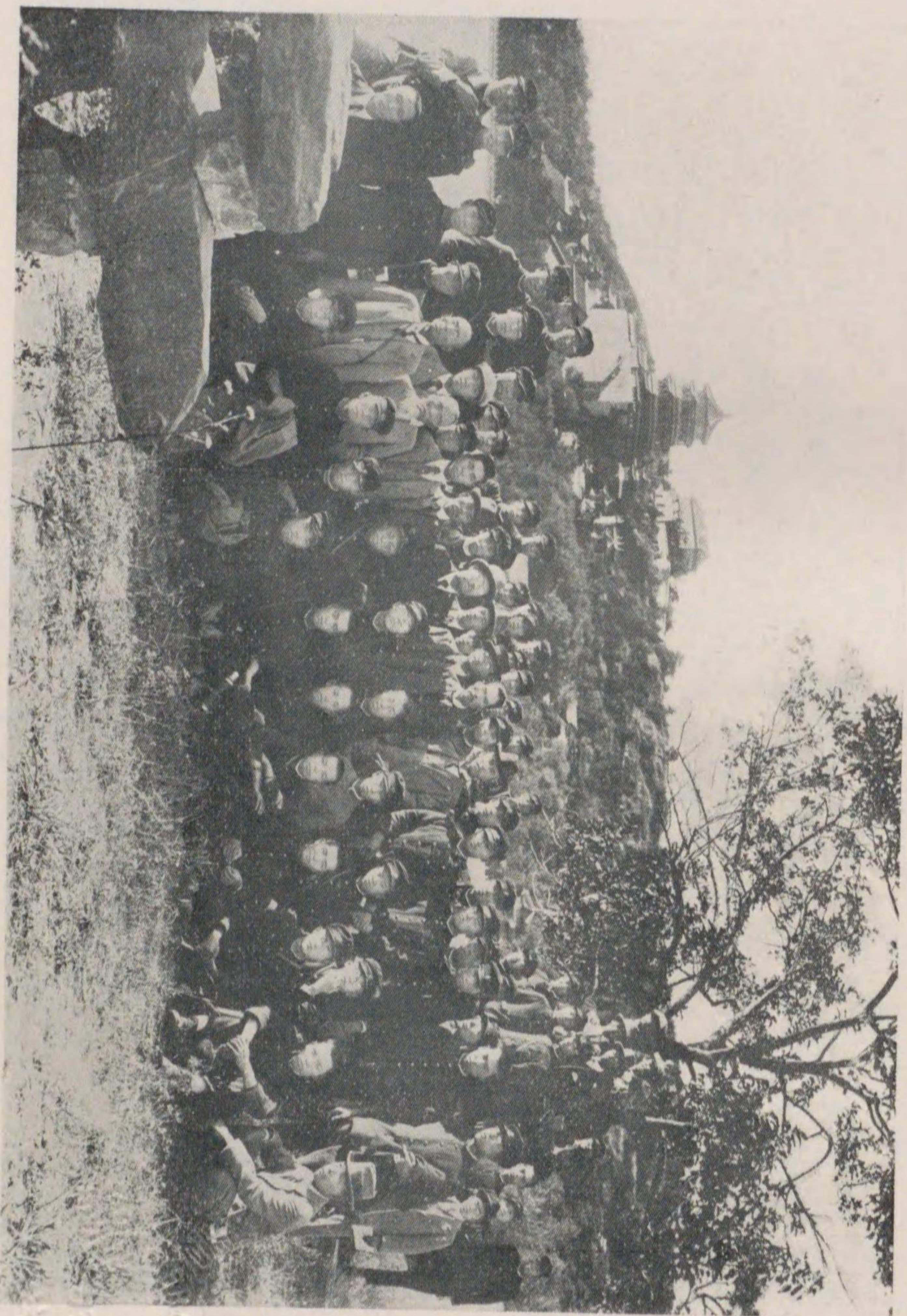
大連星ヶ浦にて



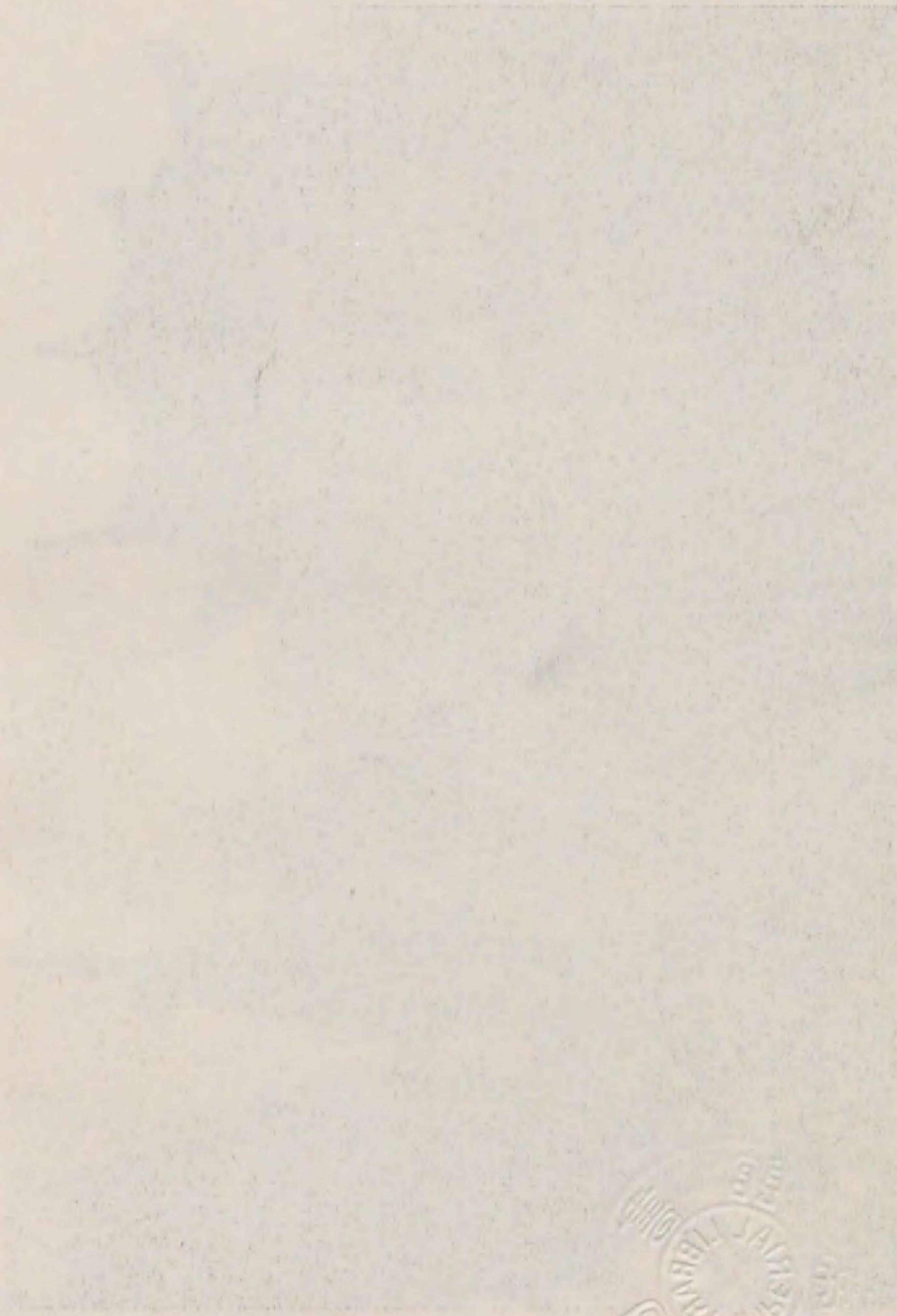


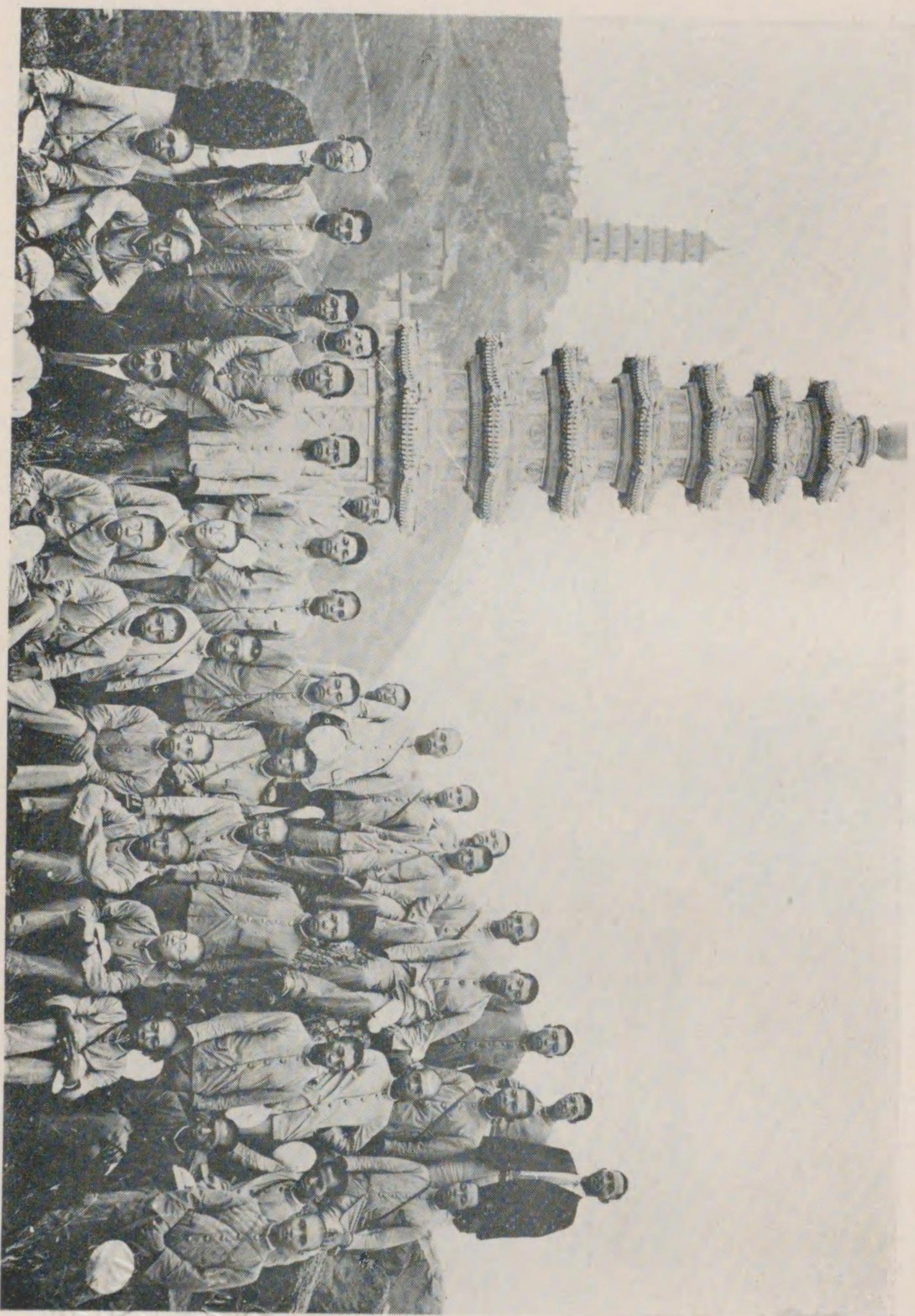
杭 州 寶 石 山 に 於 て





第一回團員(北万壽山に於て)



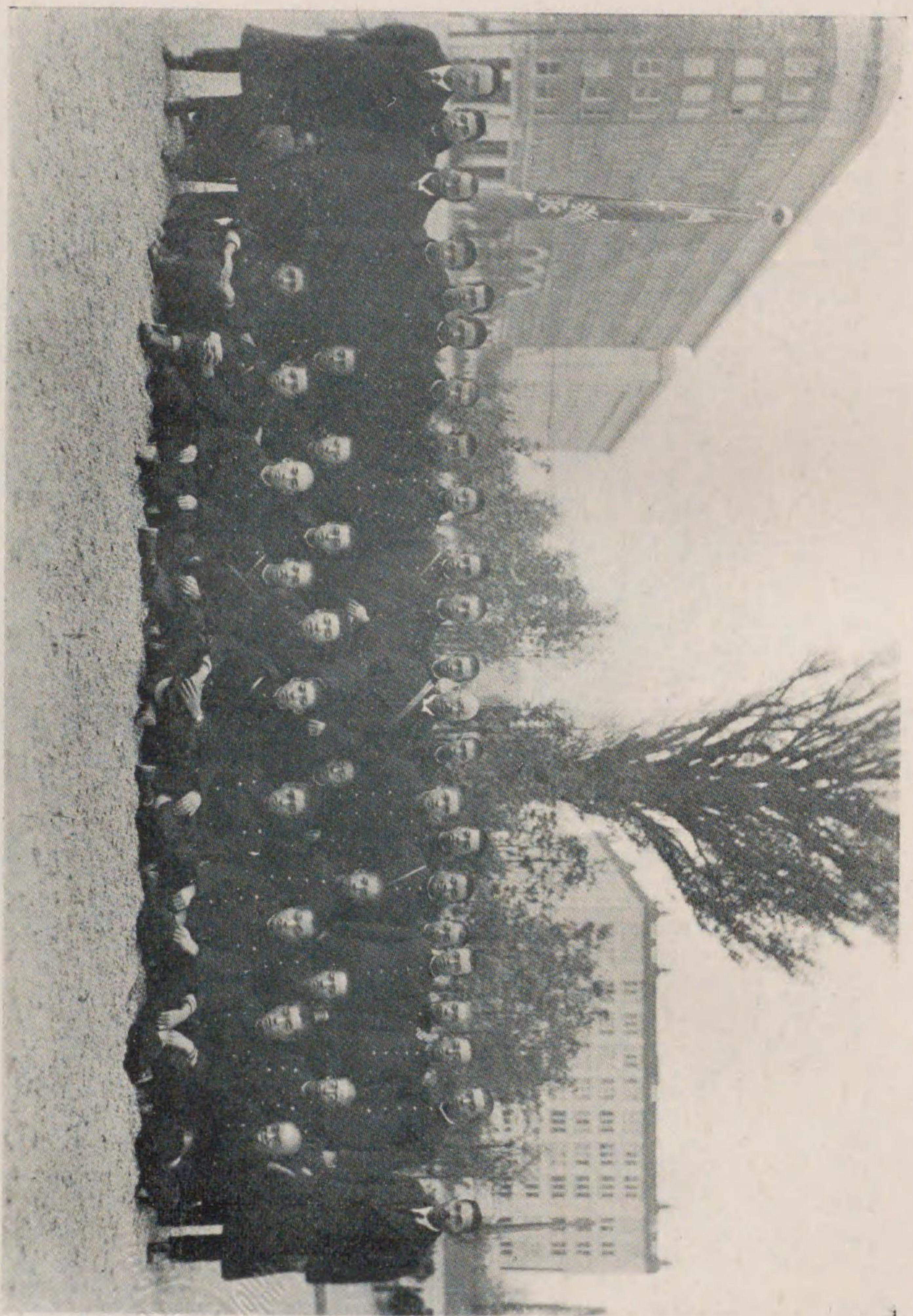


（てに山泉玉京北）員團回二第

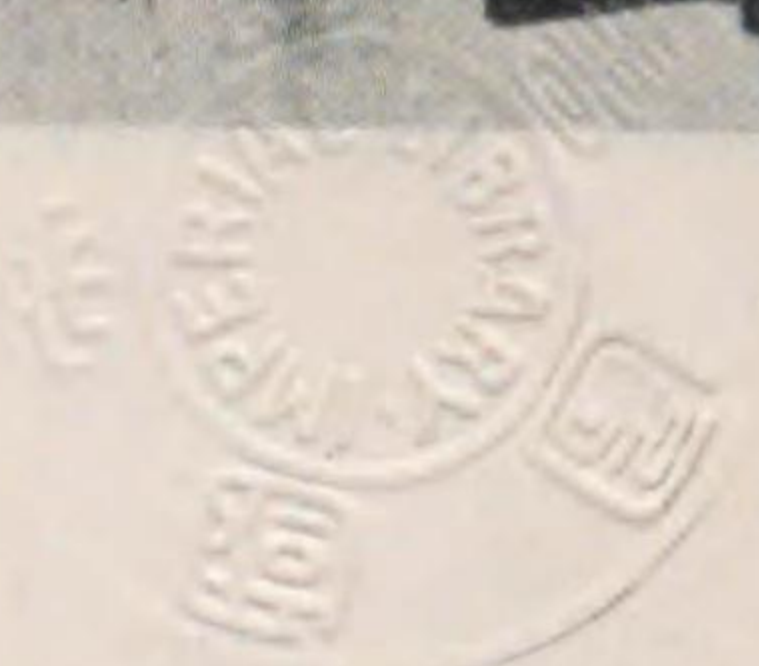


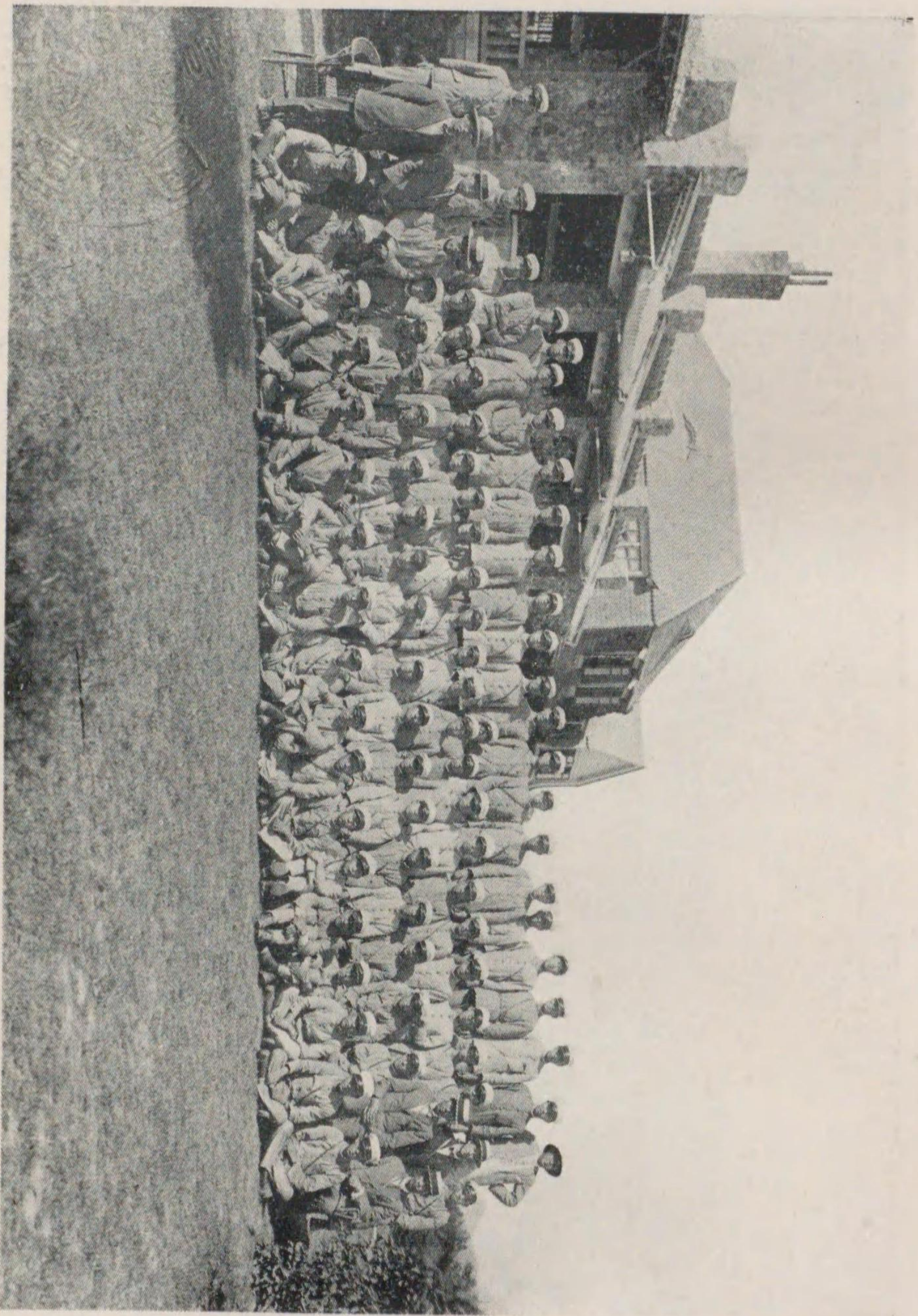
（てに山泉玉京北）員團回二第





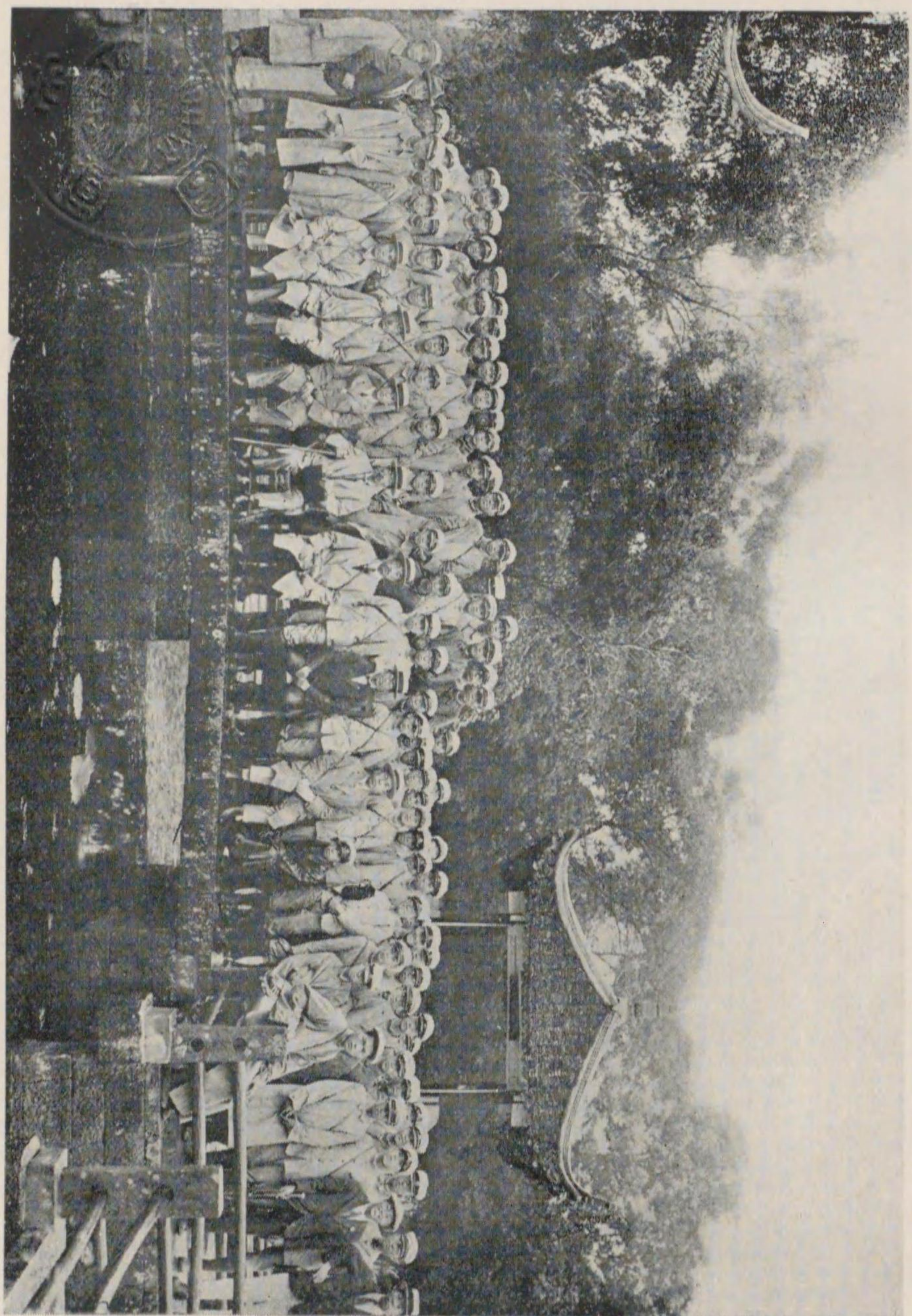
第三回團員(歸京して)





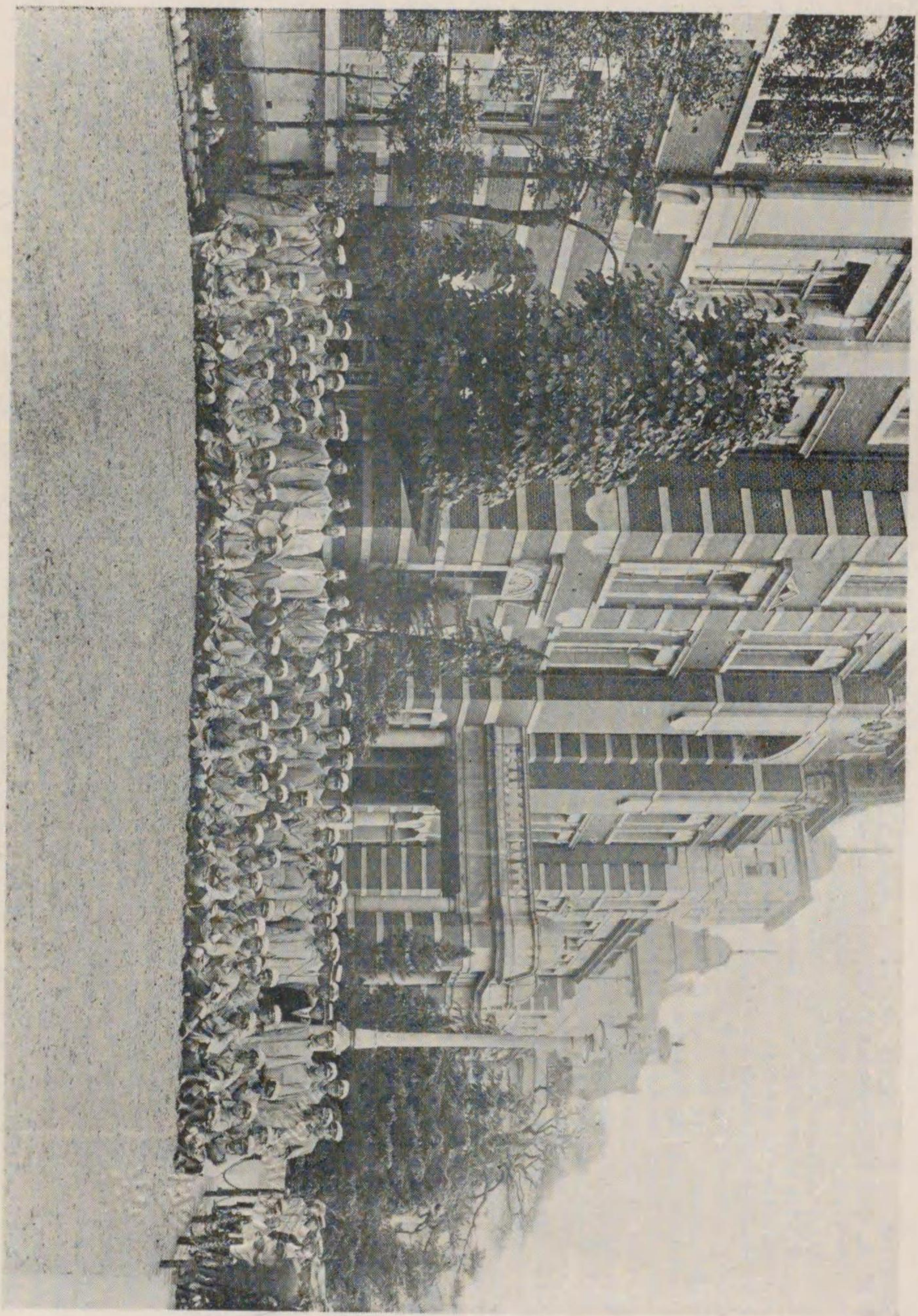
（てに浦ヶ星順旅）員團回四第



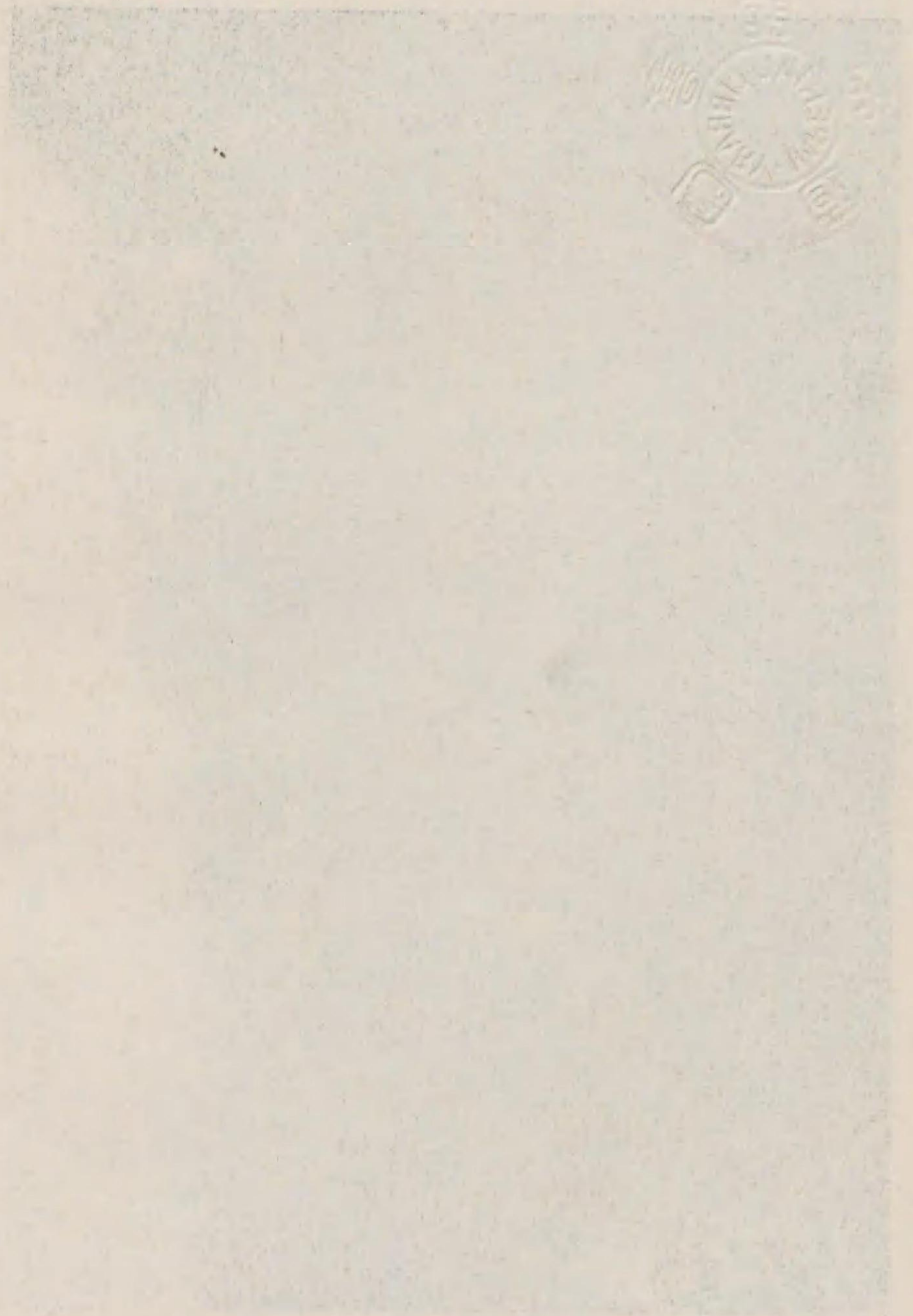


第五回團員(西湖に)

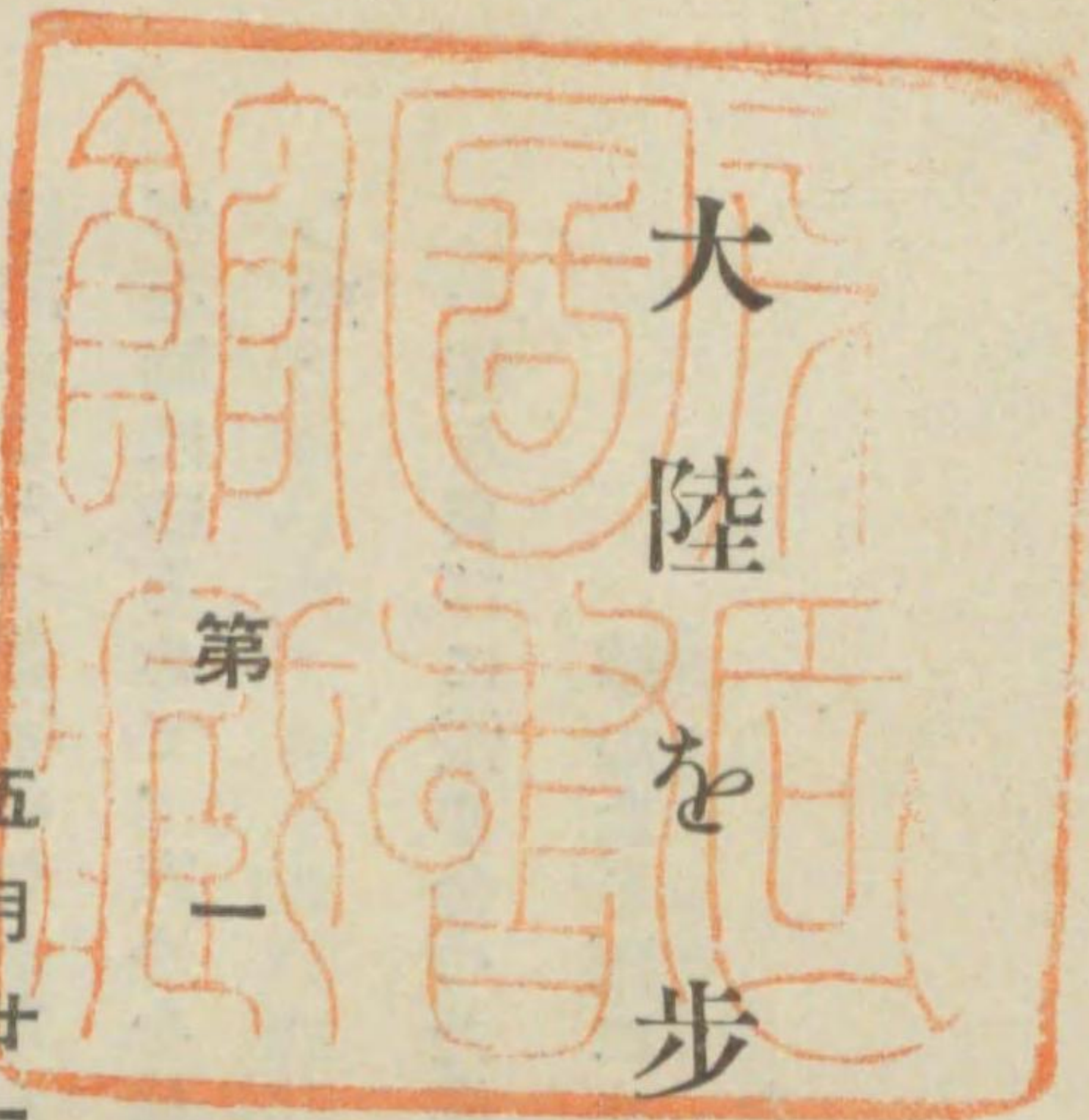




第六回團員(歸京) (てし京歸) 員團回六第



第六回團員(歸京) (てし京歸) 員團回六第



大陸を歩みて (第一篇)

第一日

五月廿二日 (金曜日) 小雨

加藤 精一

夜の帳りが下りた。

八十名の視察團員は、輝やかしい未來の發展を得ようと、いそぐと東京驛頭に集つた。

遠い滿洲へ旅立つ私共に、父母の温かい、そして切なる愛撫の眼が注がれる。卒業生在校生諸君も來て下さつた。

静かな、にこやかな校長先生のお顔——僕等を膝下に集められ呉々も繰返し旅行の注意をなされた。人波にもまれてプラットホームに歩んだ。父母に暫らくお別れの挨拶をした。

「旅行は何んといつても體が大切だからね」。
力強い友の言葉もうれしかつた。

八時二十五分ベルは鳴つた。

萬歳々々。

萬雷の様な歡呼の聲は體全體を異様に硬直させる。

汽車は走る。

さようなら！

行つてまゐります！

薄暗いブラットホームに黒いかたまりの大波が動揺してゐる、まだ父兄は見送つてゐて下さる。座席にドット腰を下した。急に神経のはしく迄もくつろげた様な氣がする。窓外遙に東京の灯は消えると、農家の灯がなんとなく胸に迫つてメランコリーな其の瞬間、包み切れぬ空想を書き喜びを胸にひそめて、窓外を見入つた。雨の夜空は、段々と心を靜かにさせる。網棚のお菓子など出した。

一樣な喜びに浸り合つた僕らを乗せて、汽車は西へくとひた走る。

靜かなる雨にまたく都の灯

なつかしみつゝ満州へ立つ

第二日

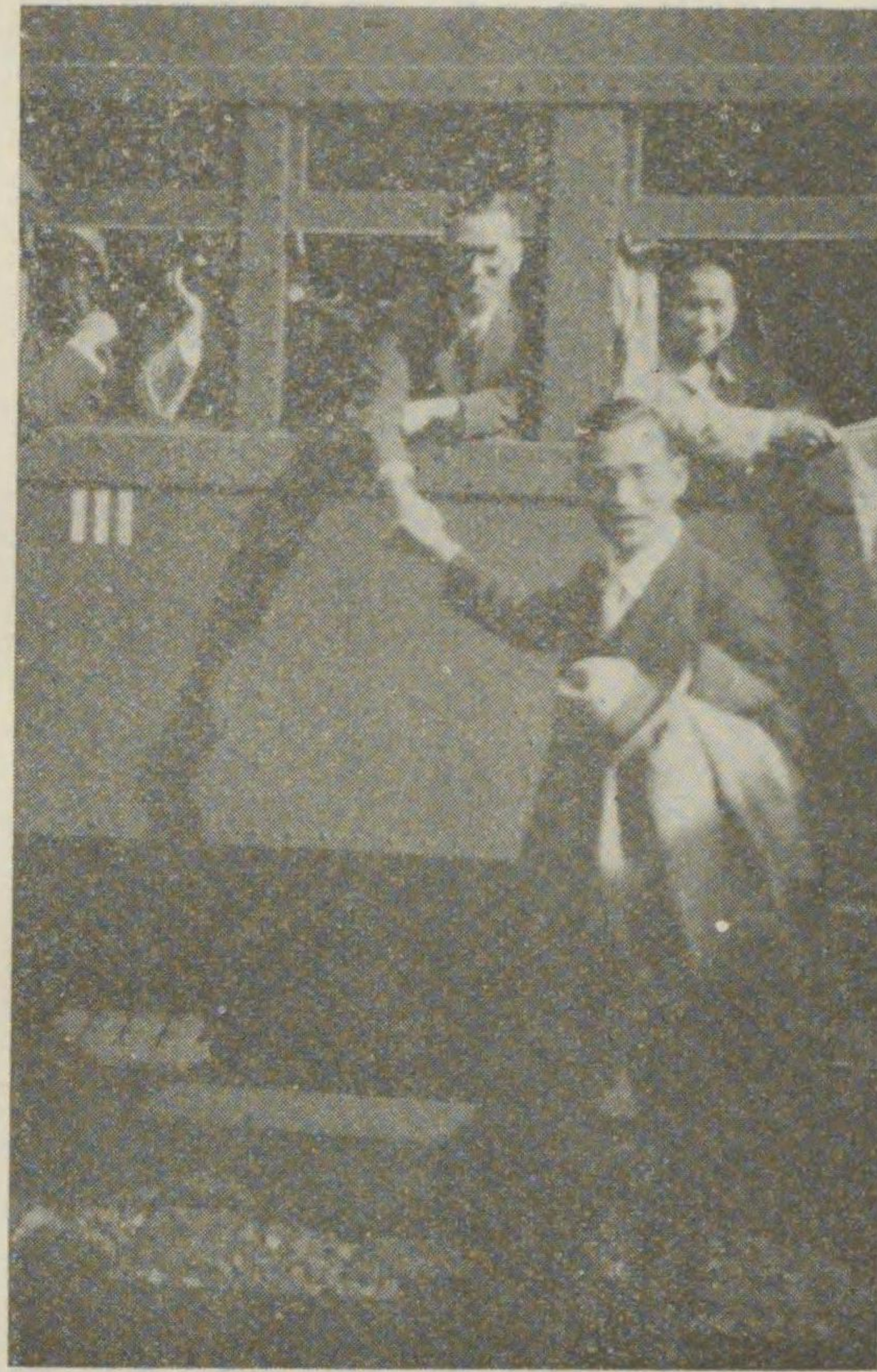
片山道徳

九月廿三日（土曜日） 晴

名古屋のホームを離れた時、金の鯨の騒ぎで大部分赤い眼をみはつた。さうして大垣驛につく頃東雲がまたくきはじめた。彦根城を緑の中から見出して間もなく、銀の鏡、琵琶湖がきら／＼と見え出した。たるんだ白帆が浮んでゐる。湖水に沿うた村々の白い壁がくつきりと朝の光に輝いてゐる。逢坂山のトンネルを越えると、大きな角の牛が、のそ／＼と荷車を曳いて近江の方へ歩いてゐる。六時五十四分京都驛。八時大阪驛着。ホームには一行のために伊勢參詣せられた土田先生がにこやかな御顔をもつて御迎へ下さつた。團長岡田先生との熱い握手は寫眞班のカメラに収まつた。旅路で改めて御顔を拜する時、又一層懐しさが湧く。伊勢の御札を有りがたく戴く。神戸のホームを靜かに動き出した。「土田先生、さよなら！」帽子とハンカチフは左側の窓に滿ちた。先生はいつまでも帽子を振られた。

靜かな綠色と青色の瀬戸内海が見えた。大阪以西を知らぬ私には一層美しかつた。晝食夜食も食堂車で相當おいしくいたゞけた。三田尻を過ぐる頃、日は赤く鹽田を照らしてゐた。黒服の支那人

が大きな白い袋を脊負つてあぜ路を行く。こんな田舎に来て賣れるのかしら、どうして生活が保てるかしら、しかし支那人は長い蔭を引いてこつこつと歩いた。汽車は眞暗になつた山陽の山々を縫



郎次竹川柳

！生先田土らなよさ

つて行つた。さうして八時十五分
下關の長いホームに入つた。機關
車は太い荒い息をしてゐた。地下
道をくゞつて埠頭に出た。スーと
磯の香風が頬をかすめる。

ポーポー海上から汽笛が鳴る。

眞暗な面にエンジンの音がけたゝ
ましく響く。青と赤の燈がいつた
りきたりする。すみきつた半弓に

は黒く、くつきりと九州の山が浮んでゐる。さうしてその線の上には限りなき星が、線の内には無
数の電燈が、青に黄色にきらめいてゐる。それらは夢の浮城の如く、静かで黙つてゐる。けれども
何んだかそれくゞつぶやいてゐる。

その聞えぬさゝやき、それは愈々本土を離れる私達の胸にたまらない喜びと一種の淋しさを投
げた。

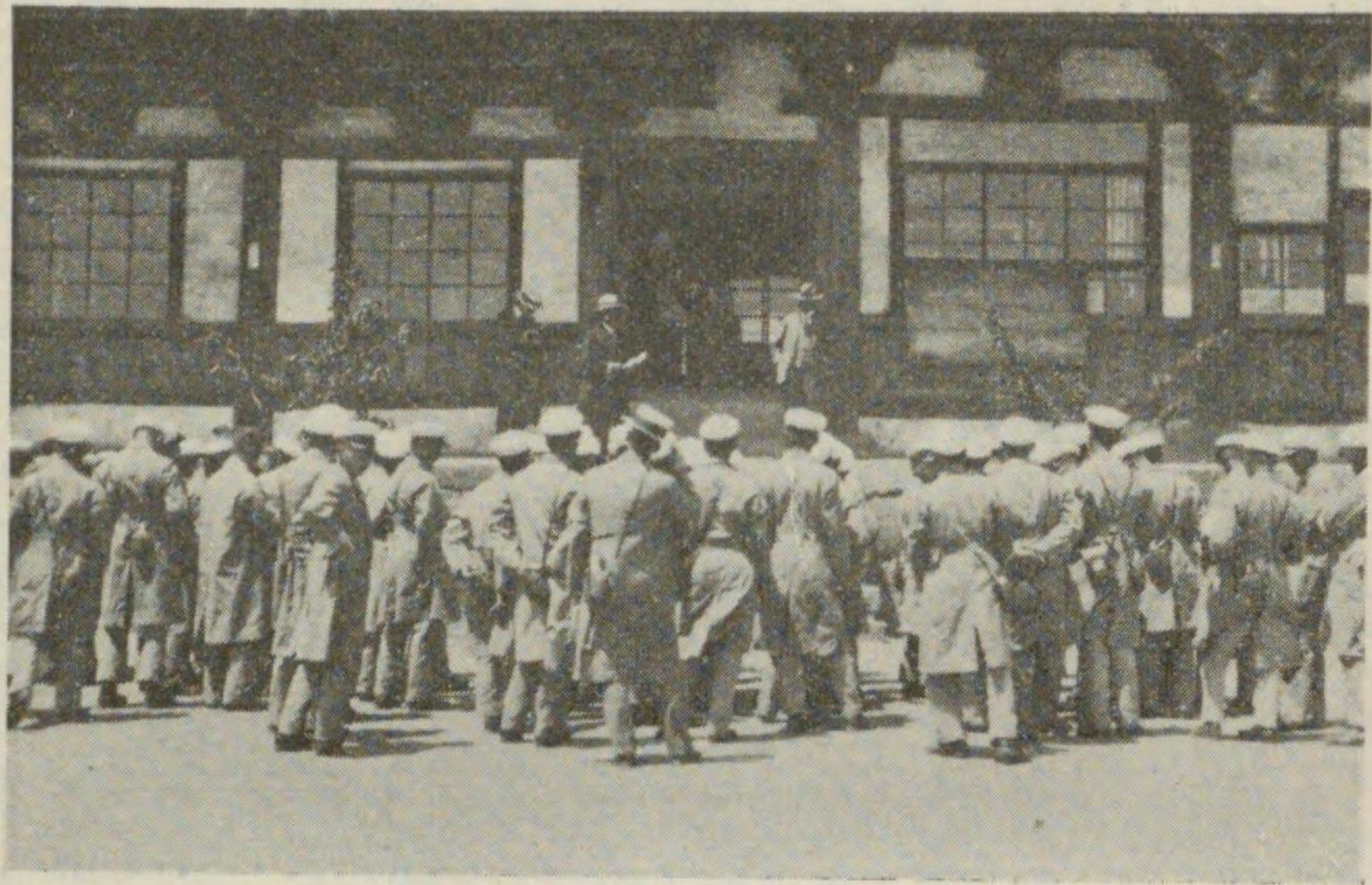
卅分の休憩の後愈連絡船景福丸(三、一六〇噸)に乗船した。十時半、巨體は埠頭を離れた。三等
船室、吳越同舟、内地人、朝鮮人、支那人、露西亞人、等々ぎつしりつまつてゐる。内地で働いて
歸る人、花々しく朝鮮、滿州に志す人、旅から旅へ移りゆく行商人、故郷に歸省する學生、それら
の人々は手足も充分出せない程ぎつしりと薄暗い此の船室につまつてゐる。粗末ななりをして居る
者、野卑な言葉をする者、……大きな胡床を置いて麥飯の冷えたお握りにかぶりついてゐる男も
あつた。亂れた髪を後にまはしながら餘念なく子供に乳をやる母親もあつた。

しかしくゞそれらの人々は輝いてゐた、黒い顔のうしろに生々としたものがあつた。彼等は生き
んが爲、食はんが爲に男々しく立つ人々だ。三等船室、ほんとうに嬉しかった。

甲板には誰もゐない。黒潮を迂る風は膚寒く覺えた。海上は眞暗だ。エンジンは太く響く。動く
スクリューに走る濤、躍る繁吹、船尾の電氣に赤く渦は巻く。手摺によりかゝり眼を閉ざれば、釜
山、朝鮮人、チゲ、白衣、蔚山、加藤清正、新羅、佛國寺等次からくゞへと嬉しい空想は走る。じ
つとしてゐられなくなる。この夜、月清し。

五月廿四日（日曜日） 晴

釜山は人口約拾四萬、内、内地人は四萬九千餘で市街の主部分を占めて商業を營んで居る。朝鮮人は街端、殊に高所に住み大部分は内地人に傭はれて居る。教育施設は第一商業學校、第二商業學校、前者は内地人、後者は鮮人が就學して居る。中學校、高等普通學校、高等普通學校は朝鮮人のみが就學して居る。其他小學校、公立普通學校が有り、公立普通學校は鮮人が就學する。女子のため高等女學校があり、内、鮮人共就學する。龍頭山神社の鳥居前から見渡すと、釜山の港は眼下に望まれる。水をはさんで牧ノ島が見え、右方海水浴場を隔て、邦人建設中の公園も見え、水産試験場もある、その前面の埋立工事は大倉組が引受け十年計畫とか。大倉喜八郎男は朝鮮人の信望有り紙幣に迄肖像を寫されて居る。此處を下つて市街を一巡し、今度は蔚山へと向つた。この邊は實に朝鮮情緒の濃いところで、すつかり喜こんでしまひ、皆カメラを動かしてゐる。ポプラ樹、本場の朝鮮牛、平和ののどかさを思はせる老婆、實際目に映るもの總べて朝鮮そのものである。これから北へ行くと段々拓けた處が多くなり、かへつてつまらなくなるのではないかと思つた。

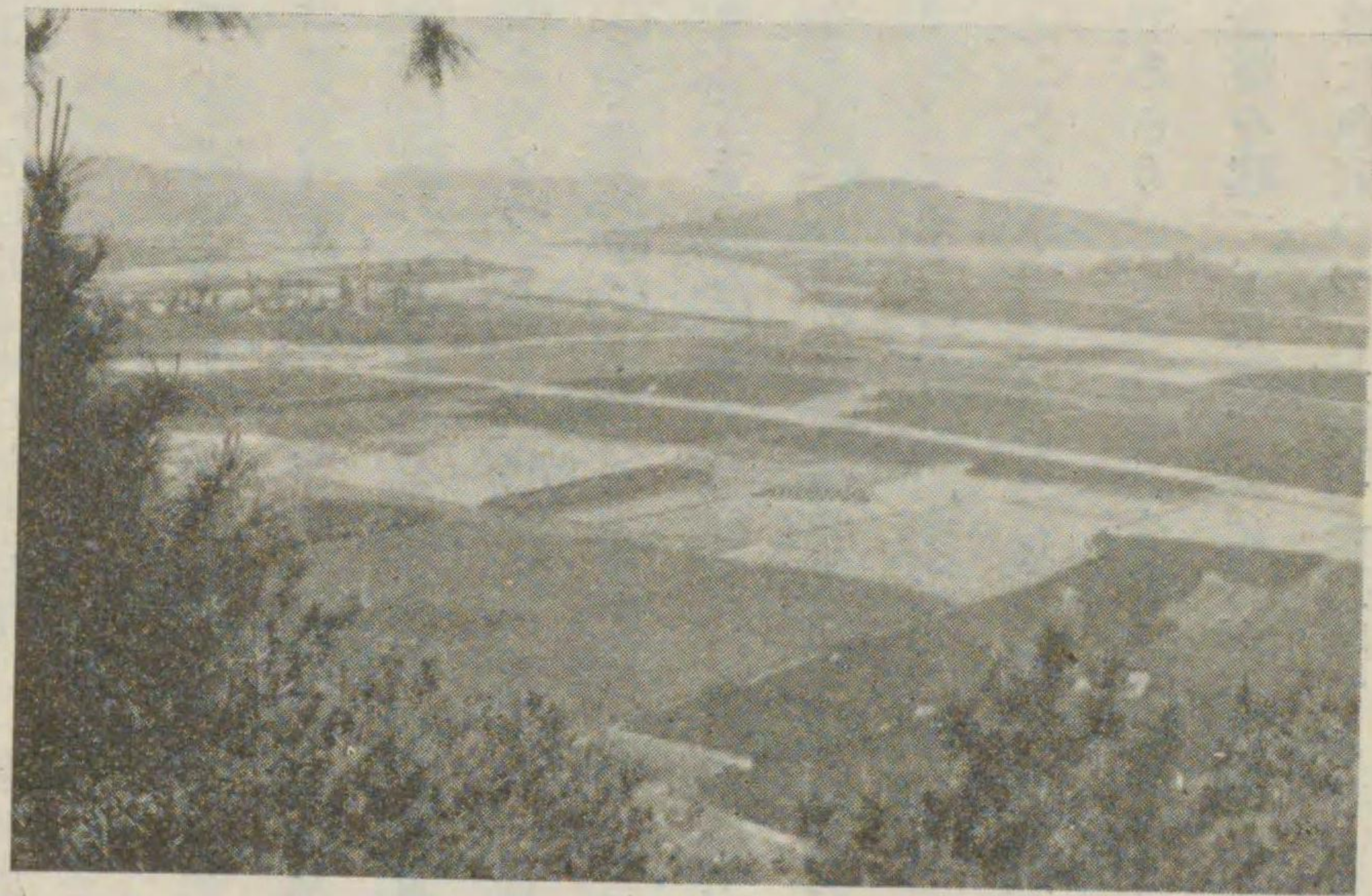


蔚 山 普 通 學 校

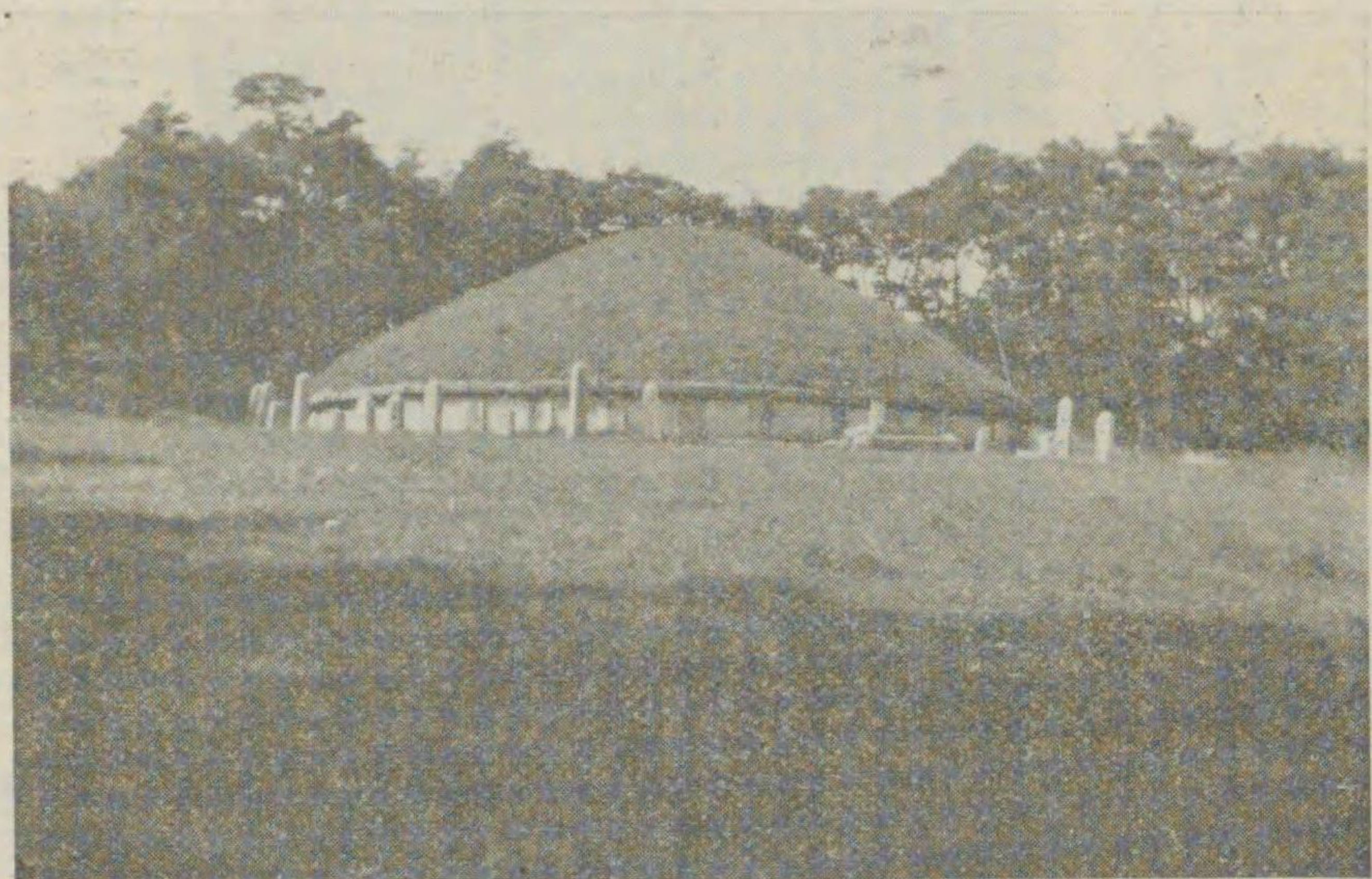
途中民家で將棋をして居るのなどを見、一氣に蔚山へ。

五拾二軒を二時間で着いた。富士屋旅館で晝食を済ませ、蔚山公立普通學校に行き校長先生のお話を承へた。この學校は鮮人のみ通學を許され、就學兒童八百名、十二級よりなつて居る。學齡は六歳より九歳迄であるが、義務教育ではないので希望によつて入れる。卒業は四年及び六年の二種で、教師は拾參名内四名は内地人である。朝鮮は現在二割の修學率しか無いのは(1)、財産上、(2)、父兄の教育に對する考の薄弱なることによるとのことであつた。しかしこれも近き將來には良くなるであらう。この建物は昔の郡廳の一部で今では後ろに新館を建てゝゐる。既に二百年は経たであらう。朝鮮風に色彩のついた變つた建物である。こゝ

で蔚山城趾の話をざつと承はり、蔚山城趾へ向つた。案内はやはり校長先生がして下さつた。此の城は朝鮮征伐の時豊臣秀吉の命で、加藤清正が設計し、太田飛弾守が築城したもので、浅野幸長並びに加藤清正の非常に苦戦した處である。くわしい戦の話も承はつた。本丸、二ノ丸、三ノ丸の跡は位置だけで、何も残つてない。船入は今は沼となり、濠は水田の一部となつて居る。城中の水溜は徑一間位、決して底から水が沸くといふのではない。當時遂にはこの水も持つてくる事も出来なくなり小便、馬の血迄飲む様な破目になつたのである。石段は城跡を公園にする爲整理した時、始めて発見されたもので、船入に通じて居る。本丸趾に立つて四方を眺めると、如何に日本軍が、苦戦したかを知るに十分である。全く、明軍の陣は我本丸を眼



蔚山城址ヨリ 堀野三郎



掛 陵

下にして居るのである。

下山後我々は再び車上の人となつて掛陵へ向つた。掛陵は新羅中興の英主三十世、文武王の陵で東石には十二支神像を陽刻してある。朝鮮には珍らしく整つた陵できれいになつて居り、入口には石獅子二對と武石人一對とが立つて居る。いそいで佛石寺へ行き、直ぐ正面の階段で記念寫眞を取る。それから大佛殿、極樂殿、安養館、浮影樓等順次に説明を受けながら廻る。遙か山の中腹を見ると一つの池がある。この池は、昔佛國寺を建立する際唐より大勢職人が來た。その時彼等の妻が後をしたつて來た、が、新築する寺へは來られないので、山の中腹へ池を堀つた。すると佛國寺の全景が映じた。夫の姿も映じた。が或一妻君の夫は映らなかつたので、遂に悲の揚句この池へ身を投げ死ん

だとかで影池と云ふ名が生れた。佛國寺を後に今度は、慶州の月城趾、雁鴨池に向ふ。雁鴨池は一
千二百七拾年前に、文武王が三國統一の記念の爲に堀つたもので、その形は遙か北京の崑明池に



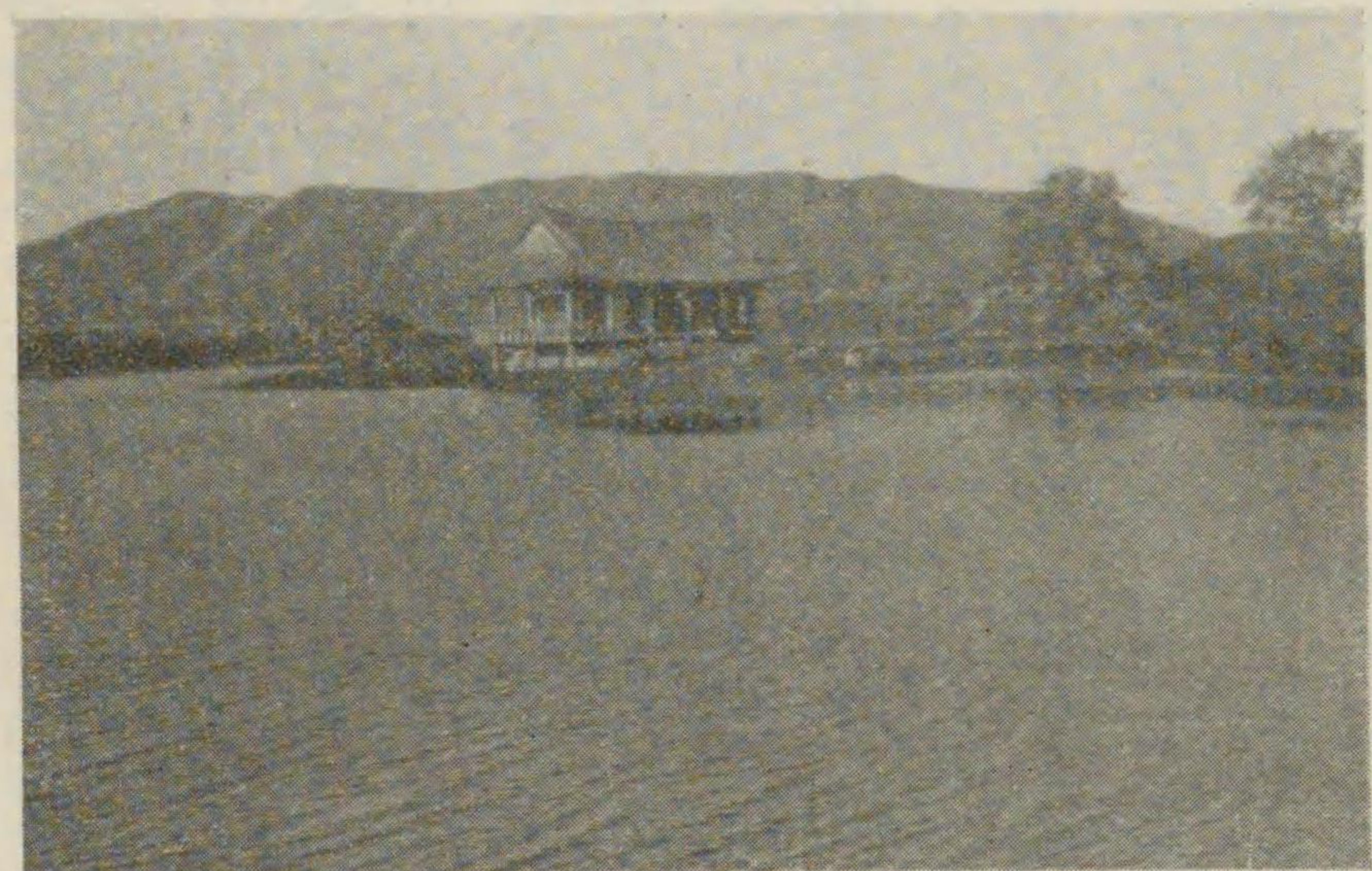
慶州佛國寺 貞孝四郎

似せて造られてある。月城に對する別邸で、諸々の宴會が行はれ、今でも當時、盛宴をした跡は歴然としてしのばれる。月城は城とは云へ城壁も何も無く築山で圍れてゐる。その山の一つに、石氷庫といふ五十疊敷位の穴がある。石でめぐらし、正長方形である。

であつたのを、謀つて脱解王が取つてしまつたそうである。次に新羅天文臺即ち、瞻星臺、これは繪の如く今でもそり立つて居る。こゝを廻つて鷄林に行き車中でその傳説を聞く。直ちに曲水の宴で名高い鮑石亭へ。鮑石亭は新羅時代離宮の在つた處であるが年代は不詳です。しかし流觴曲水をば

この城は千八年前、瓠公の所有

偲ぶに足る貴重な遺跡である。これは外國使節の來た時、もてなした處であるといふ。これから武烈陵へ行く。この墓は一部紛失せしところもあるが、残る部分は、龍の細かい「うろこ」迄、數千年をその儘でもちこたへて來た。又武烈の子供の書がある。この二者が相俟つて有名なのである。最後に四面石佛を訪れた。この石は新羅三十五代景德王が、唱佛の聲を聞いて堀出したが、大石に四體の佛が四面に描れてあつたのでこれを彫刻させたと云はれる石である。午前九時から自動車旅行をやつと終へ、柴田屋旅館へ着いた。夕食後附近の朝鮮人混浴といはれる、不氣味な風呂へ入つた。かへつてきたなくなつたやうな、それで居て、氣持のよいやうな氣で、その夜は初めて宿の床についた。時に十一時。



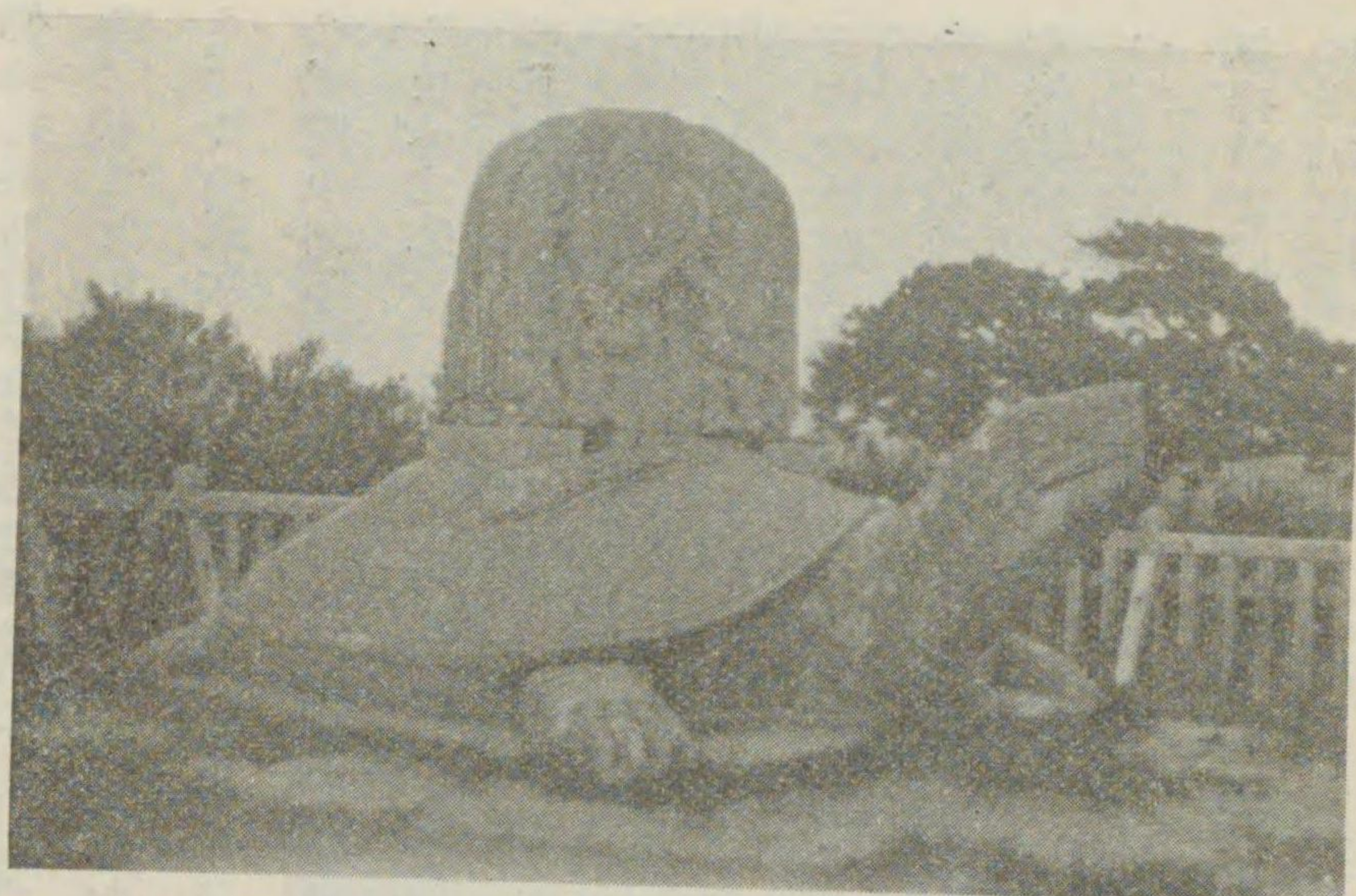
雁鴨池 堀野三郎

第四日

奥山一夫

五月廿五日（月曜日）晴

六時に起床、七時頃朝食を取った。すぐ近くの博物館に向つた。先づ館長、諸賀忠雄氏から新羅の歴史をお聞きした。「始め南山に人が住んでゐたが、その人はアイヌ人でなく彌生式土器を残した人であらうと言はれ、之を韓族と稱した。そして後一、二千年前或民族が南下して金石併用時代となり、この時代が進んで西暦後一千年頃に三韓時代に入つた。三韓とは馬韓、辰韓、辨韓を云ふ。三韓は漢江以南に存在した部落の集團である。後北方民族の大移動で始めて王を建てたこの王は紫の卵から生れたさうだ。後に海岸に着いた



武烈王陵 堀野三郎

卵から生れたと言はれる昔脱解氏が四代目の位に即いた。又鷄林の火に誘はれて子を得、之を十三代の王とした。之を金氏と稱す。かくして七百年五十六代新羅は慶州に都してゐた。三國平定の頃がその黄金時代で佛國寺はその文化の代表的のものである。之等の時代の物を始めから終り迄取り集め、しかもそれは朝鮮の榮えたと言はれる新羅時代のものであるから、言はばこの博物館は朝鮮の縮圖である。慶州の町は今も、田の道が四十間の間隔を置いて直線的になつてゐるのを見てもその當時の市區井然として、八十萬の人を擁し得た事を考へ得る。」お話を終つて藏品を見に掛つた先づ石器時代の提砥、石斧等を第一室で見た。それから金石併用時代、三國時代と見て行つた。三國時代の新羅焼を見ると今と同じであつて、朝鮮があまり進歩しない事を物語つてゐた。薬師如來もあつたが、之は排佛主義の難を逃れて現存してゐるものであると。又説明書に曰く、「朝鮮二千年の文化の所産としては新羅の佛敎藝術と高麗の陶磁器、李朝の活字印刷と諺文製作である」と。先に先生が御自慢になつた金冠は立派なものだつた。「鏤斗」なんだと思ふと酒をつぐものさうだ。先に進んで異次頓の供養塔、大鐘を見た。大鐘は聖武天皇の頃の三代の王がかゝつて作つたもので鑄造師がその愛子を犠牲としてよく鑄る事が出来たといはれる鐘で、さすると病氣が治ると傳へられて居る。音は上へ抜けるので高く吊らず、鳴りながら音に變化を來たし、不思議に強くなり

又弱くなる。ほんとに感心して聞き惚れた。博物館の見學を終り、十時頃大邱に向つて慶州を出發した。その汽車はマッチ箱のやうに小さく機關車も玩具のやうであつた。この途中鶴などの舞つたり、下りたりする景色も見られ、沿道中々面白くすぎた。車中で食事を取り、大邱へ一時二十分に着し、十五分程自由行動となる。一時五十八分京城に向つて急いだ。四時頃此の線の最高地で南北の分水嶺なる秋風嶺を通過した。早魃に對する爲こゝでは舊線路の燧道に水を蓄へる計畫をしてゐるさうだ。十時三十五分京城に着き、荷物を置いて、直ちに金剛山に向つた。鐵原も夢の中に過ぎた。

第五日

織内七郎

五月廿六日（火曜日） 晴

朝の六時に金剛口についた。冷々とした朝霧が流れる。まだ覺めやらぬ峻嶺を望みつゝ自動車に揺られて長安寺へ急ぐ。何といふ素晴らしい喜びであらうか。ほの／＼あくる金剛山！

緑に包まれた山々は、いとさわやかに一行を迎へて美しい肌を展開して居る。不知火旅館に朝食をすませて後、涼風を誘ふ松林の中を溪流の音を聞きつゝ、廣い道路を歩んで行く。南川橋を渡り、

雲住門をくゞり、萬水亭を通つてやつと金剛山の入口長安寺に來た。

千五百年前、新羅二十三代、法興王の起願で、眞表律師の創建したもの、其後、荒廢したのを、李朝世祖が六殿七閣を建立したので彫刻色彩、精巧の限りを盡し、當時の工藝を偲ぶ事が出来る。特別保護物である。左右に金剛の諸嶺峰を仰ぎ見乍ら、清流に沿つた小さな徑を、汗を拭き／＼登つて行く、光線が馬鹿に強くて目をひどく刺戟する。八時半頃、音に名高い、そして實に美しい鳴淵潭にたどりついた。やゝ廣い石疊を敷いた様に平な所だ。左に折れて暫く行くと三佛巖に着く。二丈以上の大きな岩が道の右手に突立つて居る。表には三尊、裏には六十三佛が刻まれてある。三人の子が父の後を追うて石に化したといふ哀しい話を



梶野義雄

金剛山

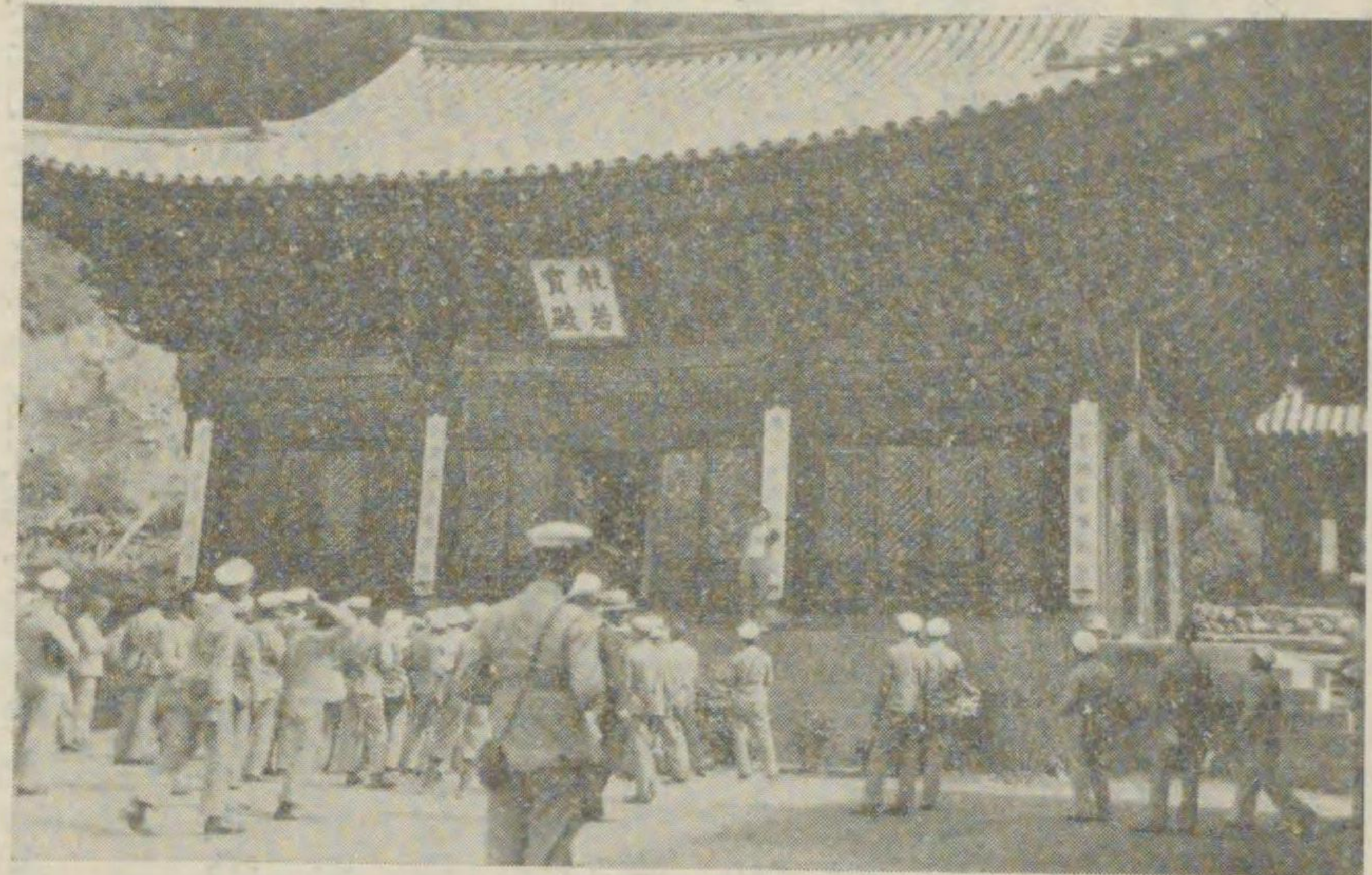


表 訓 寺

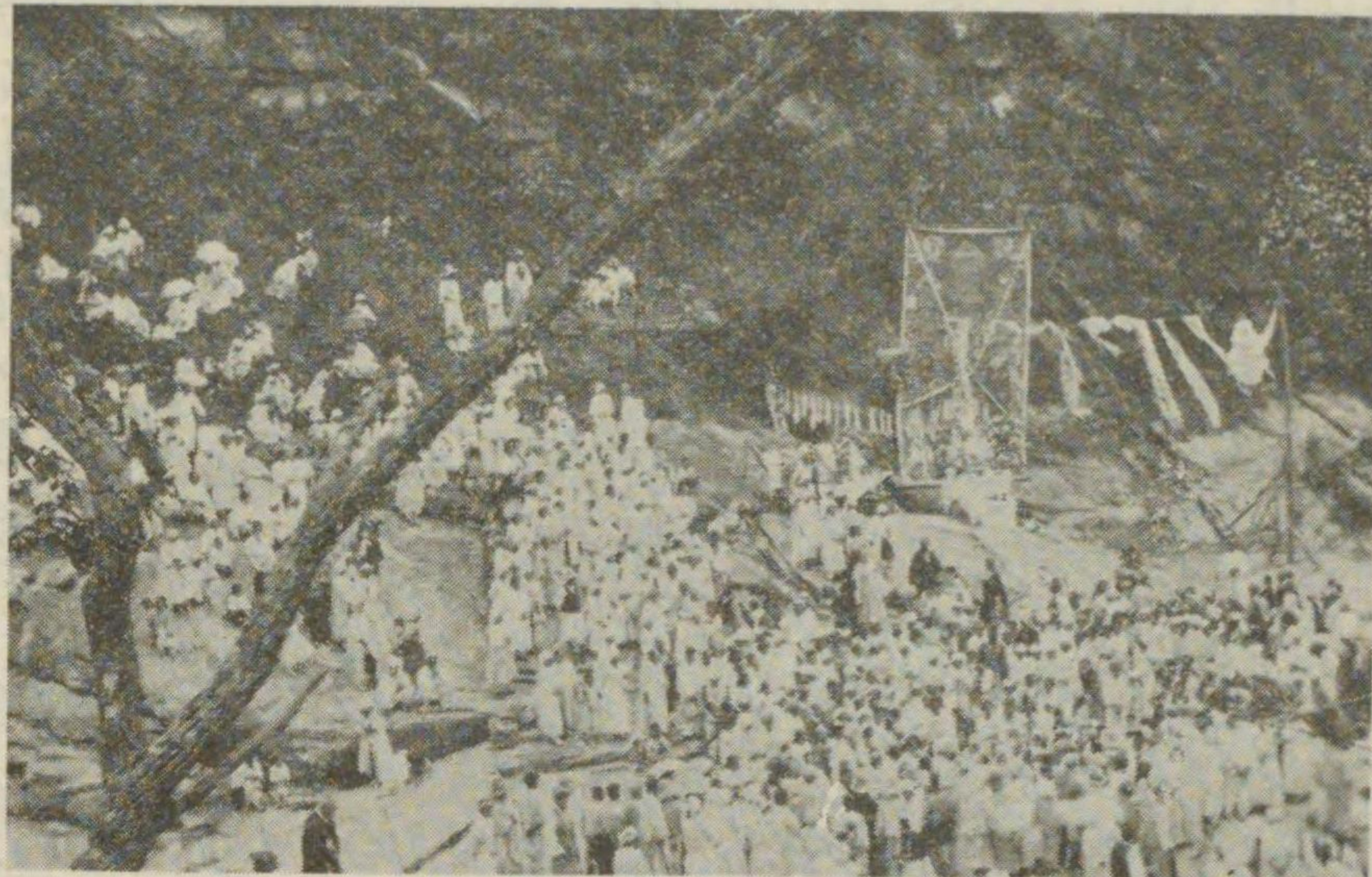
聞いて、今更に三佛岩を仰いだ。思へば先刻鳴淵潭の近くに見た四つの大きな石がそれであつたのだ。やがて表訓寺に來た。般若寶殿、極樂殿等、古色蒼然、長安寺につぐ巨刹である。此の間、大水が出たとか。大分に破壊せられてゐた。段々風景も勝れて來る。萬瀑洞に來た。萬峯の懷から湧く水の強大なる力は、巖をも石をも排して奔湍となり深潭となりて突貫する。雄壯な景趣である。一枚の大きな岩に蓬萊楓嶽元化洞天などと彫つてある。色々の文字が刻まれてゐる。白龍潭を経て影娥池に着いた。どんよりした水が藍をこらして居る。黒龍潭も美しく、碧波潭で記念撮影などして、普徳窟に向ふ。當面の頽嵐峭壁、法起峰の中腹には一本の銅柱を以て支へられた普徳窟が空外に懸つてゐる。這ふ様にして登る。十時四十分。小さな尼寺で

庭には日時計がある。涼々と流れる水の音、木魚の音——、讀經の聲。美しいメロデーだ。静な山の音楽だ。さて、青鶴峰、獅子峰の堂々たる風姿——、いつの日にか忘れん。危い足取りで坂を下りた。

火龍潭、藏經岩、やがて摩訶衍で搦んだ金剛水のうまさ！ 金剛閣と書いた八疊敷位の小屋の中に、寛からチョロ／＼と出て居る。皆の手は一齊に桶の中に伸びた。海拔二、八〇〇尺、遂に望軍臺など仰いだ美しさ。後方の白雲臺は秋の紅葉が非常に美しいさうである。正午頃眞珠潭に着き、食事をする。一時出發、元來た道に合し、萬瀑洞、表訓寺を通つて鳴淵潭まで來た。此處で實に珍らしい慰靈祭を見た。露店など出て非常に賑やかである。眞中ではシンバルの様なものを兩手に持つて音楽に合はせて踊つて居る。更に進んで明鏡



摩 訶 衍



朝鮮の慰靈祭

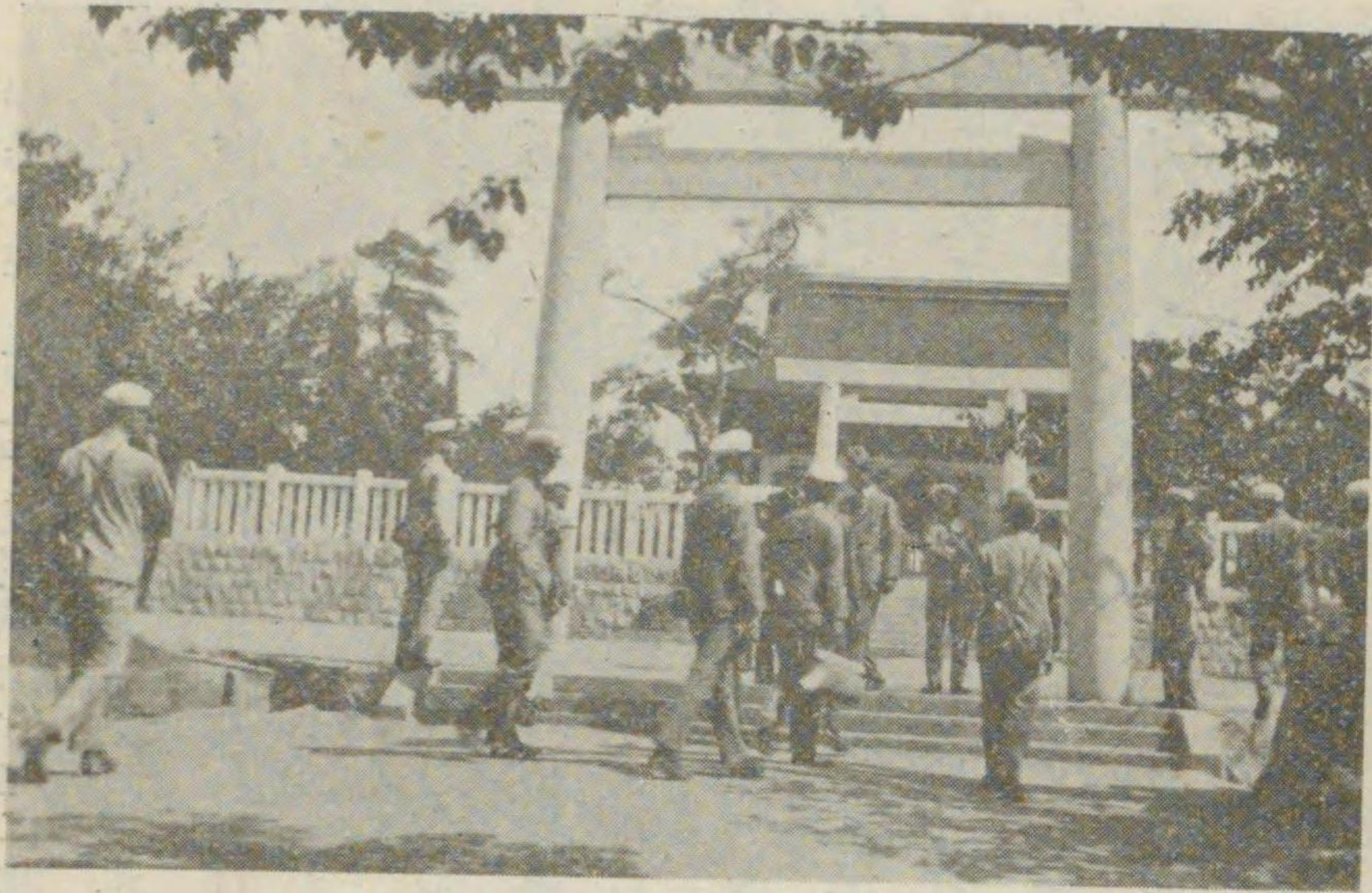
臺に着いた。青々と茂つた山の蔭が水に映じて何とも云はれぬ景色だ。まはり高い山に囲まれて居る。時々リスが木の間を走り廻る。三十分程休んで歸途に着いた。松の實など買ひ込んで四時の汽車で鐵原に向ひ同驛でガソリン・カーに乗替へ京城へ歸つた。

曉の金剛口の小鳥どもに

きほうて我も起き出でつるかな

折をえて白雲臺のみぢなど

また尋ね見ん金剛の山



朝鮮神宮

静かな朝だ。灰色の雲が低く覆つて一層静寂である八時出發。廣々とした静かな大都市京城であつた。五百年前李太祖の建造になる南大門(崇禮門)は古香懐かしく、廣衢の上に立つて居る。加藤清正はこれから入城したとか。青くまつはりついた蔦も昔をいかに偲ぶであらうか。左手の商工獎勵館に入る。朝鮮八道の珍らしい産物が網羅されてある。すぐに南山へ三百八十五の石段を上ると朝鮮神宮。白木造りの神殿神明造りの萱葺で棟に鏤めた御紋章が神々しい。祭神は皇太神、明治天皇の御二柱、大正十四年十月十五日鎮座、畏

第六日

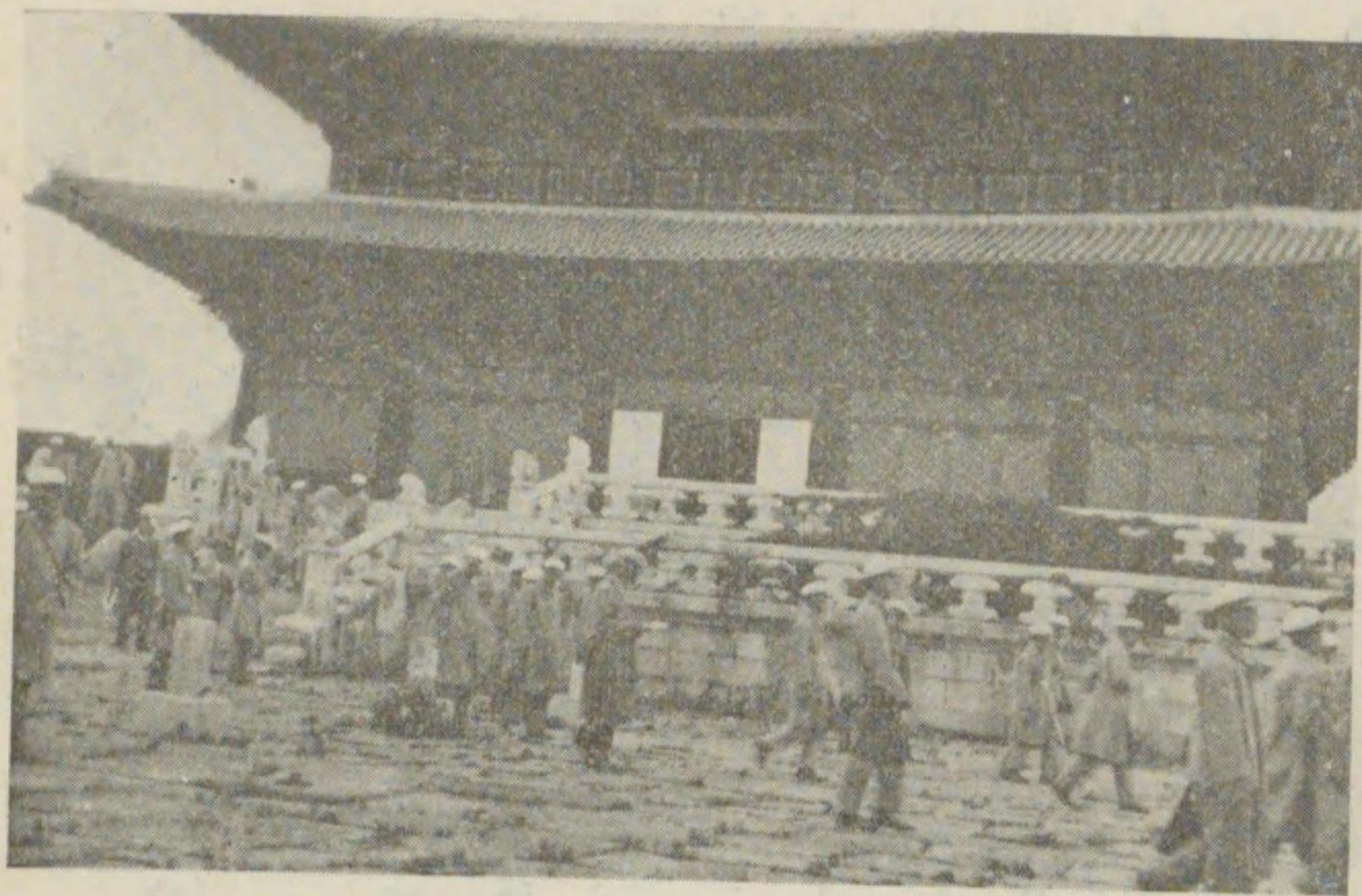
前田榮次郎

五月廿七日(水曜日) 曇

くも半島を護り給ふ。眺望絶佳で北に北韓山、鷹峯を負ひ西北に仁玉山屹立し東に駱駝山聳え漢江は洋々として東南を繞り、京城の都市が所狭きばかりぎつしり建てこめられて、丁度京都の感がある。山續きに南山公園、天満宮、京城神社、舊總督府、と、倭城臺(文祿の役の陣地)を下り永樂町より電車で總督府に着く。魏々堂々たる大白聖館。大正五年六月起工、十五年竣功。六百三十四萬圓。五階九千六百余坪。内部は全部當地産の大理石を用ひ明り窓の色模様、硝子等實に華美、豪奢に出来て居る。中心にある大ホールなどは鏡のやうで、成る程東洋一と嘆賞した。大壁畫は和田三造氏の作で内鮮融和の表徴たる羽衣傳説を題材としたものである。廳舎の後は敷地十三萬坪六十年前重築した景福宮で、興禮門を入れば勤政殿。石をしきつめた前庭



總督府



勤政殿

には一品から九品までの百官のならば石標がある。朱の大圓柱、華麗な玉座、天井の龍、さすがに王宮である。次に慶會樓。三千の朝臣に賜宴の地。四十八本の大石柱に支へられた大樓殿。白鳥浮ぶ蓮池、虎頭龍文の石のきざし。こゝでの晝食も思出の一つである。電車で昌慶苑に向ふ。弘化門を入つて右手、櫻の墜道、植物園を通り祕苑に行く。老樹天を摩し池水滾々たり。山峽溪流の間に巧に配置された殿堂門廡の古雅仙境に遊ぶ感がある。博物館、動物園を見て歸途珍しい白松を見た。鐘路通りに出て、パコダ公園へ來る公園は不潔であつたが寒水石十三層、三丈餘の塔身にぎつしり佛像のある塔は珍らしかつた。夜景殘惜しく十一時に平壤へむかふ。

第七日

太田良一

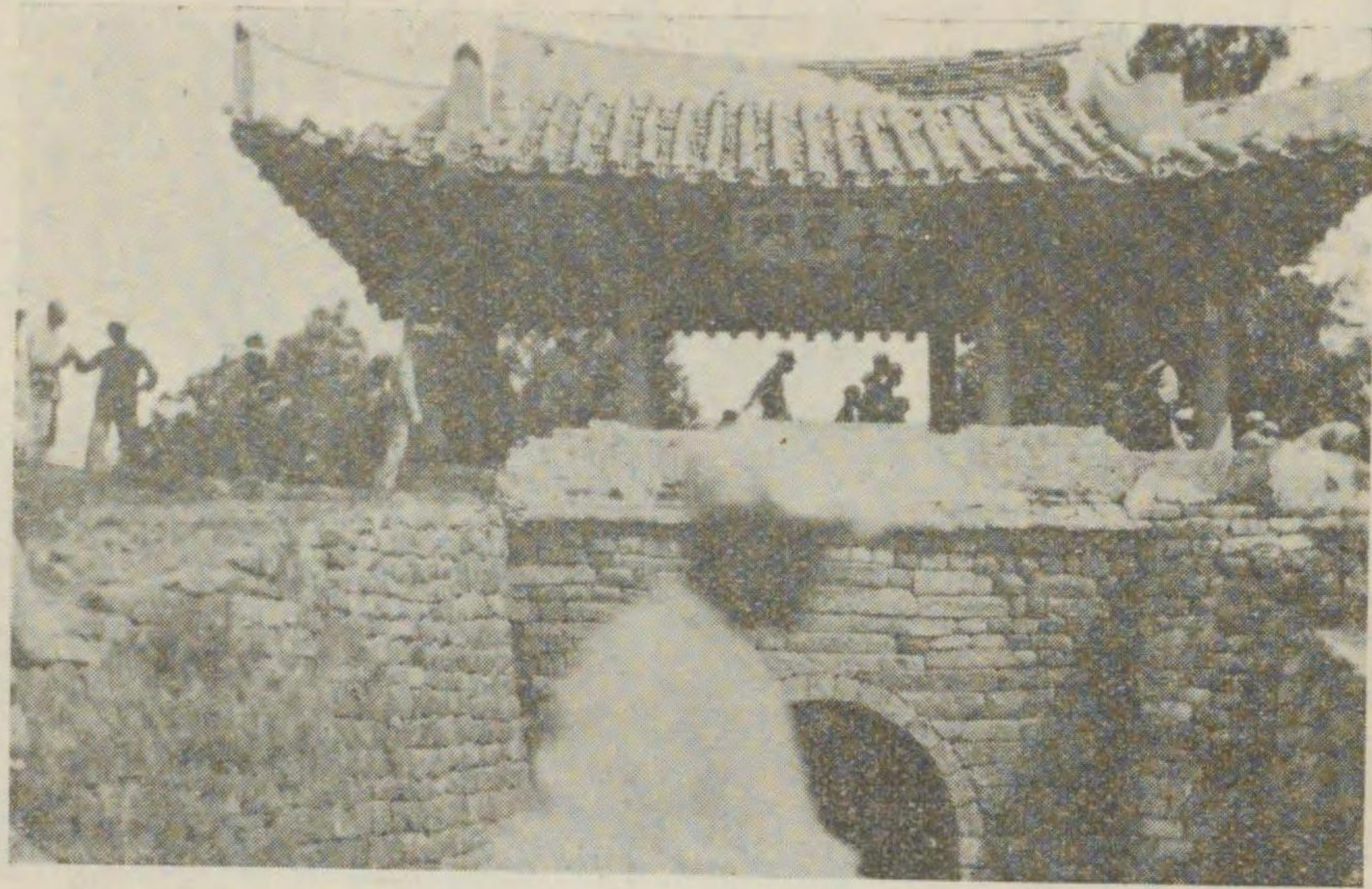
五月廿八日（木曜日）晴

刷毛にはいた様な横雲に大陸の太陽が強く反射して、今日も絶好の旅行日和。水量豊かな大同江の轟音一瞬、私達は午前六時十分西朝鮮の中心都市平壤にいた。驛で洗面した。

廣々とした野原を左右に朝の空気のすがすがしさ。京義鐵道創設記念と書かれた碑の無造作に建てられて居る中にも開け行く朝鮮の歴史が生きて居る。つばめ屋旅館で朝食を攝つた私達は、次の寸時にも東京への便を書いたり、さりゆく朝鮮の繪葉書をコレクトするのに餘念が無い。八時公立普通學校の大井先生の御



巴 谷 公 園



七星門

案内で出發。ポプラ並木を行くこと暫にして瑞氣山へ出る。廣く市街を一望に納め、遠く大同江の清流が迂回して朝霧の中に消えて居る。箕子及高麗の都した朝鮮最古の都府が、今、近代工業都市として活氣づいてゐるのを見た。

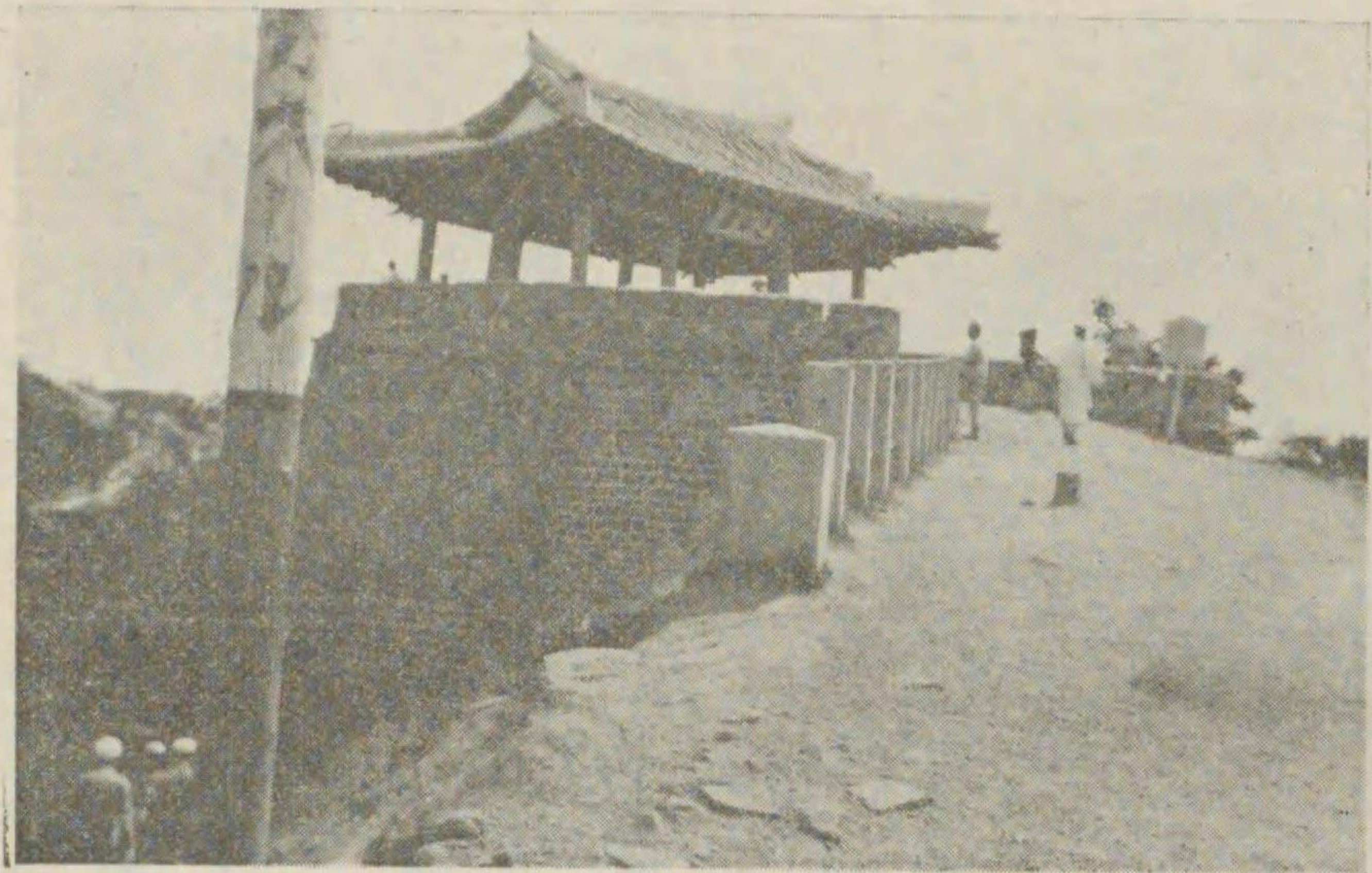
博物館では平賀先生の御話。朝鮮の文化は、三千年前箕子に初まる。箕子は殷の一族で周より來り、約千年四十一代續いたが、後衍氏を取り、八十年で漢の武帝が此れを亡ぼし、郡を置いた。樂浪郡は其の一つである。約二千三十年前。尙樂浪郡の外三郡は四五十年で撤排せられ、四百二十一年後高句麗の南下で樂浪郡も滅亡した。これが三百年程續き佛教を弘む。後新羅唐が聯合して高句麗を倒し、新羅が朝鮮を統一した。今より約千四百年前。こゝに新羅文化が興り、佛教が

盛であつたが李朝の爲に滅亡した。

尙館には、二千百五十一年前所謂車戰時代に用ひられた銅鉾及び戟戈。孝文廟より出た銅鐘。非常に優美な樂浪時代の瓦。石斧、劍等。大泉、五銖貨泉等役所の跡から出た古泉。當時用ひられた人力車の車軸等あつて當時の文化を偲ばせた。赤く焼かれた大きな瓦を見ても當時の建造物の壯大なりし事が分る。高句麗時代の古墳は中の御影石に立派な壁畫があるが、約二千年前の樂浪郡時代の埴埴墳は埴を使つて巧妙な天井を作り、二個乃至四個連續して造られた棺室には通路を築造し連絡が取つてある。各室には木棺或ひは被葬者の靈に供へられた各種の什器、武器、裝身具等が置かれてある。當時の鏡などで日支鮮の三國から出た物が總て型が同一であると言ふ事實も面白い。市電で大神



箕子廟

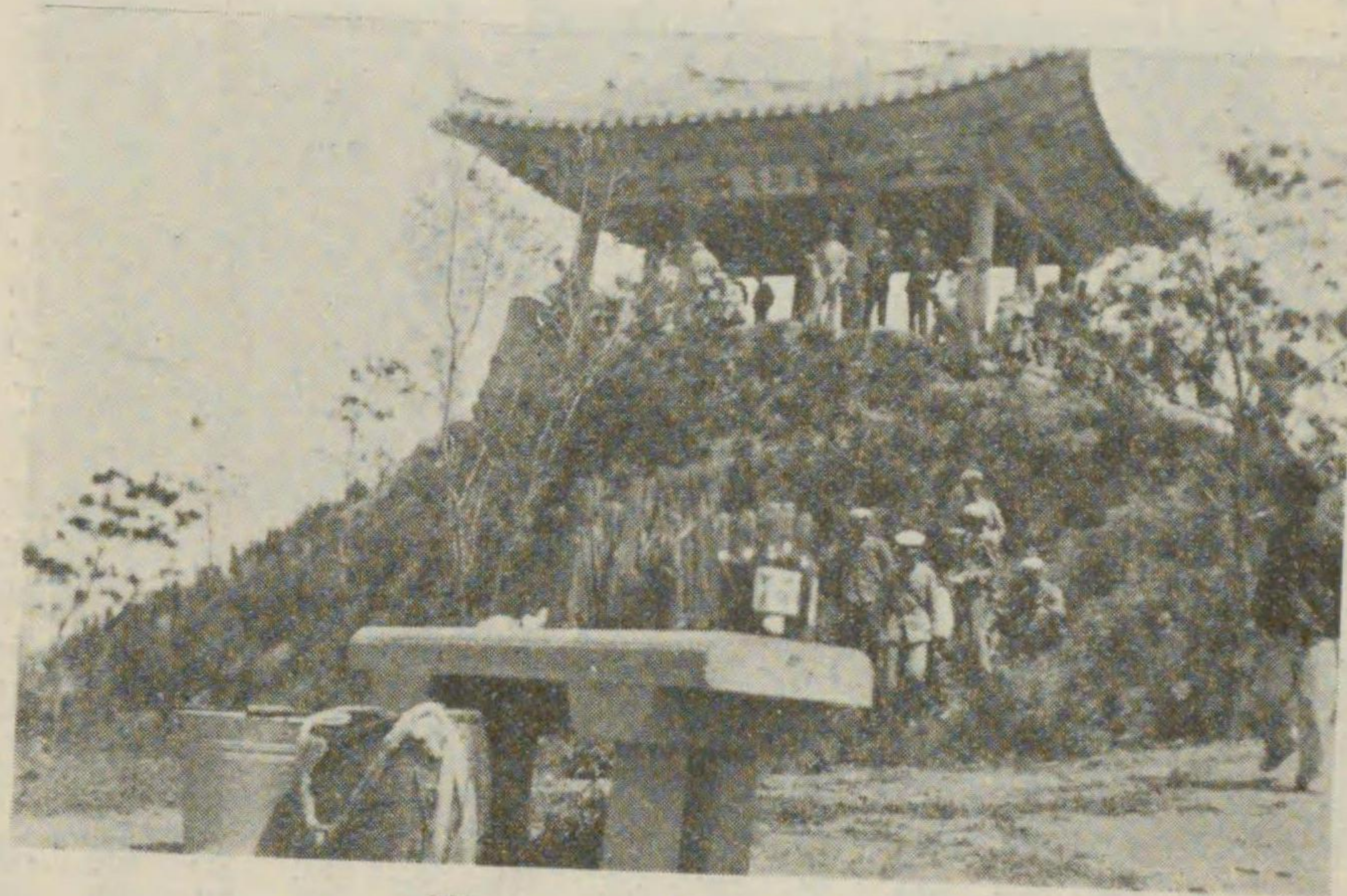


乙密臺

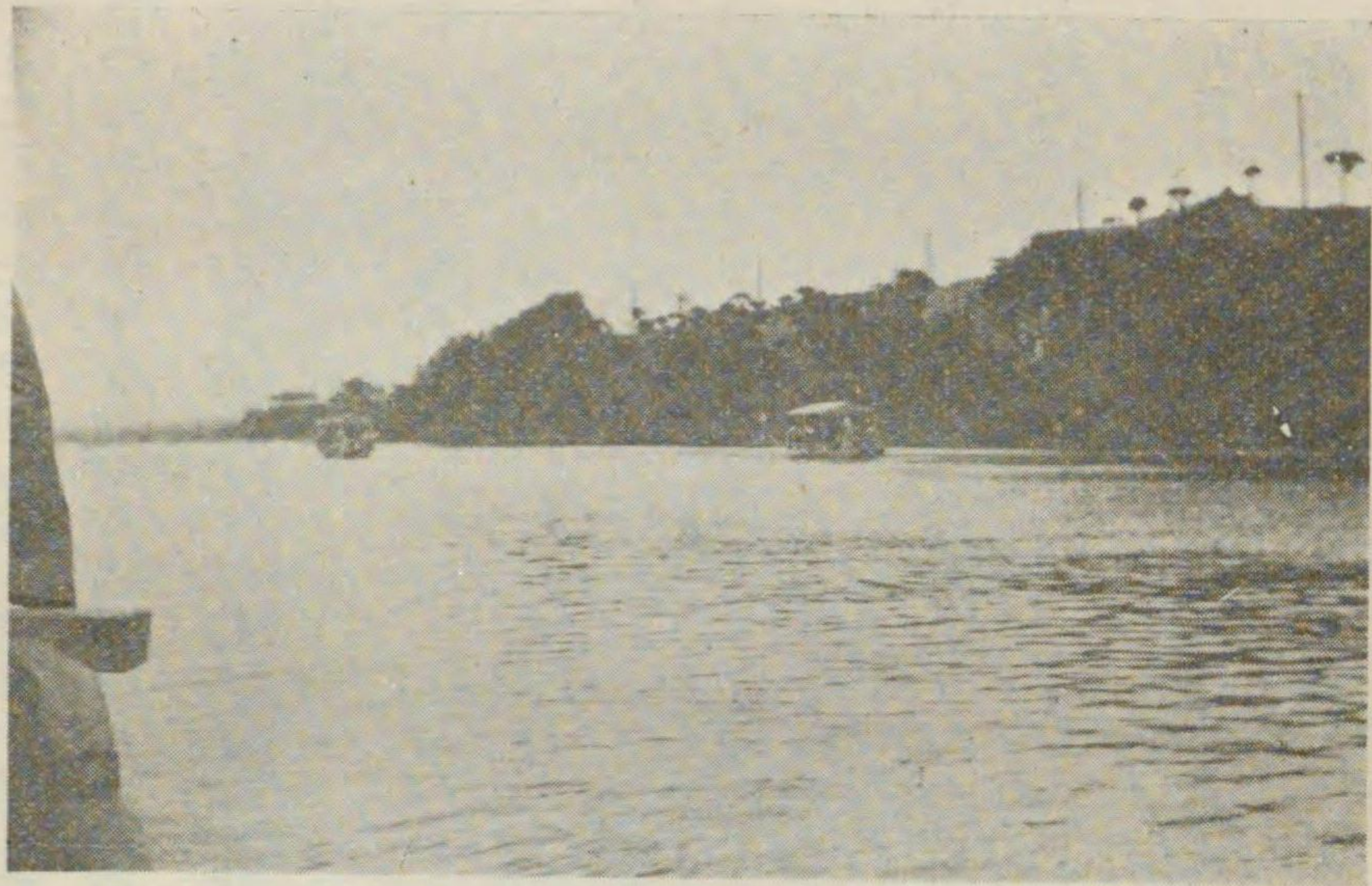
宮前下車。葉櫻の石段を登つて天照大神を祀る平壤神社に參拜する。廣々とした平野を眼下に、府制擴張後の新市街を想見する、左方は林檎に有名な鎮南浦が見え、前方のポプラ林はヨツタルマルクの古戰場、佐寶箕將軍戰死の處とか、平壤六門の一、七星門を経て櫻並木を箕子朝に至る。箕子の遺物が埋藏せられ、遺骸は焼却後空中に飛散せしめたとかいふ。幾代目の箕子であるかも不明である。松林を通つて、錦繡山の一角峯巒美くしい四虚亭に到る。日清戰役の勇士原田重吉と共に江湖に喧傳された玄武門は義州及び元山街道より乙密臺、浮碧樓方面に入る一小門で、今なほ當時の激戦を偲ばしむるものがある。記念撮影して、最勝臺に小憩、乙密臺に向つた。清く静な大同江はかすむ様な水平線の彼方にとけ込んで見える。綠樹の中に樓閣

の隠見する牡丹臺の美しさ。春風秋雨朝鮮三千歳の歴史、美しき江畔の風光は夢の繪巻物を物語る。

牡丹臺上から見た風景は又格別。漾々として崖脚を浸す大同江の碧流。前面咫尺の處に浮ぶ綾羅島。遠く眺望される船橋里の古戰場。眞晝の太陽が中天に輝き夏らしい入道雲が一入趣を添へて居る。小憩後下山、轉錦門の傍から舟に分乗して江を下る面白さ。歌が自然に出る。北部獨特の髪を白布で蓋うた婦人が、パンクシイといふ洗濯棒でパタ／＼やつて居る。河の面を流れて來た微風を受けて辨當の何と美味しかつたことよ。約一時間、大同門下に舟を捨てた。六門の中最大の物で、平壤への重要な通路であつた。危急を報じた鐘も今はたゞ昔語り。隣接の練光亭は江畔に臨める岩上に在り。四百余年前監司許碯の建設したもので、文



牡丹臺

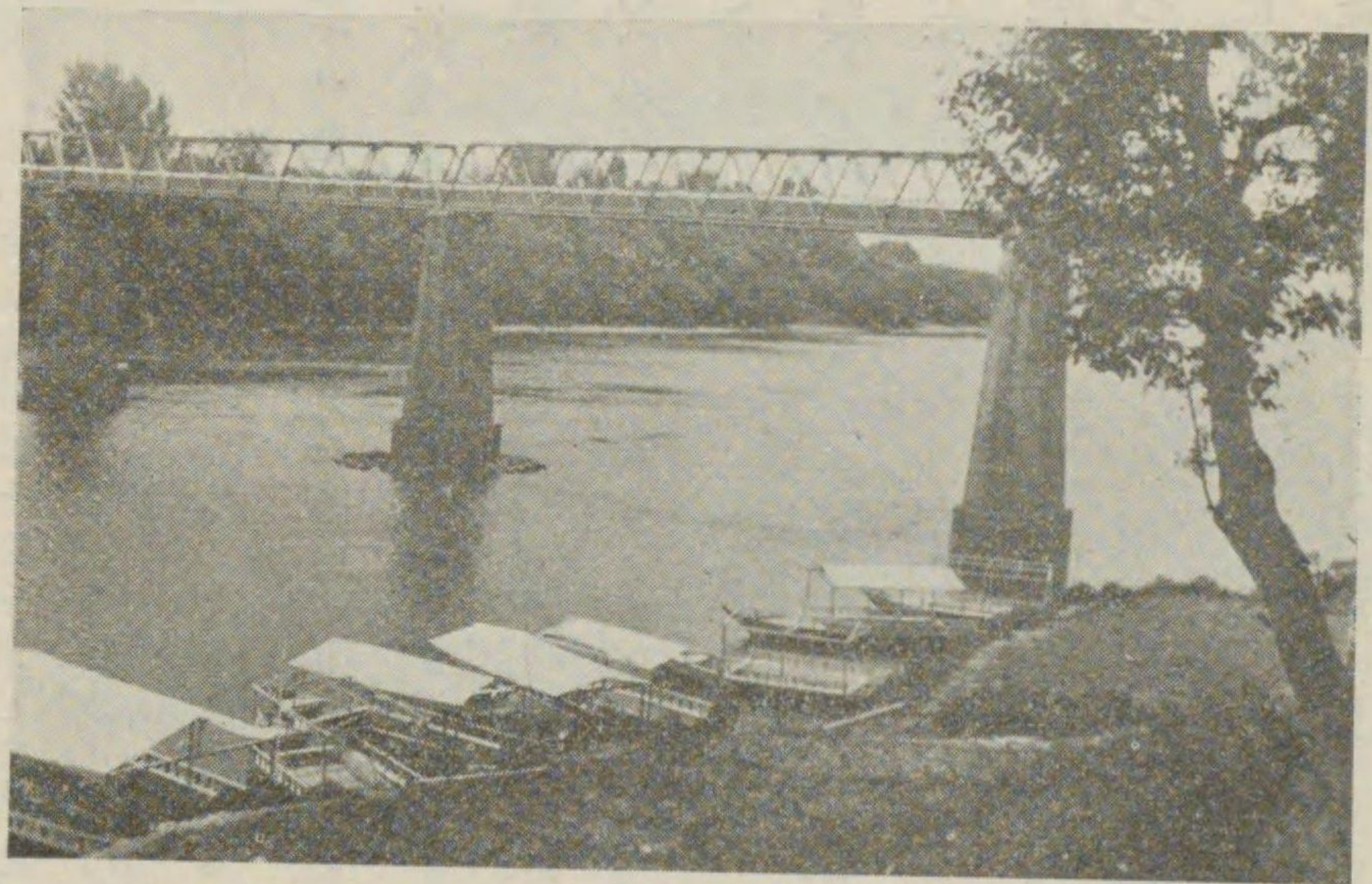


大同江 (其一)

祿の役には小西行長が明使沈惟敬と和を講じた處として名高い。案内して下さつた鮮人の方から、内部的朝鮮の理解、東洋の平和のための心からなる融和等々の御希望があつて解散。各自は思ひ思ひに市中を視察した。もし諸君が或る靴屋の店先に立つて、黒、白、アメ色のあの獨特なゴンドラ型の護謨靴が行儀よく一面に並べてあるのを見て、思はず微笑んだ時、きつと店の中に坐つて居る鮮人が、愛想よく話しかけるでせう。勿論立派な國語で。「おかしいですか……皆んな神戸から來るのですよ……昔護謨が無かつた時には藁や竹で作りました。雨降りにはこんなのを穿いて居ました。」と言つて奥から古くすゝけた木製のものを持ち出して親切に説明してくれるでせう。尙諸君は店を出る時必簡単な禮を言ふべきである。内鮮人融和の爲に。

かくて三時十八分平壤發。夕食を済して、村々の燈が色づく頃新義州を通過。唱ひ出した國境警備の歌も何となく寂しさを感じる。鐵橋をわたる轟音も一瞬、私達は二分の後異境の地に立つた。支那へ。異境へ。時針を一時間後らして七時五十五分安東に着いた。滿洲の汽車がカラン、カランと鐘を鳴らして通り過ぎる。總ての空氣が大陸的だ。好奇の眼を見張る。税關の持込證明書をうけ、初めて外國の土地を踏むに當り一通り岡田先生の御注意を受け、元寶館旅館に投宿した。かくて國外での最初の眠りについたのは十一時近かつた。

此所は朝鮮北端の二百里餘りの鴨綠江渡れば廣漠南滿洲極寒零下三十餘度卯月中半に雪消えて夏は水沸く百と餘度

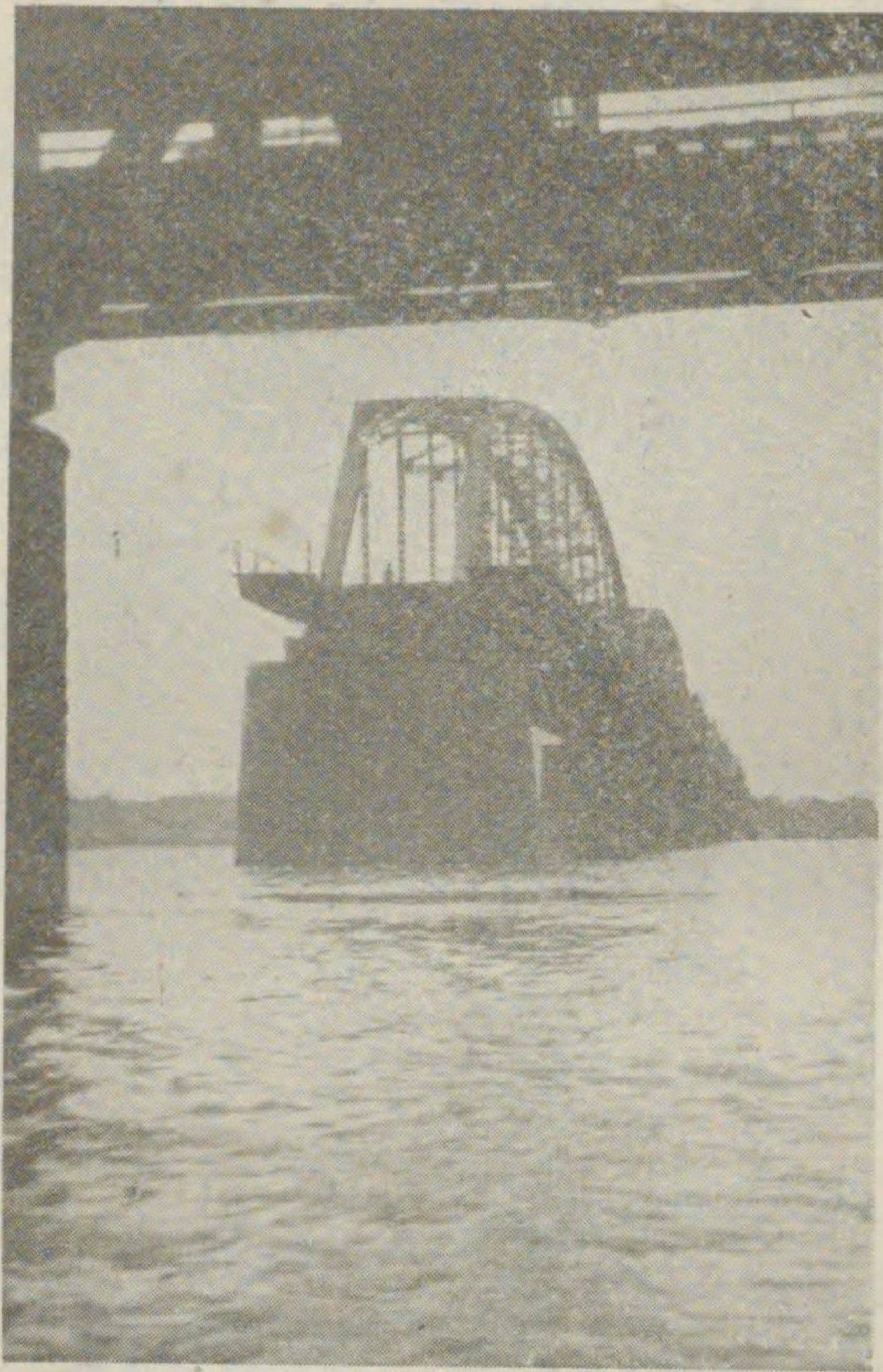


小瀬村俊雄 (二ノ其) 大江同

第八日

五月廿九日 (金曜日) 晴

清水啓利



鴨綠江の大鐵橋 池田虎雄

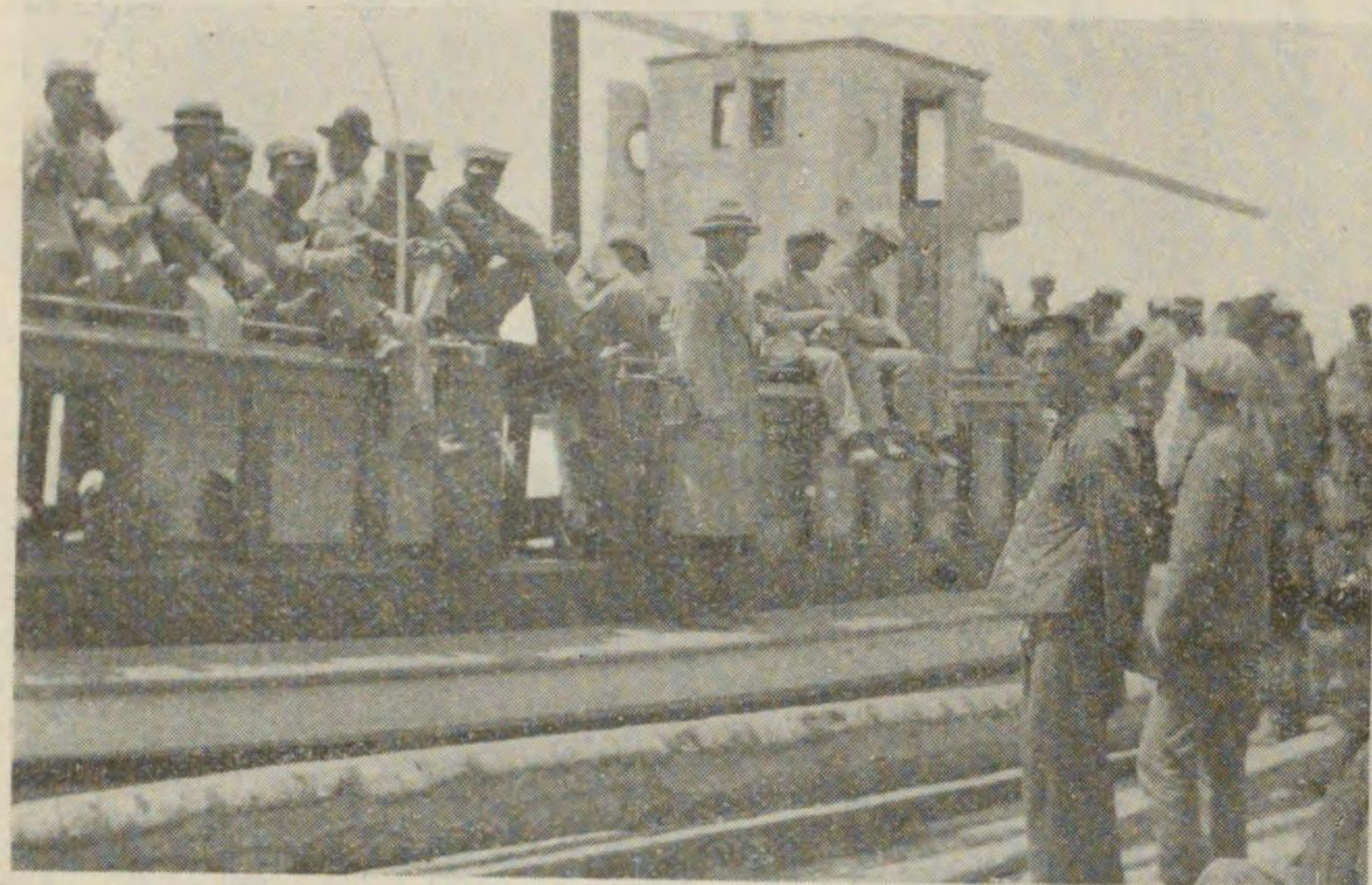
鮮と支那の境の國際河鴨綠江はその源を遠く東北白頭山に發し滿洲より渾河を容れて益々其の大を爲し、滔々百四十里黃海に入る。流域實に二百餘里。舟楫を通ずる事百二十餘里。安東より對岸新

簷端に噪ぐ雀の聲も朗らかに國境を越えて第一日の朝だ。八時宿を出る。新緑の光美しきポプラの並木に整然たる街衢も爽快に江畔に出る。洋々たる鴨綠江！ 往き交ふジャンク、東洋一の大鐵橋が先づ目に映ず、銃もつ警備兵も國境！といふ感を深くさせる。江を隔て、白頭山の溫容が低い。朝

義州迄江を横断して架した一大鐵橋は彼の「東洋一」と流す筏と共に民謡に唱はるゝ通りの大規模で長さ三千九十八呎二百三十九萬圓の工事費二箇年の日子を費して成つたものである。橋桁が十二連一日三回中央の一桁が開閉されて船の上下に便する。橋の中央は鐵道線路となり、兩側八呎が歩道である。橋の南詰は朝鮮總督府、北詰は支那の税關で携帶品の検査をする。實にこの鐵橋こそは支那への通路であり又歐洲大陸との國際道路である。九時三十分橋桁は重々しく廻りはじめた。岸壁に停泊して居た無数の彩帆がゆるぎ出した。採木公司の後藤先生の御案内でランチ採公丸にのり行き交ふジャンク、蒸氣船の間を縫ふ。江上の涼風心地よく頬をなでる。貯木所管林署製材所等江畔にならぶ楊柳の間に隠見する。支那砲艦靖海が灰色の船體を濁つた水の上に浮べて居る。私達のランチ



一揚田佐羽 橋轉廻江綠鴨



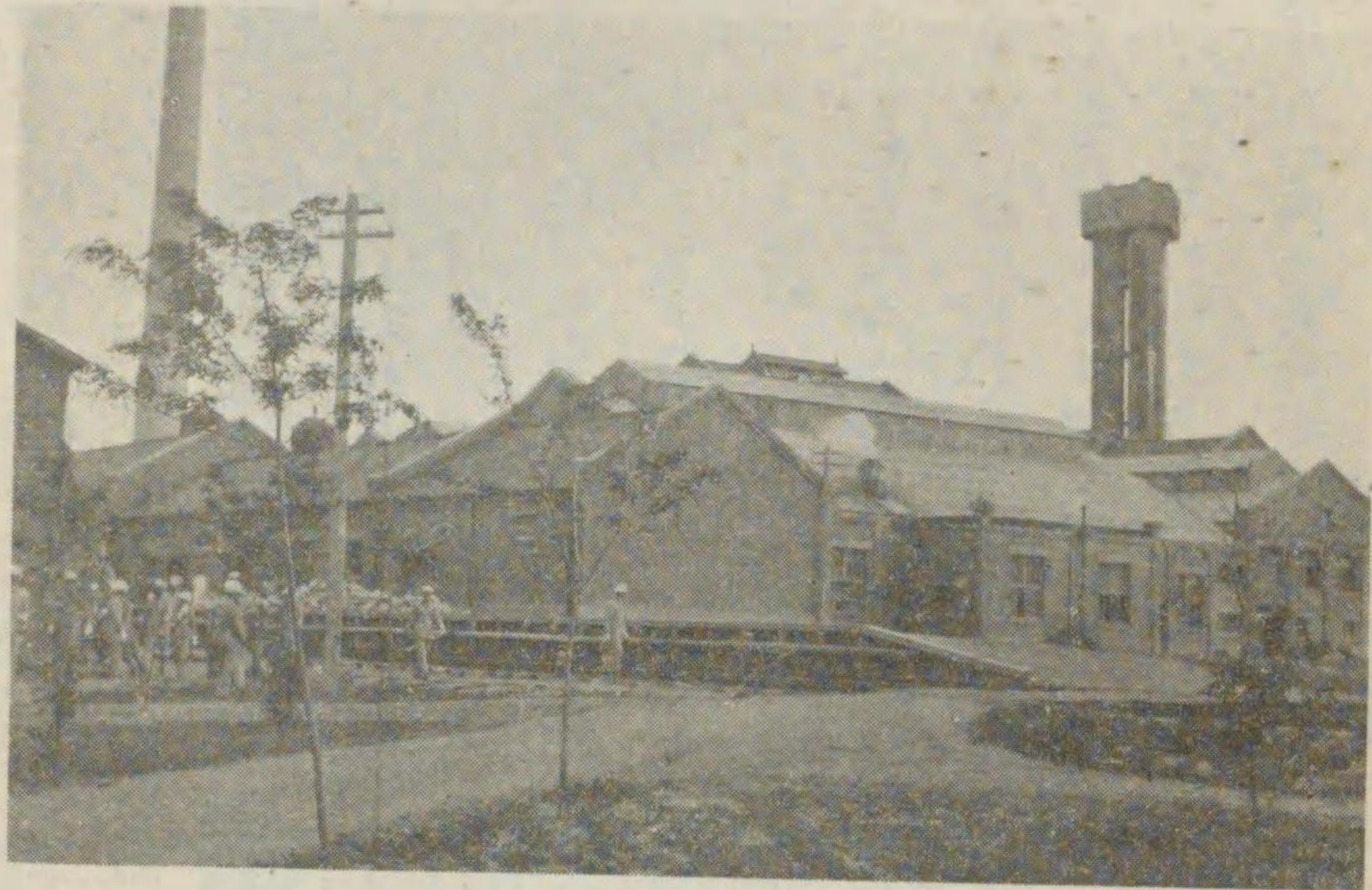
丸公探チンラの司公木採

は一廻轉して全く十字に開いた鐵橋の下を過ぎる。眞帆片帆の往來が繁い。近代的な鋭角美こそないがジャンクの船頭唄が醸す支那らしい情趣があふれる。新義州側に王子製紙安東側に挽材株式會社の屋根が見えるランチを支那筏につけて見學する。家つき筏の珍らしさ、青衣の支那人が右往左往して居る。支那筏は日本筏と異り釘で木材を連結し四角形に組上げる。洋々たる大江に家つき筏の悠々と流れるのも大陸的情緒だ。筏材は主として杉松、紅松、落葉松、水曲柳等である約八割は針葉樹で就中紅松、杉松の類は鴨綠江材の代表的木材として建築材、殊に紅松は建築化粧材として特に稱揚せられ、杉松は製紙用材としての地位を占め落葉松は電柱枕木材料として聲價を認められて居る。鴨綠江材が北滿材又は米材と比して特に品質優良なり

と謂はれるのは鴨緑江材が伐木せられてより百數十
 里。「流れ盡きせぬアリナレの波をまくらの筏舟」と
 なつて流下し安東で取引せられる迄、短くとも三ヶ月
 長くて一ヶ年間水中に浸されて居るので材中の丹寧分
 所謂アク抜けがして居るので使用後割裂等少なく且紅
 松は一種の光澤があつて一見檜に類似し工作の施し易
 き所等が特色として認められて居る。再びランチに乗
 り、支那町の岸に行き上陸する。この邊りジャンク、
 筏、蒸氣船等せましく入り込んで帆牆林立の賑か
 さである。人や車や荷物など陸から河へ河から陸へと
 目まぐるしく送り込み送り返へされる。名物の浦鋒馬
 車が砂塵を巻きあげて走る。むせかへる様な悪臭、軌
 る音喚ぶ響様々の雑音が支那料理の油鍋の様に物凄い
 叫聲を擧げて居る。この交響樂の中から混合した原色



家つき歩でその小屋を覗いて見た高梁の御飯を試食した

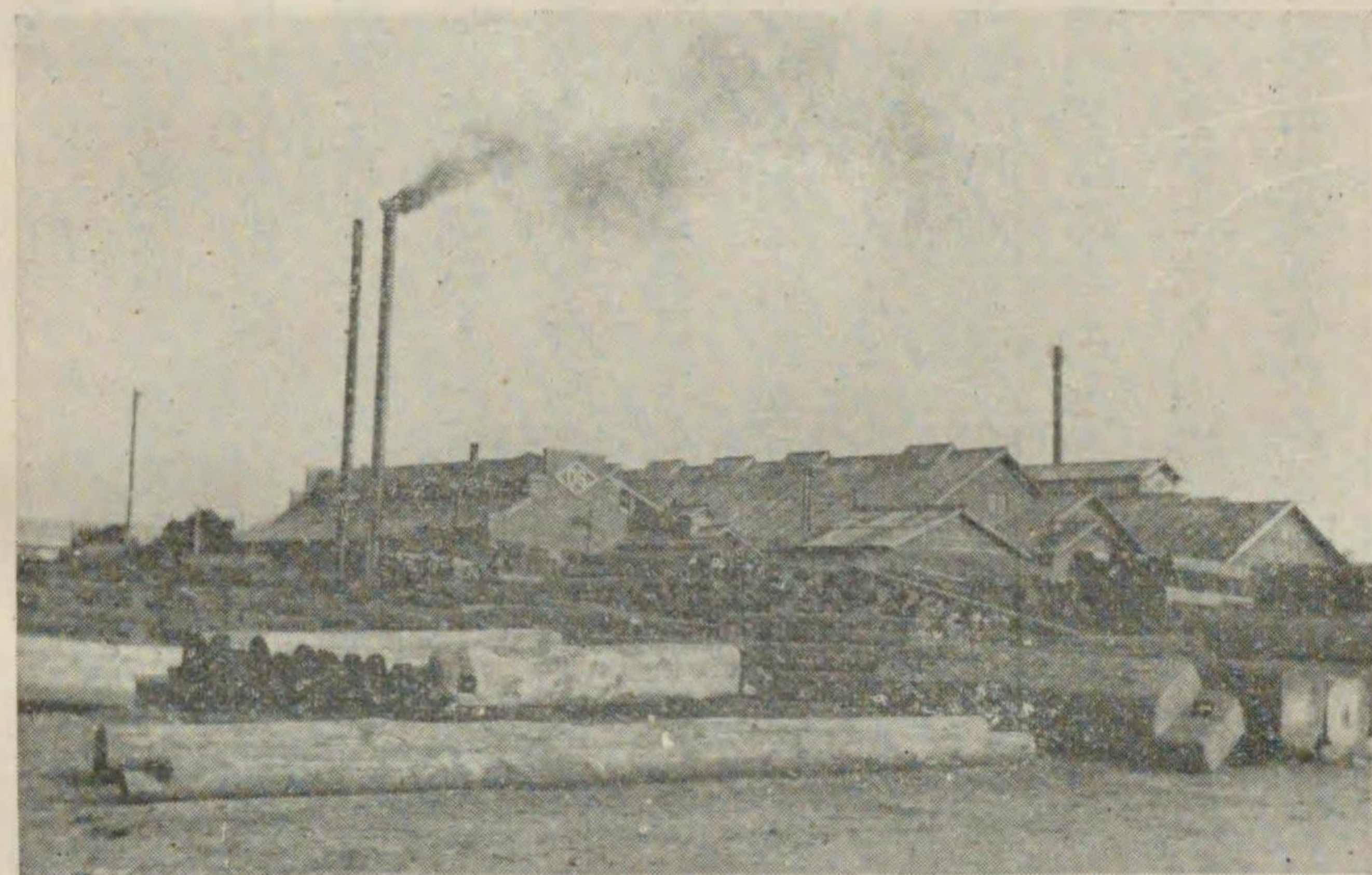


鴨緑江製紙有限公司

的な色彩を感ずる。財神平街は和源泰をはじめ支那人
 經營の商賈軒を連ねて居る。廣濶な街路を採木公司に
 行く。新市街にある小學校、女學校、圖書館等、いづ
 れも新緑の樹蔭に恵まれ堂々たる洋風建築である。鴨
 緑江採木公司の表札のかゝつた門に入る。静かな講堂
 に總務課長橋本先生の御講話を承る。零時三十分採木
 公司を辭して鎮江山公園に至る。忠靈塔に日露戦役に
 護國の鬼と化した勇士の精靈を弔ひ展望臺で晝食す
 る。ビュローの方から市街についての御説明がある。
 七〇年前、高粱の穂波打ち茫々たる原野であつた安東
 は、今や南滿の新興都市として南滿洲鐵道株式會社地
 方管理事務所の管理に依り活躍して居るのである。支
 那人街である舊市街邦人建設經營の新市街人口合せて
 拾三萬三千餘内地人一萬六千餘人である。四圍の眺望

亦佳く、遠く鴨綠江は銀蛇のうねるが如く大鐵橋も指呼される。山を下り安東神社に跪拜し馬車に分乗して鴨綠江製紙工場に行く。木材より原料となり紙となる迄の順序を見せて戴く。それより鴨綠江製材公司にむかふ。貯水池挽材場等を參觀し支那苦力と賃銀の御話等を承り再び馬車を驅つて宿に歸る。

歴史とロマンスの夢につままれた朝鮮からこれは又あまりにも歴史的に没交渉な新興都市安東、しかしそこには潑刺たる生氣が充ちて居る。釜山埠頭に觸目する白衣の影が鴨綠江を渡ると全く藍色に變る様に、朝鮮人と支那人とは全く服の白と藍程經濟人としても差異がある。……近代産業の安東一日の見學を終つて、午後八時四十五分奉天へ向ふ。



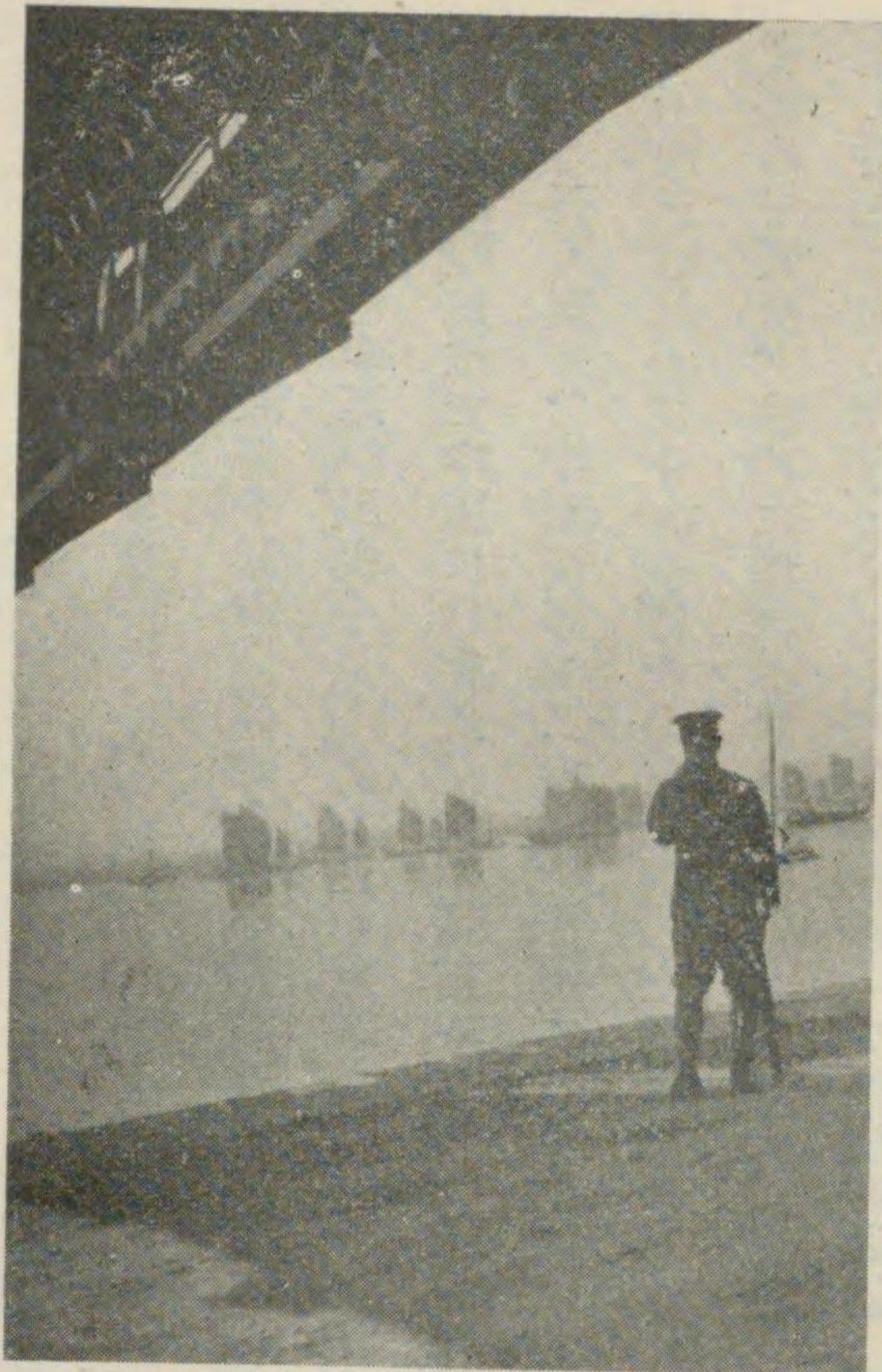
鴨綠江製材無限公司

第九日

五月卅日 (土曜日)

晴勝チ

島津健次



國境警備(東安) 片山道徳

安東で乗車した時、操車の手違ひから我々は混雜した。四等車の様な電燈の暗い、よりかゝりの低い車であつた。そこへ一團、こゝへ一團と不便でもあつたし、不安や不愉快もあつたので車掌や警官が協議して撫順の小學生をつめてもらひ残つたものは三輛目に乗つた。滿鐵の第一歩は朗らかでなかつた。

午前四時四十二分石橋子を通過五時丁度姚千戸屯通過。この附近山影漸く遠く中華民國人の住宅



が多い。洋館もある。朝鮮人と異なり營々として働いてゐる。

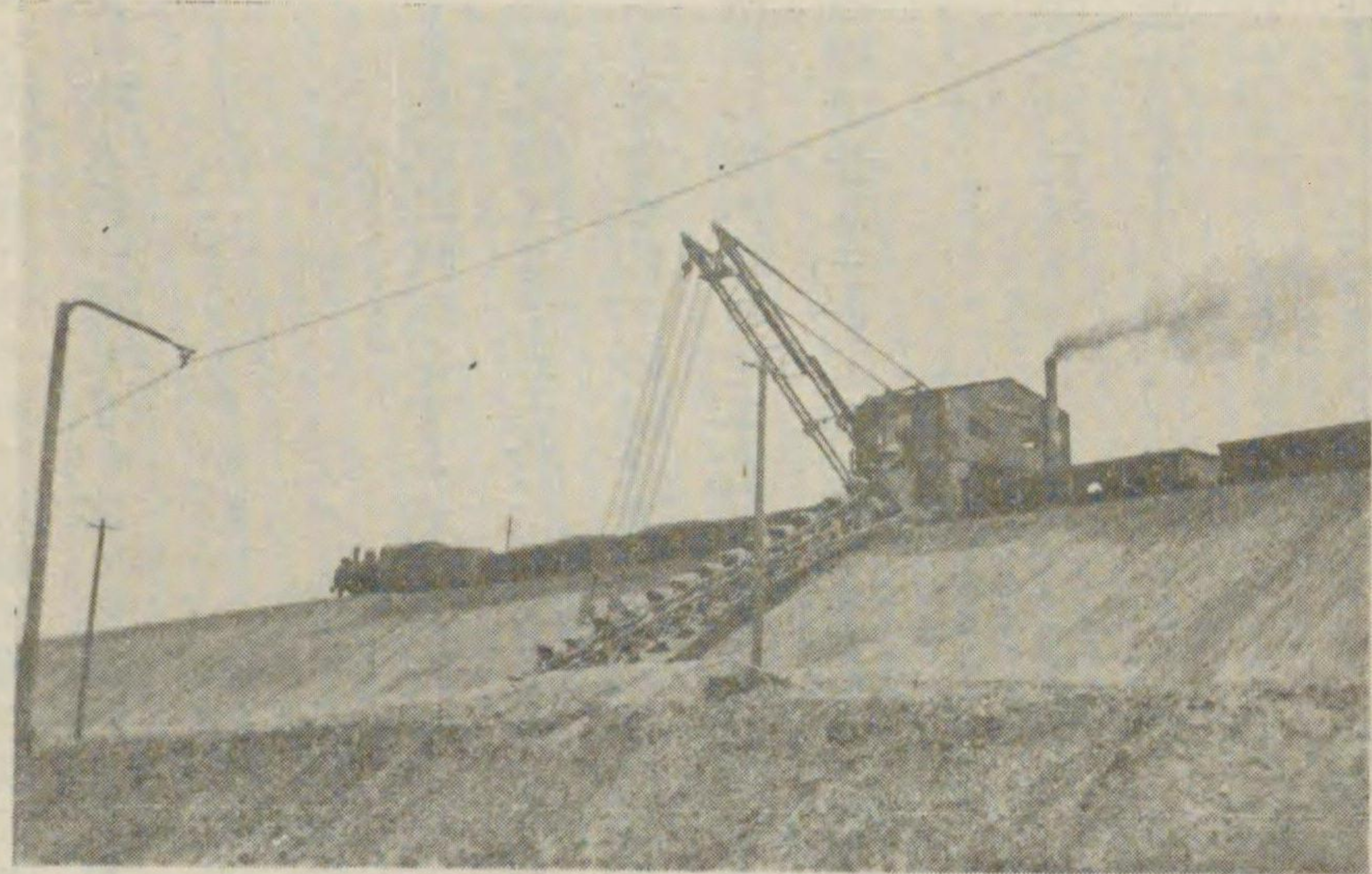
奉天に着くと直に荷物を旅館に預け撫順行の列車に乗る。案内人赤帽等が繪で見た清兵の様な風をしてゐるのに目を引く。たつた一刻の下車にも異國の珍風は深い印象となつた。六時三十五分撫順に向ふ。

七時三十七分深井子通過。滿洲らしい原野茫々として眼界開く。車中高歌す。李石寒を経て撫順に着。薄緑色の瓦の屋根小じんまりとした驛。ビューローの方に案内せられて、見學を終へ午後零時六分撫順食堂で空腹に日本式洋食の舌鼓を打つ。三時半迄自由行動。附近は土産物品店ばかり。琥珀、石炭細工、繪葉書等で二時間余を消す。折柄はげしい夕立、雷鳴、降雹さへを見た。

午後三時五十分撫順發。土匪を刑した處が見えるといつて騒いでゐた。旅趣漸く濃やかに心氣きはめて爽快、陽西に傾きて野良から歸る人々の影荒茫たる原野に點々として霞む。長白の山々水色に映えて緑の彼方に見える。午後五時一分楡樹臺通過。午後五時二十分奉天着。瀋陽館に向ふ。奉天第一、實に落着いた上品な宿であつた。九時迄日本人街の方面を限つて自由散歩、商業道徳が下卑してゐる様に思はれたがどうか夜。十時半就寝。

見學の概要

撫順炭坑中央事務所屋上で左の如き話を聞く。撫順炭坑に於て過古二十五年間滿鐵が八千二百萬噸野戰鐵道經理部其他土人等が採掘したのを合せて一億噸になる。埋藏量約十億噸は殆んど確定的であるから今後は九億噸と思へばよいのである。一箇年の採炭量は最高で昭和元年同二年時に八百二十萬噸であつた。輸出先は内地及び上海、香港、フィリッピン、ハルビン方面でその内内地に一箇年百六十萬噸から百七十萬噸輸出される。最近賣行が悪いので撫順炭貯炭量は百三十萬噸にも達する。内地では大阪、東京、名古屋、新潟方面で消費され、八幡の製鐵所へも相當送られる。一日の採炭量は最高二萬七千噸平均約二萬噸である。二萬噸と言へば三十噸積の貨車七百臺以上を使用する。勞働者は殆ど民國人で露西亞人が些か入つてゐる。賃金は



撫順炭坑

貞孝四郎

一日約四十五錢内地の九州の炭坑に於ては一日約三圓支拂つてゐる。如何に生活費の低廉なるかを
知り得る。この點日本人はとても匹適し得ない。撫順在留日本人約一萬八千、多く従業員とそれを
顧客とするものである。

大山坑

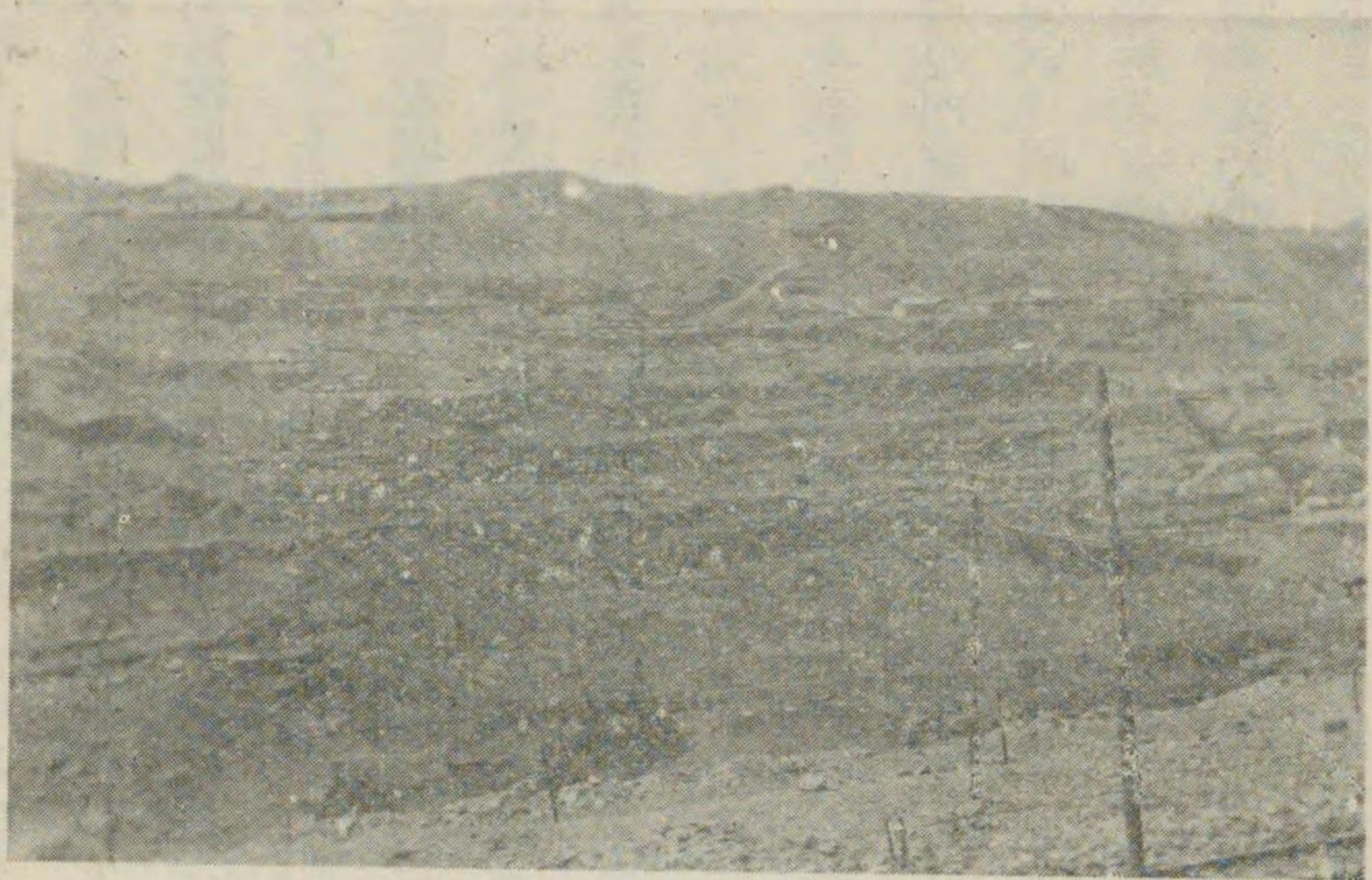
九時二十分頃大山坑に着き坑内事務所前で説明を聞く。大山坑は坑内掘で一番大きなもので一日
最高三千噸から四千噸現在は千八百噸位採掘する。明治四十年起工、四十三年に完成したもの、坑内
の運搬は電車を以てする。坑内労働者は安全ランプを使ひ監督者は帽子の前に電燈をつけ懐中電燈
を持つ堅坑は水平面より一二三四尺あり樓が二つあり事務所の方から見て手前の方は人間用であり
入氣坑である。先方は石炭用であり排氣坑である。坑道の總延長は三十五哩。世界有數といはれる。
内地の夕張は二四哩三池は一八哩である。

坑入口、坑夫が安全燈を受け出勤簿に出勤の印を押して坑内に入る。

扇風器、通風の悪い坑内であるから扇風器を設けて通風を良くす。

樓(人用) こゝから人が出入す。一二三四尺を四十秒で上下す。

樓(石炭用) 石炭を地下から運び出す。中は眞暗で地獄に續いてゐる様な氣がする。掘つた石炭



露天掘

はトロツコで選炭場に運ぶ。

選炭場 トロツコで來た石炭はトロツコごと機械で
ひつくりかへし、落し穴のあいたベルトの上を徐々に
進ませて大塊炭、中塊炭、粉炭に分ち、精選せられた
一定の塊炭は貨車に積む。此處は非常にうるさい。

古城子露天堀

撫順で露天堀は四ヶ所あるこゝはその中で最も大き
い。元此處は華人の部落であつたが買収して大正二年
頃から五年頃迄試験的に堅坑を作つて採掘して居たが
米倉第三代炭坑長の主張により大正六年之に着手し同
八年完成した。今後此處から一億噸採炭する計畫ださ
うである。一日最高二萬二千噸現在では約八千噸採
掘してゐる。採炭の方法はエスサアベターと言ふ機械
(多くのバケツ状のものを一列に續けて持ち之で土を

かき上げる。よく河川工事等で見ると陸上に持つて来たと思へば良いで表土を除く。次に油母頁岩を除け最後に炭層に深さ十米位の穴を開け、火薬をつめ爆發させ、炭層をゆるめ電気シャベルで貨車に積込み又はエンドレス運炭機を用ふ。なほ撫順炭田の東部の坑層は四十尺西四百七十尺平均百三十尺總面積千八百二十萬坪東西四里南北一里ある。

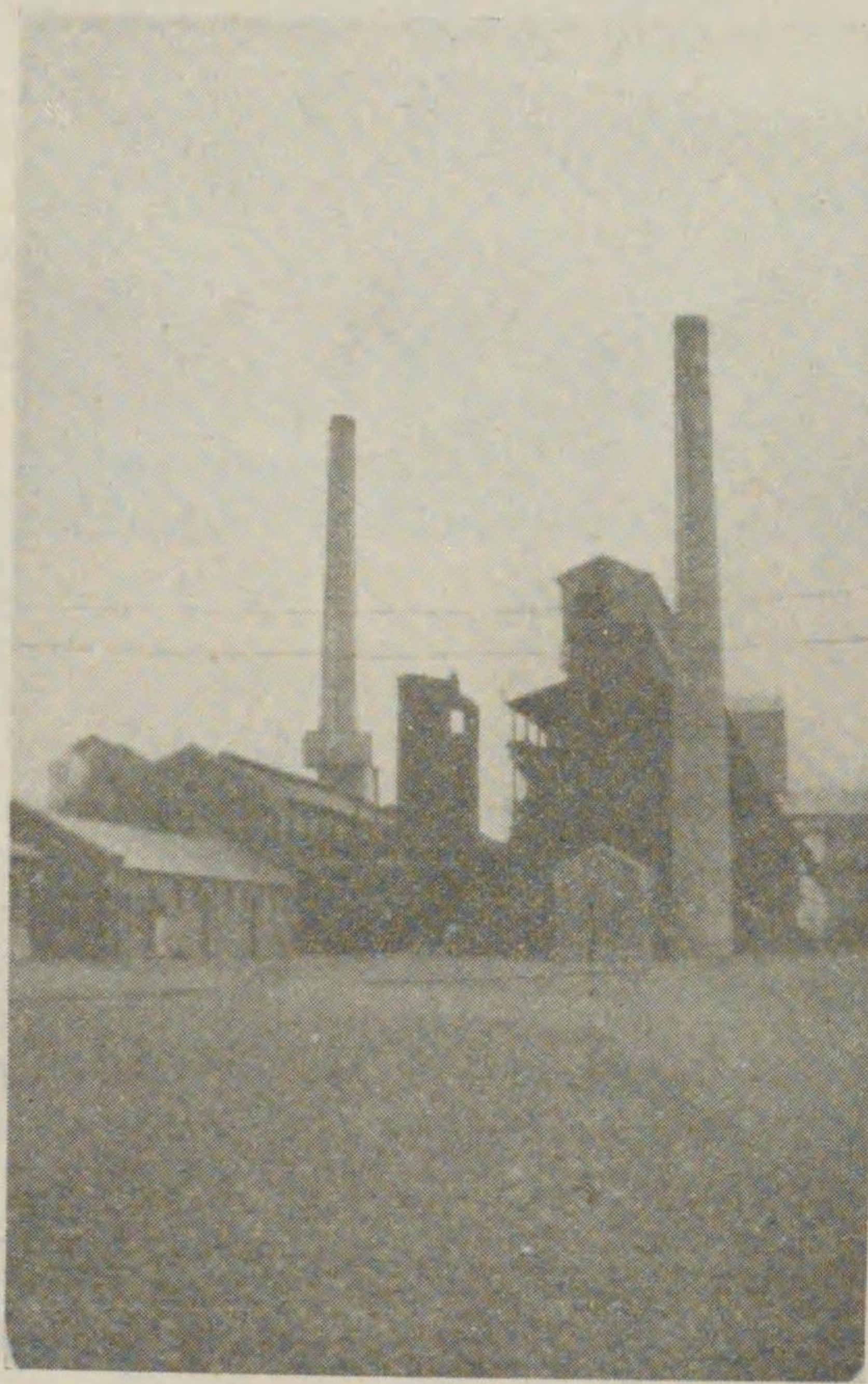
露天堀は炭を全部堀れるのが特長で、堅坑堀だと穴の上部等は残して置かねばならぬ故埋炭中の60%—65%位しか採炭出來ない。炭層が地下七五〇尺以内だと露天堀が可能である。併し露天堀をあまり廣く擴げると雨露に當る故表面の粗質惡化するさうである。

オイルセール工場

オイルセール岩は撫順炭層の表面を平均四、五十尺の厚さで覆うてゐる。總埋藏量五十四億噸でその内露天堀で剝離すべきもの二億二千噸、含油量は層の上方に於て多く石炭に接せる下層に於て少い。昭和三年四月起工し同四年十二月處女油を採る。全部機械が動く様になつたのは同五年五月で全く完成したのは七月であつた。オイルセールは今より七十年前英國スコットランド、スエーデン、エストニヤ等で製造を開始した。撫順に於けるオイルセールは明治四十二年頃より知らるゝ所であつて

雨に當つて發火しやするのでその中に石油が含有せられてゐるとか、石炭が含有せられてゐるとか論議された。遂に之を歐洲に送つて試験したが譯を誤つて下層を送つたので認められず失望したが、後上層に行くに隨ひ含有量の多い事が解つた。そこで色々研究し熱瓦斯循環、内熱式乾溜法を考案し企業に着手した。その製造工程は専門的で不明であつたが大體

露天堀で採掘した油母頁岩は第一破碎場及び第二破碎場で一定の大きさに破碎され乾溜爐で熱瓦斯で低温乾溜を受け油蒸氣を生じ更に瓦斯發生爐に入りて固定炭素及び窒素は瓦斯化せられる。之の瓦斯は油蒸氣と共に乾溜爐を出で油分



小島邦治 オイル・エシール工場

は液體となり分離され窒素は硫酸アンモニアとして回收される。而して燃料瓦斯は乾溜用瓦斯の加熱爐汽罐場及び蒸溜罐の加熱用に供せらる。液體となりて分離された頁岩油は連續及單獨の蒸溜罐

で蒸溜せられ其のパラフェン含有量多き緑油は冷却壓搾されて粗蠟（パラフェン含有量50%）を分離し他は燃料油即ち重油となる。尙乾溜残滓は坑内採炭跡の充填用に使用する。見學順左の如し。
事務所——乾溜罐——第二破碎場——第一破碎場——硫安精製所——硫安積込所——蒸溜罐其他は危険に付見學せず。

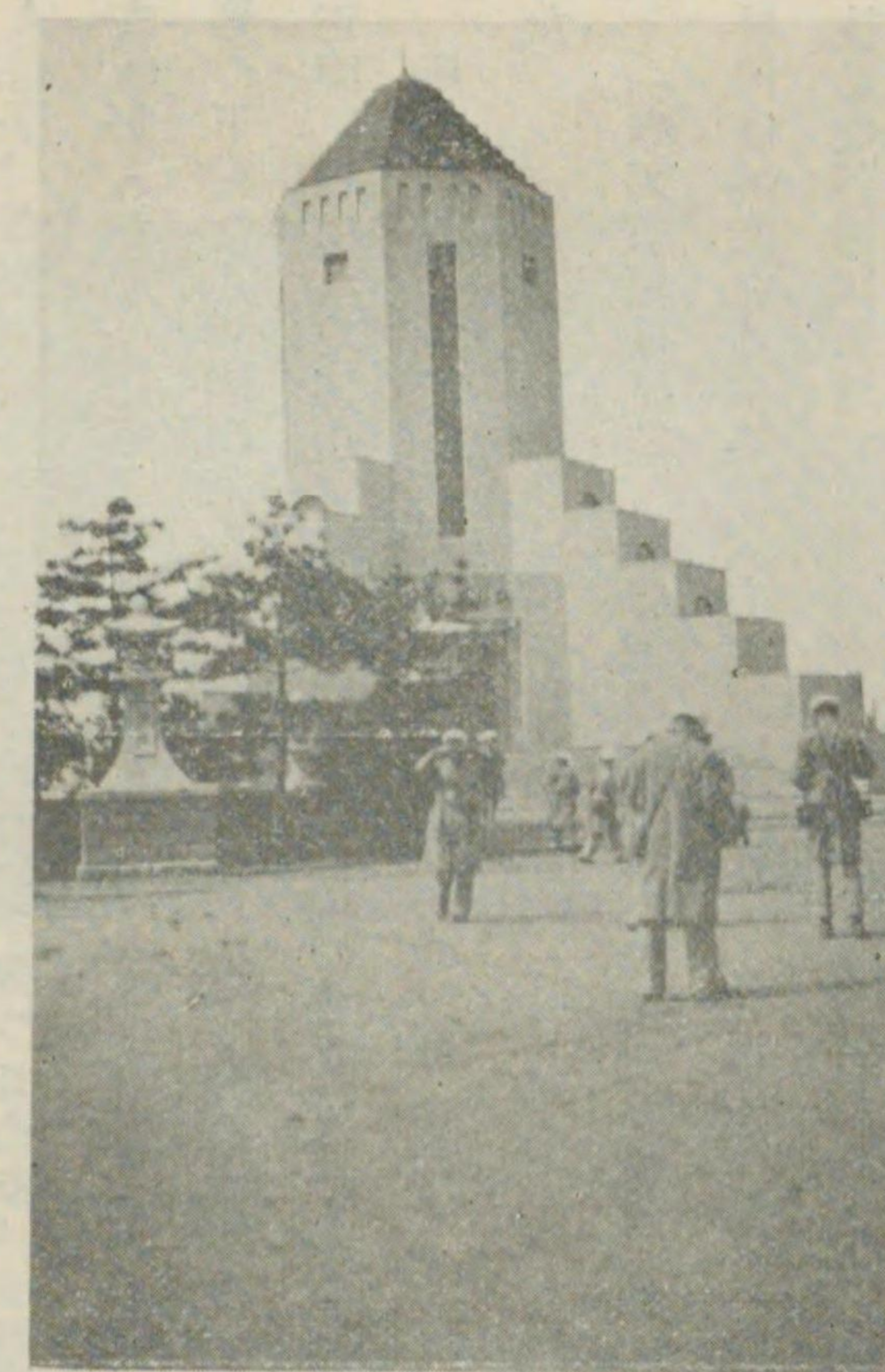
第十日

山田正二

五月卅一日（日曜日） 晴

寒さを防ぐ爲の二重窓を開くと、淡い朝霧と共に、陽が入つて來た。朝だ！ 滿洲の朝だ！ 何となく嬉しい。朗かな天地！ 午前八時卅分三十臺の馬車で出發。折から競馬の廣告樂隊自動車が奇妙なメロデーを奏しながら向うに去つた。旅館の裏は教會で、あの先の尖つた塔の中から莊重な朝の音樂が聞えてゐた。滿洲醫科大學を後廻しにして忠靈塔に向ふ。何を措いても先づ、勇士の靈に參拜したいと云ふ心持からであつた。

一、忠靈塔 新市街中央、千代田通り東三省官銀行の前に在る壯麗な六稜ピラミット型の塔である。大正七年九月竣工、三十七、八年戦役の奉天會戦に於ける戦死者三萬四千九百十名の靈を祀つて



奉天忠靈塔 宮崎大典

ある。主に名古屋三十七聯隊の兵とか。祭典は三月十日、四月卅日、十月卅一日に執行。尙附近に小銃彈型「明治三十七八年戦役忠魂碑」があつた。案内者、高橋氏の説明。

「奉天會戦は實に今日滿洲文化の基、日本勢力の植付にして、その快勝は舉國一致の熱誠に由る。

されど果して今日當時の意氣ありや。三月十日の祭典當日、必らず暴風雨雪等、天候の狂ふあるは、彼の英靈現狀に憤慨するに非ずや宜しく發憤興起して、英靈に報いざるべからず」と。

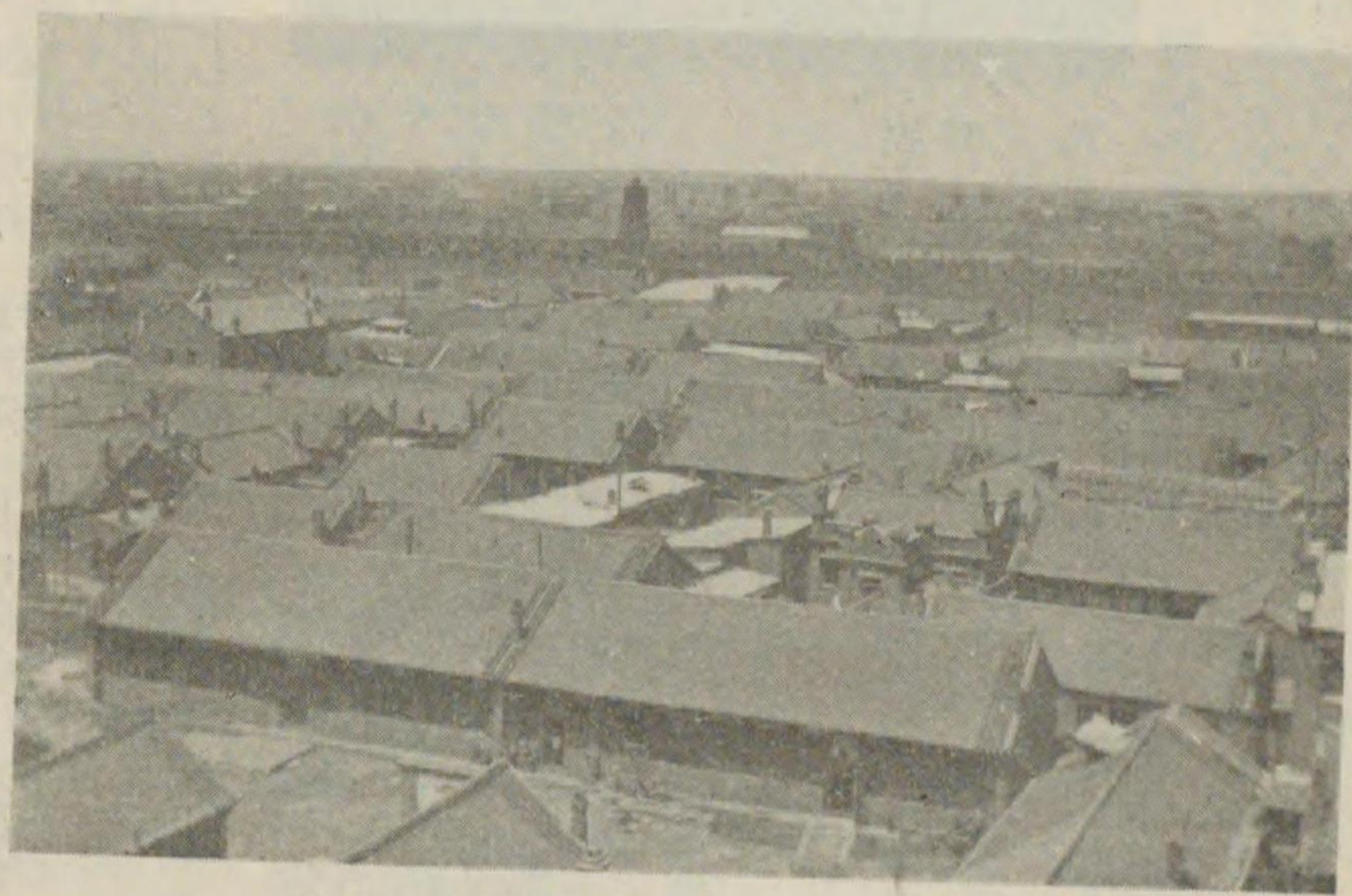
氏の熱烈な言々句々、次第に頭の下るのを覺えた。やをら首を上げて仰げば五月の空に塔の高く聳

えて、しみじみ日本帝國國民の覺悟を感じたのであつた。

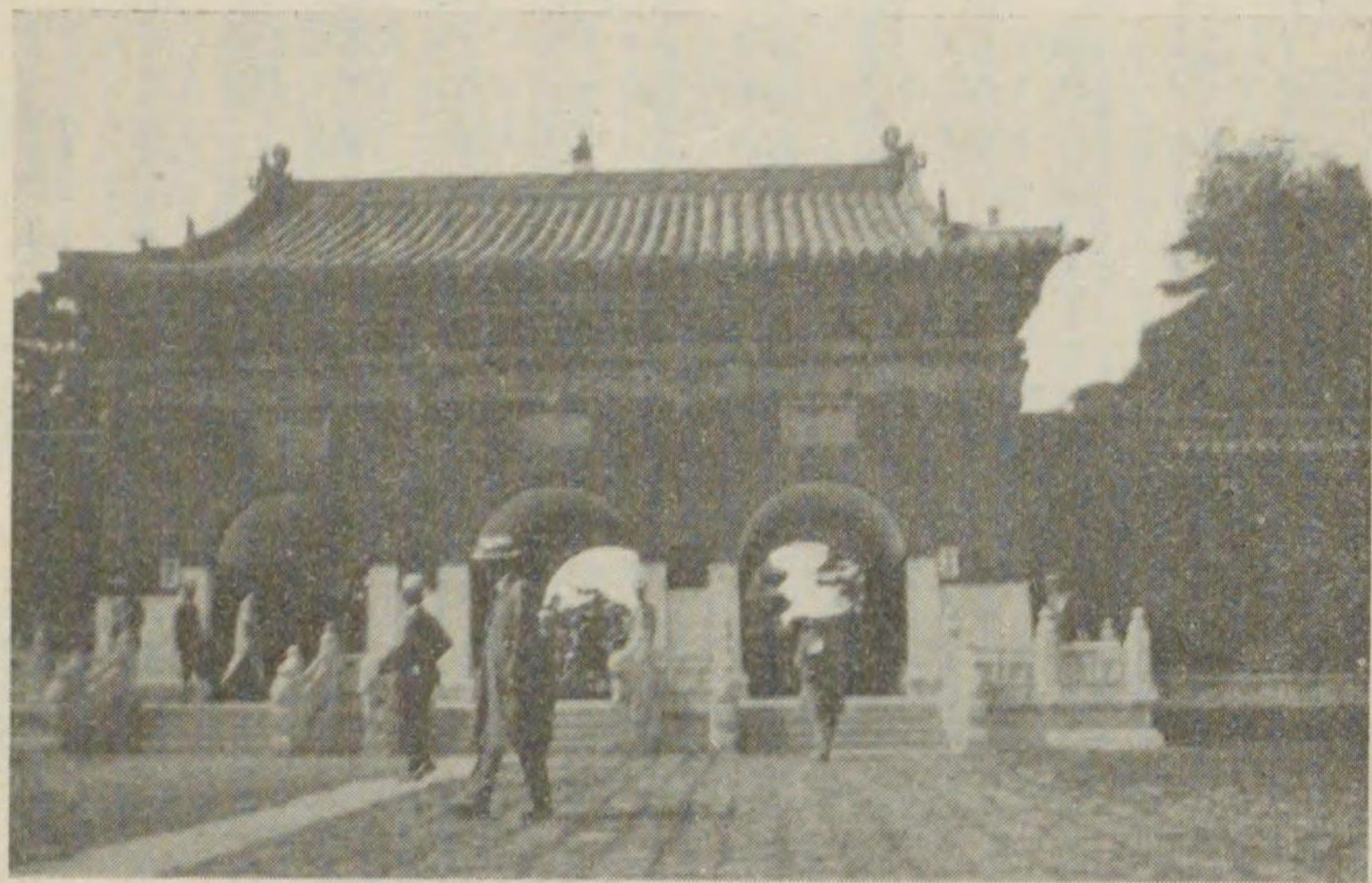
九時卅分出發。滿洲醫大に向ふ。奉天市街の建物は煉瓦造りの赤い家であつた。

二、滿洲醫科大學 驛東十一町、富士町に在る。滿鐵經營、旅順工科大学と共に滿洲の最高學府で、日華人共學、滿洲開發の文化的、人道的使命を帯びてゐる。在留邦人が海外幾百里の異郷に在つて、生命の上に何等の不安なく活躍出来るのは是であるが爲である。玄關正面の庭には北白川宮成久王殿下御手植の松あり。屋上に登つて市内を展望しつゝ、高橋氏の説明を承つた。

「奉天市街は城内、商埠地及び鐵道附屬地より成り城内は純然たる中華街、商埠地は支那側より進んで開放した各國居留地で領事館有り、鐵道附屬地は滿鐵の經營にかゝる純歐風の堂々たる市街である。併し三十年の昔は荒涼たる原野で大部分は中國人の墓地、日露戦役の狼穿塹壕が残り、血腥き戦跡に驛と守備隊があ



(望展の房絲順吉) 塔 白 天 奉



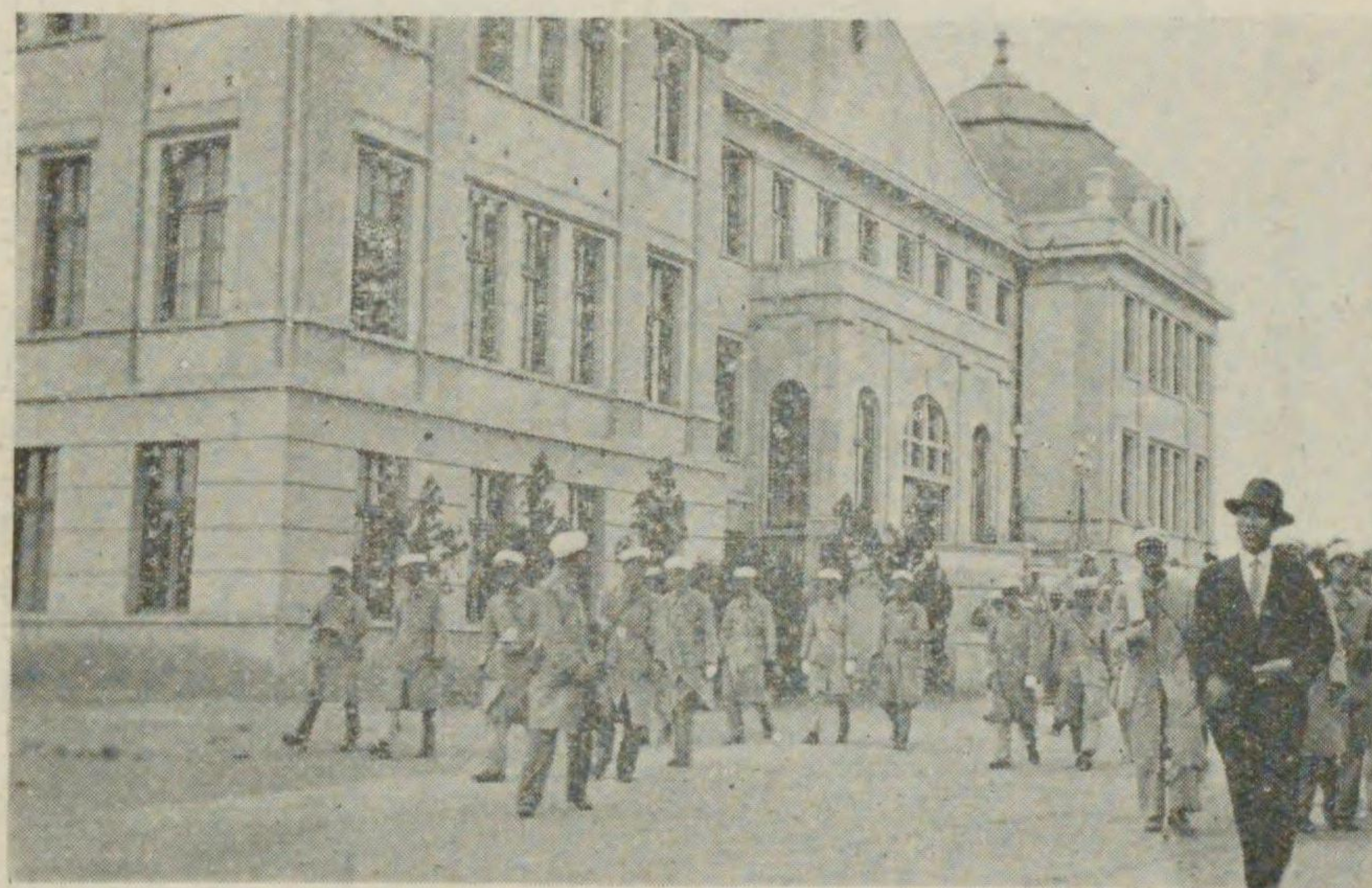
北 陵 に て

前 田 榮 次 郎

るのみで、日本居留民は商埠地十間房方面に居を構へて居るに過ぎなかつた。滿鐵の嚴格なる家屋制度に依り市街は美しいが、往々日本人は生活程度比較的高く滿洲一體の不景氣、且支那側の不當なる壓迫等に依り四苦八苦の有様である。今此對策として菊池、岸、板谷の諸氏が、全滿自主獨立同盟なるものを組織しつゝある。云々」

展望——北西に當り奉天驛より浪速、平安、千代田通の繁華を眺め、西南に忠靈塔、給水タンク、教育専門學校、公學堂、南滿洲製糖會社、奉天製麻會社（兩者とも休業中）其他滿蒙毛織會社（減資）露軍墓地、張作霖爆死事件の場所、城壁、商埠地の位置を知つた。尙同校で病症、藥品の標本解剖室など見學し、その設備の完全なのに感嘆した。九時五十分出發。

三、舊宮殿(東三省博物館)驛より一里、大西門を眞直ぐに進んで至る。宮殿は金鑾殿と稱し崇徳二年太宗の建造したもので、東西五十五間南北百四十八間の甃壁で圍まれ、その境域は大内宮闕(中央部)大成殿(東側)文溯閣(西側)に分れてゐる。正門大清門を入れば大内宮闕の一廊で飛龍、翔鳳閣(文武大宮の溜所)崇成殿(正面皇帝の聽政所、歴代宸筆の扁額、玉座あり)日華樓は皇子、霞綺樓は皇女の勸學所、師善齋、協水齋(厨房及食堂)鳳凰樓、永福、衍慶、麟趾の各宮(皇后皇子の居所)あり。博物館は大内宮闕で、東側に在る大成殿は重層八注造で俗に八方亭と呼ばれ王大臣其他八旗官員の議政所であつた。天井、柱、壁、どこも木彫、石彫、色彩濃厚な總彫である。西側の文溯閣は又圖書樓と云ひ四庫全書六、七五二函を藏してゐる。民



東 北 大 學

國三年一度北京武英殿に移し再び持歸つたものである。該博物館は日曜に限り觀覽が許され、同善堂は日曜に限り許されない。我々はこんな事にも兩雄並び立たずの感を味はつた。

四、吉順系房 城内四平街に聳ゆる五層樓の百貨店で、城内を展望するによい。

城内——瀋陽と呼ばれ美しい宮殿を中心にして方形の内城とそれを圍む不整隋圓形の邊城からなる滿洲第一の平城である。内城は長さ一里半高さ三丈五尺厚さ一丈八尺、八門を開いて内は是等に通ずる大道井字をなし諸官衙が蝟集してゐる。夜は門限を定めて閉ぢてゐる。邊城は周圍四里今は概ね破壊されてゐる。同房露臺に立てば、十字路の鐘樓、鼓樓、舊宮殿、今を時めく中國陸海空軍副司令東北邊防軍總司令張學良氏の洋風公館、大山大將入城門大南門、天主教會堂、西北郊外に這へる長き緑は北陵、喇嘛の東西南北各塔、南塔の彼方渾河の平原、附屬地等、人口四十萬を有する大奉天も一望の内に收め得た。屋上で晝飯をした後買物をし、午後一時四十五分出發した。行く所は北陵公園。あの有名な奉天郊外の泥道も次第に善くなつたと云ふ。だが埃は随分ひどい。外被もマスクも何も一杯の埃。

五、北陵公園 奉天驛の北方一里半、清朝第二代太宗文皇帝の陵墓で隆業山昭陵と稱ふ。今附近一帶公園地として奉天人士の行樂地である。境域の周圍約二里外壁九百間、内壁の高さ二丈余、入

口には華表に似た一大牌樓立ち、翠松朱柱、蔓は黄金に光り浮彫の精巧直ちに清朝の全盛期を偲ばすものがあつた。兩側に竝ぶ石獸には獅子、走獸、麒麟、馬、駱駝、象があり、様々の動物は清朝



マ ラ 塔

領域の廣きを意味するものであらう。牌樓は近年張氏が改築したもので、庇に汽船の繪があつたのは不均合ひに見えた。該陵は景勝古蹟の地であると同時に日露戦役に於ける「北陵の夜襲」として有名な戦跡地である。樓の石に腰を下して、その話を承つた。記念寫眞を撮つた。

此處で王先生の御親友盧先生(東北大學地理教授駐日七年日本語に御堪能)にお目にかゝり、同大學に向つた。

六、東北大學 アメリカ系の大學、一九二八年創立、校内は奉天城内より遙に廣く、張氏の教育

に對する抱負を傾けたもので在學生三千名(内女生百名)男女共學である。學良氏の號、「漢卿」を取つた漢卿北樓と云ふ建物、二萬人も収用し得るグラウンド、科學館、電氣實驗室、籠球コート等設備が整つてゐる。併し同校は滿洲排日の根源をなすと聞いて何となく面白くなかつた。同校附屬工場は見ないで喇嘛塔に向つた。

七、喇嘛塔(西塔) 奉天城外の四方に護國寺塔と云ふ都城鎮護の爲の勅建に係る四座の喇嘛塔が在る。西塔はその代表的のもので西塔大街に沿ひ、延壽寺の境内に古色蒼然として、當時の喇嘛教の勢力を偲ばせてゐる。是等喇嘛塔の建設は宗教上で蒙古を従へようと



奉天の天 柳川竹次郎

計つたもので、同時に寺院建立に對する寄附を勧め蒙古の蓄財を散せしめたものであると云ふ。現今中國で最も勢力ある宗教は喇嘛教、回教、道教、基督教、サイリー教である。

夕闇は既に濃く匍つて、赤煉瓦の家々は淡墨をつぶした様になつた。附近に露軍墓地が在ると聞いたが、それを弔ふ間のなかつたのは遺憾であつた。

夕食後自由散歩に時を過し、午後八時五十分驛前に集合、車中の人となつた。

北陵に於いて、放尿の罰金を年額六萬圓の豫算に取つてあると云ふ中國、此處に孤軍奮闘する我同胞の身を思つて涙ぐましくなつた。奉天の灯は次第に遠かざかつてゆく。

第十一日

岩 本 彰 夫

六月一日 (月曜日) 時

眼の力の盡くる所は青冥の天、限りない曠野は大海の如く車窓に展開する。その間に起伏し陵夷する高阜平丘は無聲の波濤である。長春につく。時計を東支鐵道の時間になほす。ロシア人が多い。ロシアへ来た様だ。東支鐵道に乗り換へる、ロシア人車掌がしきりに愛嬌をふりまく。覺束ないロシア語で話しかける。汽車は一路北滿の大都哈爾濱を目指して驀進する。着く驛毎に六七人の支那兵が懶るさうに銃に倚りかゝつて居る。

松花江畔の大都ハルビンへ。北滿の小モスコハルビンへ。私達の汽車は滑り込んだ。伊丹、深

谷、並木の三氏に迎へられて異國情調に心をとられながらプラットホームに降りた。ホームを出で、改札口に近き大廊にある列柱の右より第三に當る太柱のある所は明治四十二年十月廿六日吾が伊藤公が兇豎の爲に命を殞した所。感慨深いものがある。自動車を進んで、滿鐵事務所の屋上に立ち



石田善治

法 政 機

市街を一望する。赤煉瓦の家とアカシヤの花美しいハルビン、白系ロシア人の子供のルパシカ姿の愛らしさ、寺院の尖塔がクラシックな感じを與へる。辭して中央寺院日露協會學校を見學し郊外二里を自動車にゆすられて沖、横川兩烈士の碑に詣づる、途中法政機が格納されてゐるのを見て歡喜の聲を

擧げる。風雲急なる北滿の野に身を挺して鐵橋破壊の大任を帯び事ならずして敵手に捕はれし我が勇敢なる軍事探偵沖、横川兩烈士の碑に詣れば懷舊の情胸に迫りて言ふ所を知らぬ。碑面に勒して

志士之碑の四字がある。碑壇の後一雙の楡樹がある。兩烈士この楡樹を背にして立ち眼の覆を斥け従容として笑つて彈を受けたと言ふ。無心に茂る夏草もそとろに涙を誘ふものがある。

名古屋館に落ついて夕食を済めた後法政機の栗村、熊川兩氏を北滿ホテルに訪ひ激勵の辭をおくる。「大日本帝國『ヤングジャパン號』の萬歳を三唱した。

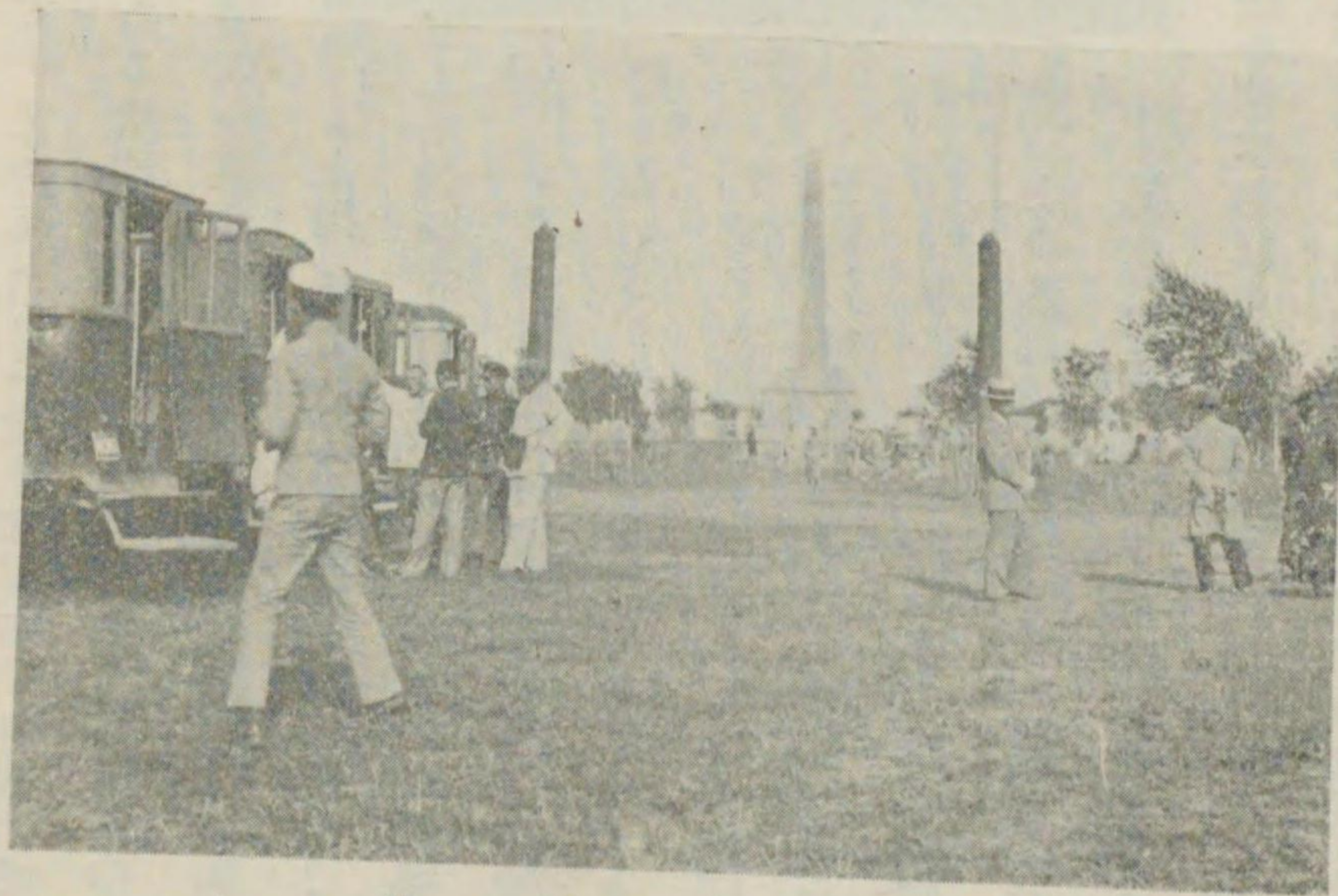
第十二日

柴田正

六月二日（火曜日）晴天

昨夜晚いのと疲れの爲今朝は起きられない。

午前十時整列。旅館の眞前の四階建の大きな家に入る。階段をかなり上つた。三階か四階の廣い室に出た



志士之碑

薄卵色の壁に茶褐色の床几、それに心よく鼻をつく木の香り。落ち着いたとても氣持の良い室。

正面には伊藤博文公の胸像あり。左右にも二、三の額あり。胸像に敬禮した後別室で、ハルビン商工會議所の中村先生よりハルピンに於ける邦人の勢力に就いての御話を承つた。

日支、日露、露支の關係を述べ邦人の現状、邦人の受ける侮辱屈辱、を自分の體驗を御話し下さるあたり、或は物靜かに、或は熱涙を迸ばしらせての御話思はず拳を握らざるを得なかつた。

終つて旅館の前を眞直ぐ左へキタイスカヤ街へ向つて行き左に折れて北滿ホテルの方に歩いた。正面に一寸繁つた木立の中に青赤黄の彩も美しい塔が見える。此れがイユルスカヤの中央教會である。

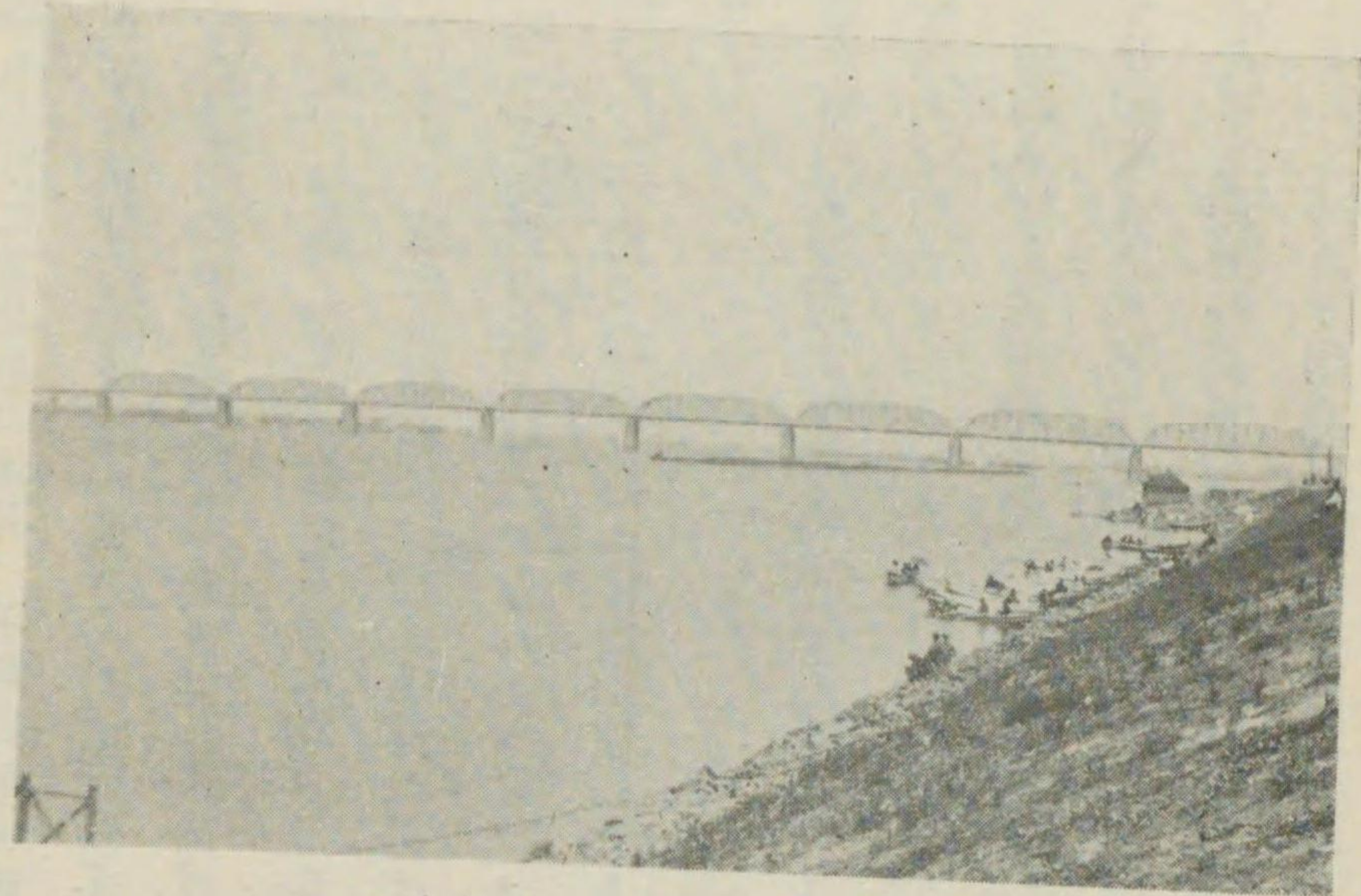
教會の庭を裏手へ出た。支那の兵隊さんが張番して居る何とか云ふ役所の横に一同並んで記念撮影。

何處も變らぬ悪戯小僧（此處では露西亞人の）表れて散散騒いで行つた。

やがてキタイスカヤ通りに出た流石ハルピン第一の通りだけあつて人通りは繁い。

それも洋装の露西亞人の男女だから、何となく歐米の都市を踏む心地がした。

キタイスカヤ街を眞直ぐに突き當ると松花江の流れに出る。右手に大鐵橋あり。下手に貸ボート



江 花 松

列をなし、右河岸にはアイスクリームの出店あり。宛然映畫に表れるが如き所だ。人だ。装置だ。

沿岸警備の支那巡警と分らぬ支那語で話す。語が詰まれば手帳を出して筆談する。

少し戻つて、花園といふ公園に入る。日支露の三國人足ざりもゆつたりと散歩して居る。滿洲は廣いと云ふことを今更知つた。

中央の食堂で露西亞料理の晝食。

僕達には餘り縁の遠い物許り出たので、食事の方法に困つたが、終には各自獨自の方法を發明して食べ終る。

此間オーケストラ・ボックスでは盛に一行歡迎の爲に越後獅子と紅屋の娘と外に何かと奏して呉れた。

食後の散歩、露語の話せる人達は此の時と許り附近

の人々と會話を始める。

公園の裏門直ぐ前の日本小學校訪問。

竿頭高く日章旗翻る日本小學校は三階建鐵筋コンクリートの堂々たるものである。

道路一つ隔て、木造平家建の支

那小學校が向合つてゐる。此兩者

の對照は考へさせられたものだ。

廣い玄関を上ると正面は大きな

明るい温室、中央に噴水、左右廊

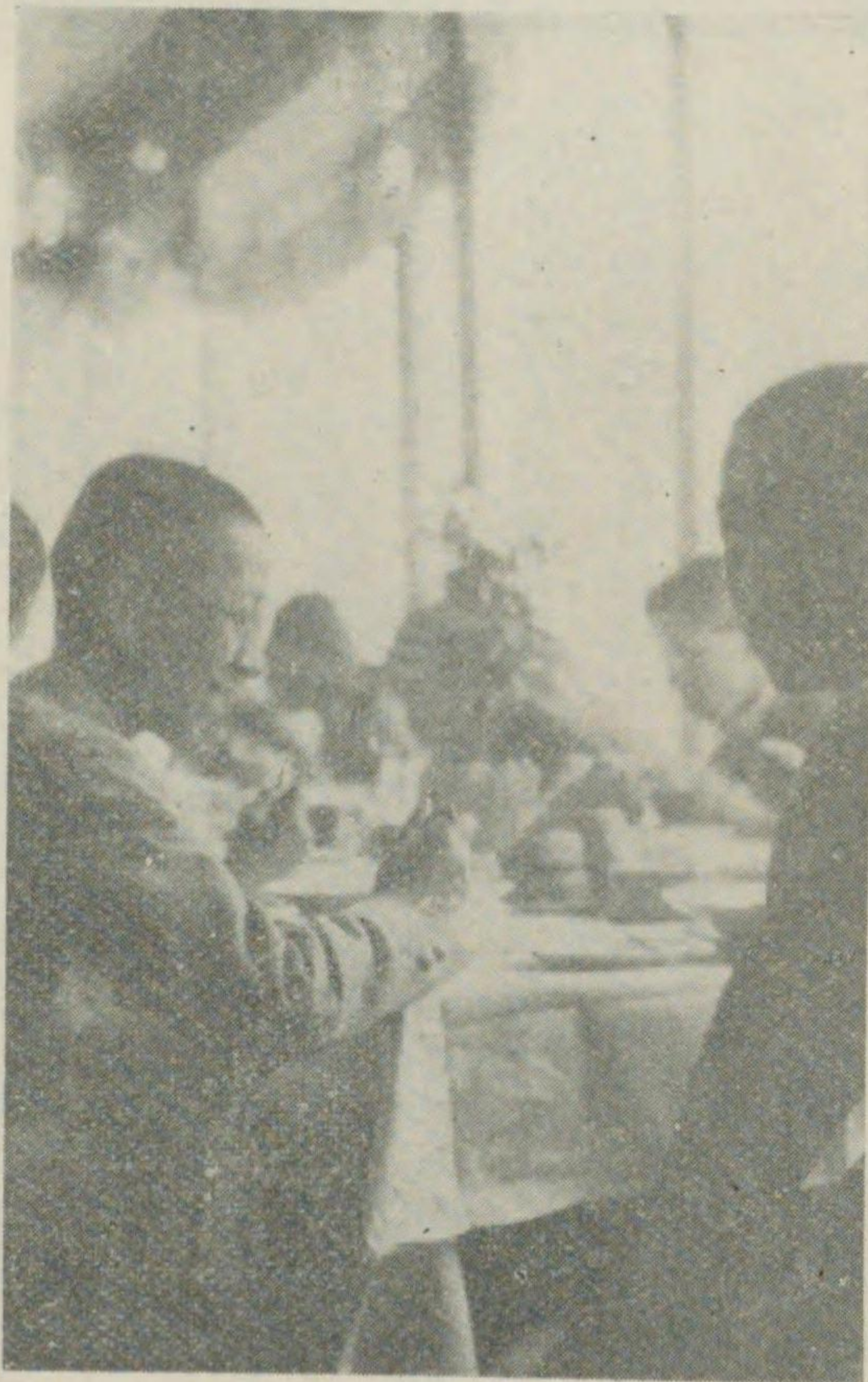
下には兒童の作品が飾つてある。

海軍記念日近くの事として、東郷元

帥の像、軍艦の繪等の如きものが

多かつた。校長先生に案内されて

見る校内設備の完全さ。



郎次竹川柳

理 料 ア シ ロ

斯くの如き學校に學ぶ兒童の母國に對する關心はと校長先生に御尋ねすれば、「内地以上に現實に



ハピルン花園スレラト

國家の力を見聽き致しますので一層愛國の念強き人になります。」との事。

同校に露語を教授する露西亞人で日本名鷺津先生に御會ひして一同先生と一緒に寫眞を撮つた。

こゝで解散、七時迄自由行動。

二三の友と再び引返してキタイスカヤ街に行き、チユリン商會に入つた。雨がボツ／＼降つて來た。通行中の婦人は外套の毛皮を立てる。新聞賣子は新聞を脇に抱へて飛んで行つた。通る人足は皆一様に早められた。

此の中にあつて平然たるものがあつた。

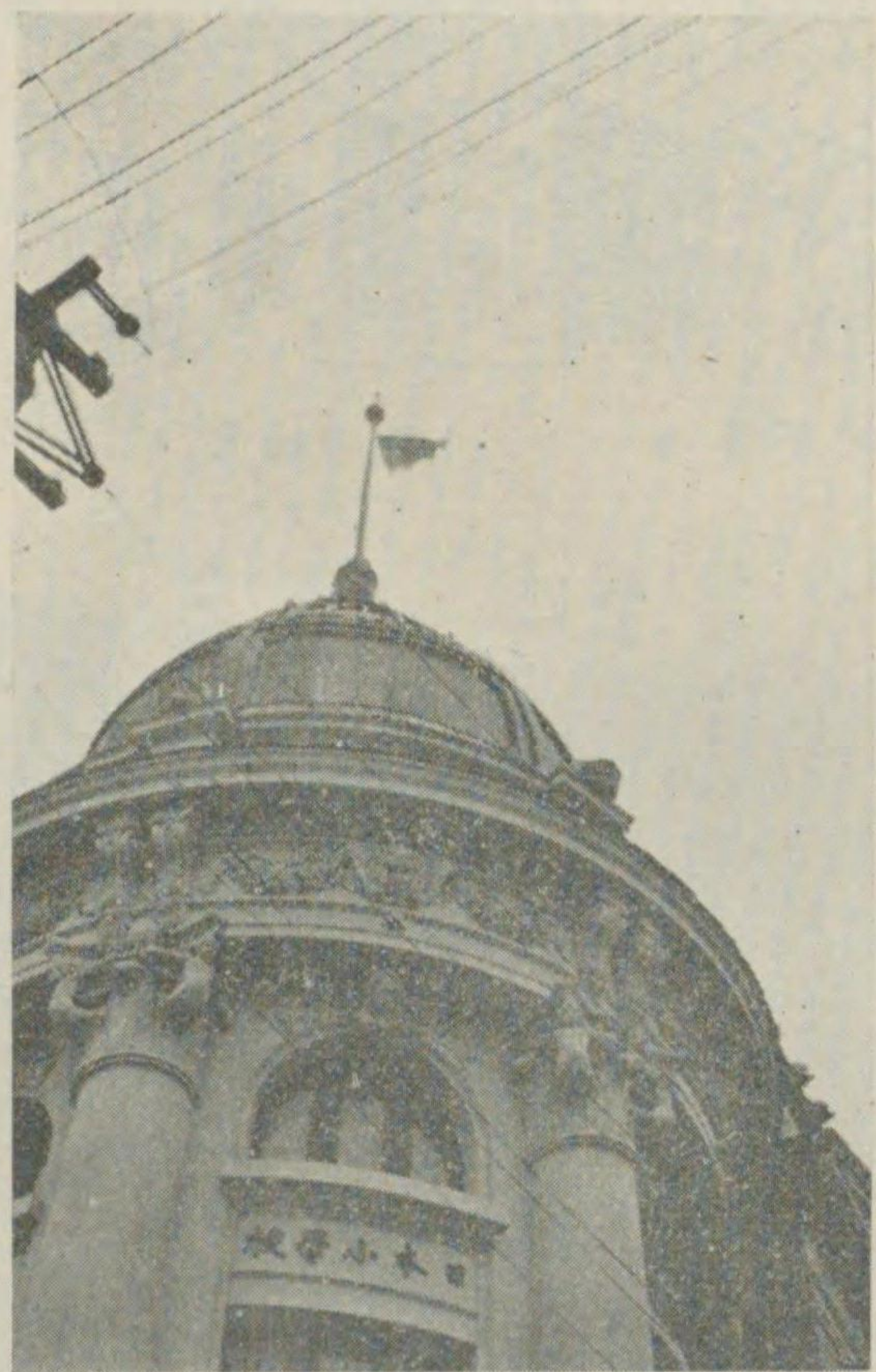
曰く、僕達と交通巡警。

チユーリン商會は小さな百貨店であるが、入つた第一階は天井が高くて感じがよい。露語が出来ないから

身振り一つで話す。

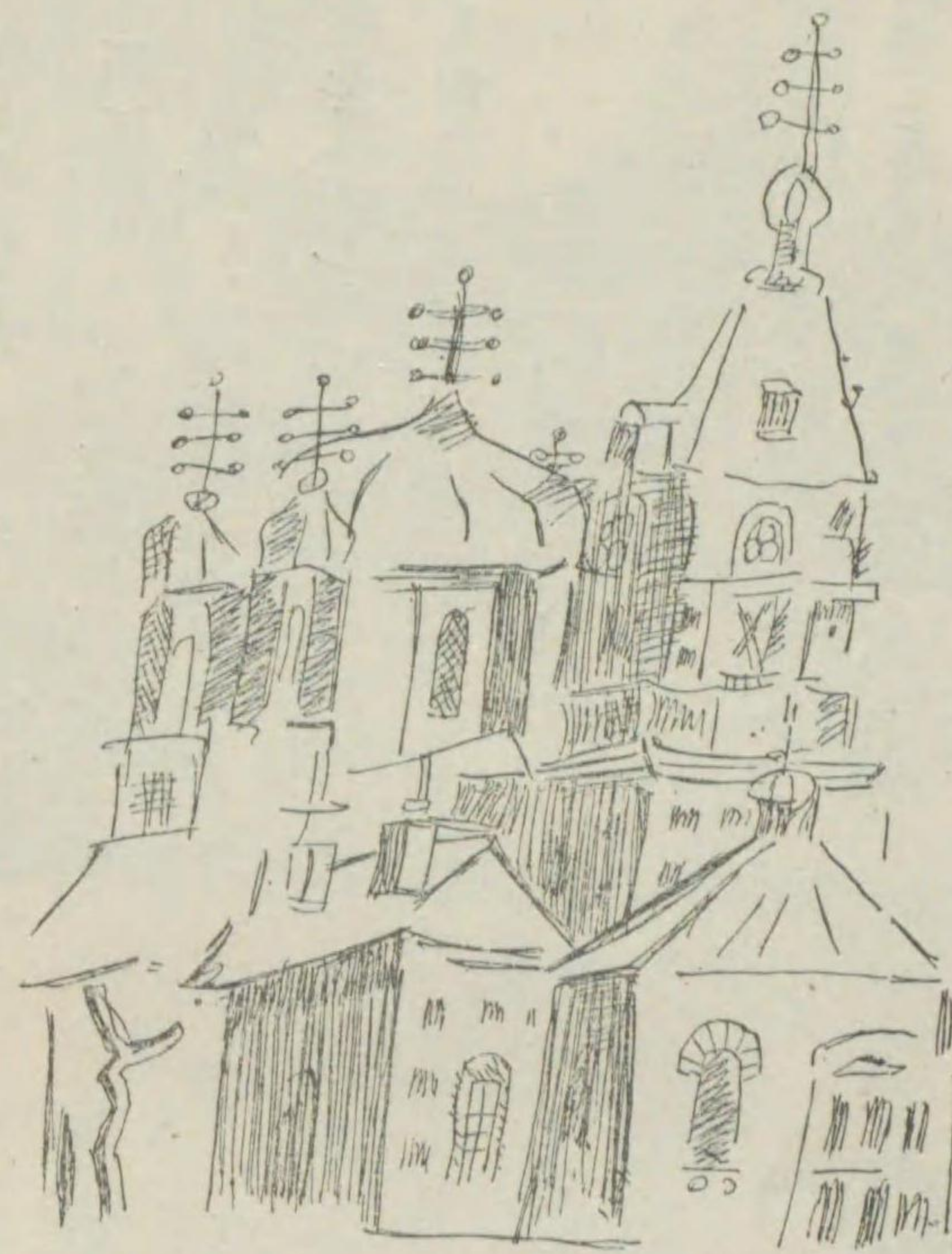
同じく前の松浦商會にも入つた。天井は高いが狭い、品が少い。隅つこの奥まつた所で兩替をする。危いのかしら。

外の雨は早止んだ。太陽は出ないけれど明るくなつた。キタイスカヤ街を散歩しながら二軒小さな店に入つた。何せ言葉が分らないのだから、度胸一つで黙つて店の中を見て廻り、引つかき廻はすより外はない。しかし此等、小さな果物屋と雜貨店とであつたが、日本人向の品物は少い。不潔さうに見える果物であつたり、玩具の如き雜貨より外にはなかつた。それだけ日本人は潔癖かも知れない。旅館への歸途井の子、岩間の二邦人寶石店へ入つた。



日本小學校 清水 鏡

澤山な石、光る玉、何時迄見て居ても面白い。但一時間の間だけ。夜七時にもなればハルピンの大概の商店は店を閉ぢる。それ程用心すべき土地なのだ。



ハルピルン寺院

金枝新次

九時頃宿を出てキタイスカヤ街迄歩く。歸は十時近い。車道には全然人影を見ない。ただ馬車のみ角の所に並んで客待ちして居る。

人道に二三人、人がかたまつて何か話して居る。三日前のピストル強盗の話が頭をかすめた。各商店のウインドウには皆鐵の棒を持つて居る。背の高い露西亞人が通る。ピストルを持った支那巡警が通る。一寸氣味が悪い。晝間の華かさ、夜は落附いて大道濶歩して見たい位静かだ。僕は街燈の餘りない道で自分の足音を聞くのが好きだ。

ハルピンは都會でそれが出来る。好きだ。

旅館へ歸へれば直ぐ自動車へ、驛へ。再び東支鐵道の板敷の三等寢台車へ。

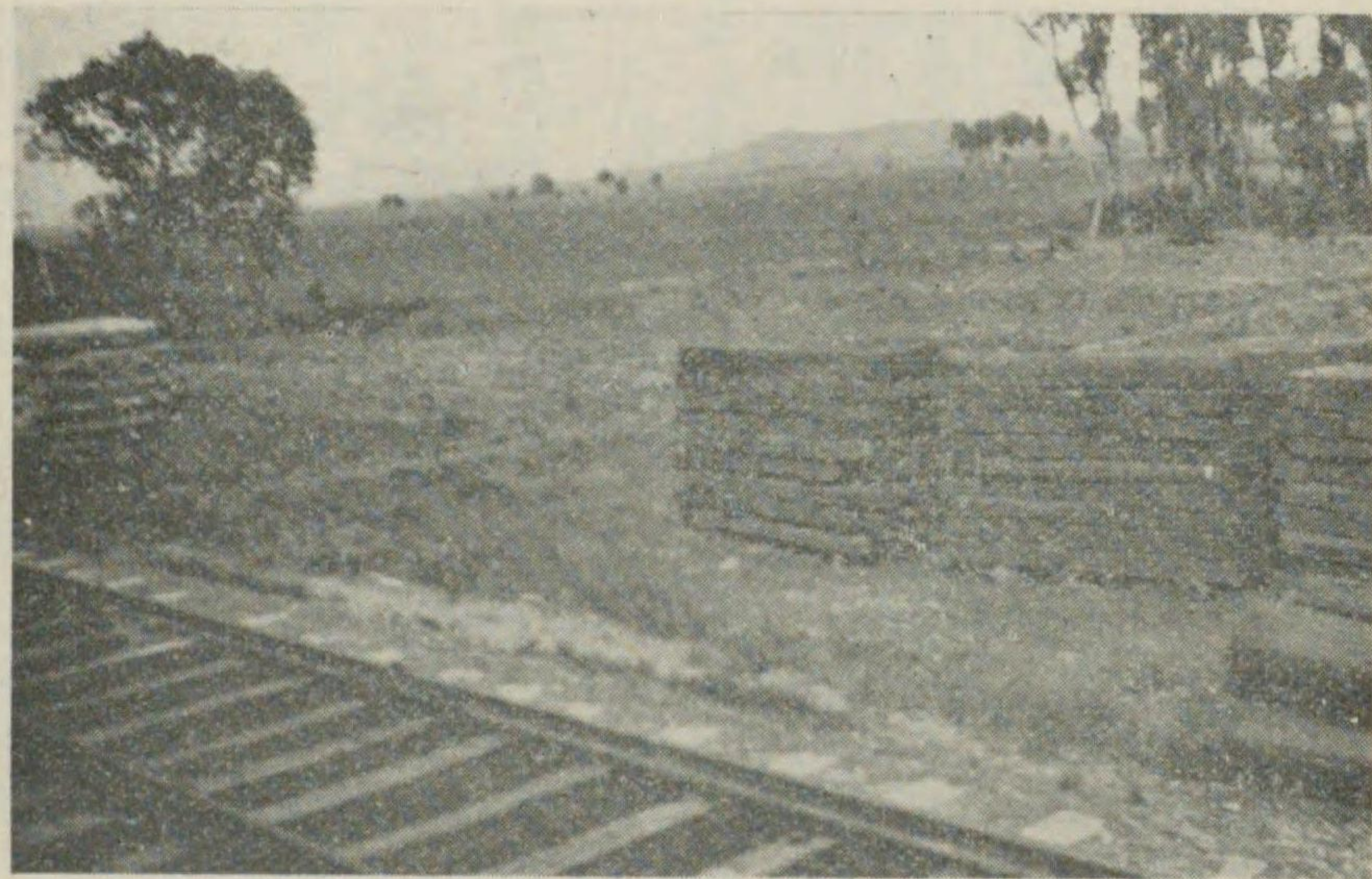
十時四十五分残り惜しいハルピンの地を去つて行く。驛の燈が北滿の原野に何時迄も何時迄も見える様な氣がしてならない。

第十三日

伊藤寛造

六月三日 (水曜日) 晴後曇

一夜を東支鐵道の板張りの寢臺に揺られて、ほのぼのとあけそめた空に長春驛を仰いだ。二十餘臺の馬車を連ねて長春新市街、支那街を一巡し西公園にむかふ。蕭洒な感じのする日本式公園だ。ポートの浮んだ池は



滿鐵沿線

金枝新次



遼陽の白塔

冬はスケートに賑はふといふ。直ぐ隣接した長春商業
學校寄宿舎炊事部食堂に朝食をとる。旅のつかれを息
はせて下さった親切が嬉しかった。忙しい習とて九時
廿八分發の列車に乗った。

奉天を過ぎると間もなく、左に沙河の激戦の跡を眺
め、遼陽首山堡橋山等過ぐる處すべて一木一草日露戦
役に我が忠烈の士の血に彩られし所、今眼前に眺めて
は感慨無量なるものがある。停車の度に、寫眞をとつ
たり指呼したりする。この間私達に滿洲の守備状態に
ついて話をして呉れて居た約一箇小隊が一驛に下車す
るや否や忽ち散開して戦闘準備、機關銃の音、小銃の
音がきこえた。滿洲守備の爲に日夜怠らぬ將士の涙ぐ
ましい奮闘。私達は心からの感謝をさげげた。
陽も既に傾き宵闇がひたひたと滿洲の曠野をつむむ

頃右手に鞍山製鐵所の火を眺め八時十分夕闇の湯崗子
についた。

對翠閣に投宿。旅に疲れた身體を温泉にいやし十時
頃楽しい夢路をたどる。たゞ此の宿はいろく不便で
あつて不平が盛んであつた。

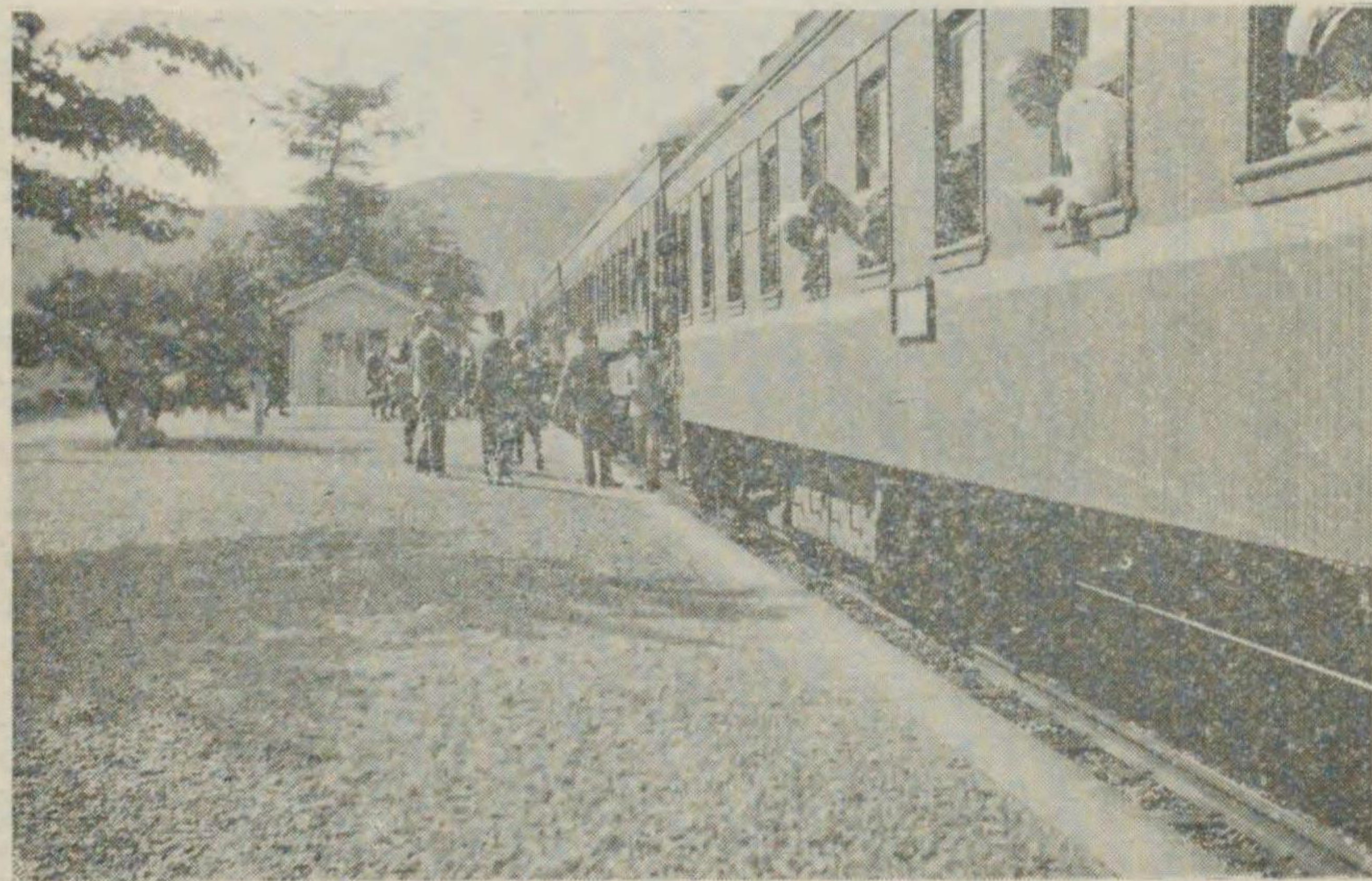
第十四日

野々垣秀一

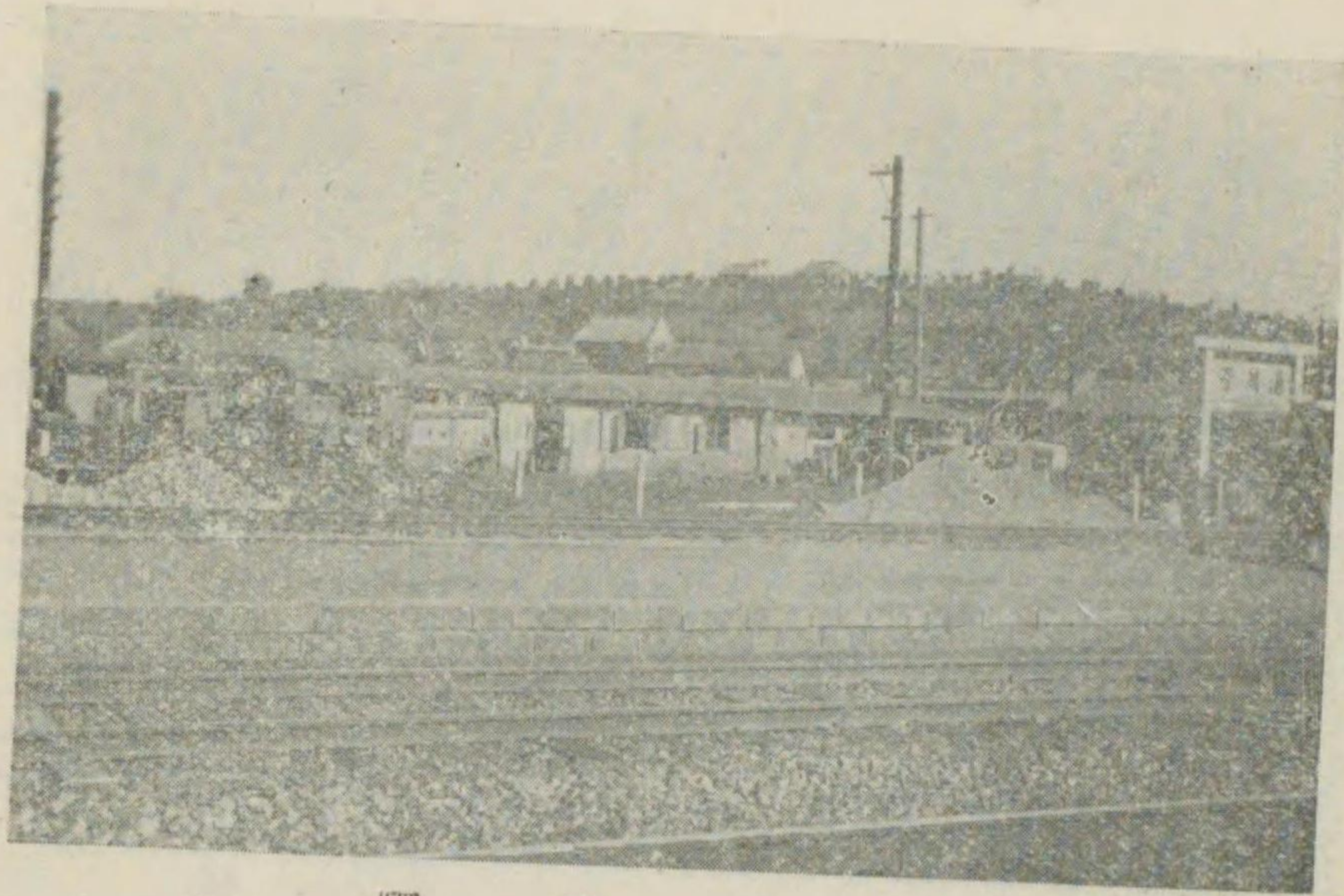
六月四日（木曜日）晴

ポプラの葉をそよがせてながら、朝の微風がレイス
のカアテンにからむ。僕たちは手拭をブラ下げ、まだ
眠い顔を風呂へ。朝の涼風。ポプラの葉。青々した香
り。朝六時。

七時、玄關前に整列、しめつた赤砂をザクザク踏と



滿洲の鐵道列車



湯 崗 子 驛

んで湯崗子驛へ。ポプラの並木からもれる朝の微光は赤砂の路にやわらかく白玉錢をちらす。驛は東京郊外の「文化住宅」風。八時、列車がのどかに鐘を打つてホームに止る。この鐘の音は又のどかなものである。一時間十分で大石橋驛へ着いた今日は特に娘々祭へ出かけることになった。大石橋で臨時列車に乗り換へると、左方にさながら金字塔の形をした五六百尺の山一樹一草のない禿山！ 迷鎮山のその頂に碧瓦紅壁の一字が望れた。馬車で、ロバで、徒歩で、蛇々として島の中の白い道を埃を浴びカツと照りつける夏の太陽の下を流れる人の群れ、麓をとりまく露店の爲に路はせま苦しい迄に押しせばまれ、私達は得體の知れぬ悪臭と、騒しい絶叫と、轟然たる銅羅の音響の中にまき込まれた。雪崩うつ人波をおよぐ様にして傾斜面を登

つて行く。

「西部へ！ 西部へ！」殖民地開拓の先驅者が身を託した、幾多のロマンスを持つあのホロ馬車を一寸とつぶした様な形、それが満洲の蒲鉾馬車である、アンペラを幌としたこの馬車が丘麓を繞つて蜂屯して居るその間を魚貫して行く参詣人の大衆あり、櫛比してゐる露店あり。烈風は満天滿地の沙を簸つてこの大衆の上を一掃して去る。犖确たる岩山をあえぎふ／＼やつと娘々廟へたどりついた廟に賽する人が沓至して立錐の餘地ない有様である。



小島邦治

沙河を過ぐ

唐時代この附近は鹽の多産地であつた。ある人が壩を營口に運ぶ途中旅の疲れになやむ三姉妹に出會つた。氣の毒に思ひ車にのせてやつたが、この迷鎮山の麓迄來ると不思議や三姉妹は一氣に山上に馳せ上ると山頂から五色の光



祭々娘

がさし天來の妙音と共に昇天した。この雲霄、避霄、瓊霄の三姉妹は福壽、治眼、産の女神としてこの廟に祭られた。

小憩の後下山して再び熱鬧の市を過ぎ停車場へむかふ。驛では一行に案内の人をつけられ、又、湯を澤山用意しておいて下さつたのが有り難い。大石橋を十一時十五分發大連にむかふ。得利寺、普蘭店、路は金州半島に入り右に渤海左に黄海を望む、やがて金州大房身を経て汽車は快い警鐸の音をひびかせながら徐々に大連驛へ進み入つた。

赤い夕陽を斜に浴び乍ら我々は立派なアスファルトの道を鎮西旅館へと着いた。

何とはなしに心安さを覺えた町であつた。

第十五日

田口 順三

六月五日 (金曜日)

曇時々晴

車掌が、「あすこに見えるのが高崎聯隊の奮戦した高崎山です」とか「そちらに見えるのがクロパトキンの砲臺です」とかいふ説明に、戦蹟氣分が湧いて水師營を右に見る頃は、すっかり胸が鳴り出した。

午前十時、アカシヤの花美しく咲き亂れた旅順へつく。馬車に分乗して記念館に行く。小高い丘にあつて二三の砲車が戦を物語つて居る。玄關に隣る一室の天井を穿つて我が砲彈が炸裂した當時の慘狀をそのままに見せて居る。各室ともに肉を裂き骨を削づるの慘闘を重ねた當時をまざまざと想はせる記念品に埋められて居る。

第一室 戦場及び表忠碑の寫眞及び種々の砲彈。

第二室 第一室に同じ。

第三室 當時用ひられた外套、帽子、肩章、軍靴、軍票、背囊の種類及び食糧品。

第四室 照明機及び之に類する種々の機械類手投彈一人用齊發銃(五發同時に一人で發砲し得る

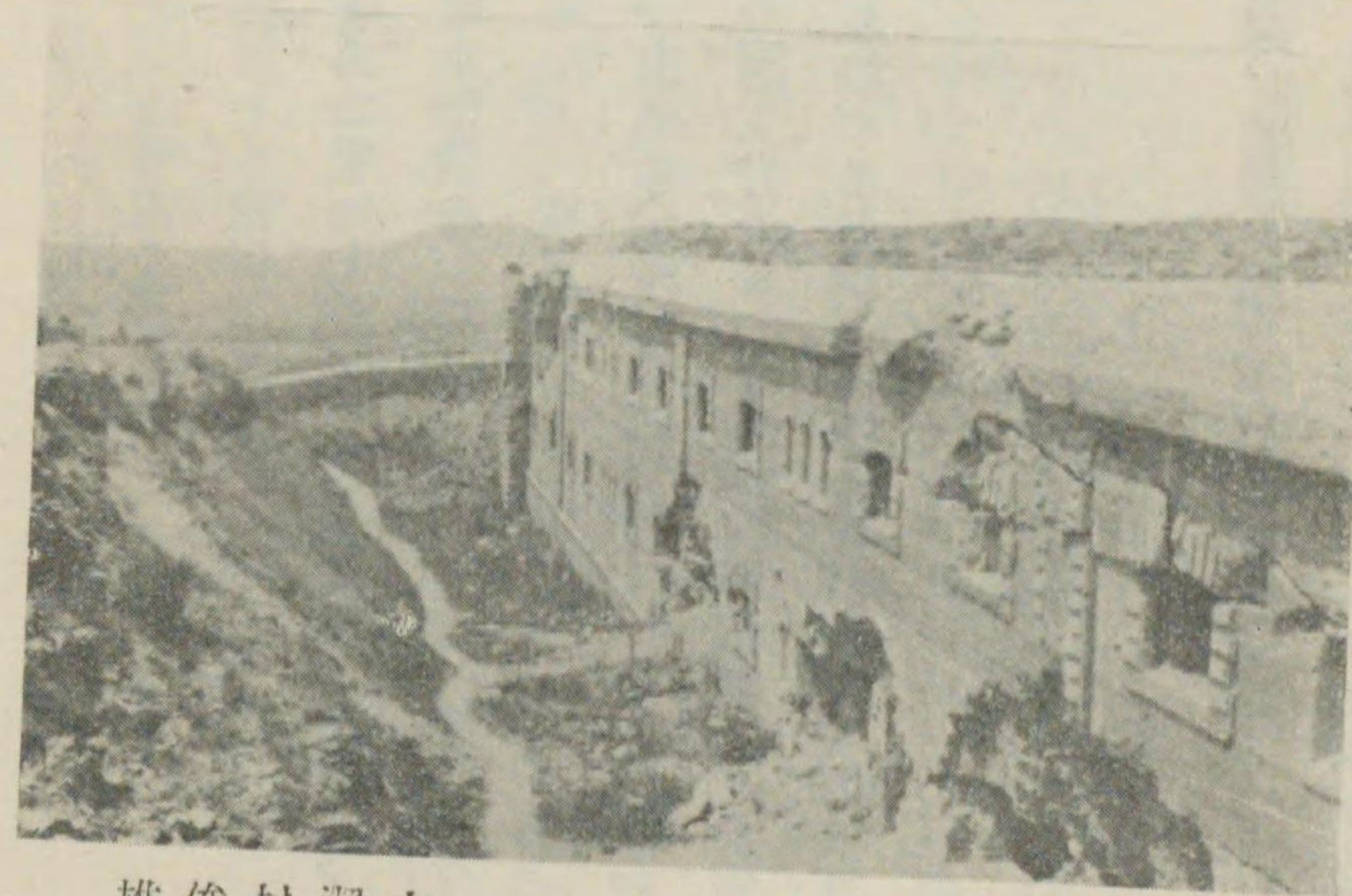
如く装置したる銃、爆撃弾、投落地雷、木工具、
二〇三高地攻防陣地の模型、各師團長の肖像及び
彼地に於ける激戦の圖等。

意外に思つたのは露軍が山上から打つたと云ふ魚形
水雷だつた。彈丸盡きて魚形水雷を代りに打つたと云
ふのは如何に最後迄力一杯に戦つたかと云ふ一證據で
はないだらうか。

も一つ僕達が驚きの眼を見張り、考へさせられたの
は確か第三室だつたかの片隅に古ぼけて立てかけられ
てあつた二個の鐵板の歴史だつた。

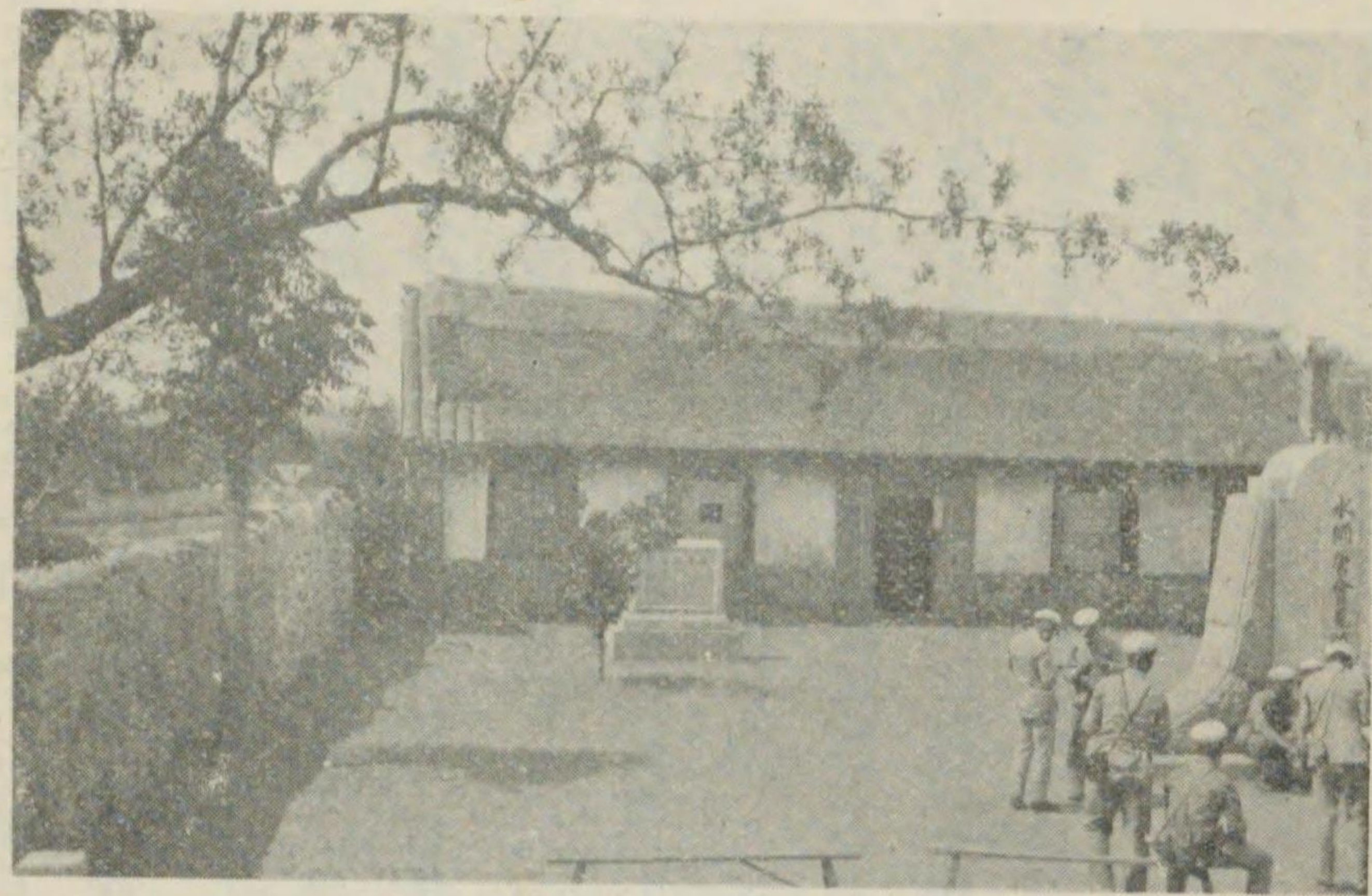
此は敵の鐵條網を切りに行く時に胸にかけて銃彈を
防ぐものだそうで、一寸持つとふらくとして落して
しまふ程である。

其の夜第二中隊第一少隊は突如左の様な命令を受け



東冠山北砲壘

小瀬村俊雄



昔ながらの水師營

た。

「明拂曉を期して本軍は二〇三高地に總攻撃を行ひ
一舉此を回收せんとす。

貴隊は此に先だち明朝一時迄に左はXより右はY迄
の鐵條網を切斷せよ、尙ほ之に用ひる携帯銃眼は之を
使用後持ち歸らざるものを重營倉に處す。」と。

かくて選ばれた第一少隊の勇士達は眞夜中を期し各
々携帯銃眼を首にかけて出發した。

サーチライトは不氣味な其の黄色い光を室に投げて
其處には悽慘な畫の戦の跡が照し出された。

俄然敵は一隊を發見した、砲彈は雨の様である。

Aはふと首をあげた。……………

Aの任務は既に終つて居た。

彼は矢庭に味方陣地に向つて駆け出した。勿論彼の

携帶銃眼は所々穴のあいたまゝ、寂しく暗闇のなかに残されたのである。

BもCも、生残つた全部は、皆、言ひあはしたやうに銃眼を忘れたのだつた。この話には感動せざるをえなかつた。

再び馬車に揺られて鶏冠山の戦跡を馮吊すべく北砲台にむかつた。東鶏冠山北堡壘は僅か一〇〇米ばかりの突起である。此があの名高い東鶏冠山かしらと疑つた位、しかし我が包圍軍が幾度も敢へてした肉弾的總攻撃を頑強に防戦し二十八珊の巨弾六百發を撲ちつけられながらびくとも動かす終に開城當日に至つて露軍自ら爆破し去つたこの東鶏冠山は實に近世的科學の精髓を集めて作られた永久砲台である。前面は二重に三丈余の深い塹壕をめぐらし内部の胸壁外岸、外岸側防等誠に至れり盡くせるもので堡内には完全なる地下道もあり、敵の砲弾には一切暴露しない構造になつて居る。胸壁より地下道に入れば混凝土掩蓋の厚さ十尺ばかり、その岩よりも堅い壁面に無數の砲弾炸裂の痕をとどめ、血肉紛々たる白兵戦を想はしめた。

案内の方の説明を偲ぼう。

丘の側稜線を形成するあたり攻めて來る方から見たら何にも無い様に表側を土で作り中をコンクリートで固め裏側に塹壕を掘つてその中には今は何もありませんが當時は劔だとか槍等の尖つたも

のを一杯に立て、置いたのです針の山と云ふ譯です。

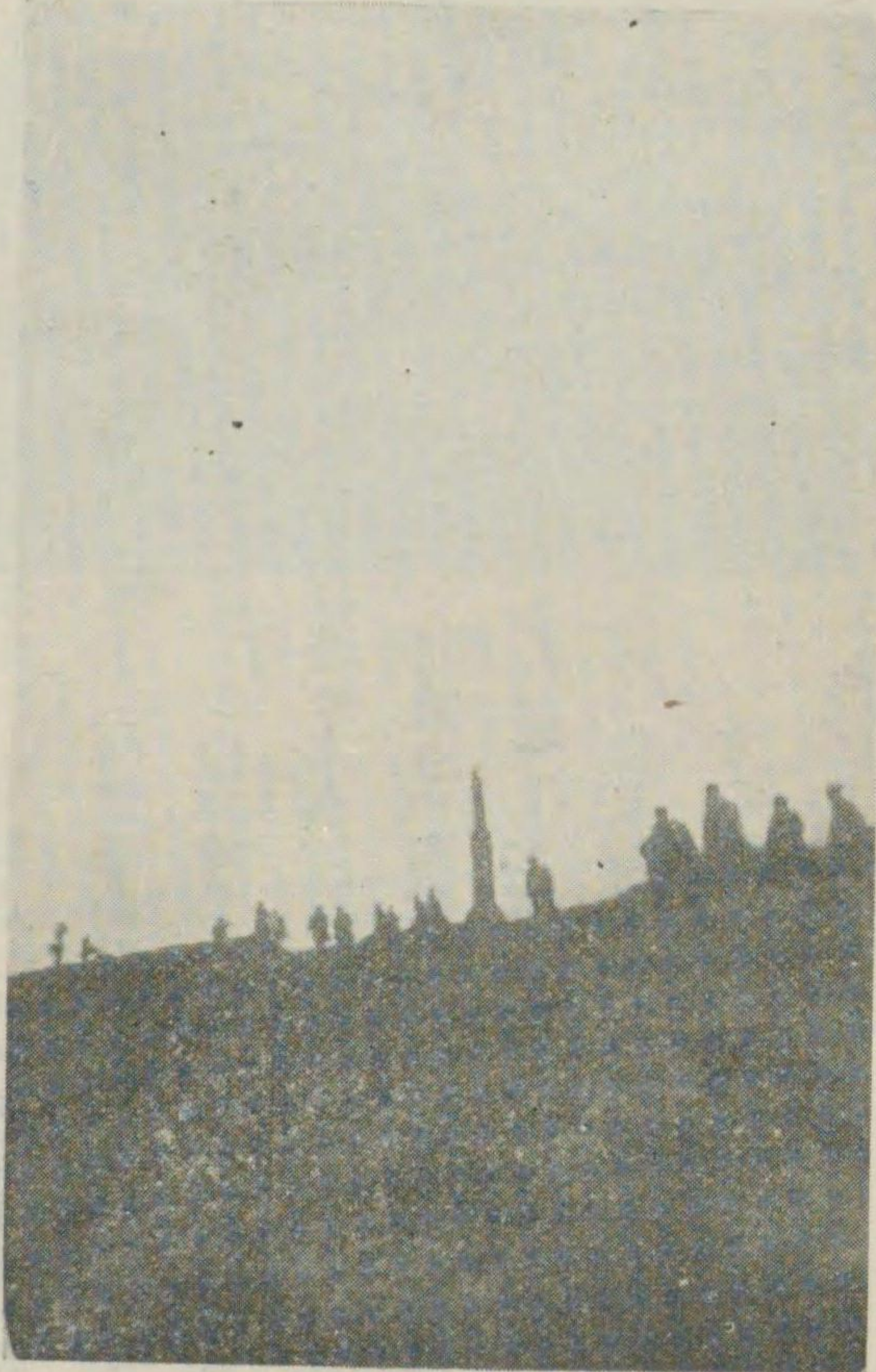
俄然我軍は此所で困つてしまつた。行つた兵は一人も歸つて参りません。其れも其の筈です。針の谷に落ちて突きさゝれ大抵は死んでしまひ、生き残つた者は内側の窓から銃で撃たれるのです。

二回・三回と次から次に斥候は出發しました。

晝は戦友の血をぬり戦死者に装つて前進しました。苦心、又苦心彼等は塹壕の在ると云ふ事と到底尋常一様の戦法では駄目だと云ふ事を發見したのです。

まづ坑道を掘りました。山麓まで來て、今度は地下坑道を掘つた。

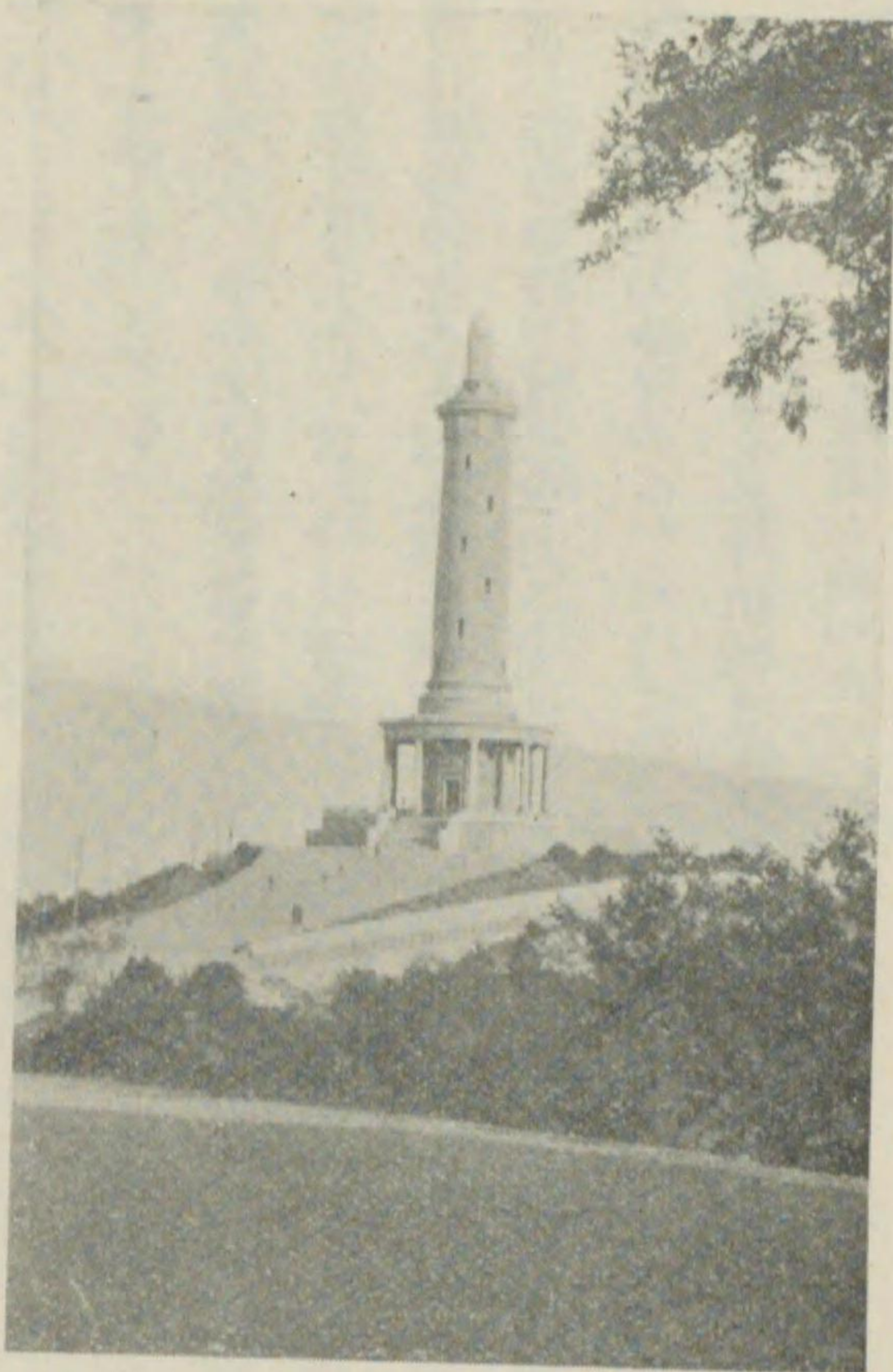
工兵は殆んど徹夜です。一寸でも余計に堀つた者が其の夜の王者でした。一本の煙草がもらへました。



萬人齊仰爾靈山

小島邦治

敵も坑道を掘つてみました。そこで爆破させることになった。そして——、
俄然我が軍の爆破は功を奏しました。



白玉石山表忠塔

見よ！ コンクリートが白日の
下にさらされました。堅固な砲壘
のあることが始めて発見せられま
した。

そこで堡壘の攻撃に向つたが突
入した者は皆倒れた。或時はいぶ
してしまはうと試みたが煙は皆味
方の方へ飛んで来て成功しません
でした。

最後の手段が講じられました。それは一人々々身を犠牲にして突入し、屍の壘を造つてそれを楯
に攻撃をしたのであります。

「死して後やむ」と言つたが勇敢な戦士は死んで後に又壘となつて盡すのであります。

あゝ、そんなにまでして占領した此の地、其の上に今我等が立つてゐるのである。思はず眼がう
るほんでくる。私共はそれから砲壘の中に入つて銃丸の跡を弔つた。一石一肉。謹しんで勇士を弔
つた。此の堡壘は敵を蒐集して、これを撃滅するのが目的である、北堡壘だけでも僅か一個中隊の
兵を以て四千何百人と言ふ我が兵士を撃殺してしまつたのである。

此處で晝餐をしたゝめて濛々たる砂塵をくぐり水師營へ向ふ。

みすばらしい草葺屋根の一民屋。其が水師營の會見所なのです。「庭に一本棗の木 弾丸跡も著
く」庭隅に一株の棗の樹の枝葉楚々として立つてゐる。懐かしい感じがした。再び馬車を驅つて關
東廳博物館に向つた。ミイラ、佛像、陶磁器、金屬、水産物、林産物、動物等を網羅されてある。
見學を終へて直ちに爾靈山へと急ぐ。小銃弾の形をした記念塔が草山の上に聳立して居る。爾靈山
嶮豈難攀、男子功名期克難、鐵血覆山改山形、萬人齊仰爾靈山、の詩が刻してある。この塔は全部
當時の流弾の破片から出来て居るとの事です。第三回攻撃に於て「我軍は我軍全滅の後如何にすべ
きかを考慮せず全滅を期して攻撃せよ」との乃木大將の悲壯な總攻撃命令がおもひ出された。

「武夫の屍山となりたり——爾靈の山の前に額く」大町桂月の挽歌せし地六千五百の露兵と一萬
の吾が同胞の靈今何處。鬼氣既に遠く今は鬱然たる青山。二十余年前百戦の跡禿山白草滿目荒涼た

る古戰場もその忠烈な人々の濺いだ血潮に培はれて、栽えられた松は早や既に拱する迄に長じ草も亦深く繁り翠阜蒼丘鬱々として嫩き夏の日に燦いて居る。

歸りに白玉山に表忠塔を拜し旅順市街の説明をきく。

カラーン、カラーン、と朗らかな警鐸を鳴らせながら宵闇迫る大連の街に入つたのは彼此九時を一寸まはつた頃でした。

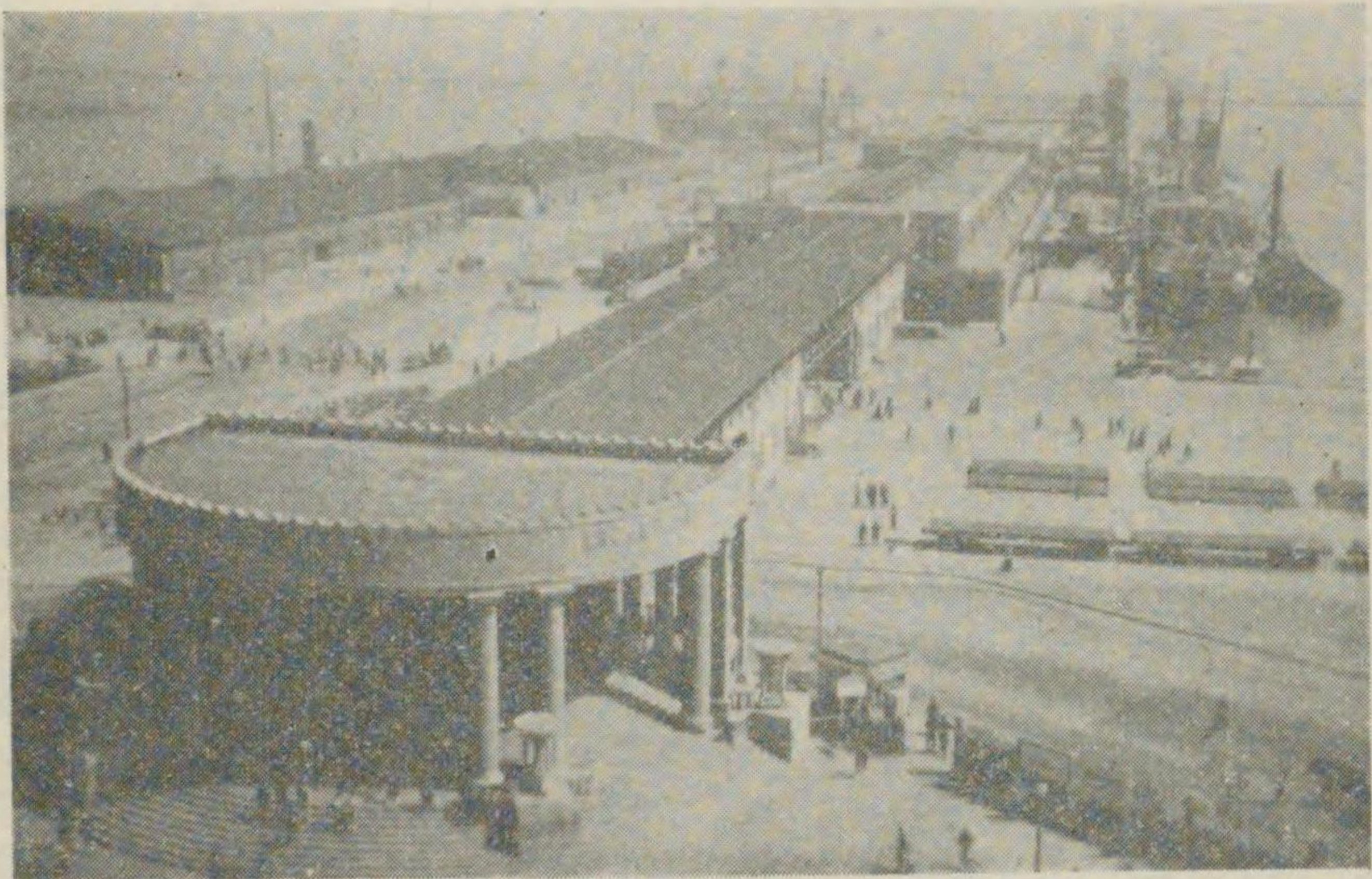
第十六日

鈴井眞一

六月六日（土曜日） 晴

嫩い夏の朝の微光を受けて瑞々しいアカシヤの若葉につままれた滿蒙のバロメーター大連の市街は植民都市としての動かし難い根深い基礎に國際都市として欣賞すべき清新な元氣と潑刺さを有つて居る。昔は一寒村で、北清事變の時英佛聯合軍の根據地となり、李鴻章が大砲を築いて、追々と盛んに、名も青泥窪から大連となつた。自動車に分乗して埠頭事務所に行く。雄大な七層閣の上に立つて一里餘の防波堤に包擁せられた九十萬坪の海面に五千噸級の船舶を同時に三十七隻を聯ね繋ぐべき三道の長き大岸壁とそこに繋泊し來往する許多の船舶とを展望し更に又た埠頭に城廓の如

く横はる船客待合所を見る。一年中に七百二十萬噸の尨大な貨物を吞吐する大埠頭。二十年の昔ロシアが遺した規模に據つて更に擴大された我が大連は滿蒙開發の鴻圖に順應すべく我が國家と人民との努力に依りて更に益進展しつゝあるのである。こゝは、滿蒙農産物を輸出して、日用品、材料を輸入する比率は七對一・五で大なる出超である。たゞ近年支那側に滿鐵平行線を築いたり、胡蘆島に築港したり、滿鐵、大連の將來について大いに考へねばならぬが、我國では猶更に大計畫を立てゝ行かねばならぬ。埠頭事務所を辭した私達は大連物産取引所を訪れた。折からの落花生取引に於ける支那人の取引状況を見學する。此所は内地には珍しい官營の取引所で關東廳が行つて居る。滿蒙に於ける特産物を取扱ふ特産取引所と金銀の取引をする錢鈔



貞孝四郎

事務所より大連埠頭を望む

取引所とがある。此所は前者に属する。二階から場内を見下す。むつとする様な空氣臭いにほひのこもる場内に無数の支那人がざわめいてゐる。内地と違つて場立人はなく形式は相對賣買の様である。取引所の仕事としては市場の經營公定相場の發表、取引人の免許信託會社の信託及び受渡等がある。そこを去つて三泰油房に行く。當地の油房會社は日本人經營のものが多く、此所は三井の經營である。原料が大豆であるから豆の來る夏にのみ仕事が出来るのである。先づ其れをふかし次いでしぼるのである。油は豆の一割しか出ないさうだ。さうして歐米に輸出せられバター燈油等に用ひられる。副産物たる豆粕は大部分肥料として日本に來るが、近年此の用途が變つて來て菓子醬油味噌等の食料品に用ひられる様になつて來たのは注目すべきことである。一絲もつけぬ裸身の群が熱霧の噴迫する中で働いてゐるのは物凄しい。次に碧山莊華工宿舎に行く。

此所は埠頭各種の荷役作業に従事する中國勞働者の家であつて彼等は別に「紅房子」と愛稱してゐる。建物總延坪約一二、〇〇〇坪に達し優に一六、〇〇〇人を宿泊せしめる。苦力とはタミール語で雇傭の意とかである。此の苦力中には山東の者が大部分で全部此所に泊り、主食に饅頭を用ひ食費一日小洋十四錢です尤其他雜費六錢副食物四錢として二十四錢の負擔額となる。故に彼等は低額の金をもらひ喜んで働くわけである。此所の建物は鍊瓦造りの長屋で内部は一見陸軍の廠舎と同



ルテホ和大浦ヶ星

じ様な作りである。次いで沙河口工場に行く滿鐵の汽車を造る所で汽車が大きいだけに實に壯大であつた。ハンマーの音、ベルトのまはる音、鐵のきしる音、其らが交錯して實に物凄しい。

それから市の西南に當る名勝星ヶ浦へと自動車を走らした。砥のごとき坦途を快速三十五哩のドライヴが快い。やがて敷妙の波穩やかに長汀曲浦を洗ふ星ヶ浦の別莊地。翠樹の陰に隠見する紅瓦白壁の瀟洒な建物が目に映ずる。大和ホテルに少憩して晝餐をとる心ゆくばかり涼風を滿喫して再び車を驅つて小崗子市場へ幾條の細い露路、その狭い路を隔て、すべて穢陋なる雜具店である。脚の跛となつて居る椅子、クツション年故りてはや摩弊し腹は裂けて綿絮を露出してゐる寝椅子。剥げかゝつた硝子鏡、左右の形違へる靴、支

那前朝の大官が着たと見える丸龍の紋を胸に刺繍した服が吊され赤鯛の偃月刀、その他家具什器等を雑然として打陳べたガラクタ市場である。支那人の押し強さがしられる。露地の盡頭は廣場になつて居る。饅頭餛飩をいためてゐる店、得體のしれぬ肉を揚げる支那人、首だけになつた豚を吊した店。悪臭の胸にせまるのを覚える。銅鑼の響き叫喚の巷流れる様な人波。アヘン吸飲を見て逃げる様にして再び車を馳せて暮色につゝまれた大連の市街にネオンサインまたゝく頃歸館。

第十七日

鏞木清

六月七日（日曜日） 小雨後曇

霧の様な雨も何時の間にか霽れ上つて、滿蒙のパロメーター大連市を、しつとりと包み、遠く霞んで見えるチャーチの尖塔はダルニーの昔を偲ばせる。背後に活動の大天地を荷負ふこの街の朝は晝の活動があまりにもはげしい故か一層落付いた、静かな姿を呈して旅のあはれさをそへる。

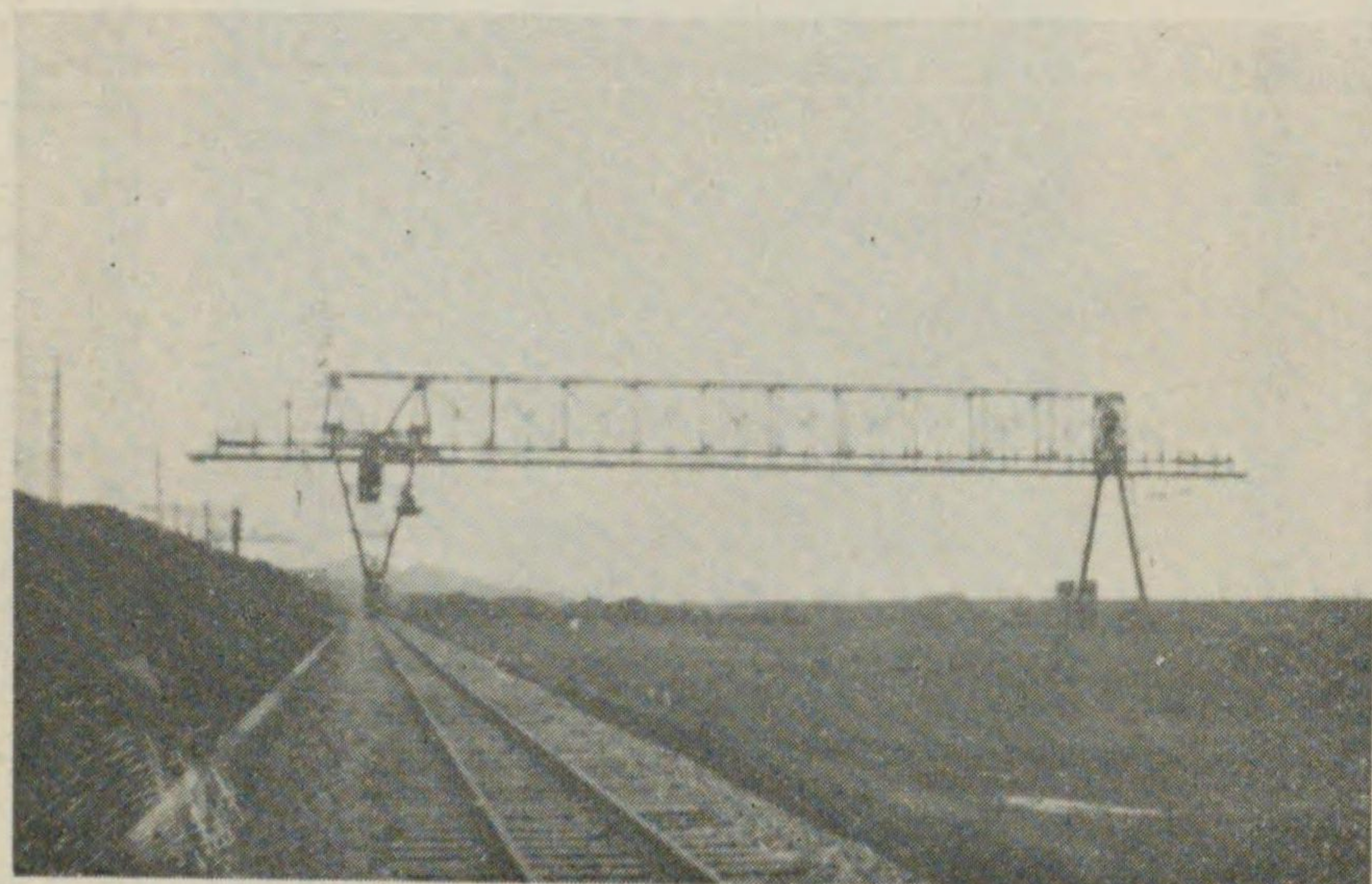
先づ一行はロシア町の滿蒙資源館を訪れ、館前にて大連市に付いての説明を承つて後一時間の餘裕を得て館内を參觀する。大連は帝露時代に極東政策の一つとして浦鹽港の冬季氷結の弊を補ふべく不凍港として作られ、日露の役によつて完全に行政權が日本に轉嫁されたものである。同館は滿

蒙開發事業調査のために滿鐵によつて作られたもので到底短時間では見盡せない程、各種資源に付いて調査せられて居り標本模型統計地圖等の陳列によつて我等の頭に滿蒙に於ける經濟状態が、はつきりと統括された。

此處からバス數臺を驅つて對岸なる甘井子の埠頭に至り同事務所の屋上にて係員より説明をうけたまはり、その設備が總て最新式の電氣装置によりわづか一人の指揮者によつてこの煩雜な作業が處理されると聞き非常に驚く。

この埠頭は撫順炭を海外に輸出すべく大連港に於ける手数を省く爲めに巨萬の費を滿鐵が投じ昨年出來上つた東洋唯一のものである相だ。

歸りがけに再びバスにて貯炭場を見學し海岸線に沿



甘井子埠頭

吉田泰次



吉貞原關

帆出連大

うたドライブ・ウェイを通つて歸館する。

午後五時までの自由散歩の許しを得た我等は寫真機や土産物を買ひに出たり、見逃した名勝や野球等を見物しに出掛け気分をゆつたりとさせる。

五時より滿洲旅行の名残りを惜しむために連鎖街なる扶桑仙館に於て本場の支那料理に舌を躍らせた。

かくて晚餐後再び自由散歩を得た一行は三々伍々連れ立つて連鎖街に將た浪花通りに散歩がてら買物に出掛け、やがて十時もおとづれる頃楽しい夢を結んだ。

第十八日

堀野 三郎

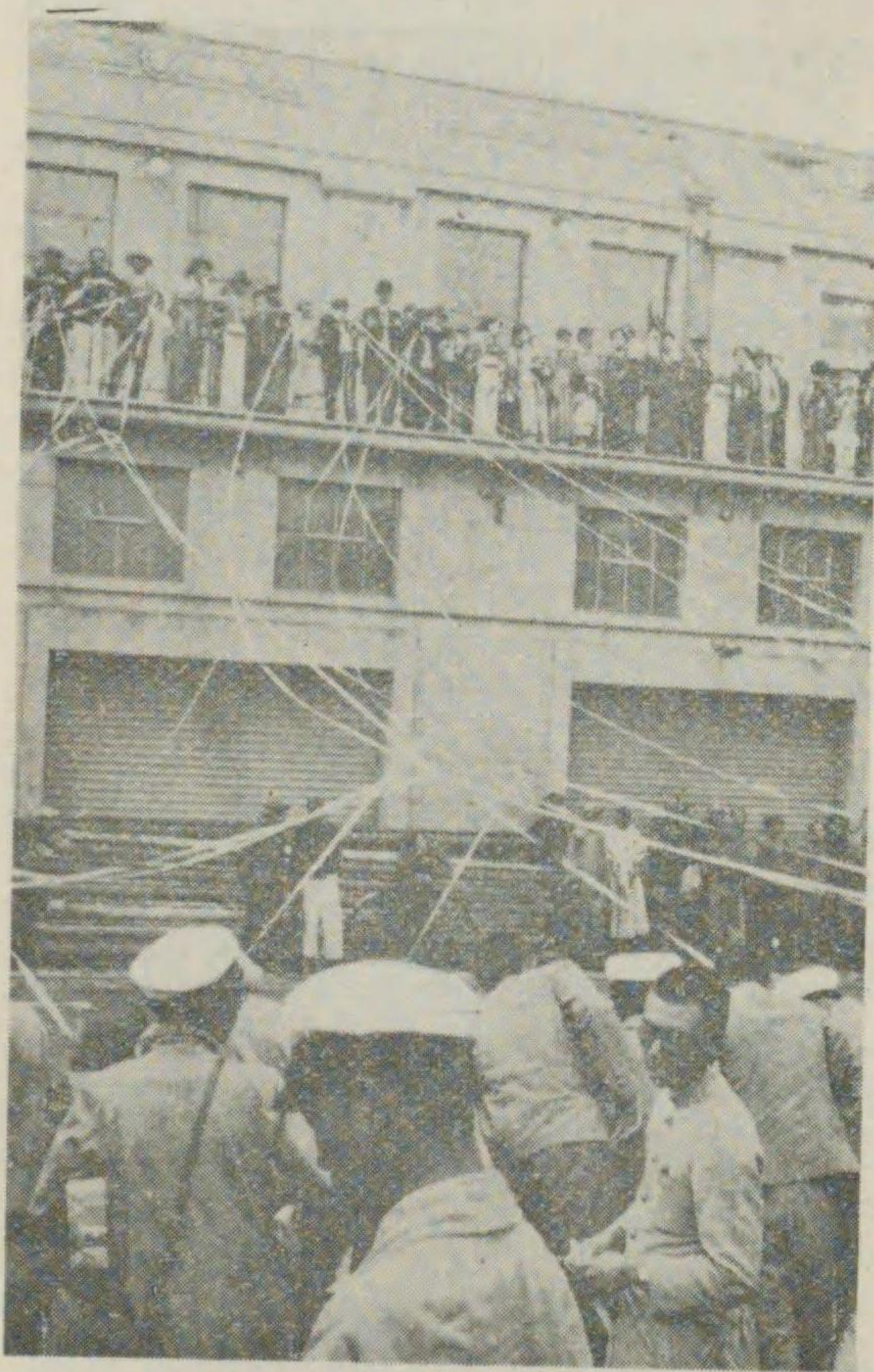
六月八日 (月曜日) 雨

細雨が街を煙らせて居た。久し振りの雨。雨の大連

をもう一べん歩いた。どこともなく東京の様な大連よ。もうお別れだ。僕達をのせた電車はぬれたコンクリート道路を走つて埠頭前に着く。いつか雨もはれて。愈々奉天丸の出帆。銅羅が鳴る。テープが美しく船と岸壁を結ぶ。

さようならの幾つもの交換。船は靜かに岸壁を離れた。

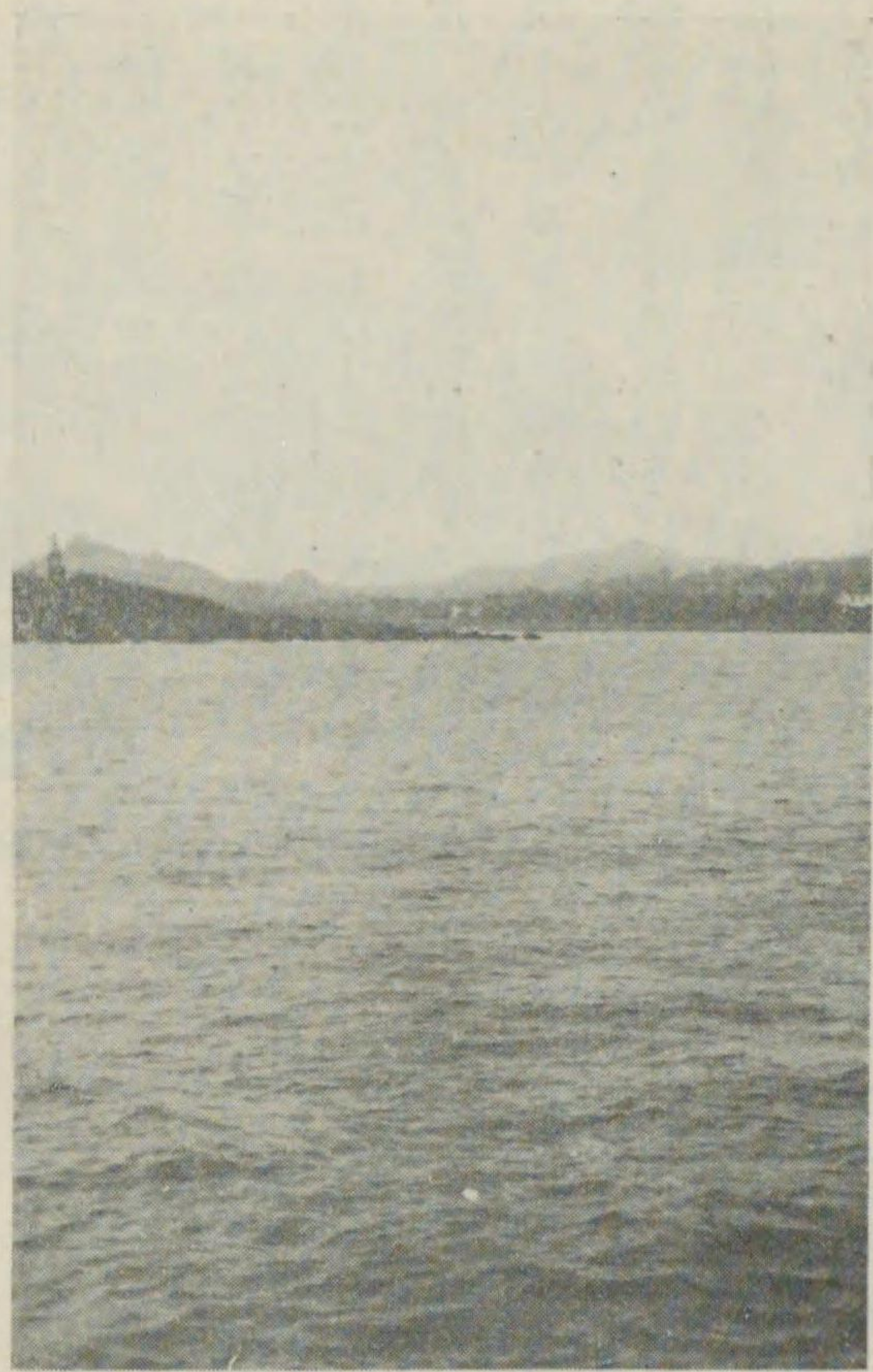
テープも切れて海に落ちたのを最後に次第に速力を出し進み初めた。船上の晝は船自身と空と水と誠に吞氣である。欄干にもたれて船のかき分ける波のうねりの白い花を見るのは壯快である。船よひの者もなく八時頃からよく眠つてしまつた。



雄秀村中

!ばらさ、よ連大

朝鮮及滿洲の熱心な視察にいさゝか疲れたらしい一行にとつてこの航海は正に休養場所であつた



青島を望む 川本虎雄

六月九日（火曜日）晴

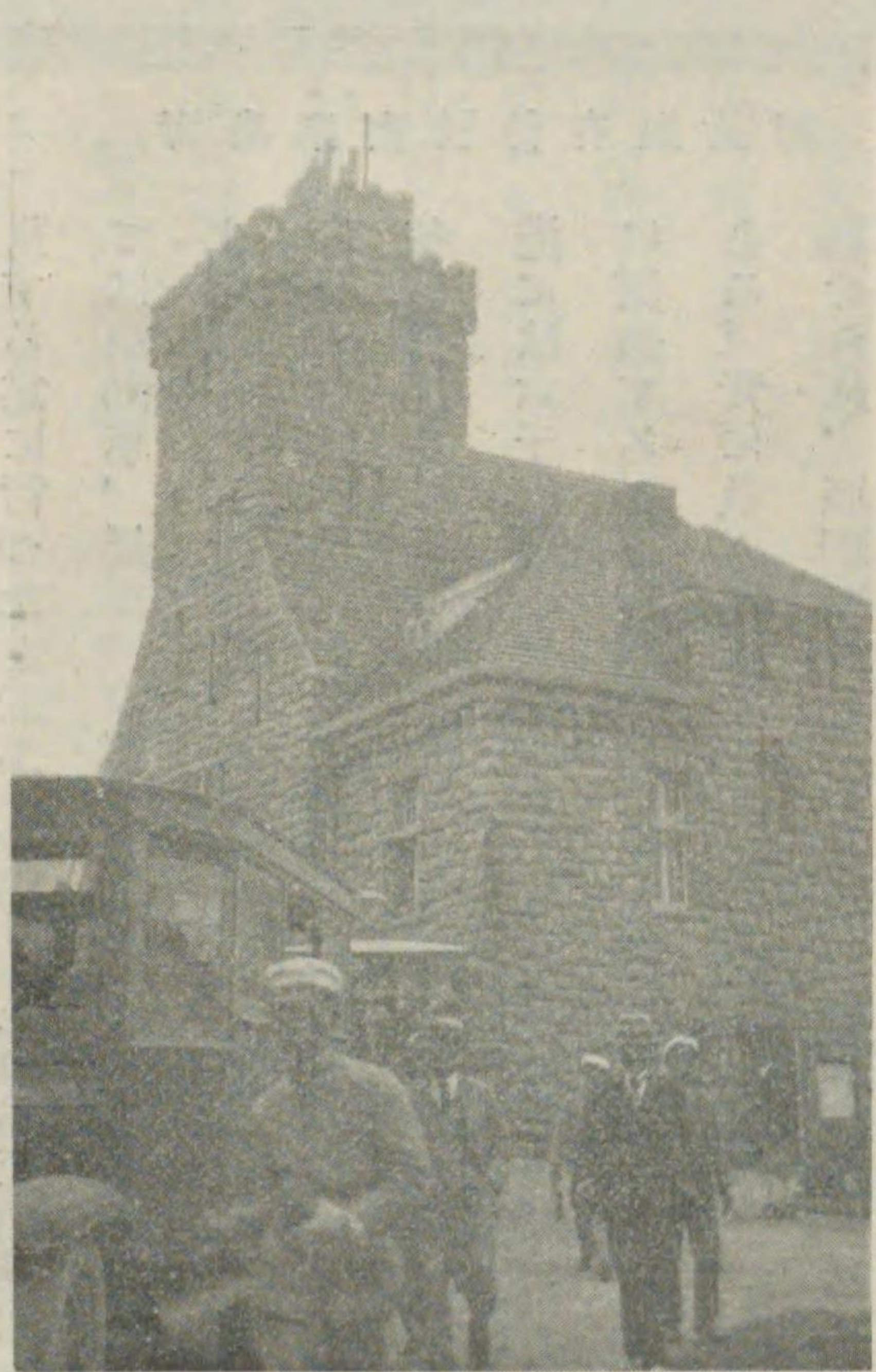
六時加藤島の燈臺を右に泰西名畫に見る様な緑と赤の美しい青島を望んだ時、期せずして歡呼した若い檢疫醫に檢疫せられ、七時五十分奉天丸は大カーブして青島第二埠頭についた。

「撤消領事裁判權」「廢除一切不平等條約」「打倒一切國際帝國主義」

など大文字の宣傳文が見える。港には見物人苦力など群をなして、船側に集つて居た。伊藤町會議員の御案内をうけた。此都市は獨乙の後を繼いだ日本により文明機關が設けられ、特に下水上水の設備は完備してをる。市中にはマンホールが有り下水及雨水を通して海に送ると云ふ程であ

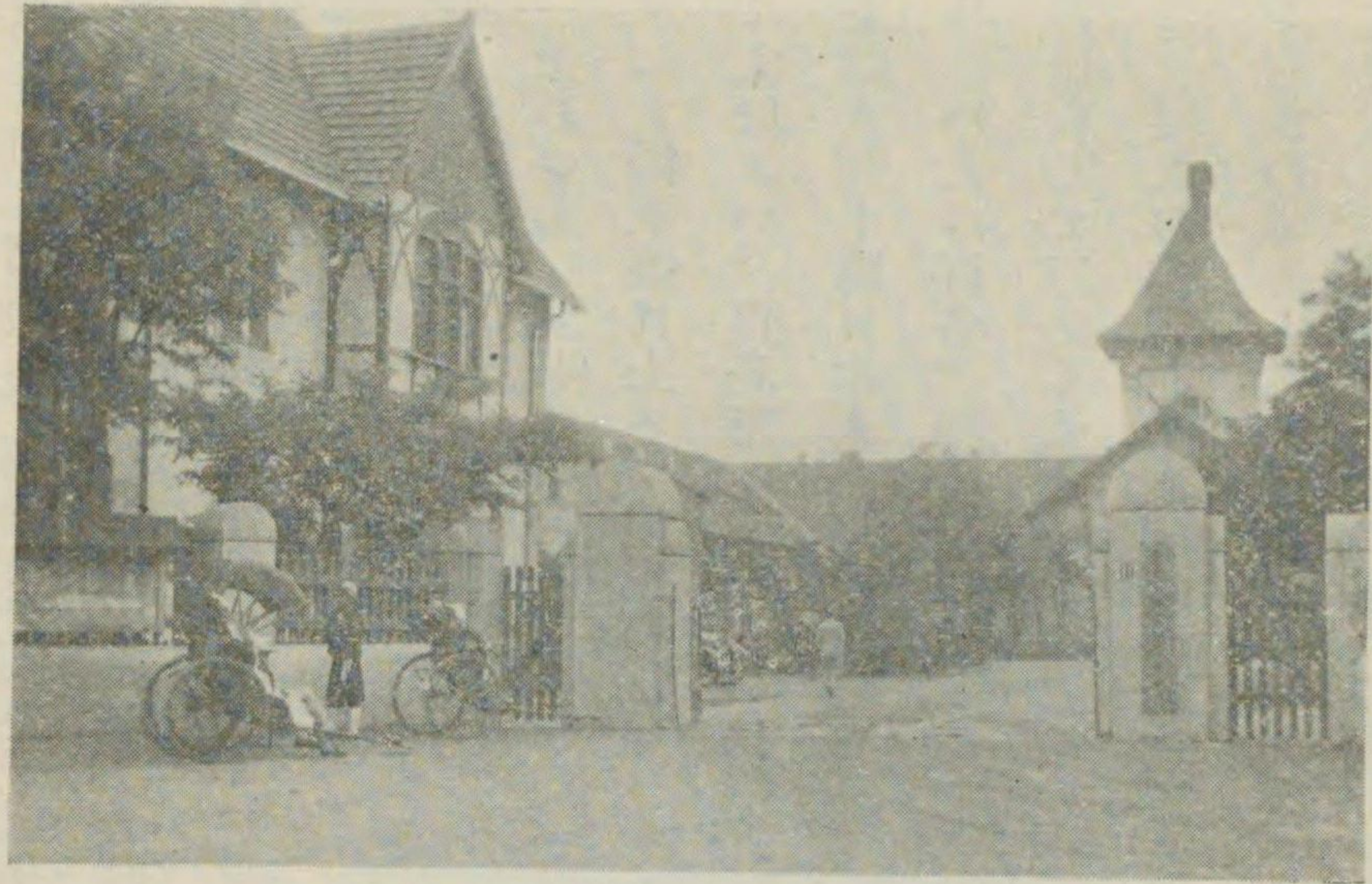
る。阜頭は第一——第四まであり、其處には三千噸級が二十隻横付け出来るのである。内地との交通は五日おきにある。自動車で商工會議所の隣の株式會社青島取引所に行く。丁度取引開始時刻少し前非常に内は雑沓してゐた。八時三十分取引開始の鐘が鳴ると、まるで喧嘩の様な騒ぎである。二十分程觀て別室で取引所の淺野氏より御話を聞く。

それから、赤楊の花下をドライブして觀象臺に上る。屋上の展望は大層よい。青島市の現在人口は支那人三十萬日本人一萬四千六百其他外人六百名。獨乙の租借當時と比較して三倍も大きくなつてをる。戦亂の爲苦しむ支那人が此處



青島觀象臺

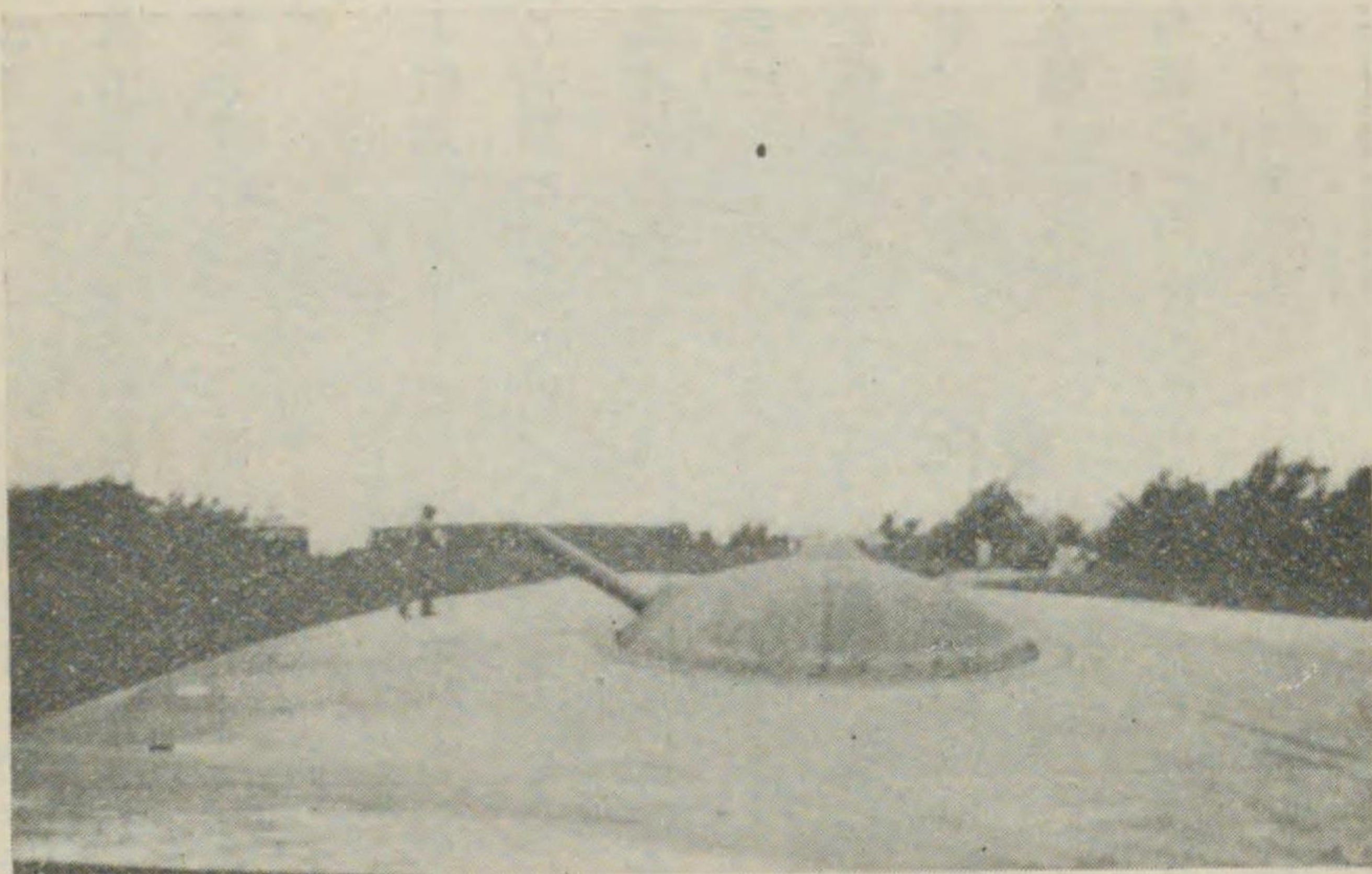
を安住の地として來る者多く最近五、六ヶ月の間に五百何軒の家が新築されたと云ふ。衛生設備は完備し街路樹麗しく風に靡いて道路は歩、車道を區別してアスファルト、人造石を以て疊み白堊赤



青島宰畜股份有限公司

藁の高樓繪の如くに櫛比して居る。同型造りの家屋、又平屋なく二階建以上である。之は獨乙が市の美觀を呈する爲に行つたと云ふ。騒音防止の爲交通機關としては自動車、馬車、自轉車のみで電車の敷設はない、土地は一坪二十錢位、此處に於ける日本の實權と申せば日本貨幣が通用すること。公共設備は日本人の施設多し。貿易は日本六割随つて内地の方が盛んである港には六千噸級の船舶六隻三千噸級の船舶十九隻一時に繋船することが出来る。又支那ジャンク船専門のもある。背に負ふ山西省の石炭埋藏量は六千八百億噸と稱せられ、亞細亞全量の三分の二が埋藏されてゐるわけである。其石炭の積出を青島にまかすことになる。將來の青島港の發展を想像しうる。再び自動車を馳せて青島宰畜股份有限公司にむかふ。

本屠場は元獨乙が西曆一千九百四年(明治三十七年)起工、一千九百六年の竣工で、大正三年日本官營、十二年日支合辦、資本金四十萬元。地積は八千六百餘坪、牛、豚、羊別々に繋留場、屠室があり、検査場、消毒場、冷蔵庫、試験手舎、懸肉庫、内藏整理室等がある。豚屠室を見る。屠殺作業は、作業開始前屠殺すべき豚を全部豚繋留舎に留置し此處より屠室に導き、額にのみをあてる。それを一人が大きな槌で打込むのである。豚が屠室に追込れる時、屠殺されるのを豫知し悲壯な叫び聲を上げ歩を拒むのである。之の屠殺場を見て三ヶ月位肉を食する事が出来なかつた人もあつたとのこと。屠殺能力は牛一日九百頭標準一度に二十六頭を屠殺する。そのため起重機二十六臺を使用する。豚は二百頭羊は八十頭。一番慘酷なのが羊で首から、ぽつり



會姓岬砲臺

吉田泰次



イテルス北砲壘の軍語

吉村昇三

と切り落してしまふさうである。輸出は日本だけで一ケ年に牛約七萬頭と算せられてゐる。それから、領事館の傍で一寸渤海の碧波を望み會姓岬砲臺へ向ふ。

獨乙が日本を假想敵國として築いた砲臺であつて日本軍がよくやる奇襲に備へる爲鐵條網が張りめぐらされて其の上に砲臺が置かれてある。之は軍艦砲撃を主とするのであつてコンクリートで固められてある。我軍艦から打つた弾丸があたつた所は、新しくぬつてある。下は地下室、壁の厚さ一間位、青島防備の中堅として永久砲臺を構えたのである。

旭公園の中を通つて、遙かに忠魂碑を拜し、イルチス北砲臺に到つた。青島隨一の高所で外海の美しい景背面の青島が一目である。獨軍は延長六八〇〇米の鐵

條網を張り、六砲壘六巨砲で防ぎ、我軍も重砲彈を集中した所で彈痕の窪みが隨所にある。砲撃開始一週後陸兵六〇六、海兵三九八の戦死者を出して大正三年十一月七日占領したものである。今は日本の領土でない。前面の丘陵、森林、窪地皆我苦戦の地である。蠟燭の光で壘内を見、早々去る。滅茶苦茶に走らしたが、船は僕らを待ち兼ねてゐた。
正午出港。

第二十日

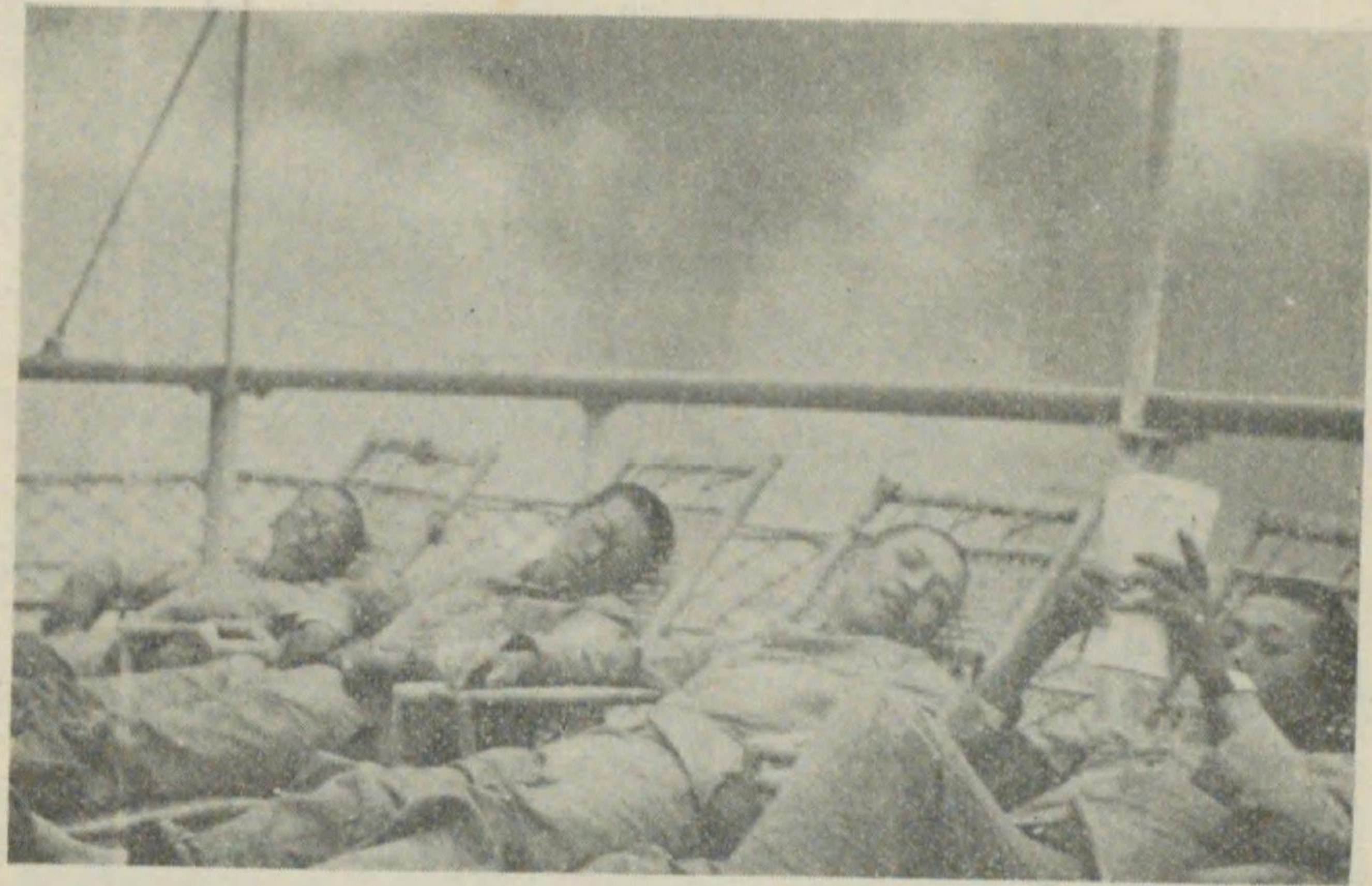
川上巖

六月十日 (水曜日) 曇後晴

緑碧の海は銀灰の空に覆はれて無限の平面のやうだ
山一つ嶋一つ見えないし船も絶えて見當らない。日誌



イテルス北砲壘を吊る



奉天丸甲板の憩

柳川竹次郎

通信、讀書、晝寝、トランプ、輪投、等に打興じてゐる、時々爆笑が起る。特に僕等の爲一等船容の甲板を解放して呉れた。上甲板で籐の寝臺椅子にもたれて紺青の海、杳々として織翳なき碧空を望めば言ひしれぬ壯快さが胸に湧く。十時頃船内見學。航海、貿易、機關について説明を聞く。

海水が茶色になつて來た。段々と目立つて土色になつた。濁流、濁水。洋々、滔々。天と涯がない。彼方に一條の陸地が見え始めた。崇明嶋である。

楊子江の河口になつた。ポツクリ／＼と流れ出たやうなジャンクに逢ふ。

段々と賑になつて行く。軍艦、商船が輻輳し始めた。母國の船にすれ違つて歡聲を擧げる。水夫が手を擧げて應酬して呉れるのは嬉しい。

英國の巨船エンプレス、キヤナダ號が堂々と下つて行く。愈々黃浦江。午後四時。兩岸が目近となる。家森一畑。

船の進行が鈍くなつた。工場の汽笛が聞えて來る。妙な櫓を立てて漕ぐ小船、三層の小蒸氣船等みな珍らしい。

夕食の後上陸の用意をととのへて甲板に出る。

銅羅が鳴り始めた。苦力が乗込んで來る。

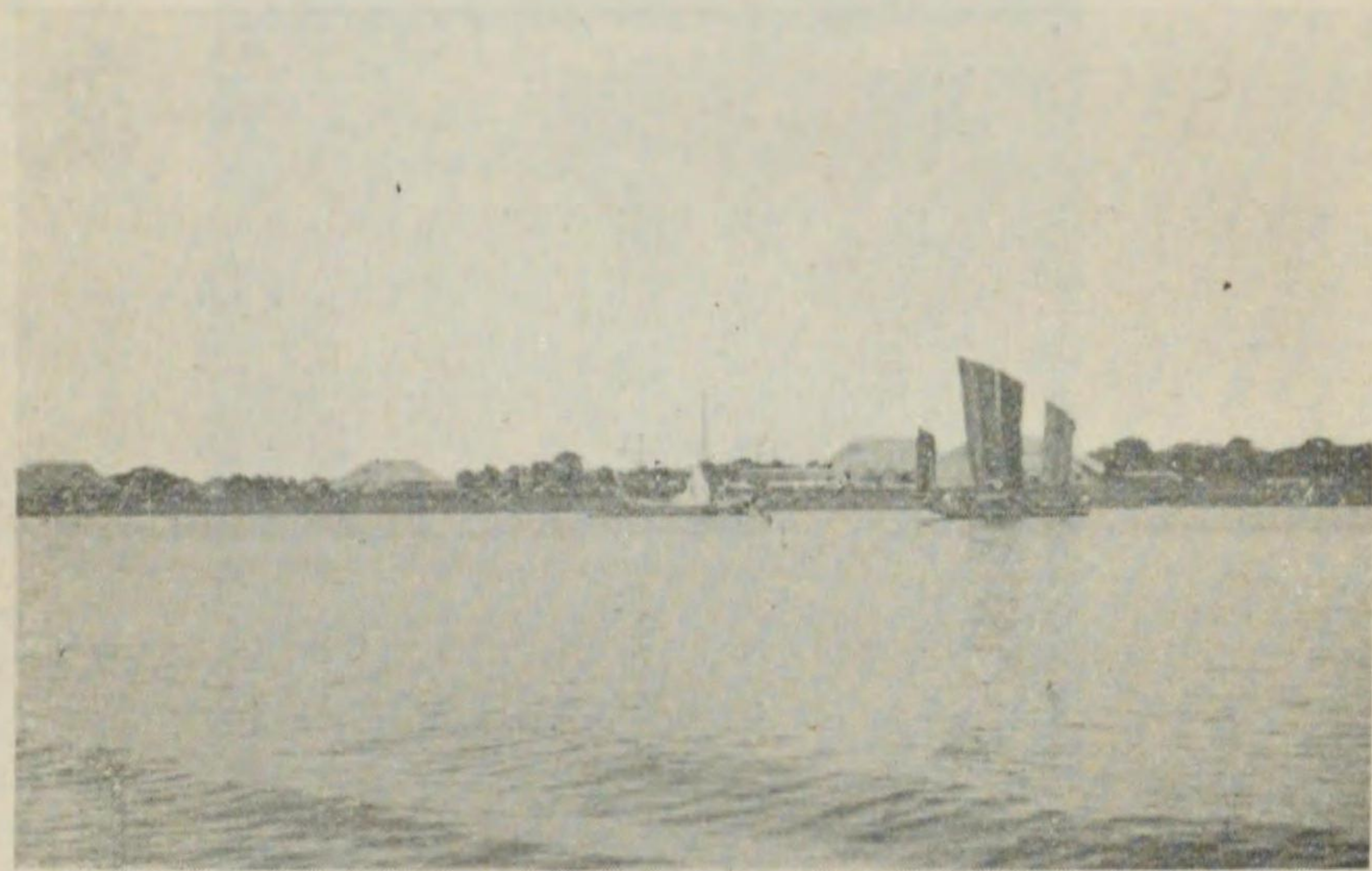
愈々上陸、税關吏の主任は英國人らしい。

簡単な検査をすまして構外へ出る。

中國旅館の客引が五六十人押し合つてわめいてゐる用意された自動車に分乗。

壯快なるドライブ！

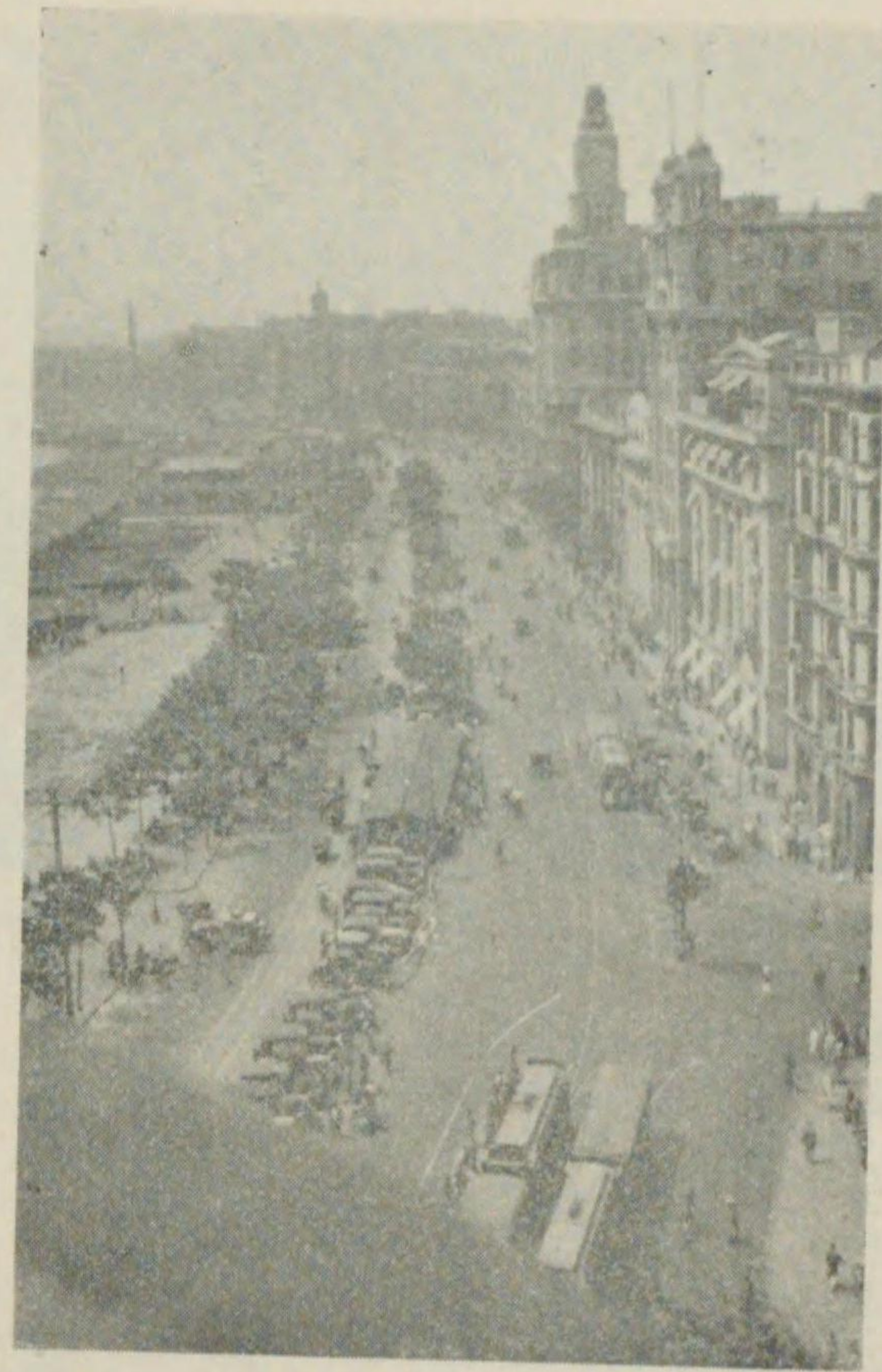
世界的の都。國際都市上海人口三百萬東洋屈指の大



吳淞に入る

關原貞吉

貿易港の夕暮はあわただしい迄の繁華さである。
整った道路。巨大な建物。



下平次郎 巴 ン ド

黄浦灘に於ける、大會社大ビル
ディングの楡比。
横濱正金、朝鮮、臺灣各銀行、
三井物産、三菱商事、中國銀行、
交通銀行、上海、香港銀行等々。
南京路に於ける大商店大劇場の
繁華。
永安公司、先施公司、中國大戲
院、上海大戲院等々。

濃艶なるネオンサイン、華麗なるポスター。
郵便局。海軍陸戦隊本部には日章旗が翻つてゐる。
車馬の往來、無軌道電車が目につく。

各國各人士の雑沓。たくましく印度人の交通巡查。

ピストルを負つた中國警官、英國形のデェントルメン。

支那服の紳士。人力車に揺られる蘇蘭兵。輕快なるアメリカンセーラー。

心強き我が海軍陸戦隊の足取り

この東洋有數の大都市が奏でる交
響樂の中から混合した原色的な色
彩、錯雜した強烈な近代文明の臭
氣がある。一行只々快哉を叫ぶ。

第二十一日

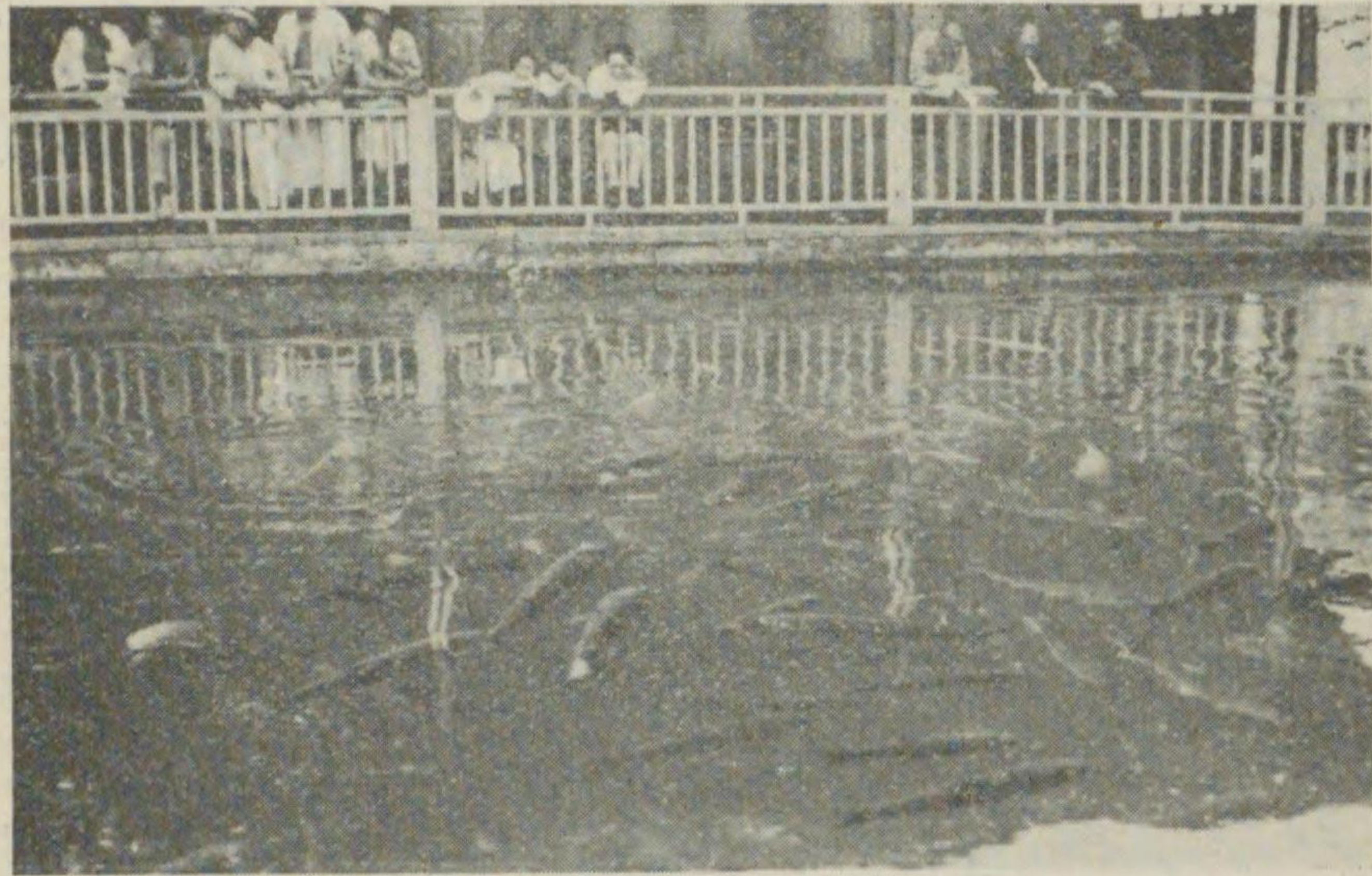
石田善治

六月十一日(木曜日)晴

洗面道具、除蟲粉、わか末等袋に入れて、七時半上海驛に出發。二等車と「頭等 1st Class」とに
乗つた、お客が多ければ一車つけるなど言つてゐる。九時十分やつと發車。沿線の景色は滿州のそ

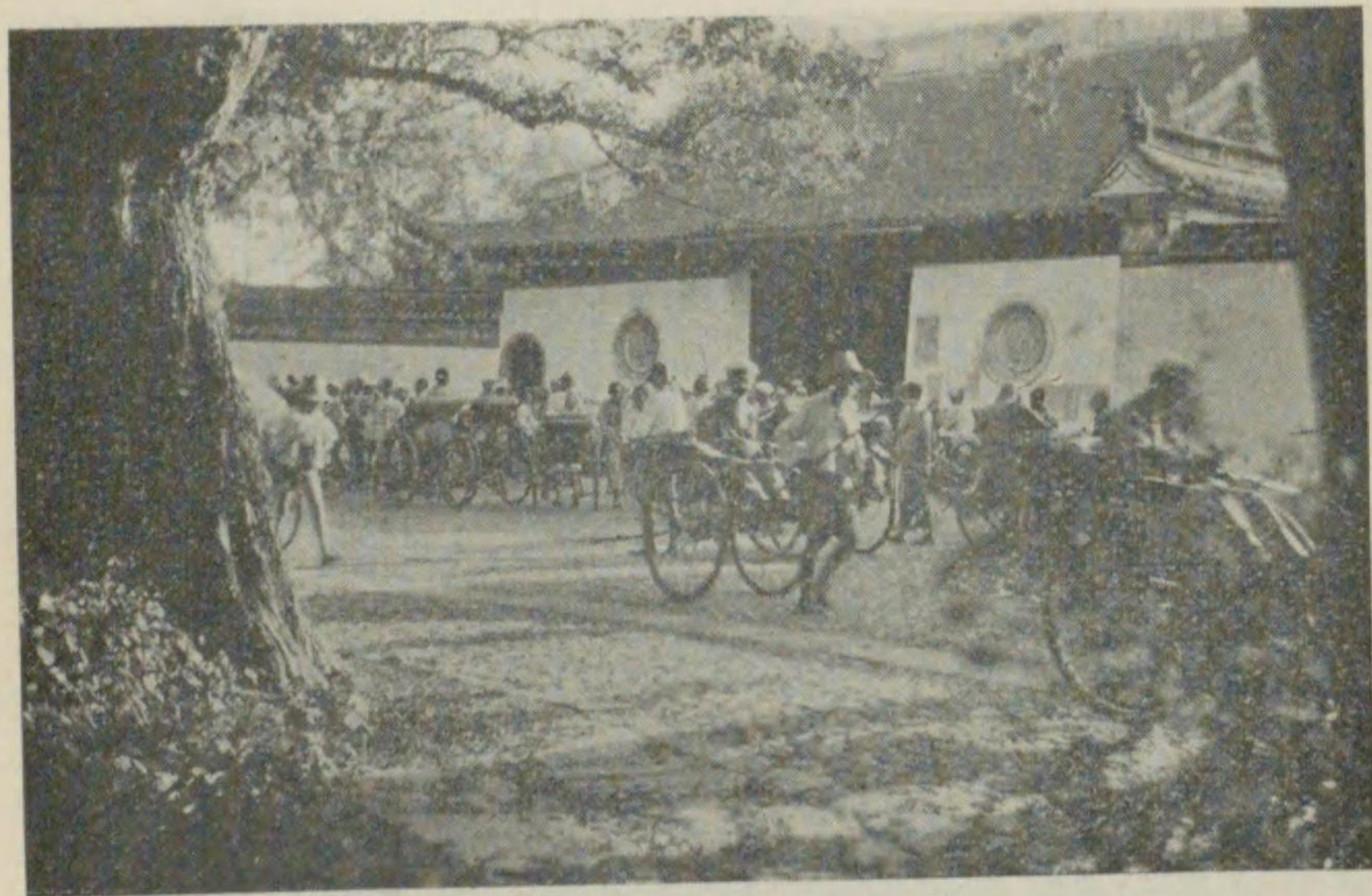


杭州驛前の勢揃ひ 吉村昇三

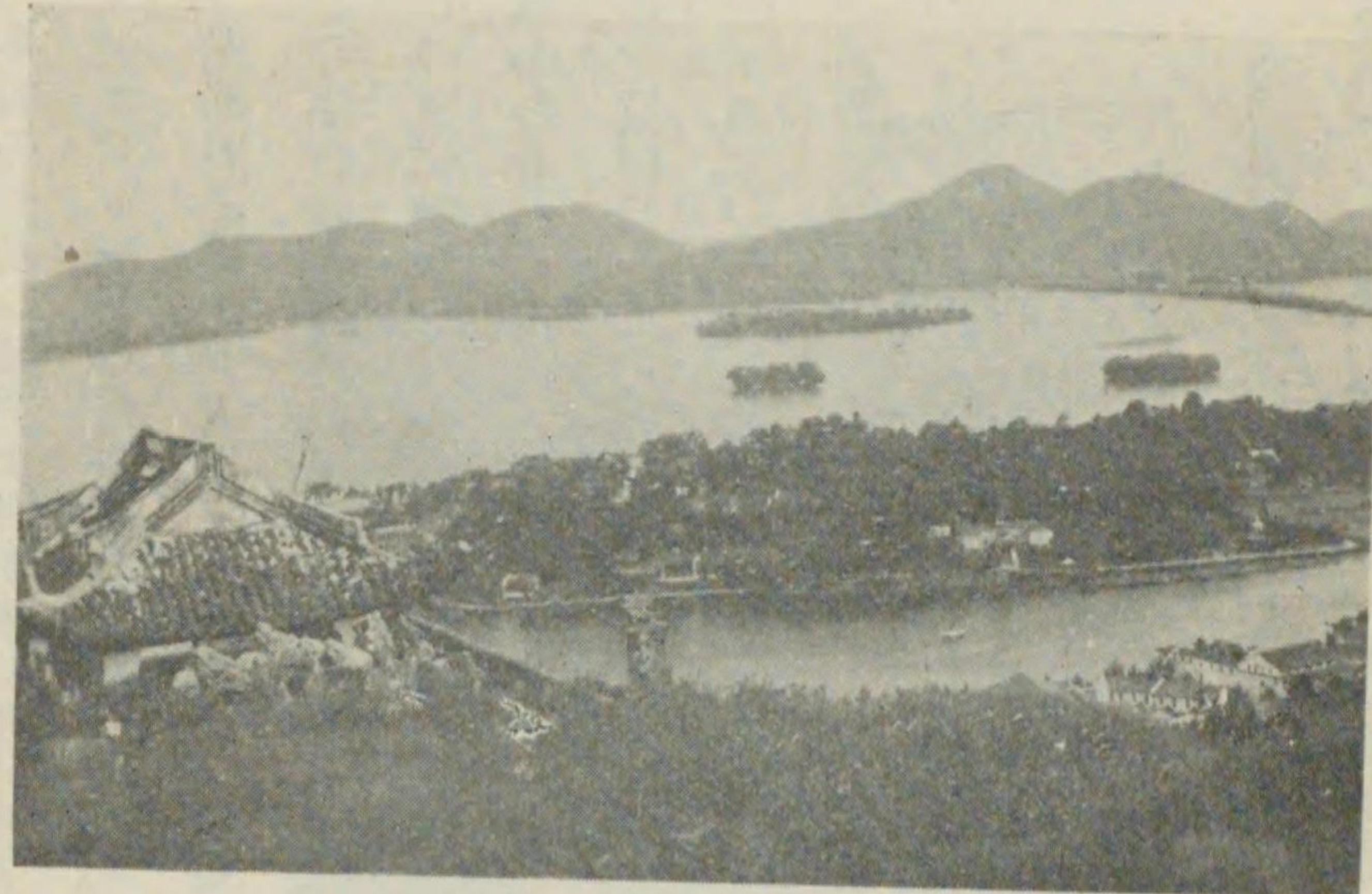


吉貞原關

魚黃の園樂魚



に後を寺泉王



清野大

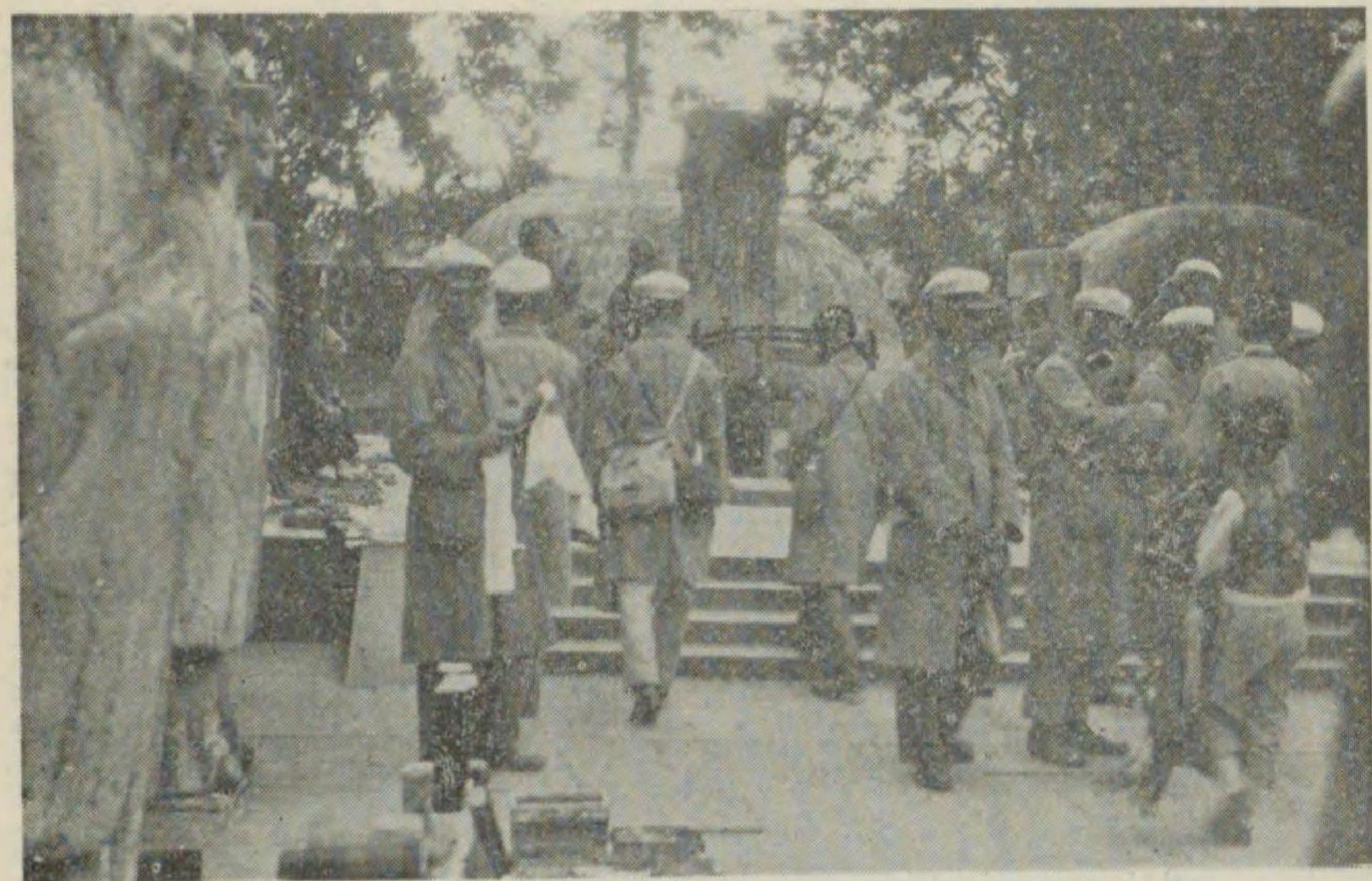
む望を湖西りよ嶺葛

れより見る處があり農業状態も異つてゐる。お茶も出たし、クツションも良いので樂だ。車中晝食。江蘇の大平野は際なくつゞいて、楊柳、水牛、運河、すべてのどけき景色である。午後一時五十分杭州着。噂に聞いた驛前の車夫が、頭を叩かれながら物凄い客の奪合は實に獐猛で、乗つて出る迄は恐しかった。八十五臺の車が一線になつて市中をうね〜と縫つて行くのは偉觀である。先づ保叔塔に上る。今にも倒れさうな塔で岡田先生も「あまり近くに行くとあぶないぞ」と言つてらした。尖端に二本ばかり木が生へてゐるのも面白い。寶石山を過ぎ葛嶺に行く。此處では西湖を一面に俯瞰して絶景である。左には杭州城、はるかに南屏山を隔て、錢塘江が見える。杭州は浙江省の首府で人口約百萬。春秋の越國隋唐の杭州餘杭郡、吳越の首

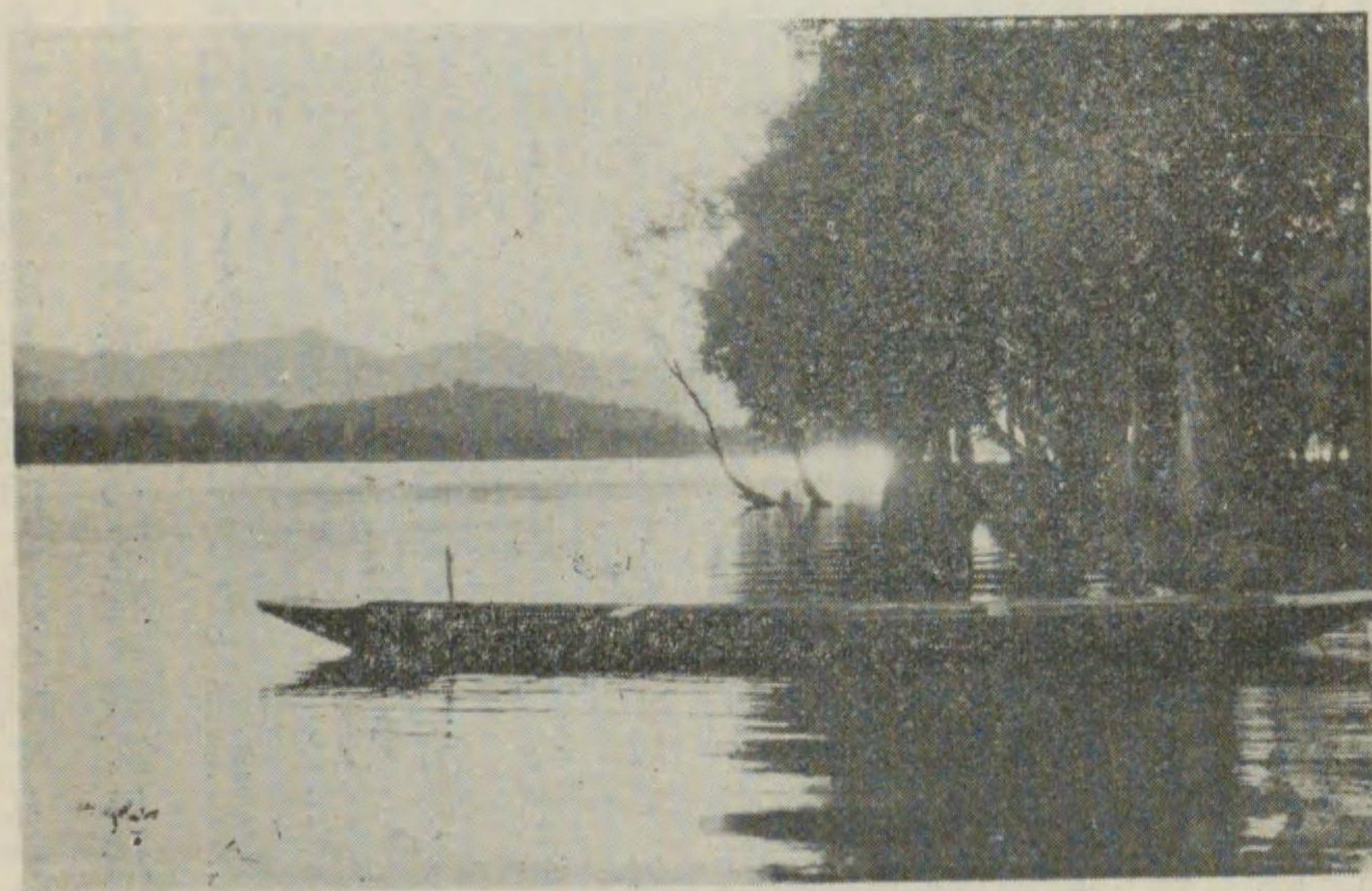
都西府で南宋も亦此處に都を定め、明清兩朝も之に倣つて杭州府を置いた。こんな事情で歴史的にも有名だ。山を下りて飛來峰雲林寺(靈隱寺)に行く。物靜かな境内に、實に大きい大雄寶殿がある。背面の極樂の諸佛も美しい。羅漢堂には大きい五百羅漢が並んでゐる。誰かに似た顔は無いかと探した。魚樂園で靜かな魚を見物、岳飛廟に行く。美しいかはいゝ子供が珠數等を賣らうとついで來る。誰も愈々買はないので「貧乏々々」といつて人をけつとばしてゐる。噂の如くたちは悪い様だ。廟の前から舟にのる。先づ漕ぎ方の變つて居るのに氣が附く。漕いでゐる子供も面白い。西に夕陽を浴びて西湖に舟を浮ばすは涼味満點、非常に愉快だ。歌が出て來る。競漕をする。湖心亭、三潭印月に行く。蓮の葉が多い。折から沈んで行く日の美しくさ。見棄て



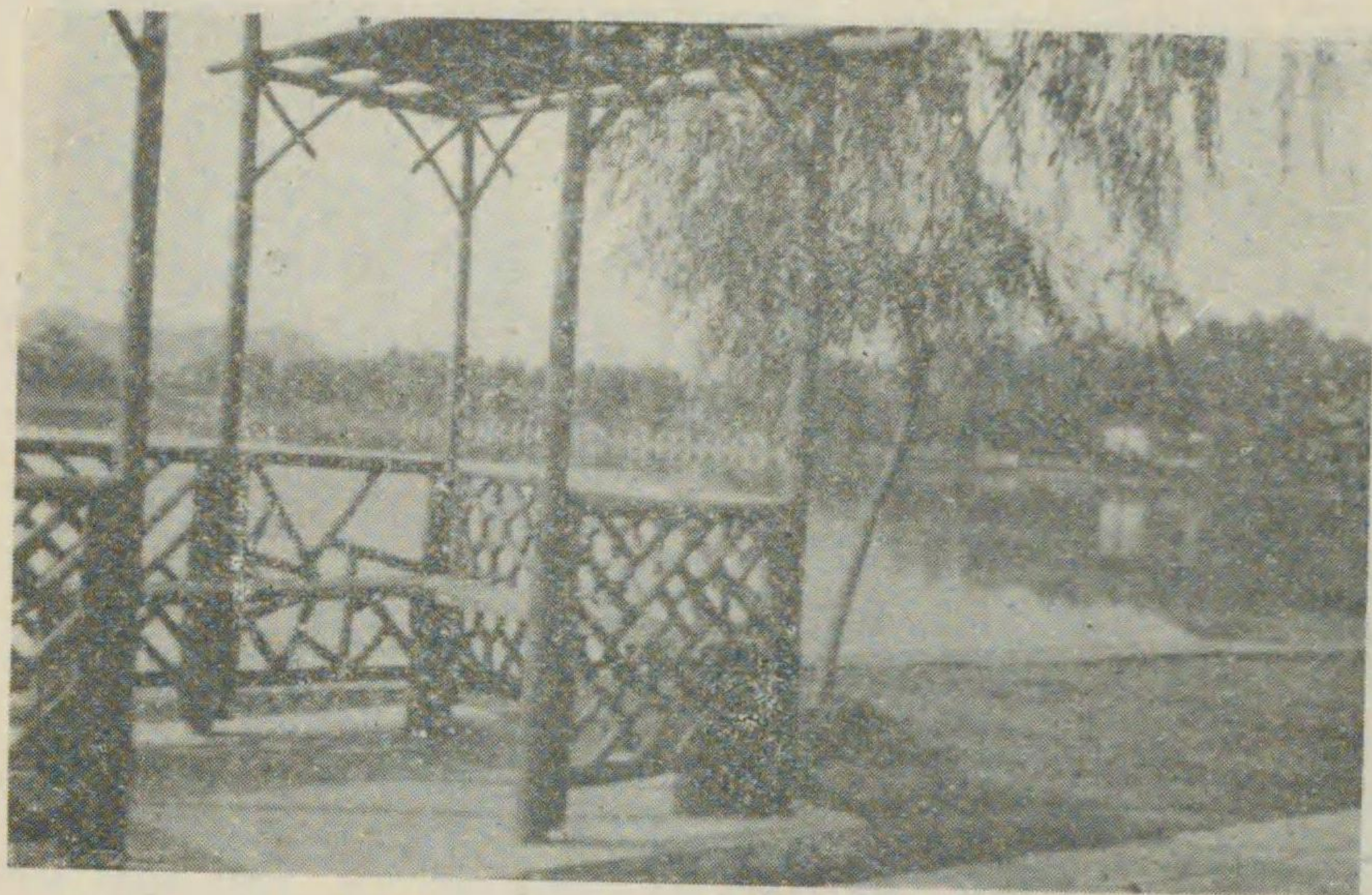
寺 隱 靈



廟 飛 岳



日 落 の 月 印 潭 三



三 茂 原 水

新々旅館前

がたい景色である。歸りは孤山で舟をすてる。もう日は全く落ちてゐた。亭橋を渡つて新々旅館に着く。室は二人又は四人づゝ入る洋式である。晚餐は支那料理であつた。本場でありながらまづかつた。杭州第一の旅館で廣く賣店もあり、色々贅澤なものもあつた。繪葉書、チョコレート、ビスケット等。珠數や石摺賣りも來た。渡部先生は石摺を一つづつ値をつけてらした。室は小さいが二人なので落着いて寢られた。

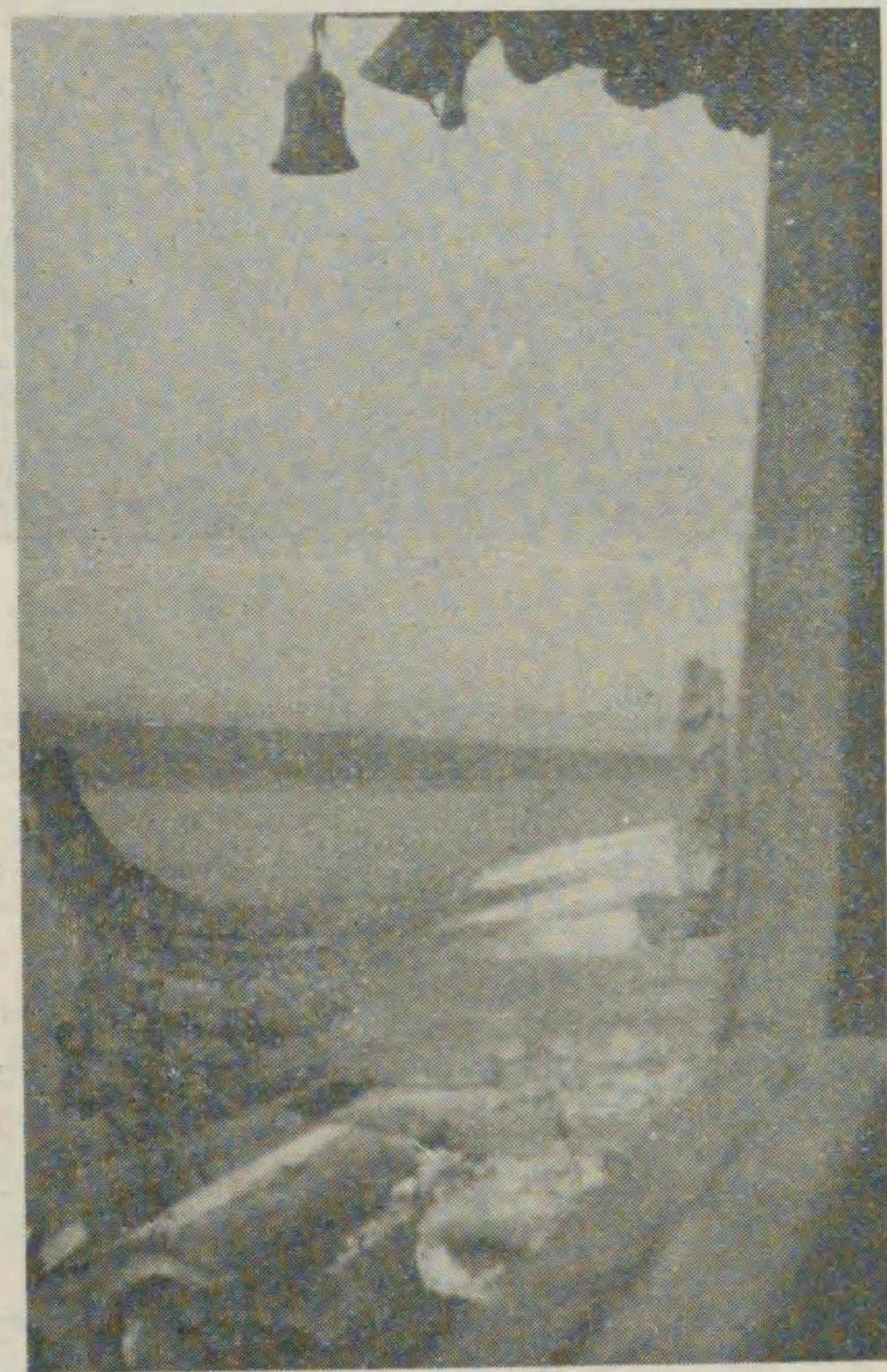
第二十二日

川 端 捨 三

六月十二日 (金曜日) 晴

西湖湖畔に一夜を淡き夢に過した私達は、七時琥珀色の日光が汀の柳葉にほゝえみかける頃白堤を朝の涼

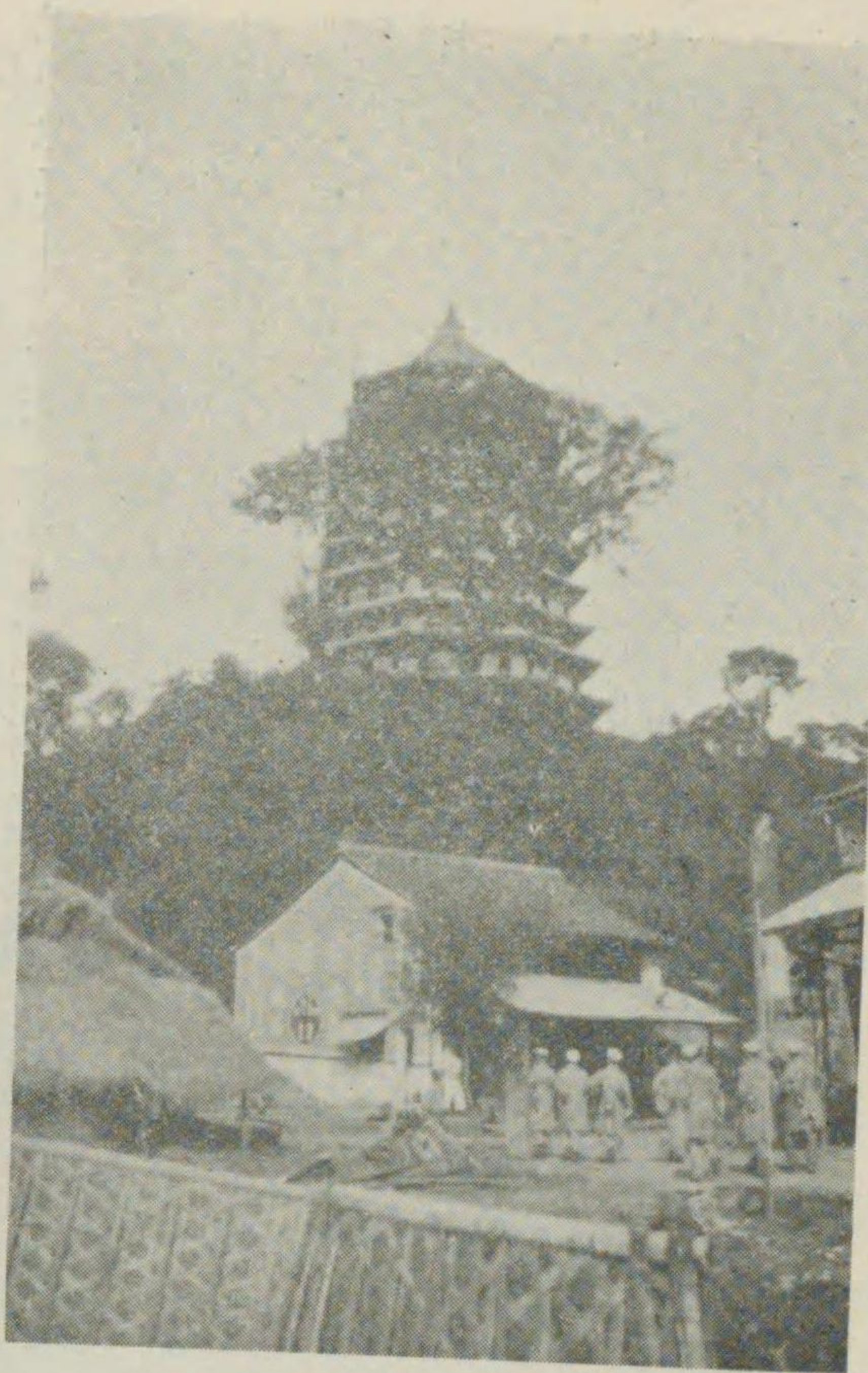
風にふかれながらドライブした。明の太祖が達征の時「提兵百萬西湖上。立馬吳山第一峰」と賦した吳山の綠容を望みつゝ揚柳の並木を快くはしる。蘇堤を渡り右曲して錢塘江畔の六和塔へ來た。八稜十三層の塔が亭々として空に抽いて居る。塔上に立てば脚下に繞る錢塘江白帆悠々として、青磁の色に晴れた空、見晴らす江南の曠野、水平線から眞白い夏の雲が輕やかに飛ぶ。塔を下りて閘口驛にむかふ。「革命尙未成功」「同志仍須努力」「打倒帝國主義」等書いたビラが矢鱈に貼り付けてある。だが依然として江南の水郷は明媚で靜けさを守つてゐる。午後二時二十五分上海北站につく。焼けつ



六和塔上より錢塘江を望む 岩本彰夫

く様な炎暑、アスファルトが靴につく。自動車に分乗して晝の上海見學。くすんだ建物は夜のネオンに輝く街とは思はれない北四川路を左へ折れると我が海軍陸戰隊本部。堂々たる戰車も心強く樓

上高く翻る日章旗を仰いで嬉しく涙ぐましい。日本人公園を訪れる。毎年天長節には在留日本人が集つて式を擧げるとの事。日本人の公園らしい、すべてが清楚な感じである。再び車にのり北四



六和塔 前田榮次郎

川路へ出で、中央郵便局の偉觀を仰ぎながらパブリックガーデンよりバンドを走る。上海の代表的な景觀、異國情調の多分な味ひ、宏壯なビルディングの聳立を見つゝ、佛租界に出で上海第一の歡樂境大世界を過ぎゼスフェールド公園につく。青々とした柔かさうな芝生緑につゝまれた植込の蔭あたりに

黷ふ外人の姿を見ては身は支那にありながら西洋の那邊にか旅して居る様な感である。瀟灑な公園であつた。再び車を驅つて永安公司に着く。目を丸くして土産物をさがしながら店内一巡。南京路の夕は驚く程の賑かさ。梶棒の長いサイパンがとぶ。自動車がつきりなしに續く。電車が走る。

あはたゞしい南京路の夕。疲れ切つた足を曳きづつて宿へたどりついたのは夏の青空に星のまたたきはじめる頃。此の夜、夕食は貪り食つた。パン食二度の後なので、夜は怖づく外出。世界のあらゆる人種とその利益欲望の渦巻く所、國際都市としての上海は東西文化が不可解な結合を見せた怪奇な市街である。私達はこの東洋有數の大都市が奏でる交響樂の中から混合した原色的な色彩と錯雜した強烈な近代文明の臭氣を感じた。

第二十三日

平井武夫

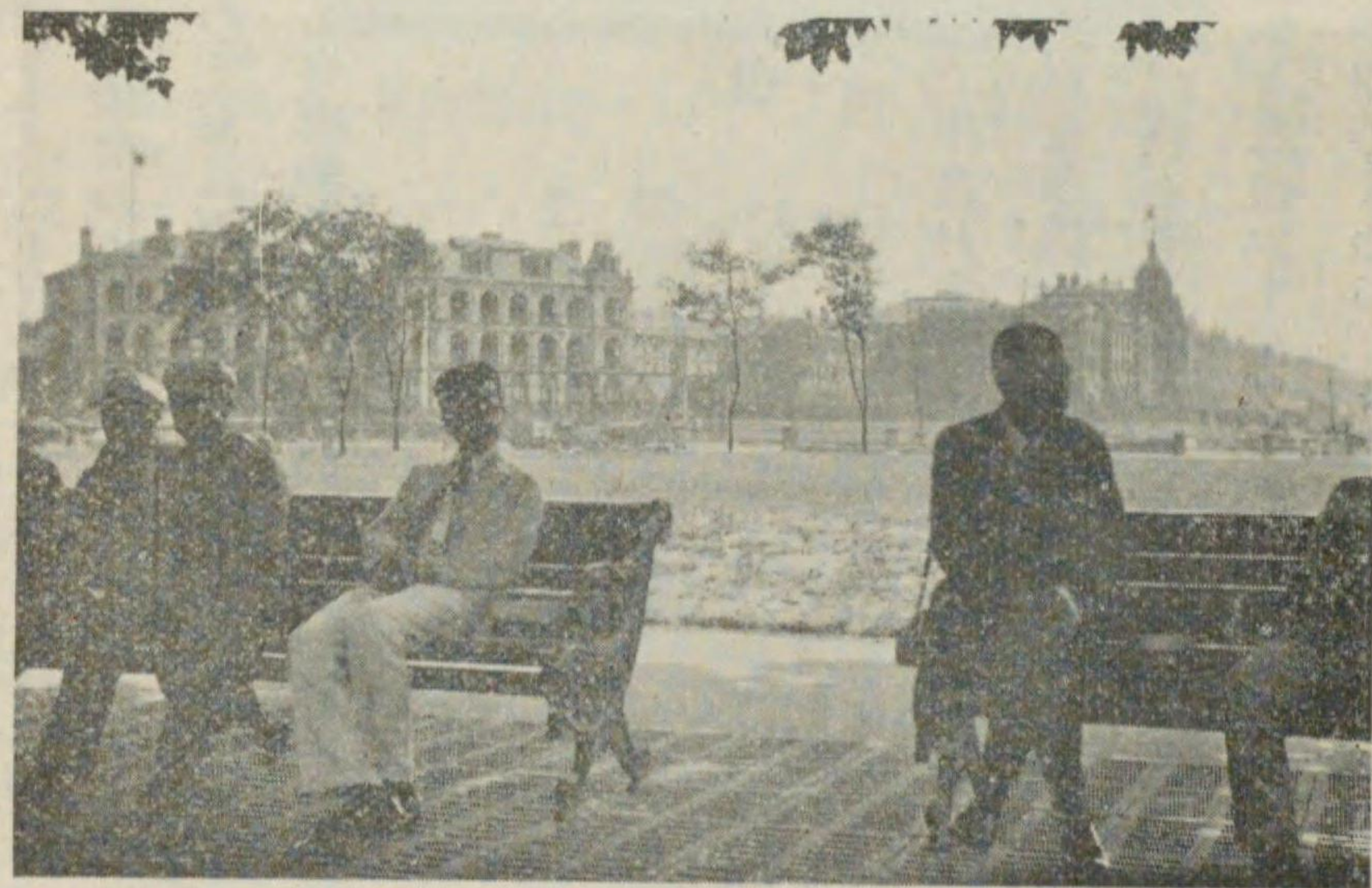
六月十三日（土曜日） 快晴夕刻曇

上海市中見學。

疲もすつかり醫せられた。午前八時萬歲館前に整列する。汗と力の横溢した苦力はしつかりと平均を保つて巧に一輪車を操つて居る。二輛連絡した市内電車は單線を一種の音響を伴つて通行する。良く晴れた今日はもう脊に汗がにじみ出た。岡田團長より、色々御世話になる蘆澤氏、光村氏、澁谷氏の紹介があつて徒歩で、上海最大の市場中央市場に向ふ。此のマーケットは鐵筋コンクリート三階建の廣大なものである。一階は魚肉、牛豚鶏肉、及各種卵等である。先づ驚くのは量の多い事、

新鮮な事、安價な事で、日本のやうに掛聲をかけて賣る様な事はなく、皆、手籠、風呂敷をもつて多く銅子で買ふ、見學中鵜飼先生が大聲でこの市場にはすりが多いから各自懐中物は注意せよ。といはれる。二階には青々と氣持のよい野菜類が一面に擲げられて居る。東京等でも卸賣市場なら、商賣人が集るのだから、新しい品物もあるが、斯様に消費者直接に新しい物が、口に入る事は稀である。内地の野菜は何でも見受けられ又果實類も數多くある。三階は食堂でこの市場で労働する人々の爲に設けられて居る。名も知らない料理が安く口に入る。

市場の經營は市直接で、商人は支那人、日本人が其の大部分をしめて居る。勿論日本人と言つても使用人は多く民國人である。朝から正午まで開かれ、十二時



ンデーガツリブバ

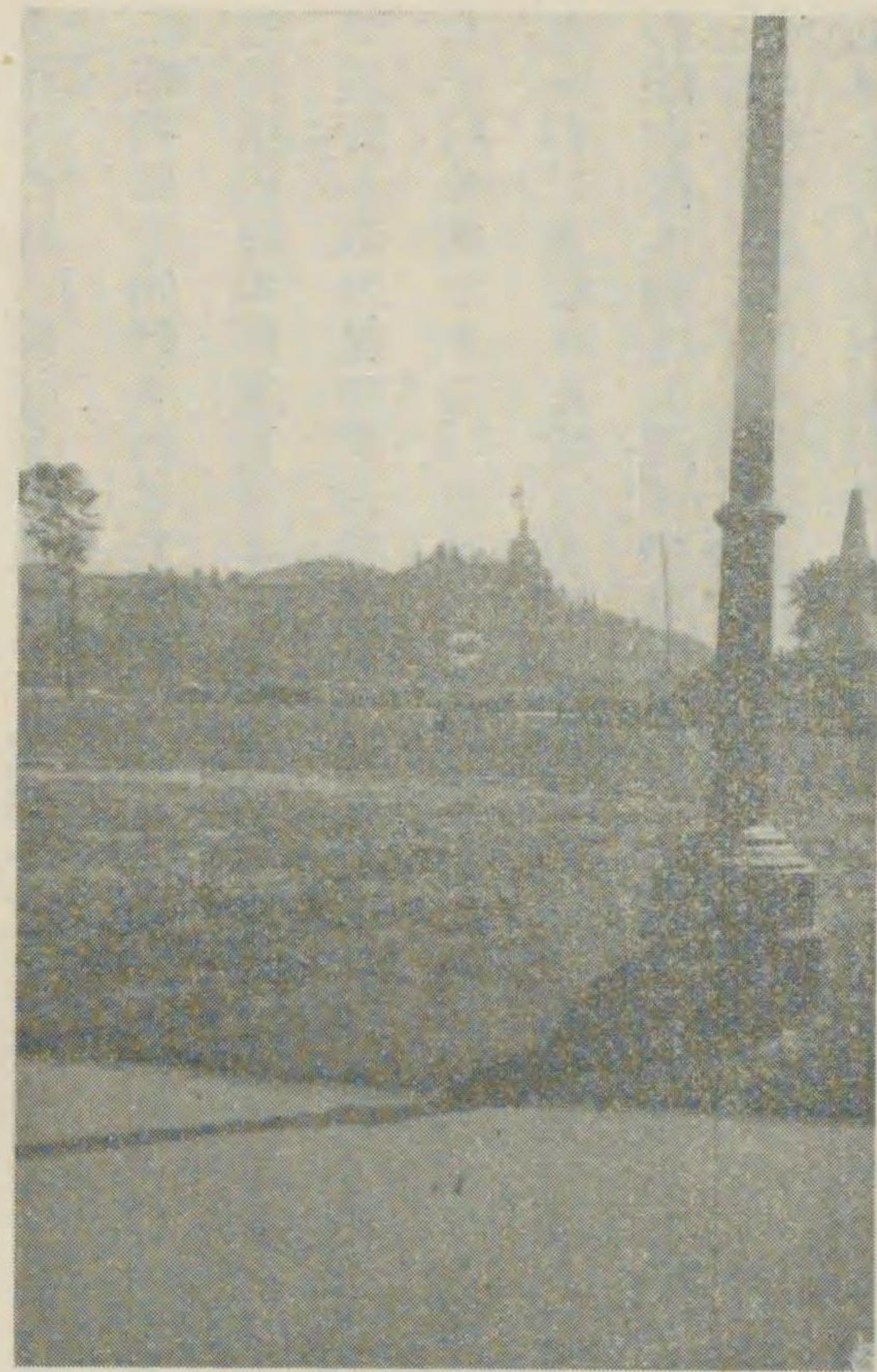
以後は専ら掃除にあてられて居る。衛生設備も完全にコンクリートは水道によつて水洗される。貨幣は銅貨で行はれるが、價格は大洋を基準とし、又大洋の變動で銅貨も増減する。又珍しい事は日々物價表が發表されるから不徳な商人は一掃される譯である。これは新聞紙上で發表されるのださうである。兩替屋のあるのも面白い。

市場は非常に暑かつた。同じく徒歩でパブリック、ガーデンに向ふ。道路はアスハルトで流石東洋第一の國際都市であり又共同租界内である故道路の清潔も良く保持されて居る。辻には租界支那巡警が居り棒で交通整理して居る。ターバンをまいた偉大な印度巡查は我等に對して、厚意を有して居る様である。まもなくガーデンブリッジを渡ると向つて左手に公園がある。橋の特長は別段ないが、どこことなく、がっちりして居る。反對側をアメリカンセーラーが二三人くんでゆく。日本の陸戦隊も通る。異國で我兵を見る事は如何に心強いが、初めて經驗した一である。

西華德路から黃浦灘に通ずる電車のレールにそつてゆく。ガーデン、ブリッジの下は黃浦江から蘇州に至る運河で、未だ鐵道のなき時には盛に利用せられたものである。河に面して左手の岸に各國領事館がある。

公園は、市民絶好の涼み場で隅田公園を想像して誤らないが唯一つ昨日の公園もさうだが、入園

料を取るのが違ふ。趣意は美観保持をするため、下級中国人の出入を防止して、小洋二拾錢で入園し得る。一々買ふ事は不便だが各公園に通用のパスを買へば良い。最初支那人は絶對的に入園させ



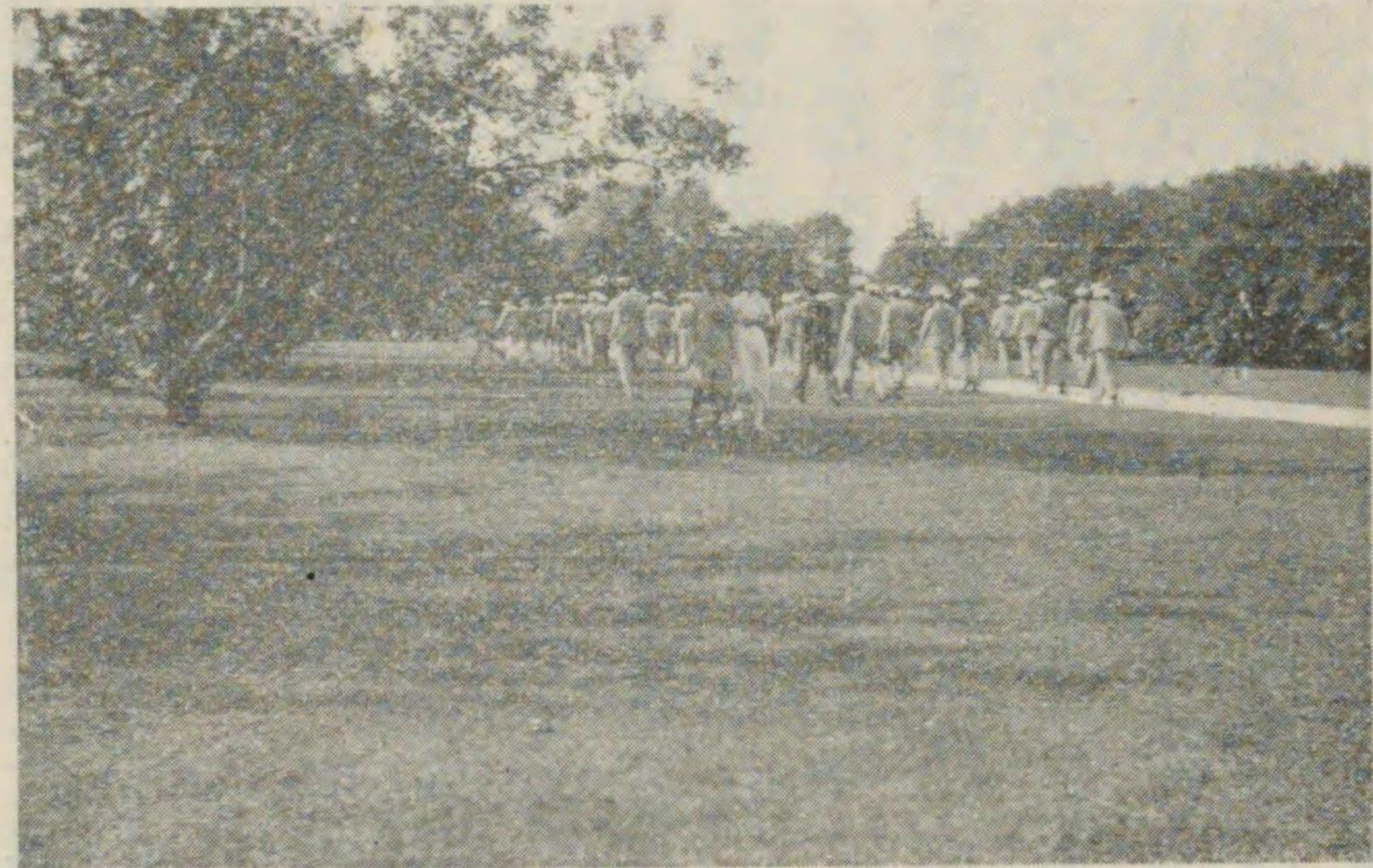
バドンヨリ日本領事館を望む 下平竹次郎

なかつたのを、現國民政府の懇請で、一時許したが、彼等は公衆道徳も何もなかつた故にこんな事になつた。僕は川べりで大氣を孕んだジャンクを撮つた。バンドの通りは偉大な建築物が整然と列んで居る。この邊、丸の内と同じ位だらう。英國旗が重々しく翻つて居る。横濱正金銀行上海支店に行く

廻轉式のドアの前にはインド人が見張つて居る。明日は日曜の爲忙がしく、支店長の講話は拜聴し得なかつた。室内は別天地と思はれる位涼しい。こゝで支那建の爲替相場が發表され、日本に通告される國際取引を扱ふ正金の使命は偉大なものに相違ない。行員は日本人五十人中国人二百人外

人十人であるとの事、一隅で馬蹄銀の現物を見せていた。馬蹄銀と言ふ名は日本人がつけたもので、決して馬蹄形ではない。なぜわざ／＼斯様な形にしたかと言ふと、携帯に不便にして盜難を豫防したためである。目方は約五百匁で價格は九百八十弗。一面に刻印がしてあり、鑄造の印や、純分検査の検印等もある。

屋上に行き市内を展望する。バンドに沿つて右手は整然並列せる建築物、左手黄浦江には、大小汽船各國軍艦、ジャンク等が雜然と浮んで居る。十字街を右に南京路に出る上海第一の通で大馬路とも言ふ。歐風のどつしりした商店會社等があつて、銀座通の少し大きなものである。電車もある。乗合自動車もある。問題の無軌道電車もある。この電車は條件として道路が完備せなければならぬ。現にアスファルトである。車形



ジエフスルー公園

は一見自動車形であるが、非常に大きい。運轉装置は電車と同じで、二條の電線からホールで電氣を取り軌道でない故に、はづれるから、ポールも長い。車はゴムの厚いタイヤで乗心地はよさそう。三井物産會社上海支店は二階建のどつしりした家屋で、すぐ二階にあがる。

支店長である福島氏は市の行政について御話あり、又我等の發展の道や覺悟を御教示になつた。又岩井氏の具體的の御話あり。徒歩で歸り、午後一時から上海の名家王一亭氏の御家庭訪問である。自動車でバンドを一走すると、間もなく城内に入る。奉天でも長春でもハルビンでも城内と言ふと支那街であつて、奉天などは城壁があつて、整然と區別してあるが、上海では城壁は壊されて無い。租界に比して凡てが非常な差である。支那の官憲もあてにはならないし、何だか不安である。門前に着いた。内と外と差が大きい。即ち何時内亂が起るかかわからぬ支那の事であるから邸の周圍は丈夫なコンクリートの塀である。すぐ應接室に通された。立派な椅子に、きたない服裝で腰を下すのはちと氣がひけた。一亭先生に御挨拶をする。品のよい偉大な身體の持主である。慇懃に接待して戴く。庭内を一々御説明下さる。狭いが、よく庭園として利用されて居る。池あり、池に臨んで一亭あり。故に一亭と號すと御話になつた。岩石をつんだ小高い所に御堂があつた。先生は、熱心な佛教信者で、朝に夕に禮拜せられるとの御事である。又先生が渡日された時の種々な御會合の御寫



自邸に於ける王一亭先生

水原茂三

眞もあつた。一堂あり、周圍みな書畫を以て滿されて居る。如何に藝術を味ひつゝあるかが思はれた。再び應接間で茶菓を戴いた。

先生は書家であると共に畫人であり、又有力な資本家だとの事である。その骨董品は準國寶の價值があるとの事。初て支那の上流社會を見て感心した。三育精神といふ御揮毫を下さつた。

歸りには狭い城内へ自動車を乗り入れて、下りて城隍廟へ行く。淺草を小さくし、仲見世を狭くして、もつと大衆を混雜させ、異臭、原色、騒音を交響させたやうな處で、とてもかなはぬ。湖心亭茶館なども大した混雜である。珍らしい物がギツシリならんでゐる。商店街を通り抜け一旦歸宿、自由外出なので南京路に来て、永安公司を見る。先施公司、新々公司などもあり皆

百貨店で上階は旅館になつて居るとの事である。商品には、日本品も多い。明に Made in Japan とあつても那一國のと聞くと德國貨的とか英國貨とか言ふ。エレベーターも兩替所もある。金を拂ふと必らず偽物か本物かしらべる。八時過れば南京路の大商店は閉鎖され、ひっそりとして寂しい。夜十一時上海北站發、南京に向ふ。二等車だが内地の三等よりもつと悪い。疲れてぐつすり眠る

第二十四日

金 枝 新 次

六月十四日 (日曜日) 雨

ホノボノと、江南の朝があける。あきやらぬ眼は、又いつか淡い夢路をたどる。ふらみふらずみの雨雫にふと目をさまされてやゝ落つきすぎた緑の景色を窓の外にうつとりと見て居た。楊柳、水牛、牧童、車、運河、舟、等々……實に静かなノンビリした景である。昨夜から座り續けて臀がいたい。何に促されるともなく、服装を整へ終つた頃煙雨の都南京に到着した。

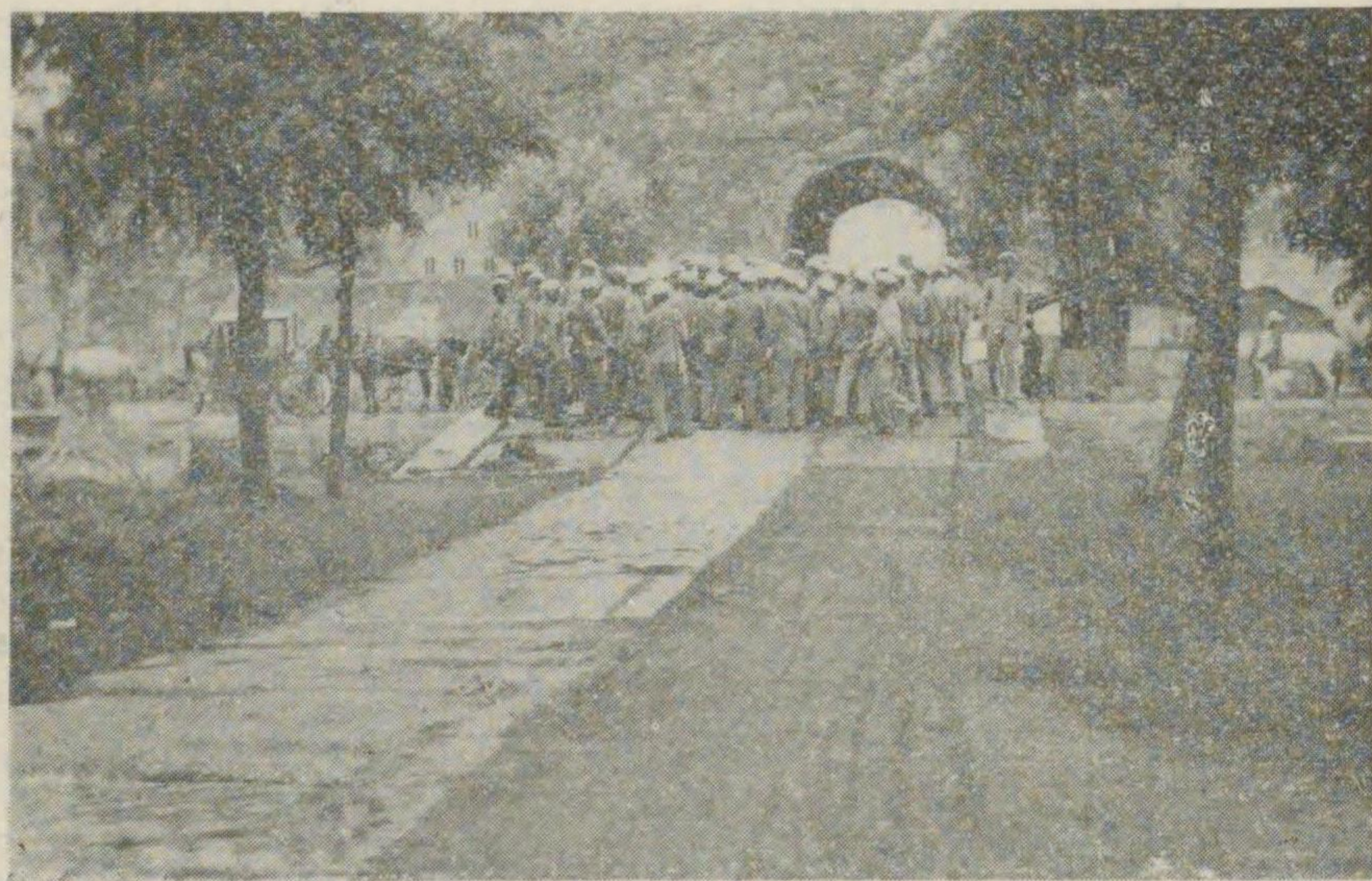
ホームには、ユーモラスな中華兵が漠然と整列してゐる。都らしいモダンな、洋装の支那婦人がそれと一しよに目にうつつた。驛前から馬車で、朝食をしたゝめる爲に寶來館へ來た。

再び馬車で城内へ入ると、音もせぬ雨に道端の木や草が重々しげに緑を落してゐた。鷄鳴寺に入

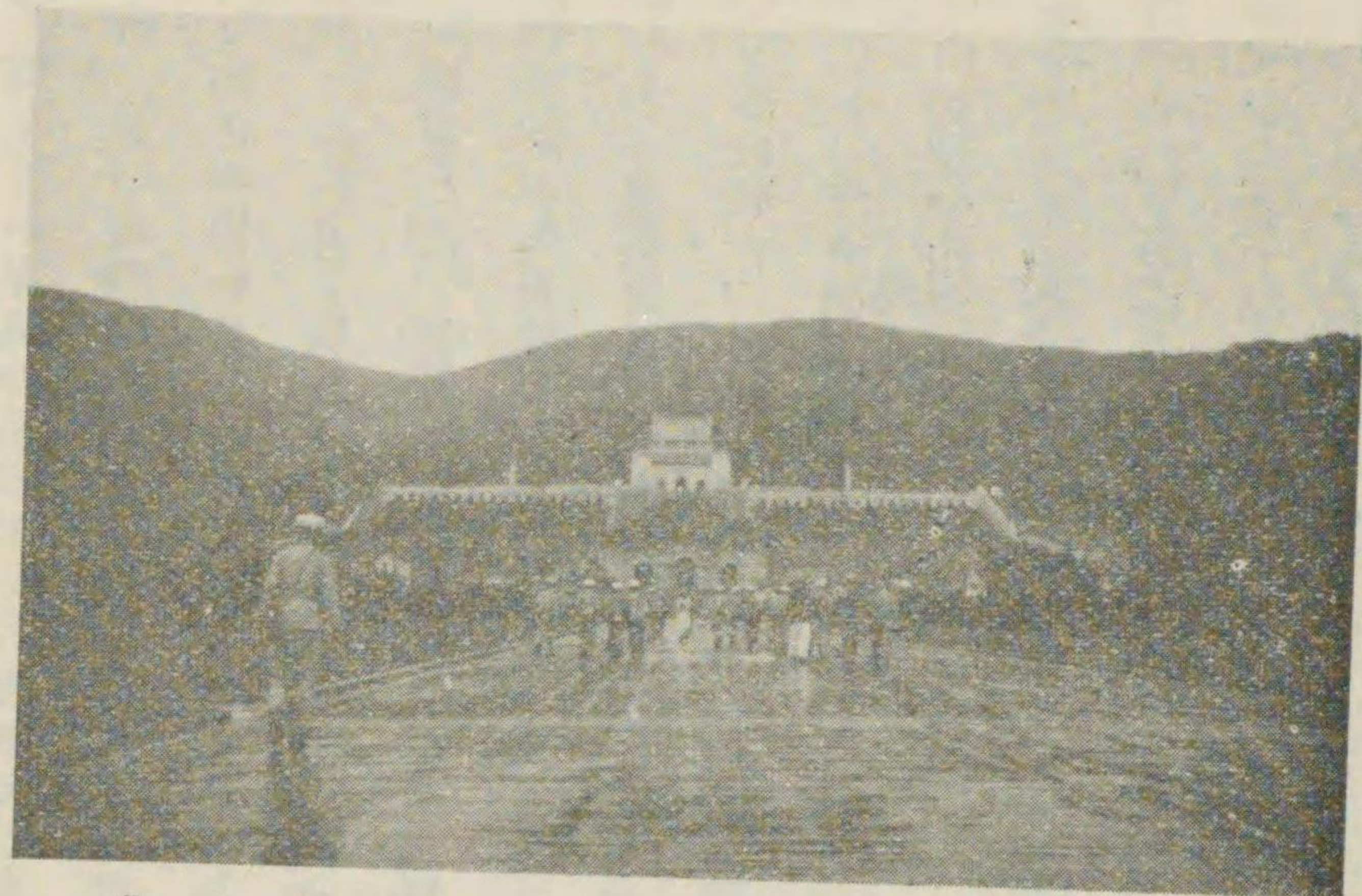
る。美しい赤色の壁が雨にうたれて、緑の草の上にある。裏の城壁に立つて、煙雨の下に、横たはる町を見ながら赤黒い日焼けの、やゝ、目のギョロとした、日本のルンペン風の男とでも云ふ様な案内人の説明。

『あそこに、見えますのが數日前まで國民大會を開いて居た中央大學です。左手に、たくさん、ならんでゐる赤い屋根は蔣介石さんの軍隊の居る所です。今通つて來たのが、鷄鳴寺と云ふお寺で明の洪武皇帝の建てたもので南朝四百八十寺の一つとなつてゐます。あの山が紫金山です。ムラサキと云ふ字に金カネと云ふ字を書いた紫金山です。』と手のひらに指先をすべらしながら話しつゞける。辛うじて意味のとれる、支那ナマリの言葉。

と反對の側にはすぐ足下に玄武湖が廣がつてゐる。



明の故宮



宮崎大典

孫中山陵

再び馬車を連ねて、雨の城内の畠の中を行く。だゞつびろい草の生えた道をがたぐたとゆられる馬車の中から、道邊の水だまりに波紋をえがいてるのを見ながら……

うつとりとして、懐古の情に、心をはせてゐる時、水藻におほはれたやはりカイコ趣味の小川のほとりにそつと止つた。あたりの静かな調和の中に、皆の足音もとけこんでたゞブシツ氣な案内人の聲が、調子つばづれをしてゐる。

之が明の故宮だと、話してゐた。石だゞみを歩いて古物保存所に入つた。中には碑文や、陶器の類が、ならべられてあつた。階上には、精巧を極めた佛像が並んで、壁には沈希遠陳遠等の筆と思はれる太祖や、他の帝王の肖像畫が、かけられてあつた。すぐ中山陵に

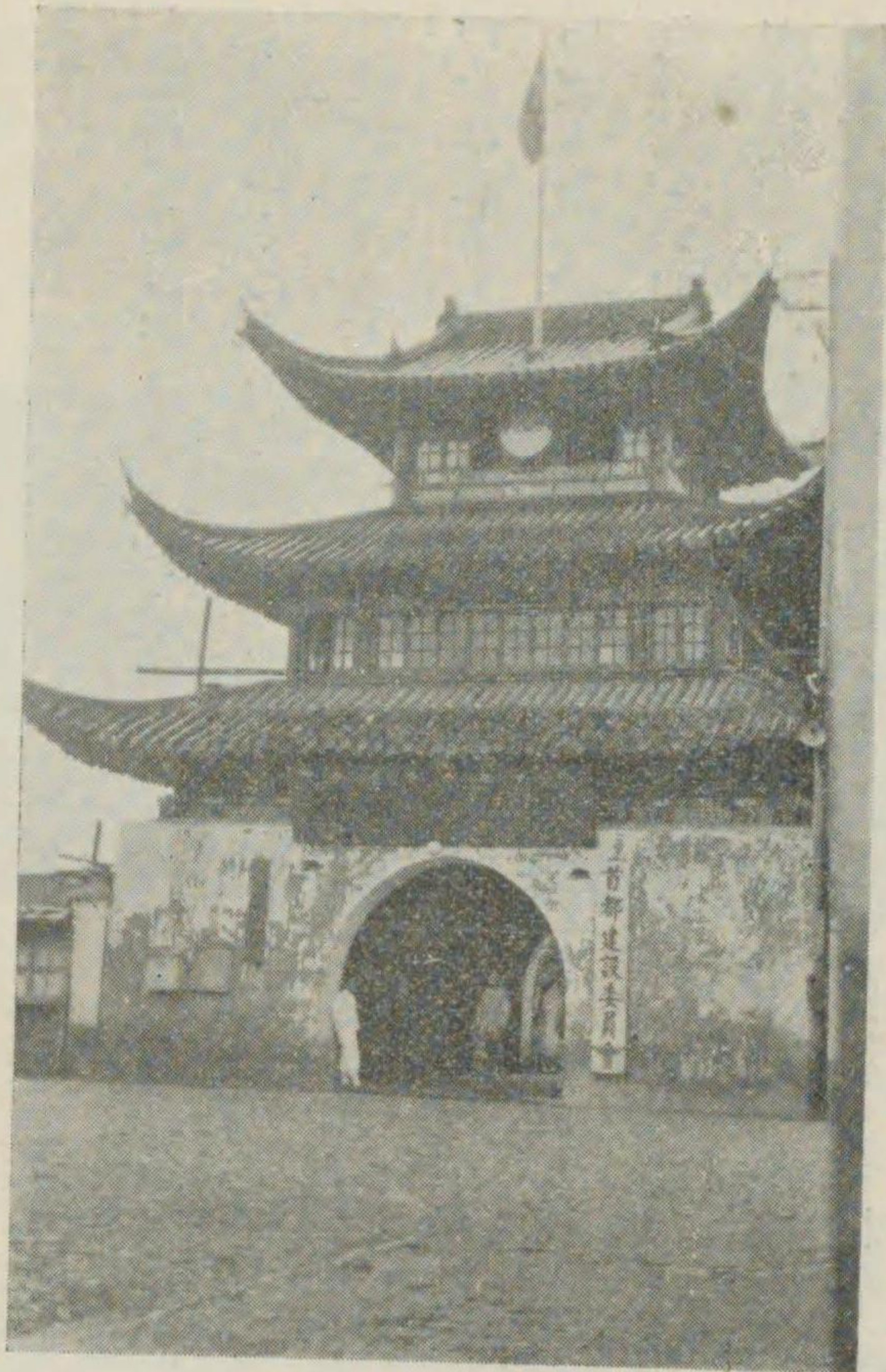
向つたが、雨はやゝ繁く馬車の内までしづくがたれるまだ出来もやらぬ壯大な陵の規模が私達の目を驚かせた。その白色燦然威風嚴然たる、まことに一世の英傑をまつるにふさはしい大陵墳。雨は益々ふりしきり夏とは思はれぬ寒さに、唇の色をかへて馬車にゆられた。途中いくつもの石像を見ながら、明の孝陵につく。可成堂々たる石橋をわたると鐘山の陵に入る。孫中山のそれにくらべてあまりに年老いた、貧しげな感がないでもない。長髪賊の亂に殿樓を焼かれて、所々に黄色い瓦と、門の礎とがさびしげに名残をとめてゐる。雨は又、しきりとふり出して雫が頬をつたはる。一樓を過ぎて（此處では後で辨當を食べたのだが）又一門をくぐると最後に、無暗に高い石の壁が立つてゐる。その中頃に壁に比して、小さなトンネルが、爪先あが



孝陵

りについてゐる。全體の色調が薄黒い陰惨な鬼氣とでも云ふ様なものにつままれて。……
さう云へば處々の石の隙間に名の知らぬ花が咲いてゐる。トンネルをぬけて陵上に立つと、たゞ

雨のために襟かきあはせておりて
來た。



南 一時を大分まはつた頃、支那町
京 の中を通つて、有名な秦准に出た
市 馬車の垂をおし分けて見れば、小
政 さな溝川がつゞいて、今は昔の繁
府 榮をしのぶよすがもない中に、畫
舫が浮いてゐる。傘さした支那人

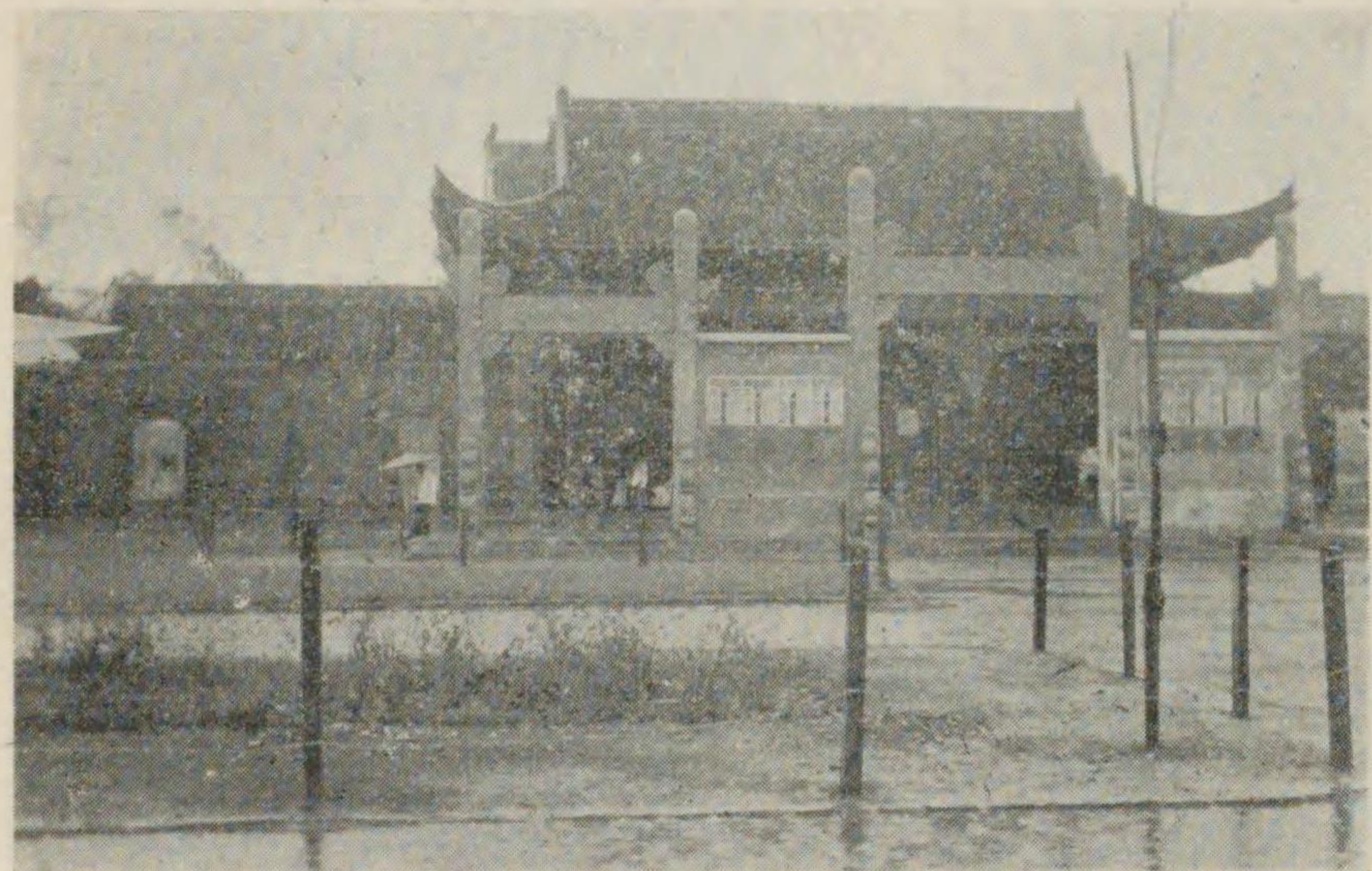
が行き交うた。『煙籠寒水月籠海』

と云ふ風景もどこにかくれてか。昔の試験場が、今は市政府となつてゐた。
片側に孔子の廟が赤々と、齒のうきたつ様な色でぬられてゐた。又馬車がゴト／＼と動きだすと、
たゞ寒さが身にしみる。道には水が三四寸たまつてゐた。

寶來館で、つかれを休めた。ぬるもの、服をかはか
すもの、又雑然とにぎやかである。窓から眺めると向
ひにマンジウ屋が一軒、誰か白い湯氣を立てたのを買
つてくると。

『乃公にも買つて来てくれい』ドンペイが廿數枚ほ
ろり出される。

かくして南京の夜も支那らしくおとづれた。九時、
馬車で驛に向つたが、雨はいつか止んで燈火が鋪道に
輝いた。赤や、青のネオンサインが黒々とした空を背
景に浮び出されてゐた。しばらく町の中を歩いて、蘇
州に向つた。



孔 子 廟

千里鶯啼綠映紅、
南朝四百八十寺、

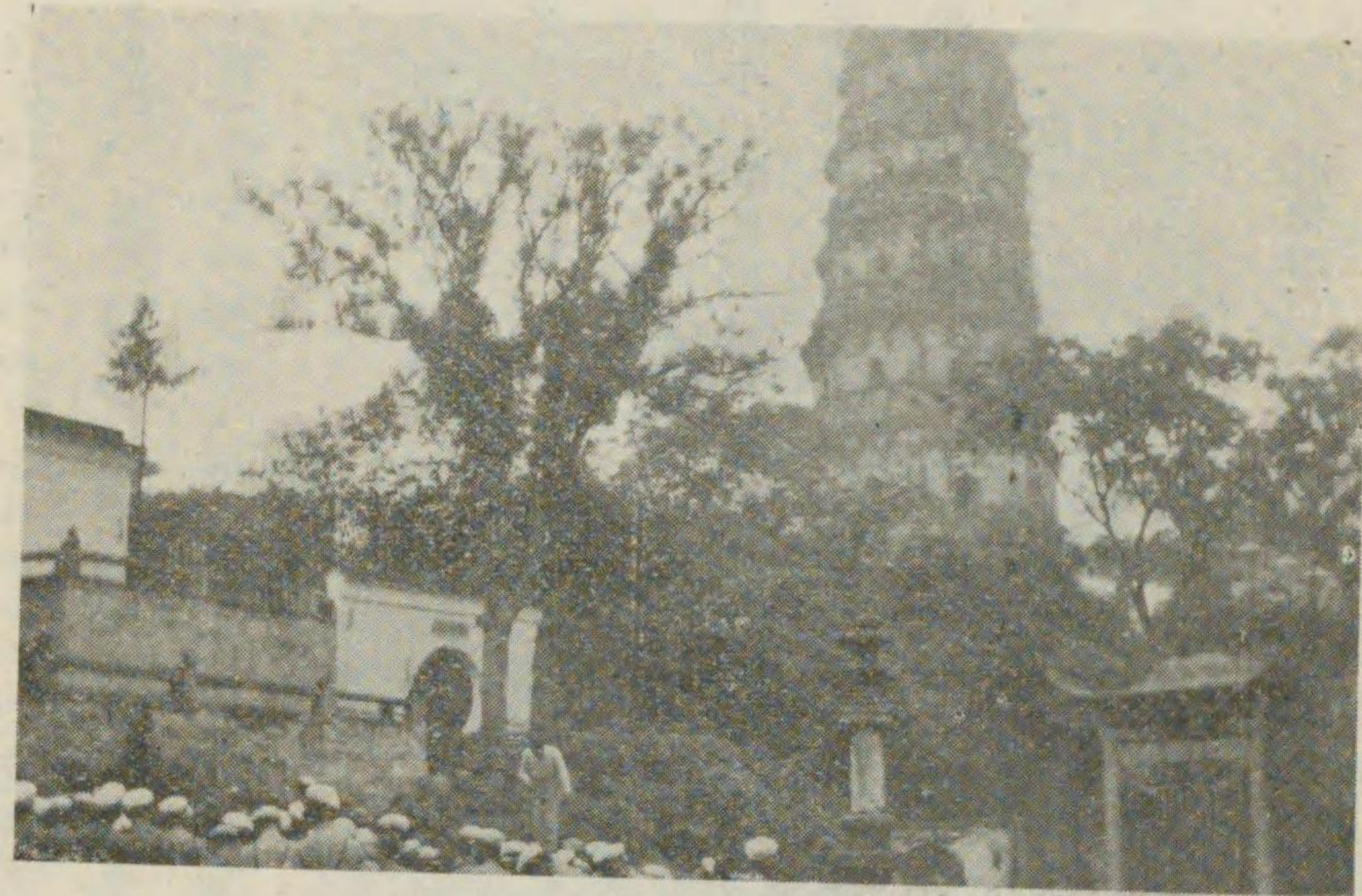
水村山郭酒旗風、
多少樓臺煙雨中。

第二十五日

大野重藏

六月拾五日（月曜日）曇

朝霞に霞む虎邱
 曉天の霧たちこむる耕田の間を楊柳の蔭に眠る水牛に想をよせつ四時五十分水の都蘇州に着く。船を傭つて運河を行く。朝の空気が冷かに心地よい。領事館の匹田、古川兩氏の御出迎を受け御案内を御願ひする。緑の耕田の間を行く事約一時間で虎邱に到る。船より上り石徑を登つて千人座に到る。朝霧につままれた古塔天に高く、ちくと囀り飛ぶ小鳥。秦の始皇帝此地を掘りて寶物を得んとせし時一匹の猛虎あらはれさまたげし所より虎邱の名があるとか。苔蒼き岩に圍れて水草におほはれた水は氣味悪い程に碧い。劍池と言ふ。二

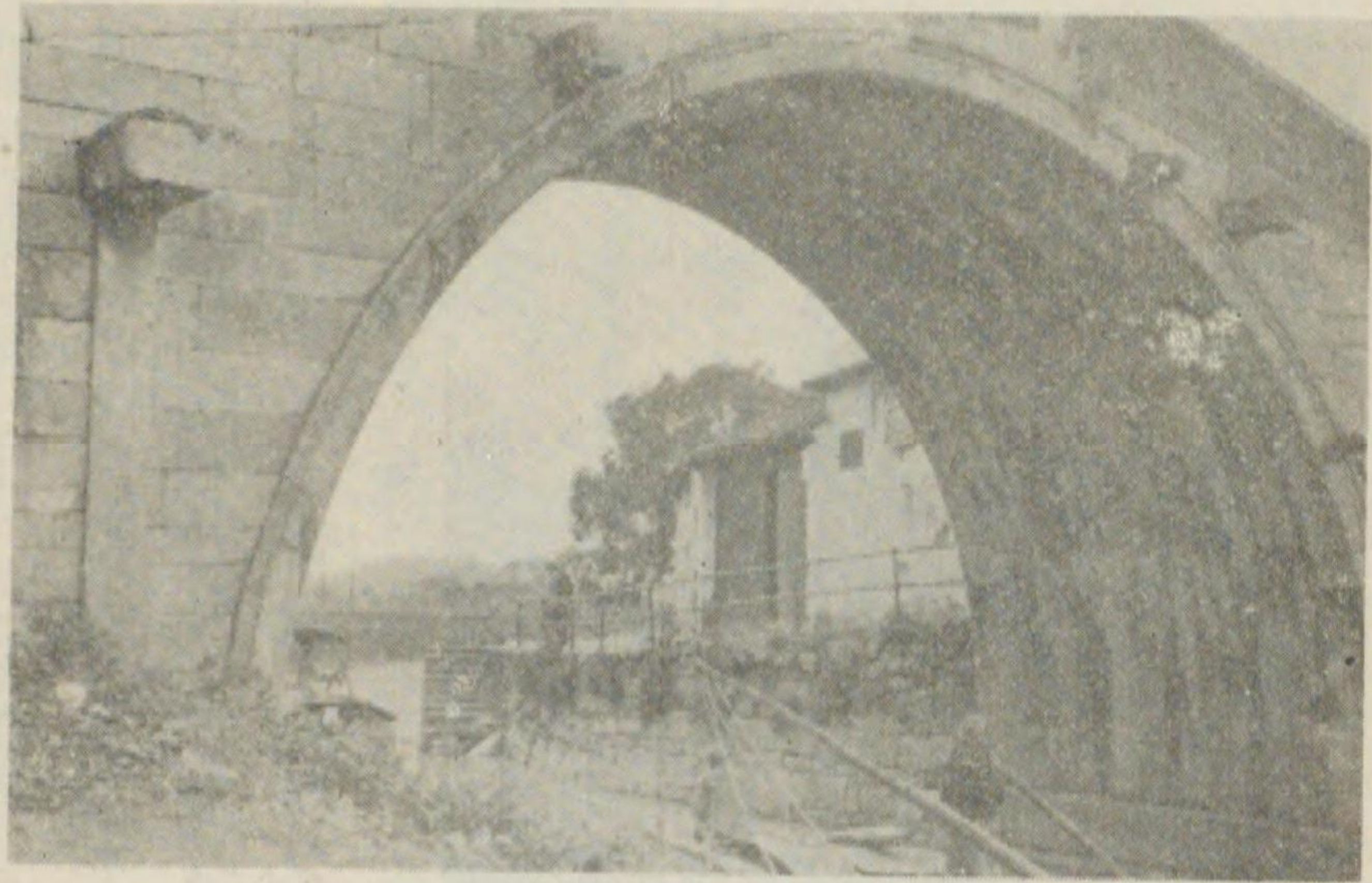


朝霞に霞む虎邱

千年の昔、吳の闔閭王を葬つた時、金銀財寶を共に埋めたが、之を知れる人夫の首を刎ねその劍を洗ひたる所であるといふ。當所で朝食をしたため虎邱禪寺に到る。虎邱の荒塔は仁壽年中の創建にかゝり今は塔身も傾き、頽かゝつた裂目には何鳥のもたらしたか夏草が繁く生えかゝつて居る。再び船にのりて細雨そぼふる運河を寒山寺へ向ふ。楓橋のあまり殺風景なのに一同期待を裏切られ啞然となる。江楓漁火對愁眠の景趣もいづこに。臭い、特殊な刺激と景況とに目を張りながら支那街を通つた。しばしば兵火にあひてより改築せられた寒山寺はあまりに私達の豫想を裏切つた。唯せめて文徵明の石碑がかけ壞れた姿寂しく昔を偲ばせた夜半鐘も我が伊藤公の寄せたものとか。こゝで石摺を買ひ込む。次に又舟で留園に行く。江南の一名園。池



虎邱に集ふ扇賣の少女

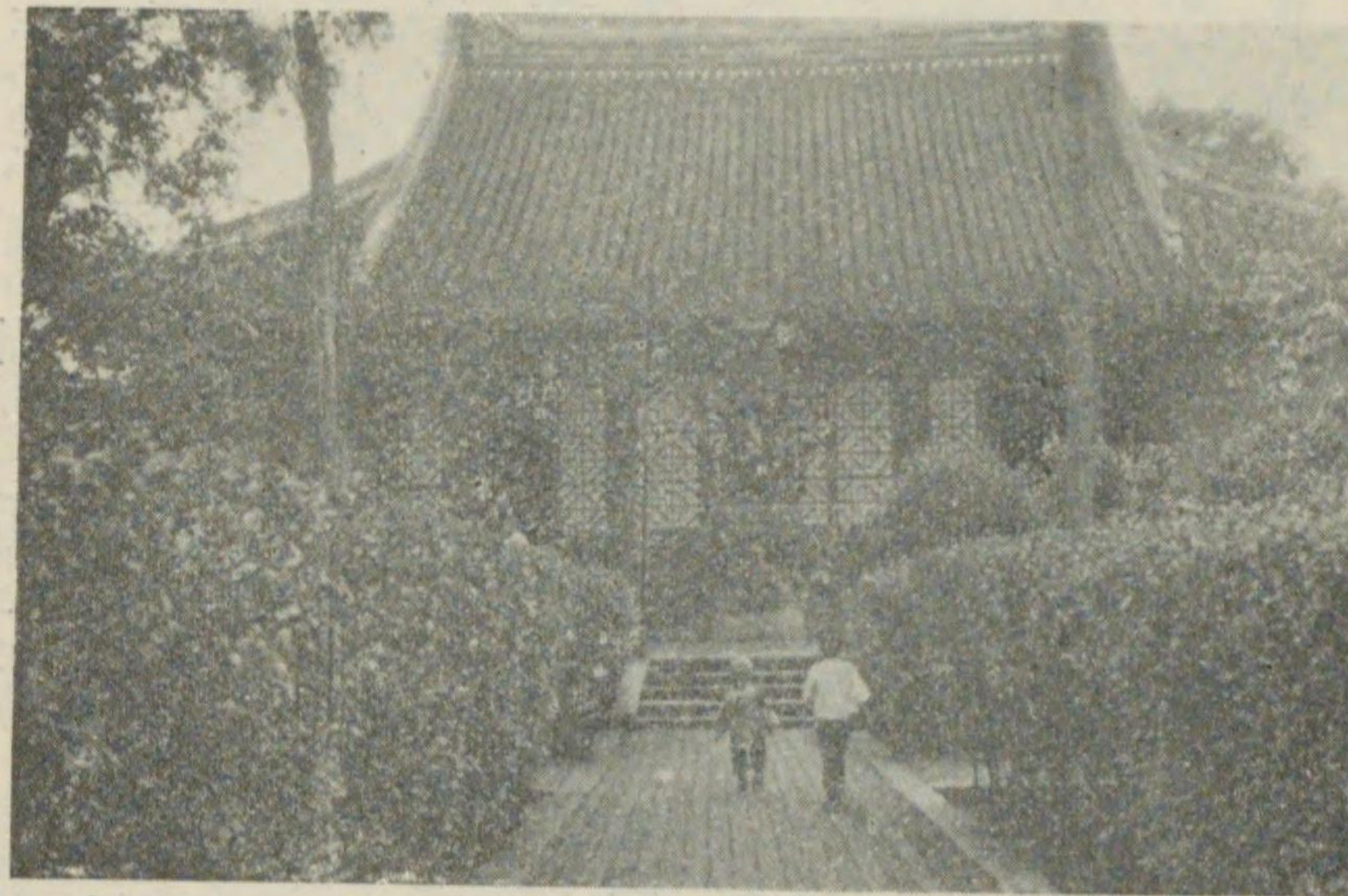


清木鐘

の整理をして就寝する。愈々明日は故國むかふ船出。一ヶ月に亘るこの旅行の足跡を顧りみつゝ眠に入る。

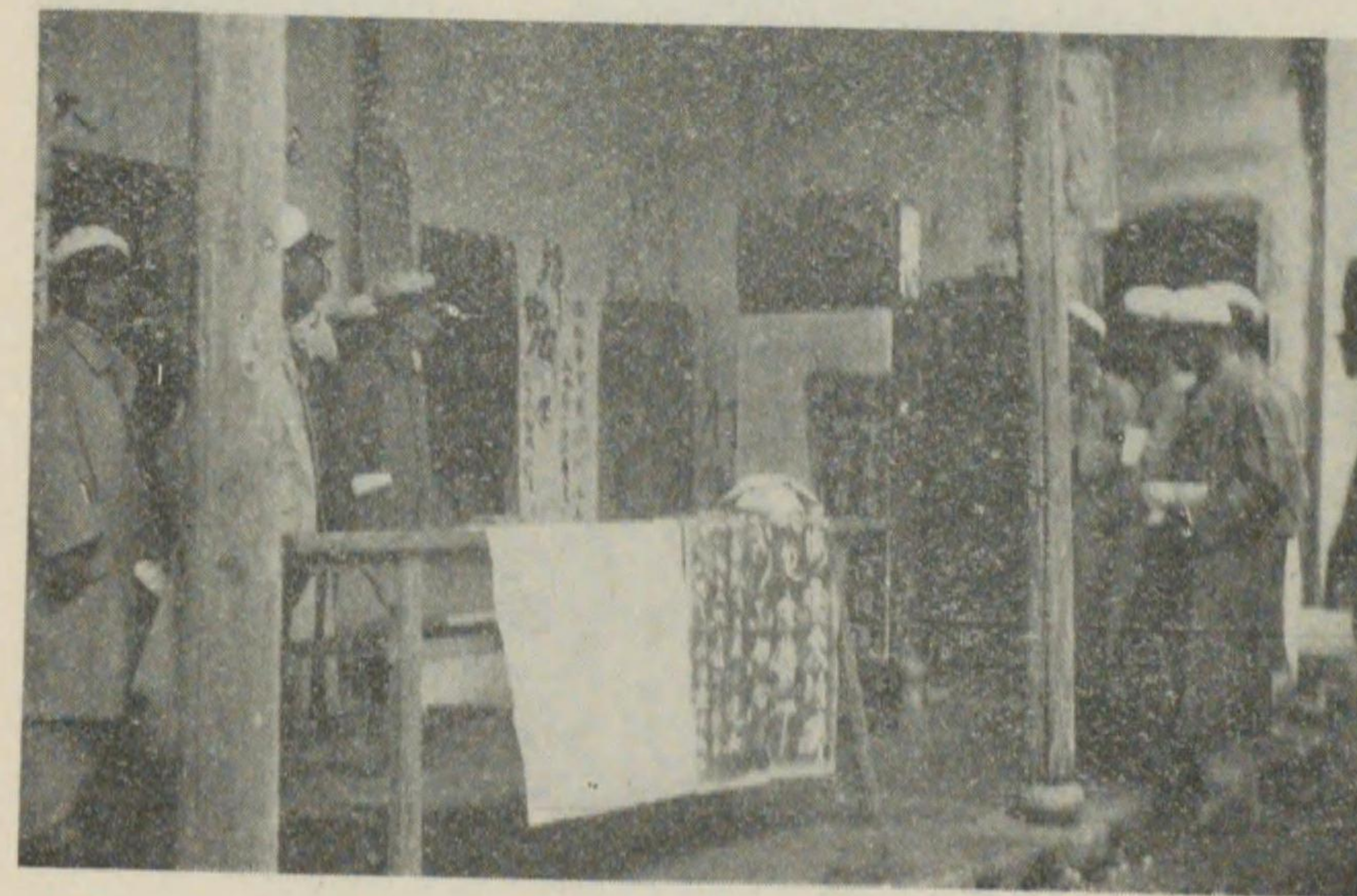
泊夜橋楓

あり。橋あり。曲廊あり。亭あり。樹々の線深くして數奇をこらした庭園である。辭して又舟で驛まで歸り北寺の塔へ行く。城門をくゞつて城内に入る。前方に高く天に摩する八稜十三層の塔。北寺の塔だ。金十仙を拂つて塔上へのぼれば附近の平野を一眸の下に收め無數の湖沼が鏡をならべた如く光つて見える。大陸の涯なき所、只靄鬱たる煙霞と化し俗人も亦自ら詩中の人とならう。虎邱、太湖なども遙かに見える。驛で晝食を取る。午後二時十五分發して上海にむかふ。上海四時着。海外に於ての最後の一日、各自土産の品などの買蒐めに忙しく十時迄の外出を許された。トランク



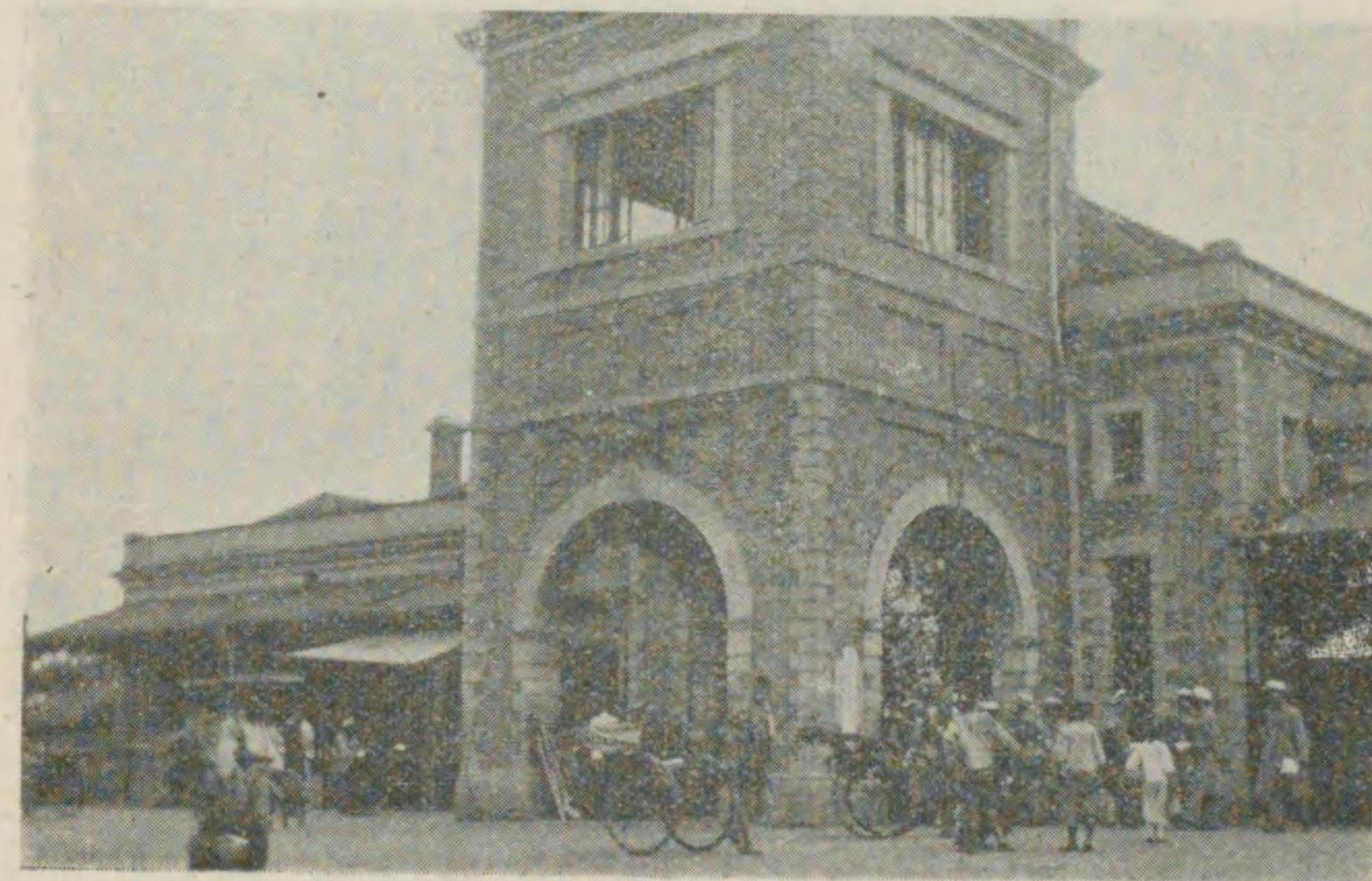
典大崎宮

月落烏啼霜滿天
江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺
夜半鐘聲到客船



昭和五年度の旅行團は、こゝ(蘇州驛)へ下りる筈であつたが、福岡商業の生徒が敗兵の暴虐を受けた時なので止めたので、我々が始めてこゝを見たのである。

北寺の塔

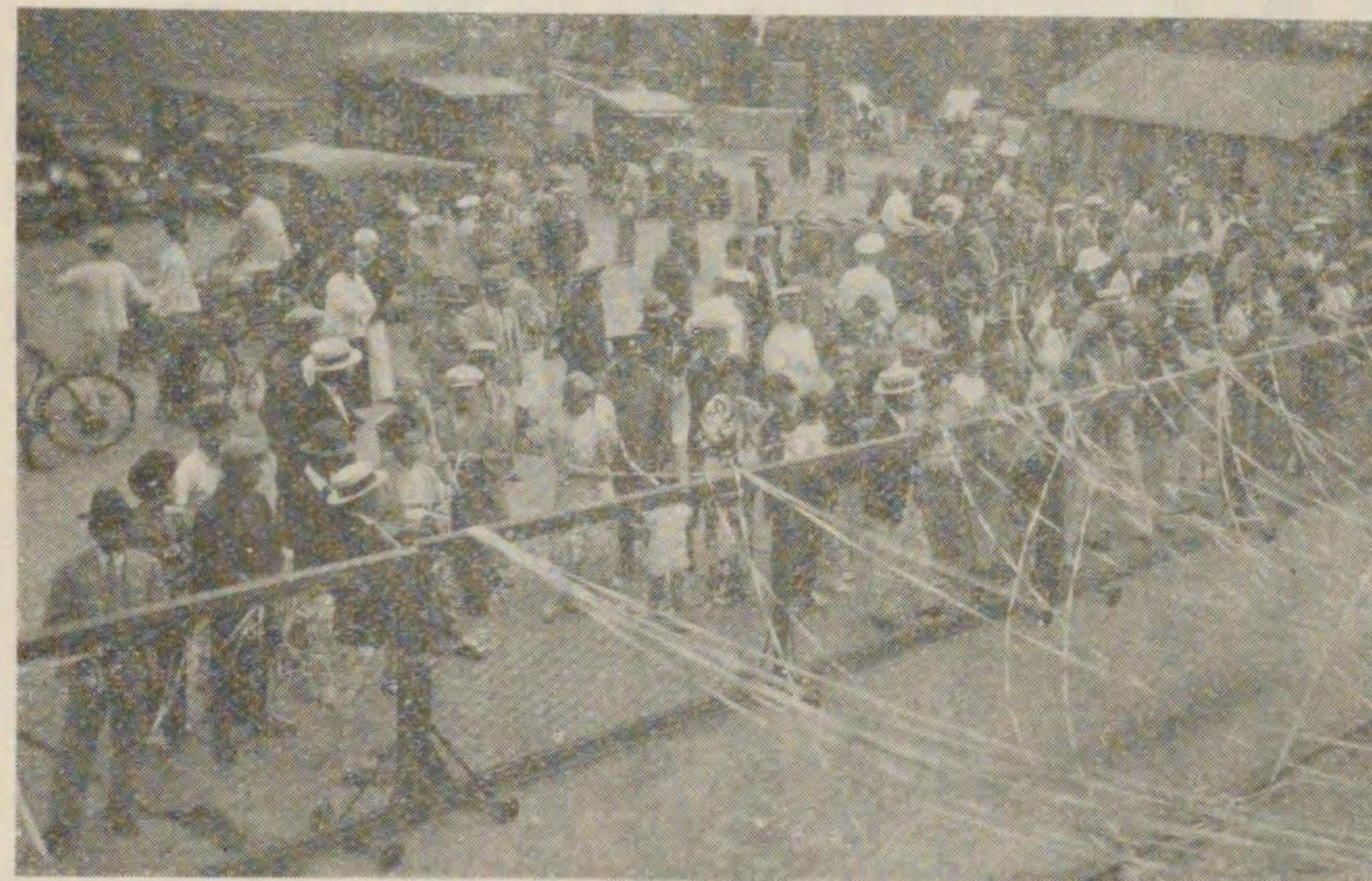


第二十六日

稻垣 賛郎

六月拾六日 (火曜日) 晴

愈々支那とお別れの日だ。七時N・Y・Kの波止場へ。名残り惜しい氣もして船に乗込む。見送人で雑踏する。五色のテープがとぶ。私達をのせた上海丸は幾多の人の心からなる見送りの聲に送られて岸壁を離れた。サヨナラ、上海。サヨナラ支那。船は次第に速力を増して行く。風風ぎの穏やかな海。皆非常な元氣だ。税關の検査がある。寫眞機をもつて景色を寫してゐる者、輪投げに興ずる者、手欄にもたれて想ひを故國に廻らす者、思ひ思ひだ。太陽も水平線の彼方に落ちて夜のとびらが海上をとぎす頃一入懐郷の思には



上海埠頭の別訣

しる。スクリューの響が徒らに我々の夢を亂す。

第廿七日

關原貞吉

六月十七日（水曜日）晴

朗らかな朝が訪れて来た。朝食を知らせる銅羅が狭い三等船室にガタン／＼反響する。食事を快談の中に過し蒸し暑いキャビンを逃れて、デッキに出ると、大洋の面をかすめて冷い盪風がさつと頬を撫で、行く。白日の下を我上海丸は水平線の彼方未だその片影さへも現はさない我等の郷土日本へ、日本へと波をけつて進んで行く。九時を廻りかけた頃、見えた／＼、緑にかすむ五島列島が、もう日本だ。さあ今日は愈々日本の土地を踏む事が出来のだと思ふと居ても立つても居られない様な気がする。

踊り立つ私等の心をのせて正午、船は波靜かな長崎に着く。簡単な税關のポケット検査を受け構外に出る。さあもう日本の領土内だ。もう日本語が通じるぞといふ様な當然すぎる程あたりまへの言葉が皆の口から出る。何處でも日本語で大丈夫だと言ふ言葉、それは冗談にもせよ我々の眞情の發露なのだ。車夫の案内で詩的雰圍氣の漂ふ長崎市を見る。大徳寺に赴く。此處は天満宮と楠子が

祭つてあり、大徳園といふ純日本式庭園であり、此處から長崎港内を一眸の中に收める。長崎一と稱する楠の老木がある。左に下つて長崎目貫の濱町通を過ぎ、聖壽山崇福寺に赴く禪寺で柱、瓦、壁等建物の隅々に渡つて古めかしい、寺内に大釜がある。今より二百餘年前大飢饉の時この寺の二代目の住持が一山の僧を率いて集めた布施米をこの釜で粥にして施したと言ふ釜である。再び濱町通を過ぎ諏訪神社に參拜。諏訪山公園は神社に隣接して居る。銀杏の大木の蔭なすあたりに汗をふけば小鳥の可愛らしい聲が風に流れる。この山からは又市中遠くは灣内を手に取るやうに見ることが出来る。山を下つて出島の天主堂を見にゆく。靜かな詩の町長崎の一角に建つ天主堂、白亞の壁と輝り映ゆる金色の十字架、何となく神々しい感に打たれる。ここはカトリック派の禮拜堂で日本最古のもので往時は頗る勢力もあつたが今は衰微してゐる。堂前のマリアの像は當時の信徒が幕府の手厳しい掟をくゞつて觀音菩薩に似せて作つて信仰して居たものである。

五時出航。夜は船内に映畫あり楽しく打興す。

ふるさとの言葉安けくベッコウの

細工ものなどひやかしてみろ。

第廿八日

牧野正一

六月十八日（木曜日） 晴

瀬戸内海——朝霧仄々と明け行く中より現はれる緑の島々。眞帆片帆の和かさ。——初めて故郷へ歸つた様な気がする。小波一つたゝぬ海を鷗三つ四つ飛んで朝の陽の光も長閑かだ。總べてが、荒漠たる満州、あくどいまでに塗り立てた支那の商店街ばかりを目にして來た私達にとつては確かに胸の躍る程嬉しかった。かよふ千鳥の淡路島を過ぎ風の海は船脚早く、午後二時四十分神戸港の岸壁に着いた。税關所をすぎ市電で湊川神社に参拝した。有名な光圀卿の嗚呼忠臣楠氏之墓の石碑は境内の入口右手にある。社前で解散し皆は思ひ／＼の場所を歩く。

宵闇迫る頃三ノ宮を發し、京都に着いた頃は青い夏の夜空に銀星が唳いて居た。三條橋畔の伏見屋旅館に旅鞋をぬぐ。さつぱりと湯に汗を流し京極通りを散策する。

最後の夜の點呼も終つて十一時床に就く。思へば既に二十八日長い旅であつた。明後日は東京だ父母も待つて居られる。先生にもお會ひ出来る。友達が待つて居る。と思ふと皆の胸は喜びで一杯だつた。

第廿九日

小村秀雄

六月拾九日（金曜日） 晴

午前八時宿を出る。三條橋畔より京阪電車で伏見へ。掃き清められた参道の玉石を踏んで御影石の石段をのぼり明治大帝の御陵の前に跪拜する。神嚴の氣は自ら人の襟を正さしめる。朝鮮、満州上海、南京と大陸を歩んで、皇國の力をありがたく身にしめて、今こゝに仰ぐ桃山の御陵——、東陵参拜の後乃木神社に詣でる。水師營も追懷せられてなつかしい。こゝで解散。

私達は比叡山にむかつた。車を八瀬にすて、西塔橋より四明嶽までケーブルカーに託す。車窓より展開する風光、溪谷、奇巖、峭壁を俯瞰老檜古杉鬱蒼たる間を縫うて四望指呼の内に何時しか頂に達する。これより道を高祖谷にとり空中ケーブルカーに乗る。延曆寺驛に下る。巨檜巨杉天を摩するあたり堂塔伽藍の點在して森嚴の氣が漂ふ。根本中堂に参詣し叡山中堂驛よりケーブルののる車窓に展開する風光、琵琶湖の水光、四方に流下する翠巒を賞しつゝ、阪本驛へ隣り間につく。阪本港から汽船で涼風わたる湖上を三井寺にむかふ。今下つて來た叡山が秀麗な山容を連ねて居る。

三井寺に行く。長等の山の中腹の壯大な伽藍、西國十四番の靈場靜かな境内に山鶯の聲がする。

電車で石山寺に到る。西國十三番の札所、秋の月の近江八景と源語を草した紫式部で名高い。汽船で濱大津迄行き、三條大橋行の電車に乗り歸途につく。夕食を濟せて京都驛にむかふ。驛にはわざわざ奈良から我々一行を送る爲廣瀬先生が見えて下さつた。一同御挨拶をして午後九時四十五分東京に向け出發した。

廣瀬先生からおくられた奈良名物のわらび餅に舌鼓をうち明日の東京入の光景を思ひうかべて見たりした。愈々楽しい夜は次第に更けて夢路なつかしくひたすら東京へ向ふ。

第三十日

川上巖

六月二十日（土曜日）曇天

夜は明けた。眠られぬ思が疲労に反抗してウツラ／＼とし沼津を過ぎた頃、漸く目が覺めてた。豊橋から三宅君が歓迎に乗込んだ。

國府津を過ぎてからは只東京驛頭のみが念頭にある。

樂しかつた旅程が終つてなつかしい父母の下に。

歡喜と追懐とが入組んだ妙な心持になる。

汽車は容赦なく進行する。やがて東京驛へ引入れるのだ。朝の田園。なつかしい故國の朝景色。富士は曇つてゐた。横濱へ着く頃には歸宅萬端の用意が整つてゐた。

窓々には急仕立の班別を示した紙が張られた。あゝ東京だ！、盛大な歓迎。歡呼の中をホームへ突進する。

校長先生を始め慈愛あふるゝ先生御一同、夥しい父兄親族。

情に満ちた、友人數百名。ホームは動きが取れぬ。漸く降りた。

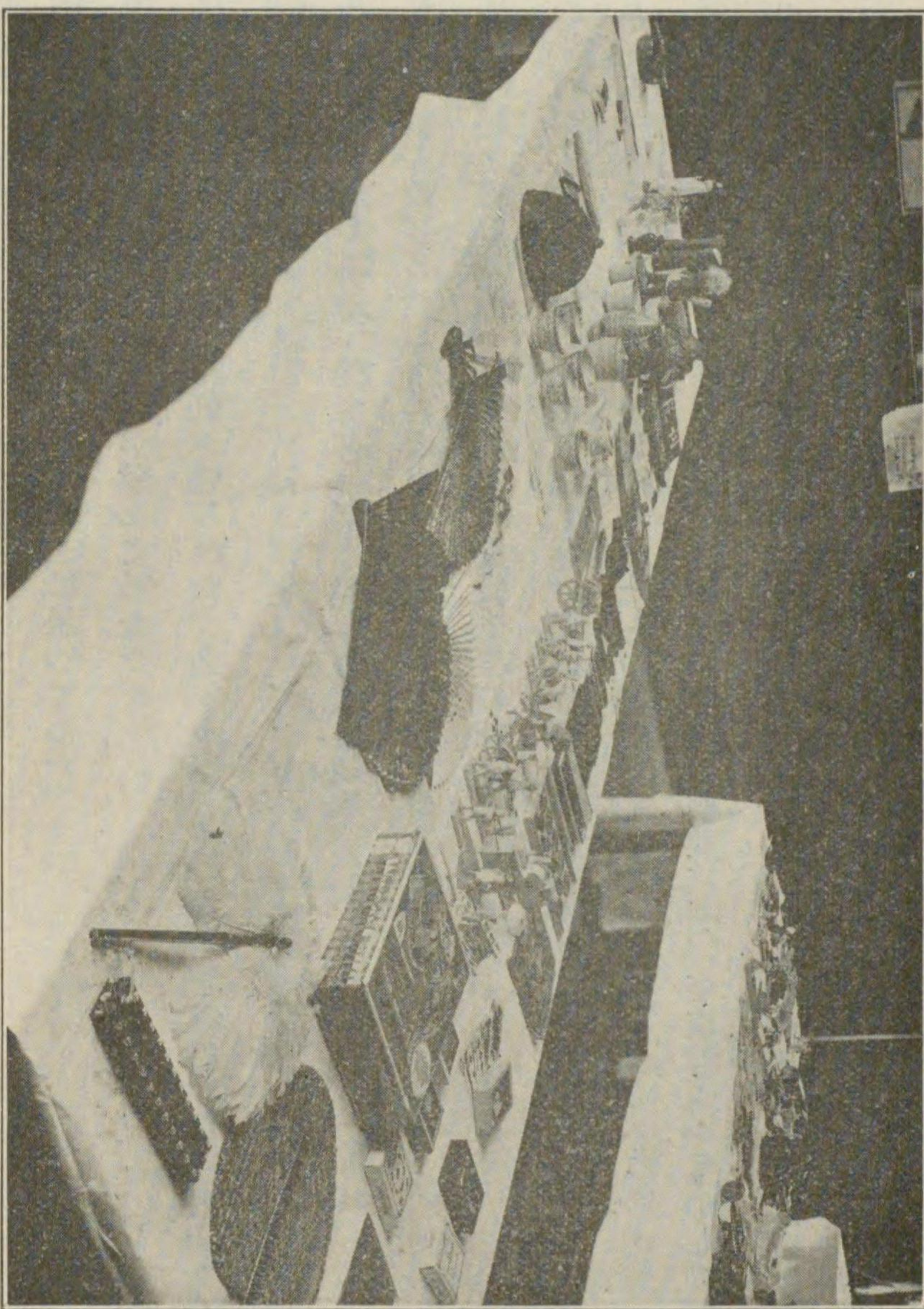
廣場に於ての紀念撮影の後、なつかしい校長先生の祝辭。

「今回の旅行が大成功に終つたのは嬉しい。是は一重に引率諸先生の熱誠なる苦心と生徒の眞面目な服従と各方面の多大なる後援の賜である」との御趣旨であつた。

團長よりの謝辭答辭があり、終りに後援會總代の發聲で萬歳三唱、東京驛頭を揺がして此の意義ある大旅行のプログラムは光榮、歡喜、感激の裡に了つた。

「萬歳」のどよめくホーム人波の

ゆらぐホームに、こゝろ湧きたつ。



船中から

大陸に近づく (第二編)

大陸に一步を踏みて

鏑木清



(右)てに海内戸瀬

高い赤土の秃山がすぐそばに聳え立つてゐる。
 そして紫色に霞んだ山々につままれた港の内は静かな朝風である。
 そよ／＼と海面を渡る五月の潮風は息苦しい船室から甲板にのがれて来た人々の、ほてつた顔を心持よく涼しく撫で去つて行く。

はる／＼と訪ねかへつて来て、昔なつかしい故郷の山々を見つめてゐる人の瞳、あの赤い土を初めてふみしめようとする観光客の胸の内、唯だ／＼無量の喜びに充たされてゐる。船は今、静かに棧橋に着かんとしてゐる。

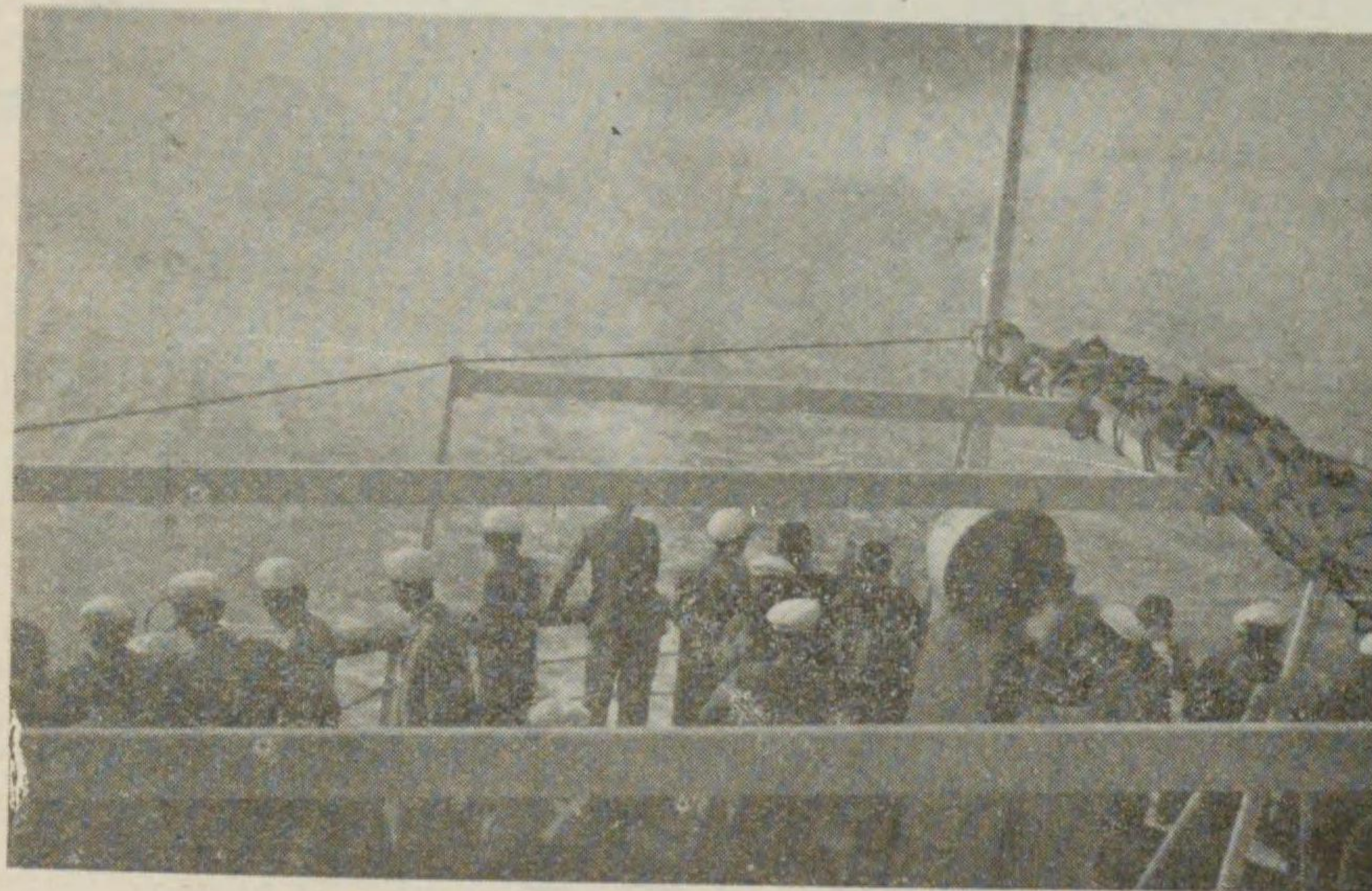
鷗が舞ふ、一羽、二羽、そして三羽、白い輪を畫いて。

禿山の中腹には藁屋根の民家が群がつてゐる。そしてその間を往來する白衣の人がはつきり浮いてゐる。

朝風にひらめいてゐる税關の旗の下あたりに群がつてゐる労働者の姿までに、私達の心はひきつけられて行く、畫の様な朝鮮の姿。

「ぼーっ」と氣笛が響き渡つた。

上陸！ 上陸だ！ 初めて踏んだ朝鮮の土地、そこには、いかめしい大きな機關車がスタートを起さうとしてゐる。新興朝鮮の意氣、それは丁度機關車の様に燃ゆる様な力に充たされてゐる。大陸的な感じが充滿してゐる釜山の港、詩に見る様な高麗の國、これが内地からわづか八時間の船便のある土地であるとはどう



大陸に近づく

しても考へられぬ、黒い冠をかぶり長煙管をくはへ、白衣をまとひ靴をひっかけてあるく人の姿、詩であり、繪でなくて何ぞ。

荷げ上のクレン(Crane)のひびきは完全に朝の靜かな空氣を破つてしまつた。そしてマツチ箱の様な小さな電車が狭い道路をけたましい雑音をたて、走つて行く。「チゲ」を脊負つた男女が雜踏する。

大空に一條の墨を流してゐる對岸の造船所の煙突には、力づよい齒車の音と多くの鮮人労働者の力があふれてゐるのが想像される。

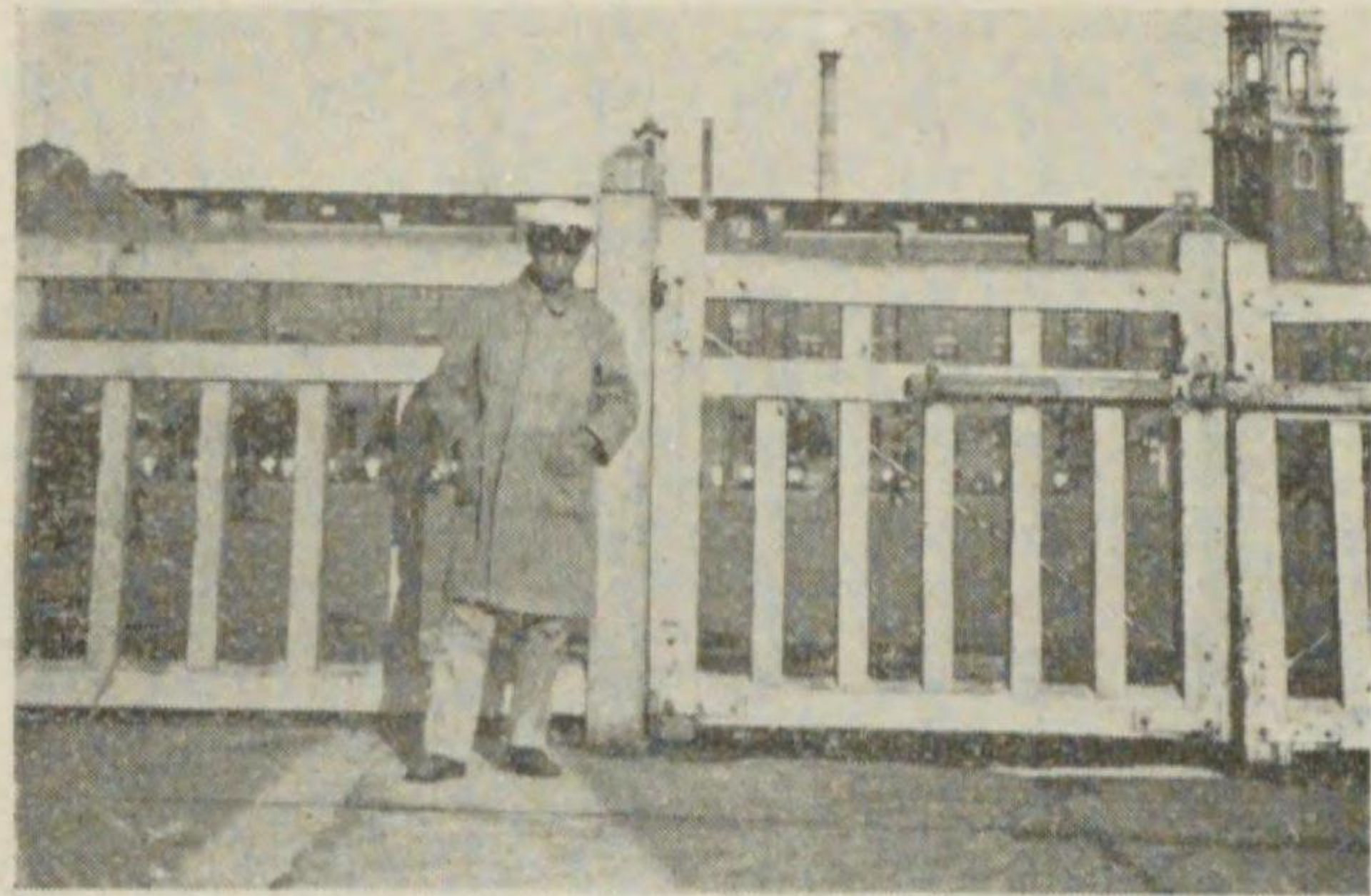
「朝鮮の燃ゆる様な新興の力は動いてゐる。」かう考へながら歩む私達の足は一步々々強くベエイヴメントをふみしめて行く。

若々しいポプラの並木の梢に一塊の白雲がひつかゝつてゐる。そして白衣のすそを拂ふそよ風は塵芥を拭うてベエイヴメントの上を流れて行く。

——朝鮮よ！ 汝の力は燃えてゐる——

自動車よりの描寫

松 永 幸 助



奉天驛にて

廿四日朝、朗らかな太陽の下に釜山に着く。お得意の鉢巻をした大きい鮮人人夫が、ちろ／＼みてゐる。町は自動車で見物だ。車内でみんなが少女のおさげについてゐるリボンを議論してゐる。

軽い笑ひをのせて自動車は走る。子供は手をあげて迎へる。青い青い畑を両側にして走る。

白衣の人の長ぎせる、足どりまで違つてゐる。

「あんなの銀座へ出したら愉快だらうね」

「みものだぜ」

女の人がかれさうな小川のにごり水に勇ましくきぬたをうつてゐる。

特有の白い粘土性のかわいた道、そのほこりをあびて、悠然とあるく彼等。

畑の間に、ポプラが、青空の雲のきれつばしを掃く様に、づしんとつゝたつてゐる。突然！ どしんと尻がとびあがつた。

おそろしい道だ、道を横切つて流れた河がかれてしまつたのだ、水がある時はどうするのだらう。そんな事を三つ四つやつてゐる内に岩石の山がみえ出す。

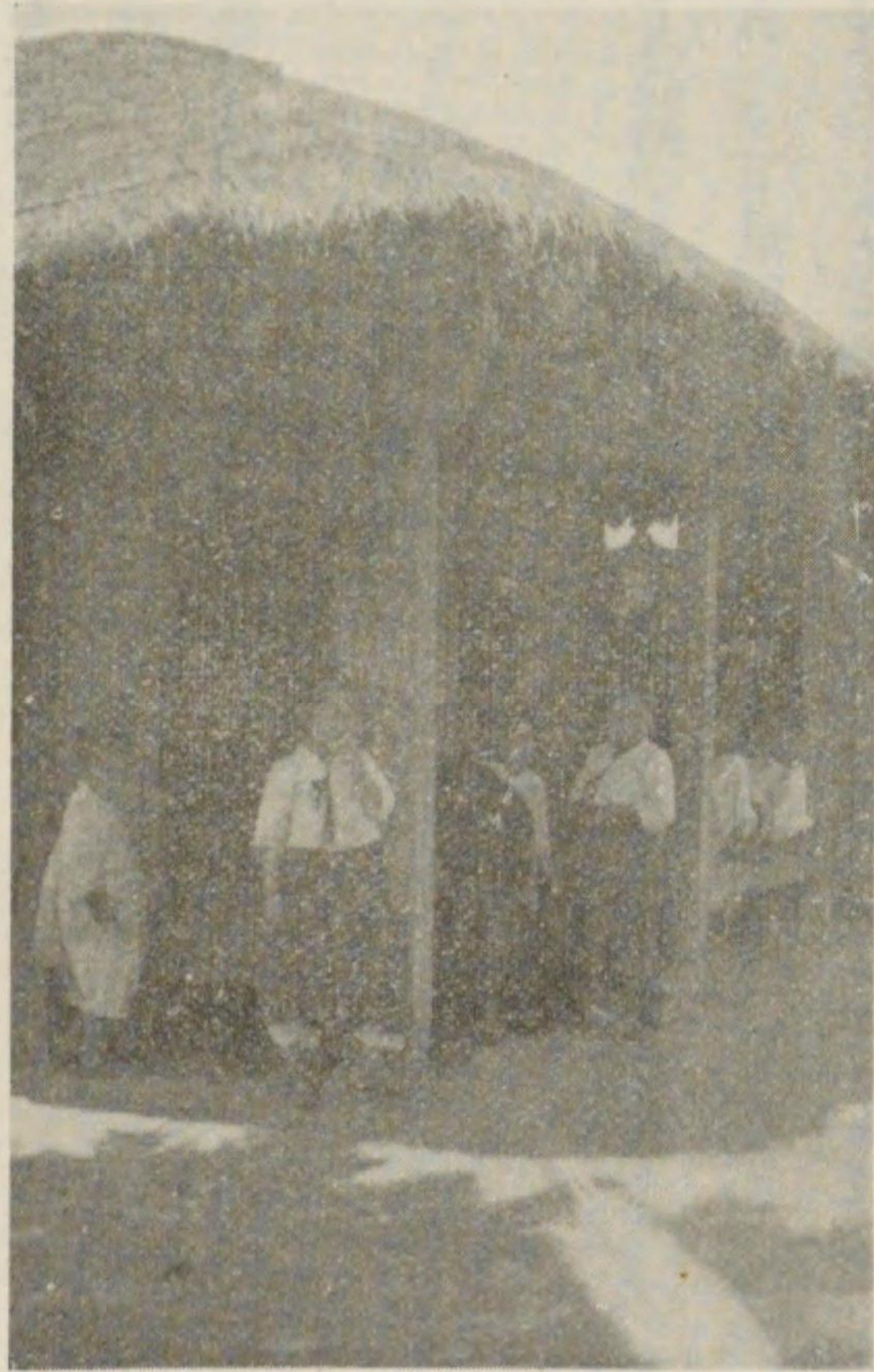
大きい岩石が、山腹や麓にごろごろころがつてゐる。

牛をつかふ農夫、黙然として通行する自動車にひとみをおくる。

浅くて水のきれいな川がある。整つたコンクリートの橋を渡る。

下では子供が河端のポプラのかげで無心にあそぶ、涼しい風が渡る。

正午蔚山着。附近に子供が集つてくる。



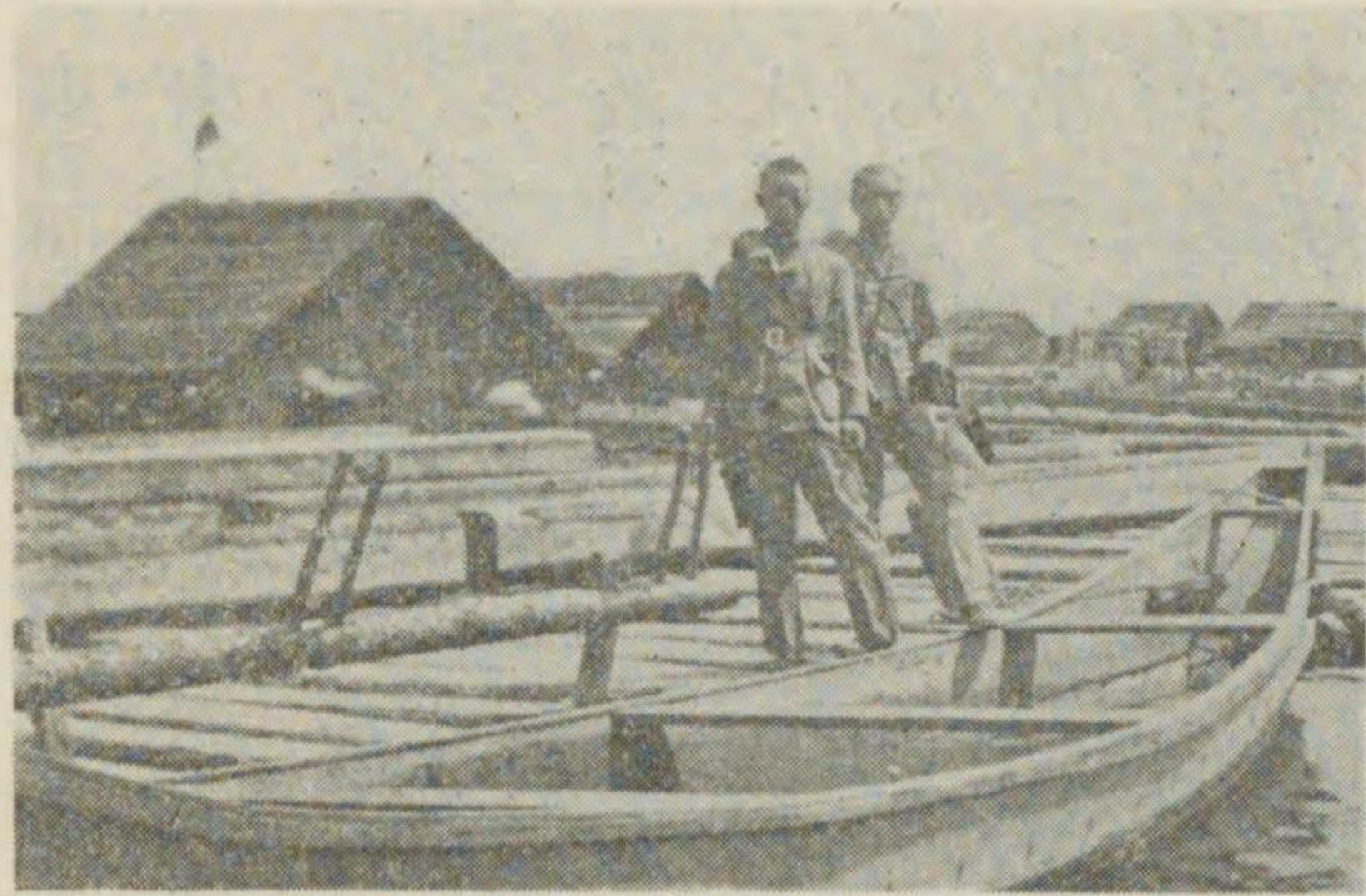
田佐羽(州慶)供子の舎田

およそ丁寧な言葉で話をされる。
「アナタドコカラキタノデスカ」
「東京」「……………」「内地の東京」
——大きくうなづく——

緑の深い蔚山城趾が向ふに見える。

傳説の慶州

高木勳



鴨緑江にて

◇人の卵 昔倭國の東北一千里の海中に多婆那國がありました。更に二十里隔たつた海中に、女王國がありました。多國の王様は含達婆と云ひまして、或時女王國の娘をその妃となさいました。妃は妊娠してから七年目に大きな卵を生み落しました。さあ王様を始め人々は大層驚いて、相談いたしました結果「人が卵を生む道理は無い」と云つて之を棄てさせる事に決めました。然し

妃は面目無いと云ふものの、流石に自分の生んだ子供ですから、「むざ／＼捨て、了ふのも可愛さうである。それに卵の中から何が出るか譯らない」と仰つて、帛の布に包み、寶物と共に海に流してやりました。卵の入つてゐる箱は流れ流れて金官國と云ふ國へ着きましたが、その國の人々は「そんなものを取ると碌なことは無い」と云つて又押流して了ひました。

そして遂に辰韓の阿珍浦の口に漂着いたしました。

そこへ一人の老嫗が通りかかり、その箱を開いて見ますと、中から可愛らしい男の子が出て參りました。

老嫗は大層嬉んで「之は天の授けに違ひない、大切に育てましょう。」と、その男子を家に連れて歸りました。

その男の子は日々大きくなつて、立派な男子になりました。

その時以來、老嫗の家の附近で、鵲が鳴く様になつたので、その名を鵲の音を取つて昔セキと云ひ、箱を解いて出て來たのであるから脱解と名を付けました。

脱解は常に漁をして老嫗を養つてゐましたが、或る時老嫗は「脱解よ、お前の骨相は人並では無い。必ず立身するに違ひない、勉強して名を擧げなければいけない」と申しました。

それから脱解は勉強に働き、特に地理に通じました。

或時吐含山に登つて、四方を望み見て居りましたが、「楊山の一峯は日月の勢がある。」と云つて、そこに行つて見ますと、其處は瓠公と云ふ人の邸でありました。脱解は密に炭を澤山用意してその庭に埋めました。

その翌日何くはぬ顔で瓠公の家を訪ねた脱解は、「この宅地は私の祖先のものであるから、返して貰ひたい。」と申しました。勿論、そんな突然な、無理な要求に驚いた瓠公は、之を斷りました。が到々水掛論になつて、判官に訴へて黒白を定めて貰ふ事に致しました。

判官は兩方の言ひ分を聞きましたが、脱解に

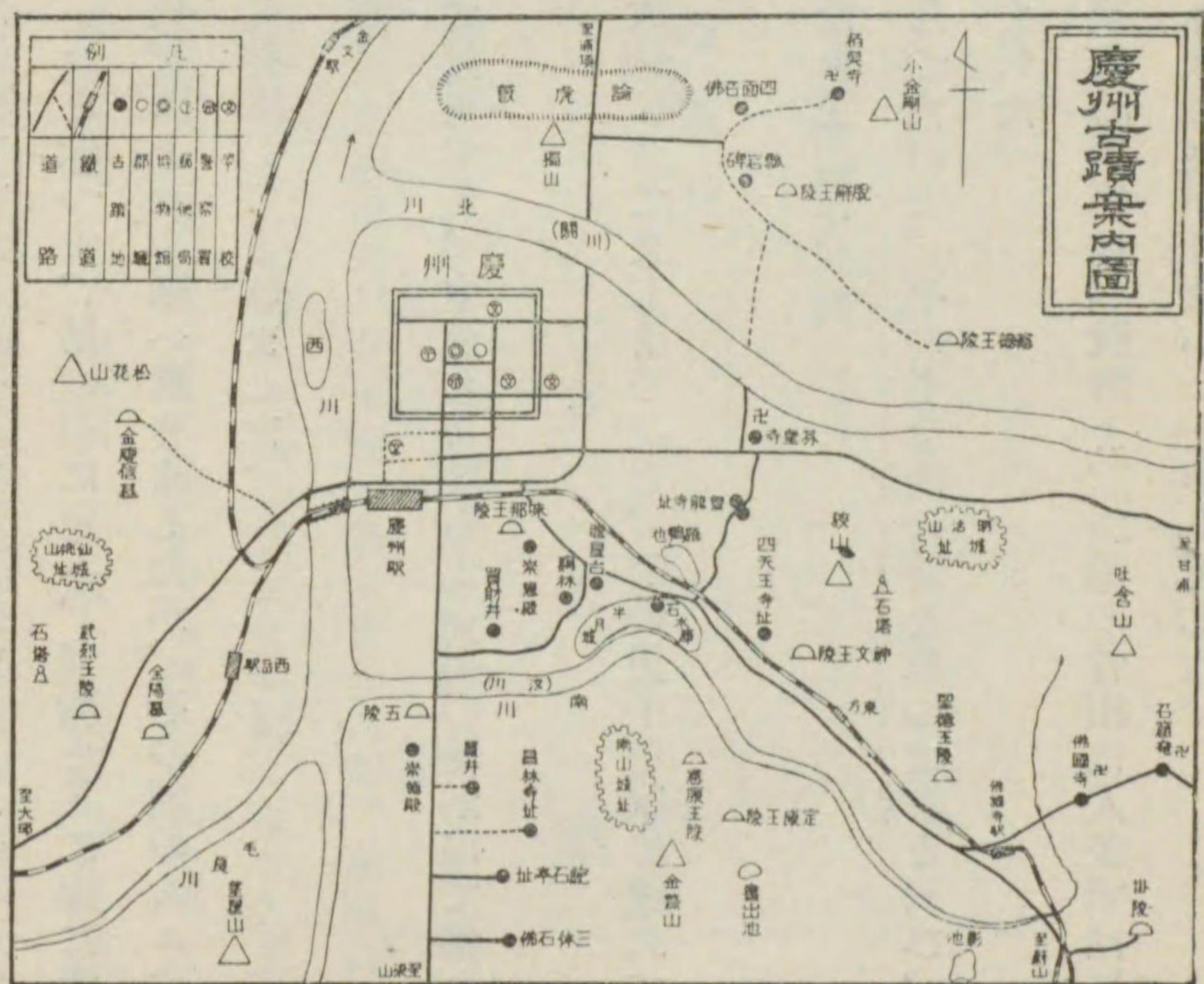
云ひますに、「お前が、この宅地を祖先の所有であつたと云ふには、何か根據があるであらう。その證據の品を見せよ。」

すると脱解は「別に證據と云つても何も御座いませんが、唯私の祖先は鍛冶屋で御座いました、そして旅行中に宅地を人に奪はれたので御座います、ですから宅地の何處からか炭が出て來るに違ひありません。」と申し述べましたから、早速堀つて見ますと、果して炭を多く發見しましたから訴訟に勝つた脱解は、うま／＼とこの土地を得て了ひました。

その後の脱解は日々その勢力を強めて、王様の家臣の中の大豪傑と云はれる様になりました。そして南海王からその娘を貰つて、儒理王の薨する時に六十二才で王の位を譲られまして、新羅の第四の王、昔脱解王と名乗りました。そして瓠公から取つた土地には月城と云ふ城を築きましたが、その形の半月形な處から半月城と呼ばれ、今でも慶州の新羅の史蹟の一として有名であります。

(實説。脱解王は肥前、玉名郡の人である。初め任那に行き、慶州に來りて國政を輔け、後遂に王位についた。)

◇鷄林 脱解王在世中、王が或夜、金城の西の始林の方向で鷄の鳴くのを聞いて「はて不思議な事だ、眞夜中に鷄の鳴くのは變だ。」と早速人を召して之を調べさせました。





鶏

使の人はその方に行くと、始林の中で、火が燃えて空の方から紫の雲がすつと垂れて参りました。そして雲の中から黄金の箱が落ちて樹の枝に掛りました。使の人は、呆然として立つて居りましたが、雲も火も消えた時分、やつと氣が付いてその樹の下に行きますと白い鶏がその下で鳴き出しました。

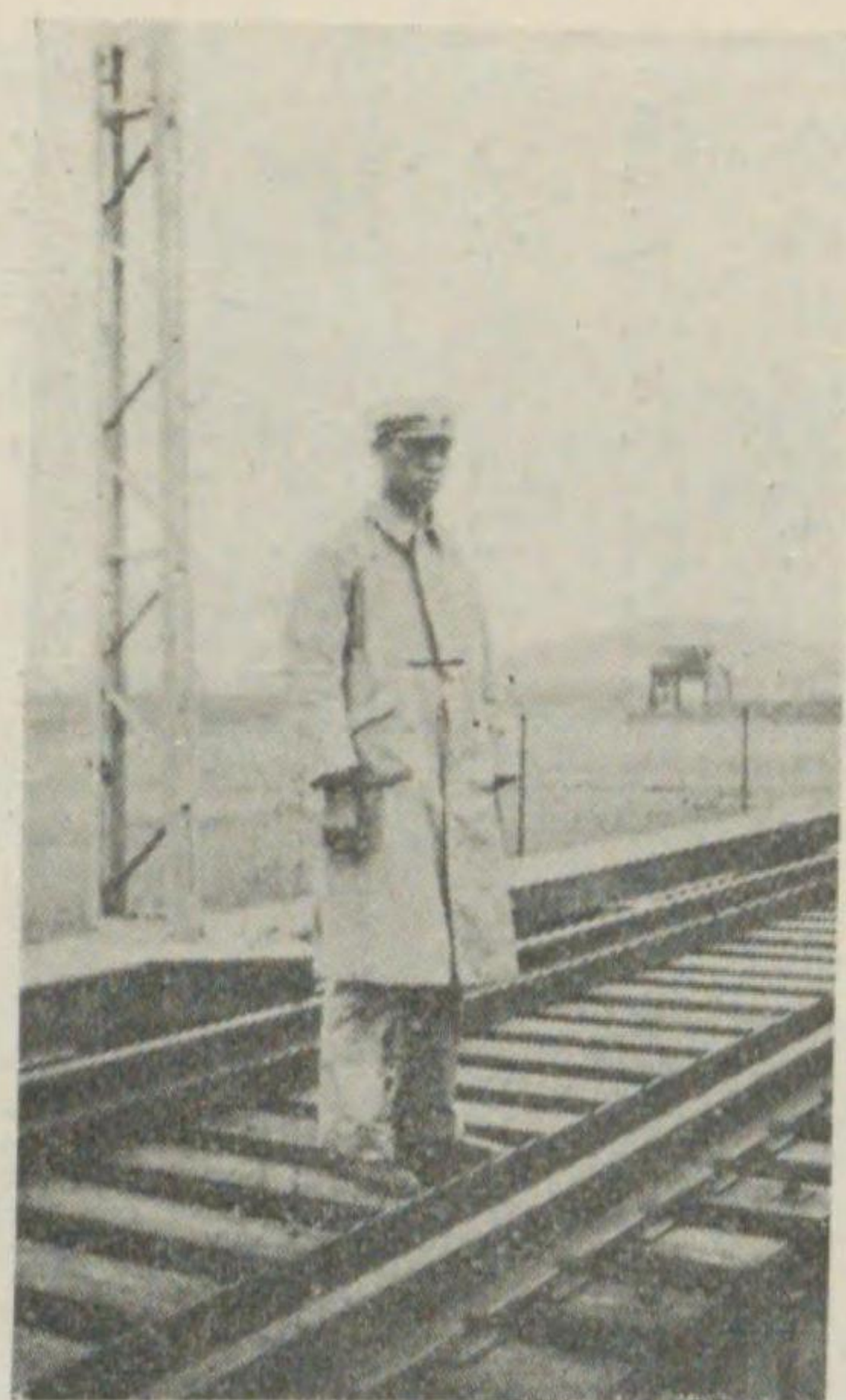
林

使の人は引返して、王様にその様子を言上致しますと、王は「直に見に行かう。」とて従者を率ゐて夜中に始林に行きまして、その箱を取り開いて見ると男の子が一人臥て居りましたが、王を見るとすぐと立ち上りました。その姿が立派であつたので、王は之を抱へて王室に入り、其の後その男子を王子として育てましたが、日に日に大きくなり、名を閼智アノチ（小兒の意）と付けました。この太子は金の箱から出たから、金氏と名

付けました。そして始林を鶏林とし、之を國號と致しました。

この鶏林も史蹟の一つで有名です。

阿鼻叫喚の鮑石亭



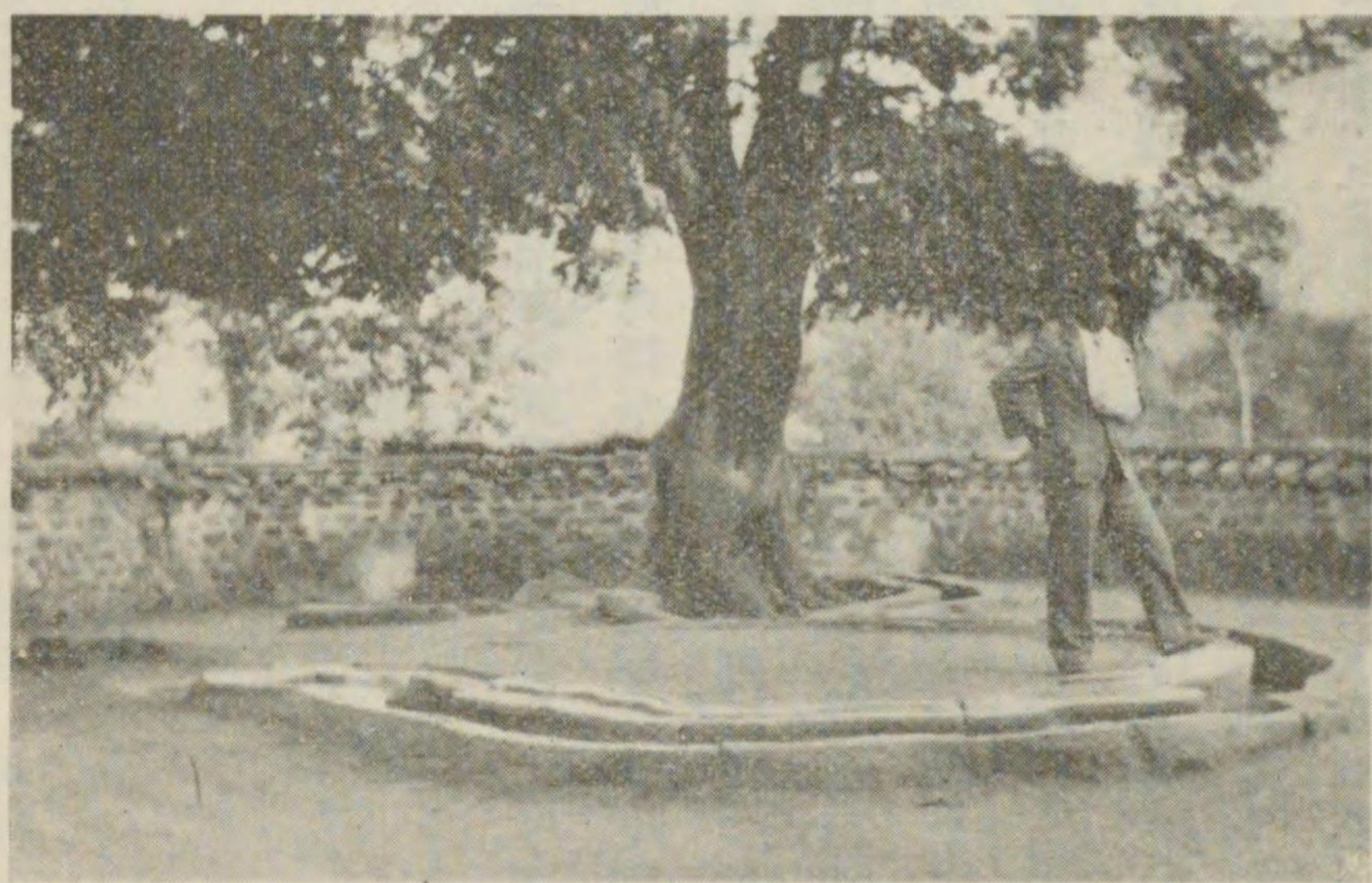
満洲甘井子にて

彦陽街道を南へ、南山の西麓、五陵から十町餘も行った所に、鮑石亭の白標がある。老樹四五本が物語顔に枝を伸ばして、低い塀が圍らされてある。此邊は新羅時代の離宮苑池の一部で、此鮑形の水溝に水を流し、觴を浮べて曲水宴を行った所で、現在それが

が其儘に存して、石渠は曲りくねつて鮑形をなし短徑十五尺、長徑十九尺、渠の深さ八寸。水落しから流す水は渠中を蜿々と弛く流れて他に排出する仕掛けで、今は石渠とその中心にある槻の大木一本が静寂の天地に遺つてゐる。新羅は、四十九代憲康王の時、最も殷富を極め民家の悉くが瓦葺でどんな田舎でも今日とは反對に草葺は稀であつた。五風十雨、五穀豊穰、民も享樂に耽り笙歌の聲

吉田 泰次

は道途に絶えない。或日此所に王が遊幸すると、南山の山神が現はれて舞を奏した。けれどもそれは王一人に観えて他の人々には少しも見えなかつた。舞ひ罷む後、王は今觀た山神舞を舞つて見た。後此舞の振を傳へた。舞樂の祥審と稱するものがそれである。新羅の黄金時代もさう續く理もなかつた。其五十五代景哀王は打續く泰平に慣れて日夜歡樂の極を盡し、政も顧なかつた。南西の一角に卑賤から身を起し、後百濟の國を建て漸々其勢力を擴げつゝあつた甄萱を新羅朝では一介の兇賊位と意に留めず、其四年九月後百濟は軍を進めて蔚州を攻襲し、疾風の勢を以て王都に迫るのであつたが、王は斯かる危険の身に逼るも知らず、妃嬪などを具して此所に宴を催してゐた。晴天の霹靂、後百濟の大軍は一時に此所に亂入し、今迄の歡樂境は忽



鮑石亭

ち修羅の巷と化して杯盤狼藉中に王は悲しい最後を遂げたのであつた。

過去の都慶州

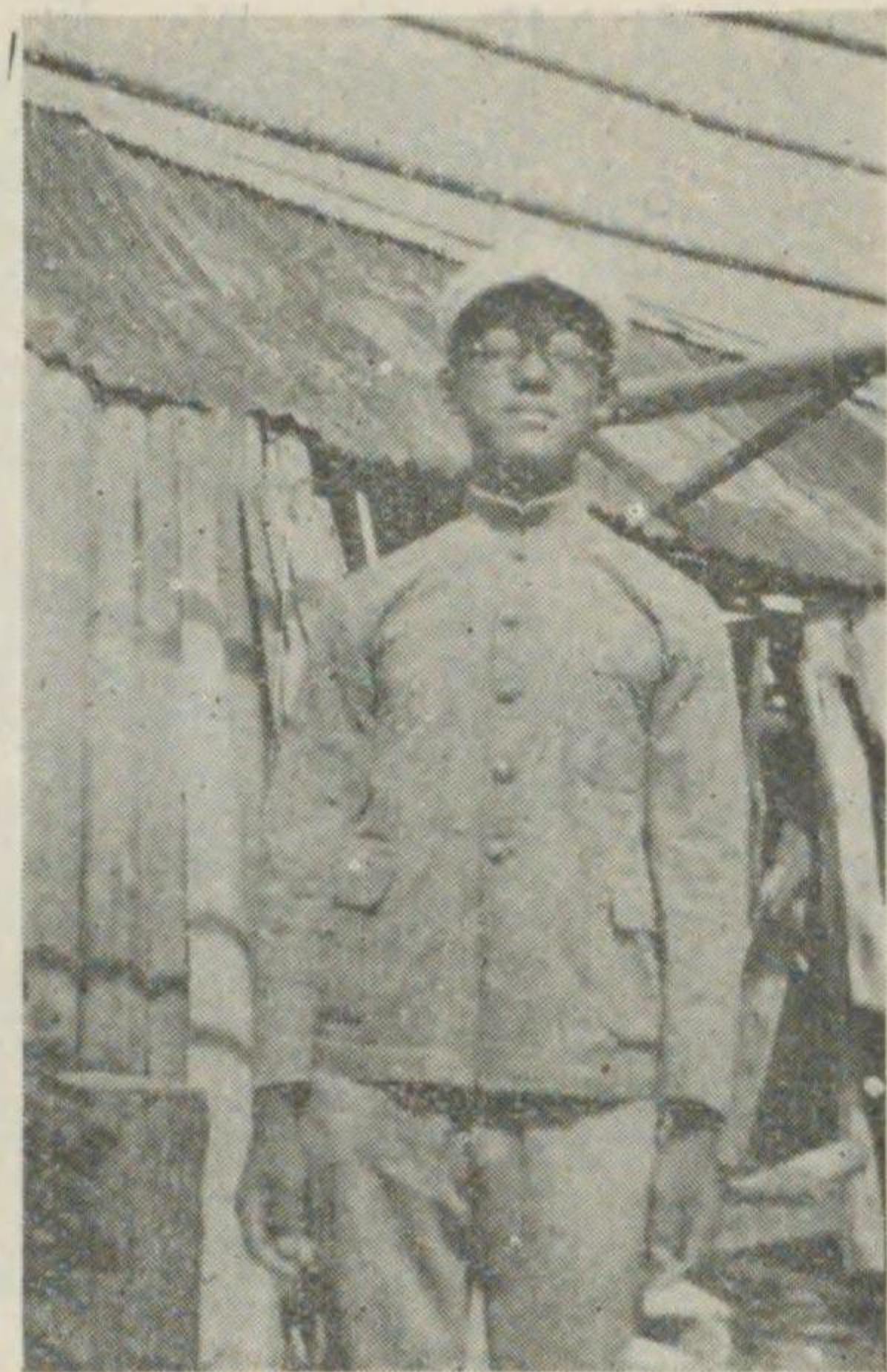
石川昇

朝鮮の東南隅、日本海近く、明活、仙桃、金鰲、金剛の四山が四圍に聳え、東西二里、南北二里半の慶州盆地をかこんでゐる、其の盆地の中心の町である。

往古、人民が亂を避けて、このあたりに移り、史上で云ふ辰韓の六部をなした。ところが、漢の宣帝

の地節元年に、六村の村長が關川の岸で大會を開いた時に瑞兆があつて、楊山の麓の蘿井から現れた神童が、乃ち新羅の始祖となつた赫居世で、十三歳で王位につき、よく人民を撫して國の基を定めた。

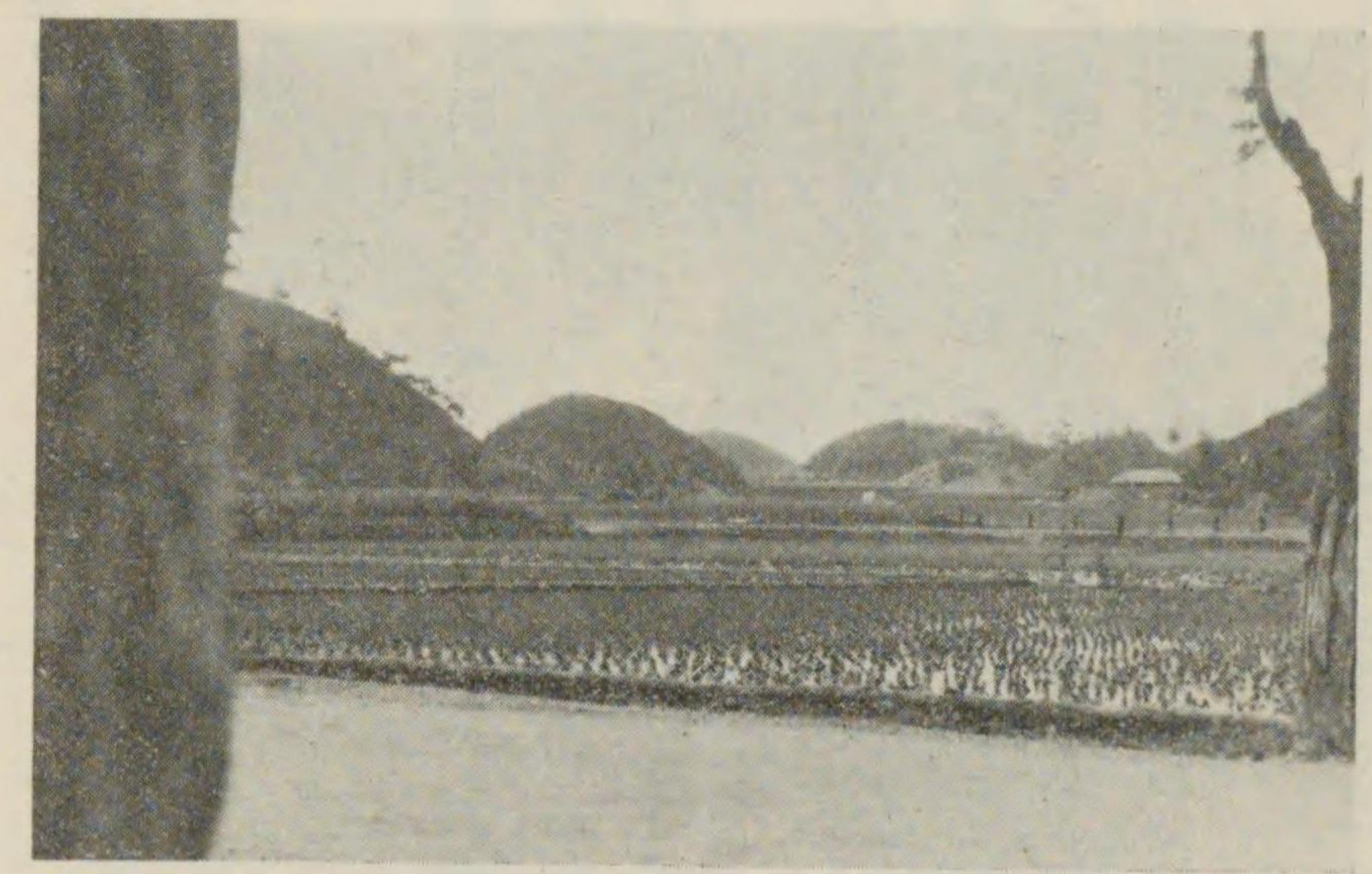
この新羅の勢盛んになるにつれ、辰韓、辨韓の諸部族が相次いで降り、婆沙王が聖賢の道に則り



歸りて

國を治め、民を救つたから、四隣みな其の徳に化して國の基は愈々確立した。其の後廿九代武烈王に至つて百濟を亡し、其の子文武王に至つて高句麗を倒し、完全に半島統一の偉業をなし遂げ、盛んに支那と交通し其の文物を輸入して、國運隆盛を極め、高僧名儒の輩出をみたが、其の頃を絶頂として次第に衰へ、五十六代敬順王に至つて、高麗起ると共に、始祖以來五十六代九百九十二年の社稷も亡び、千年の文化を誇つた都慶州も、没落の道をたどつた。もつとも慶州と云ふ名は高麗の時代になつて付けられたものである。

慶州は我が國の京都の様に古器遺物の充満である。殊に其の遺物の物語る古代文化の價値は偉大なものである。日時計の石片、青硝子を着せた興輪寺の瓦、唐草瓦、巴瓦、新羅燒の陶物等の貴重な物が、澤山に慶



慶州の古墳



過去の慶州(出土品を賣る子供)



慶州博物館 梶野義雄

州博物館に保管せられてゐる。

古代朝鮮に、どんな種族が、どんな物を使用してゐたか、又石器はどんな風に輸入せられ、銅鐵の様な金屬の使用され始めたのは何年頃からであらう等、古代朝鮮の殆ど大半がこれらの遺物より知る事が出来る。又近年金冠塚より發見せられた純金二貫匁目の黄金の冠は、素晴らしい物で、其の附屬物を合せて換貨してみると現今の何十萬圓にも相當するであらうと思はれる。之が遺骸と共に埋まつてゐたので、精巧ではないが豪華であつた極盛時代の新羅をしのぶ好い資料である。

慶州が最も榮えた頃には、戸數十二萬八千、人口八十萬の人が住み、今の慶州盆地全體をうめてゐた。其の家屋は、全部瓦葺きで、日夜絃歌の斷える時がなかつたと云ふ。現在では戸數三千、人口一萬數千の微々たる川舎町になつてしまつた。町も昔の街の西隅の一部にすぎない。

アーリラン、アーリラン、アーラリヨ

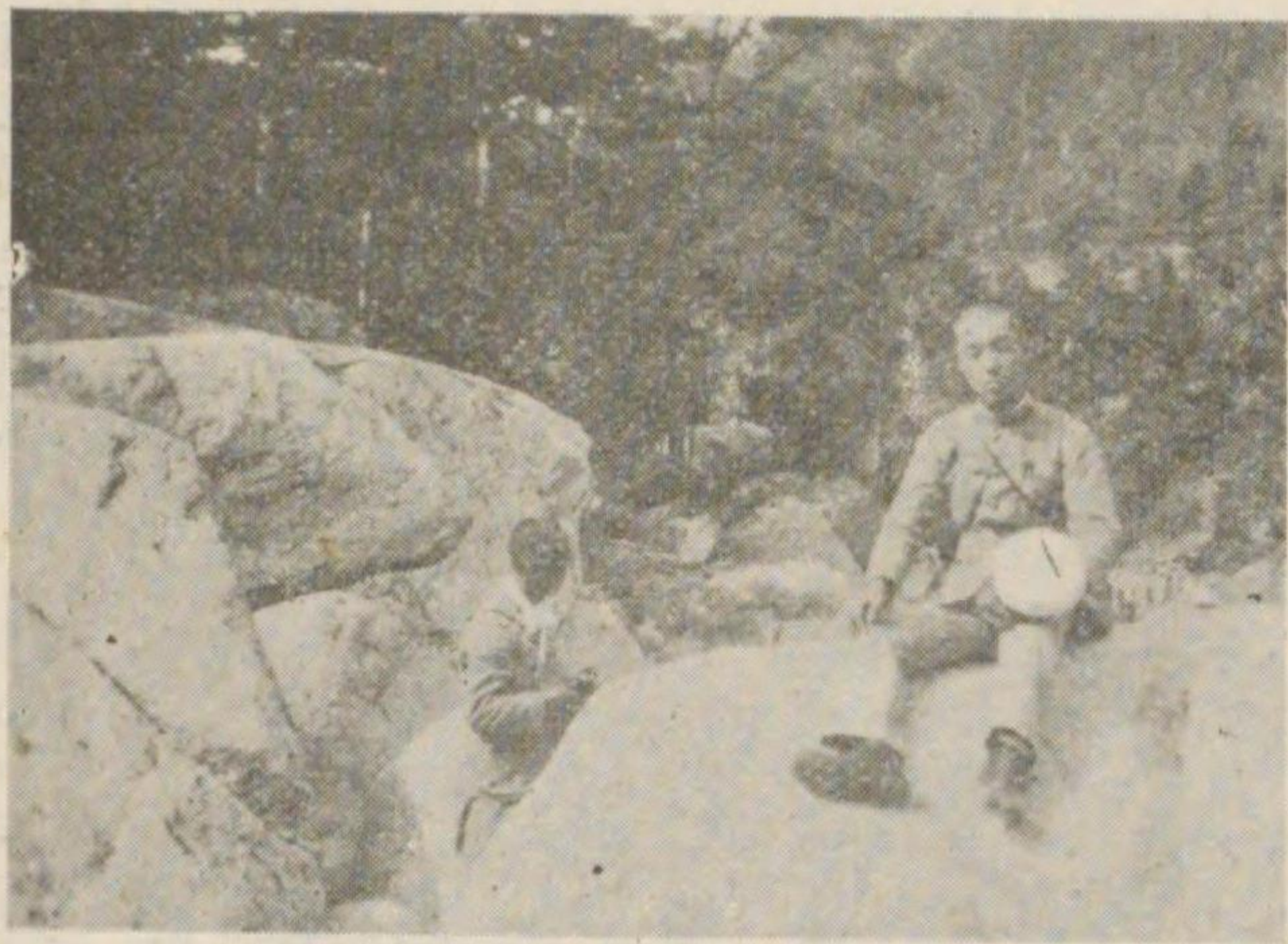
アーリラン、コゲロノモカンダ

ナルユボリコ、カナンニムン、

シンニト、モカソ、パルピヨンナンタ。

金剛山の概観

梶野義雄



三佛岩のほとりにて

紹介せられて居つたものである。

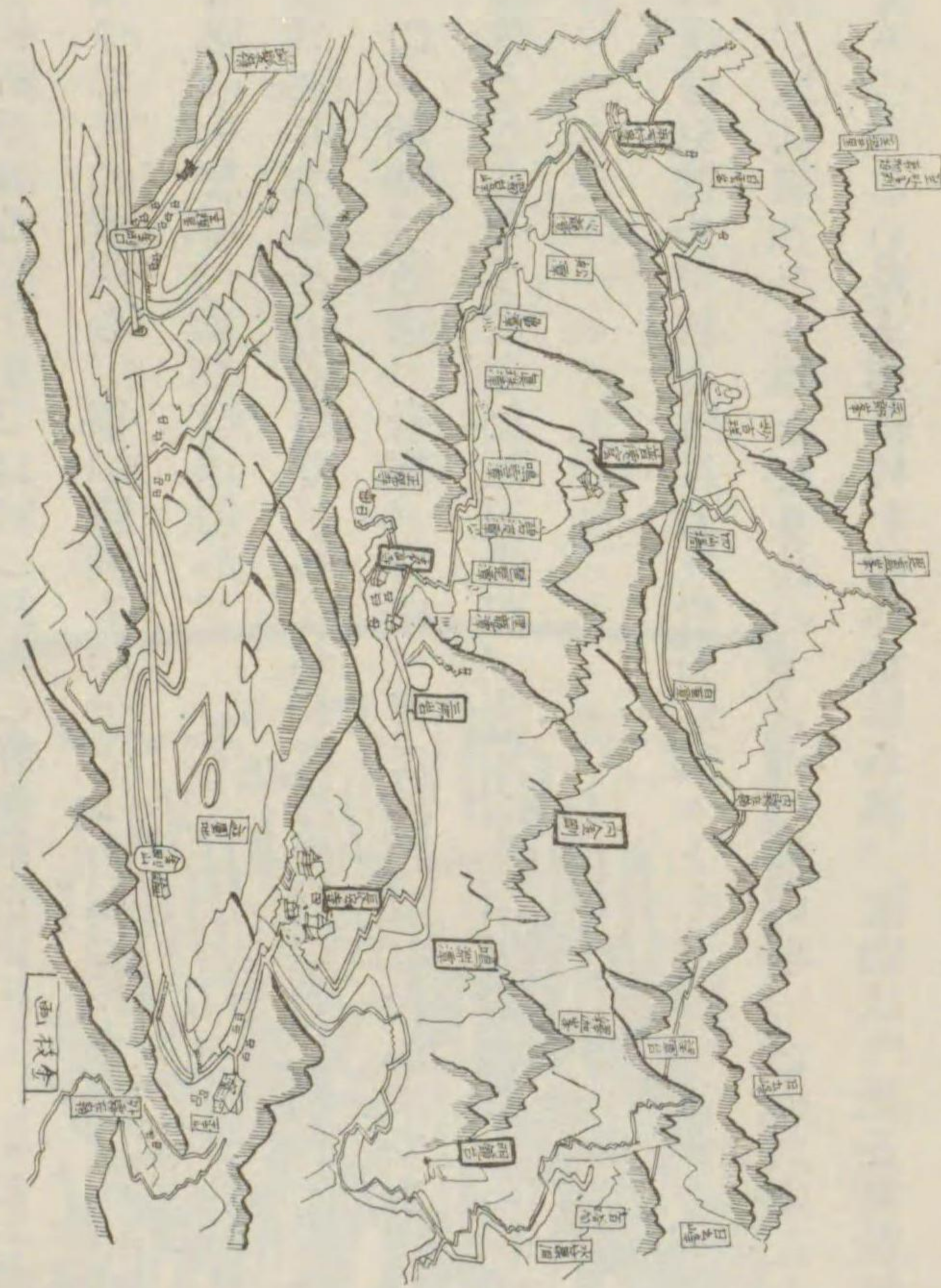
「金剛山」と云へば「あゝ聞いた事がある」と誰しも云はれるであらう、しかしそれが何處に在り、又何で有名なかと聞かれると、皆目わからない人が大多數の様である。私は我が校第一回探勝團員として概要を書いて見よう。

金剛山は京城の東方、江原道にあつて、南北六里、東西二里乃至四里、實に二萬五千町歩、それに海金剛一帯約五千町歩を合した地域で、古來、三金剛ともに名が著れて居た。然るにその後新金剛とて、外金剛の東方に未探檢の新たな領域が加へられた。之れとても、たゞ未探檢だと云ふに留まり、その地には古刹楡帖寺有り、その歴史より見ても千數百年以前から、すでに

其の地形は朝鮮半島の脊梁である大白山脈中に在つて、其の位置は甚だしく東海岸に迫つて居り山は概ね花崗岩より成り、之れに太古の結晶質片岩をまぜてゐる。此の大岩層が南北の大斷層線に従つて幾多の地層が陥没し、そこには千數百米の急傾斜の山稜が生じ、之れが長い年月の間に驚くべき風化侵蝕を得て、最も複雑に彫刻削磨せられ、又幾多の深溪が派生して出來たものである。そして其の峯數たるや、實に一萬二千峰と數へられ、殆んど想像の外である。其の中でも、南北に連なる國士峰(一、三八五) 虎龍峰(一、四〇三) 遮日峰(一、五二九) 日出峰(一、五五二) 月出峰(一、五八〇) 昆盧峰(一、六三八) 等あげれば數を知らない。此れ等の分水嶺により東西に分たれる。其の東部は海に面して概して峻嶮な爲、東方高城附近より之れを望めば、全山岷々として鋸の如く高峯亂立して、見るからに非凡な大風景地たる事を肯かせる。西方は段々と高原地帯に下つて居る爲め、左程奇勝も見られない。

内地に於ては日本北アルプスが之れに似て居ると云はれるが、絶対に比すべきもので無いと思はれる。

「朝鮮へ行つたら金剛山を見なければ其の價値は無い」と云はれるほど、今日世界的に知られて來たのは何によるか。朝鮮當局の紹介より、むしろ外國の旅行家の功であつた。



剛 金 内

一英人、イサベラ・ビショップ夫人は、一八九四年に此の地を探勝し流麗な筆で金剛山の絶勝を禮讃したさうである。又我が邦人としては大正六年七月、大毎紙上に菊地幽芳氏が「金剛山探勝記」を連載したのが最も著名である、今日では秋の紅葉の好季節を主とし、年に一萬數千人に上る探勝者があるさうで、従つて交通機關も、宿泊設備も十分とのひつゝある。

さて其の風景の構成にもなるべきものは何か。

第一、其の特徴は、全山殆んど花崗岩で、其れが長年月の間に風化浸蝕を受け、又彫刻削磨せられ、縦横に碎破せられ、奇峰、絶壁、岩臺、岩柱、實に其の語を失ふ程である、岩臺は實に驚かされるもので、何十疊敷ともあらう大きな花崗岩が、清水に洗ひ出されてゐる様は、此の地ならでは見られない。

且崩落せる岩石は溪谷を埋め、到る所巨大な岩石が疊々として凄じばかり、又、岩を洗ふ水は、瀧となり、湍となり、或は淵となり瀬となり其のテンポの早い事、之亦此處ならでは見られない。

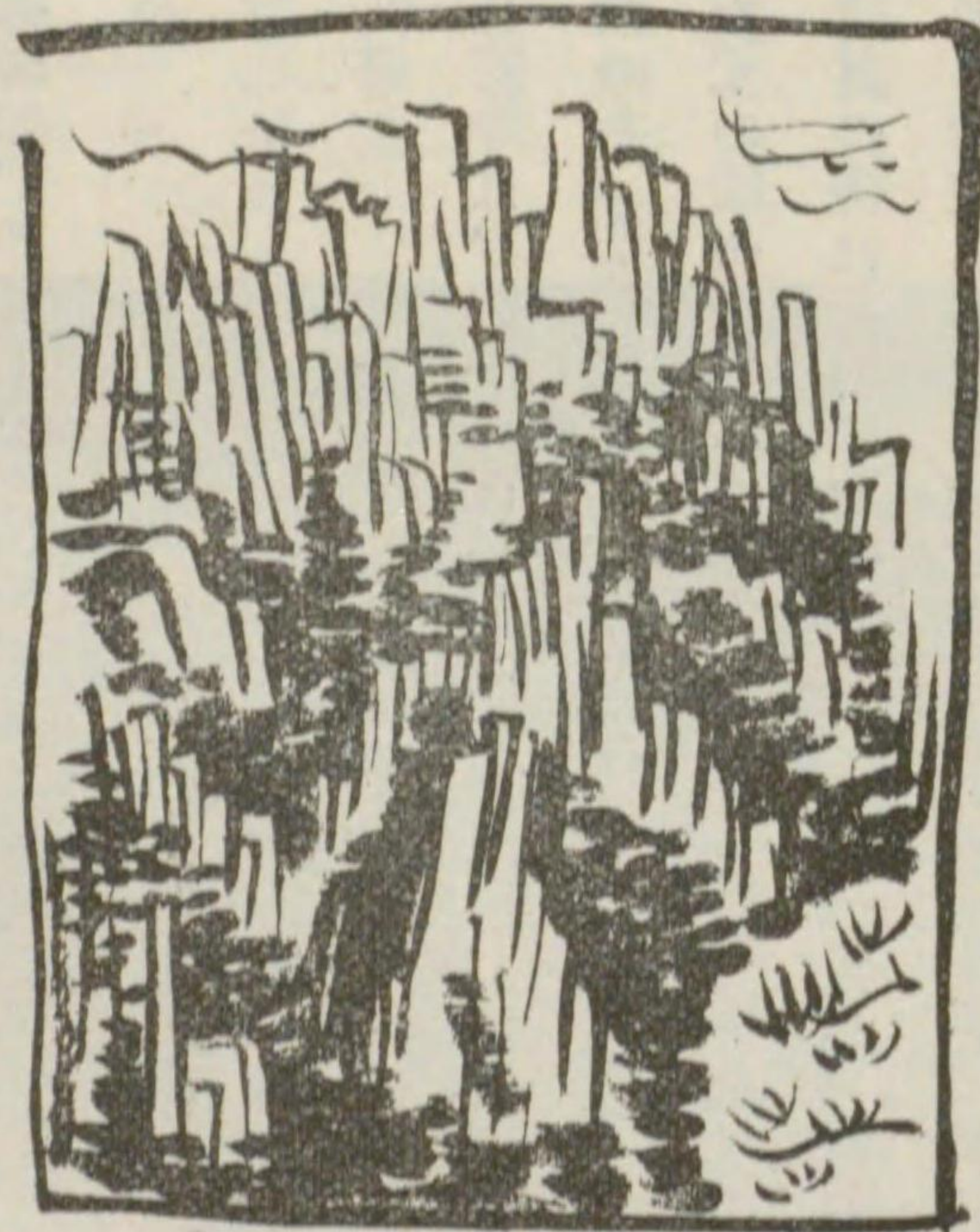
第二は、朝鮮にはめづらしい豊富な森林を持つて居る事、植物は内地と大差無く針葉樹、闊葉樹等混交し又、鬱々たる紅葉（内地のと少々異なる）は秋の盛觀を思はせた。

第三は、古來靈地として、各所に古刹が占據し、其の佛堂、草庵は自然と人工との巧妙な調和美

であることは其の傳説と共に、又金剛をして有名たらしめたものである。

要するに其の雄大さは、少しでも當地を探勝した者でなくては、わかりかねるであらう。

最後に探勝のルートを少しのべて見たい。先づ我々の取つた様に、内金剛だけを一日にして簡単に探勝するのも、せはしい人にとつては妙案である。しかし誰れでも此處へ来た以上、物足りぬ感にうたれる、だと云へ一々大溪谷を探るには、少くとも十數日を要する、此れでは餘り専門家過ぎる。二三日にしてその大觀を探勝するのが最も適當にして効果あるものと思はれる。先づ往復とも夜汽車を利用すれば一日で内外の何れかをさぐり得るが、その勝のクライマックスなる萬物相に達するには、



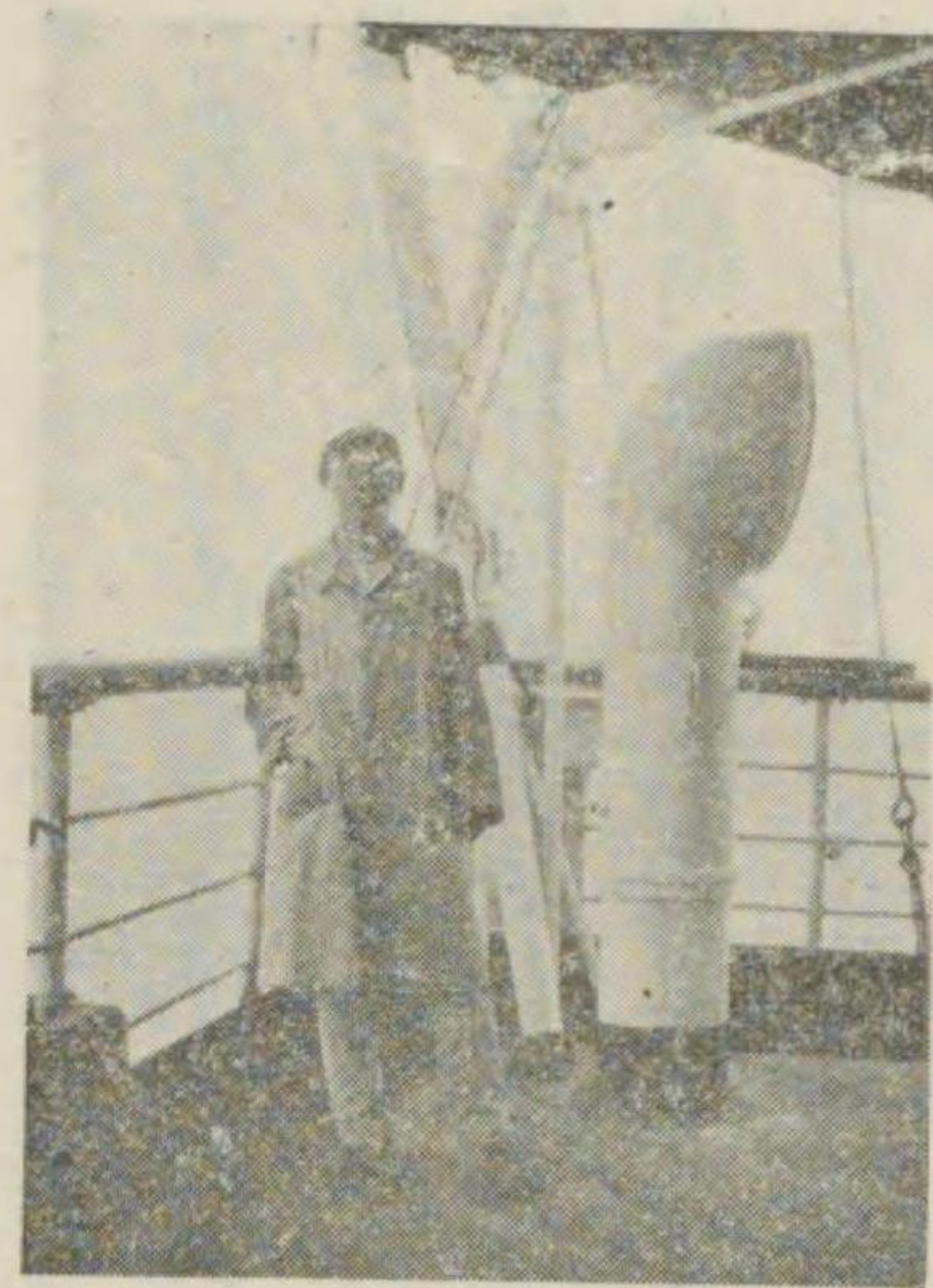
金剛山 金枝新次

少し無理である。残念ながら我々一行も、日程上此の萬物相に行かれなかつた。最も理想的なのは第一日、長安寺發、明鏡臺、表訓寺、正陽寺、萬瀑洞を訪れて摩訶衍庵泊。

第二日、四仙棺を経て崑崙峰登山、九龍淵に下り、神溪寺を訪れて温井里泊。
第三日、萬物相探勝の上引返し出發。

とはいへ私等が思ひもよらなかつた金剛山の探勝は、うれしくも追想する次第である。

金剛山探勝

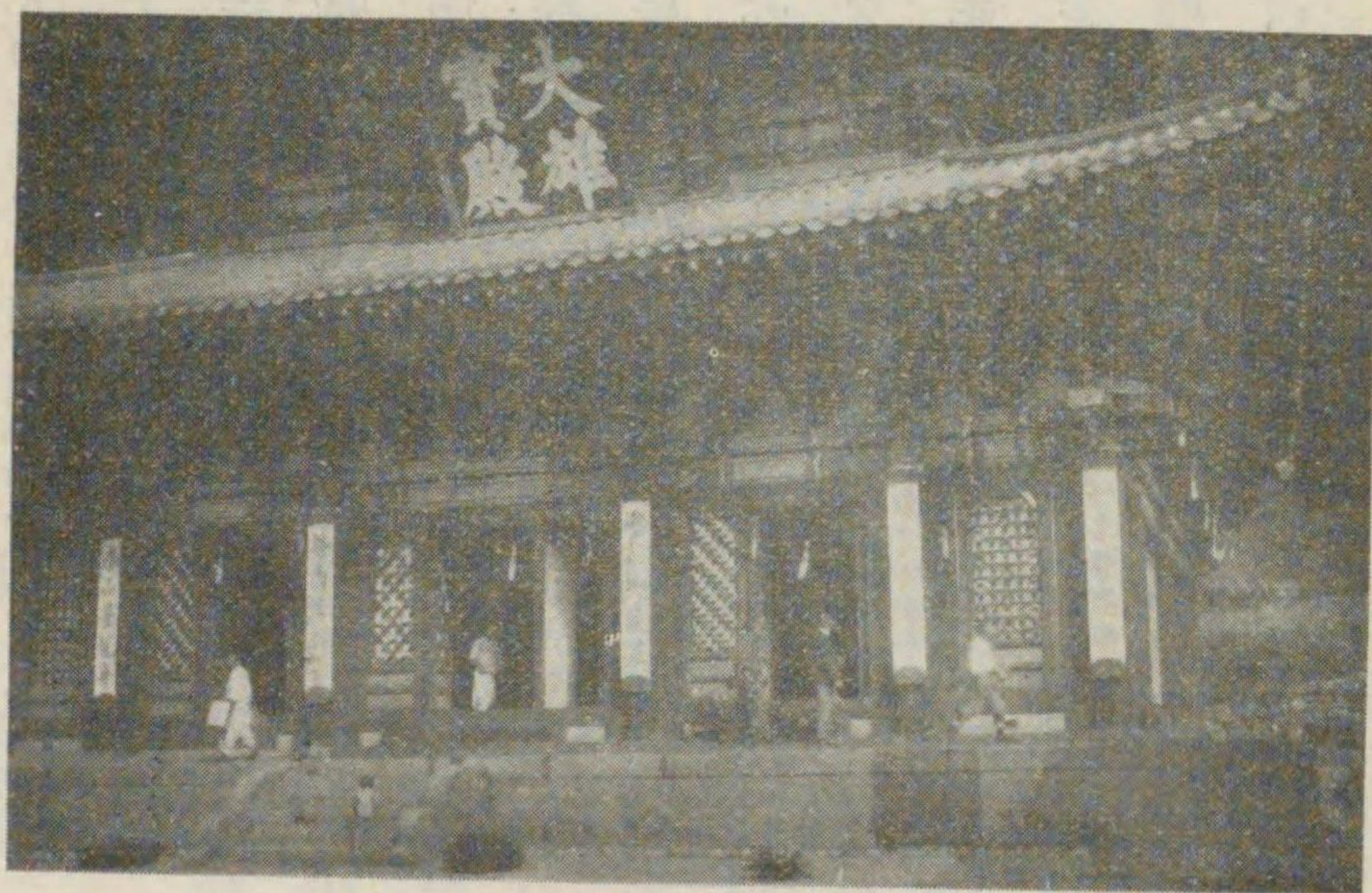


海上へ航行中

神戸長一郎

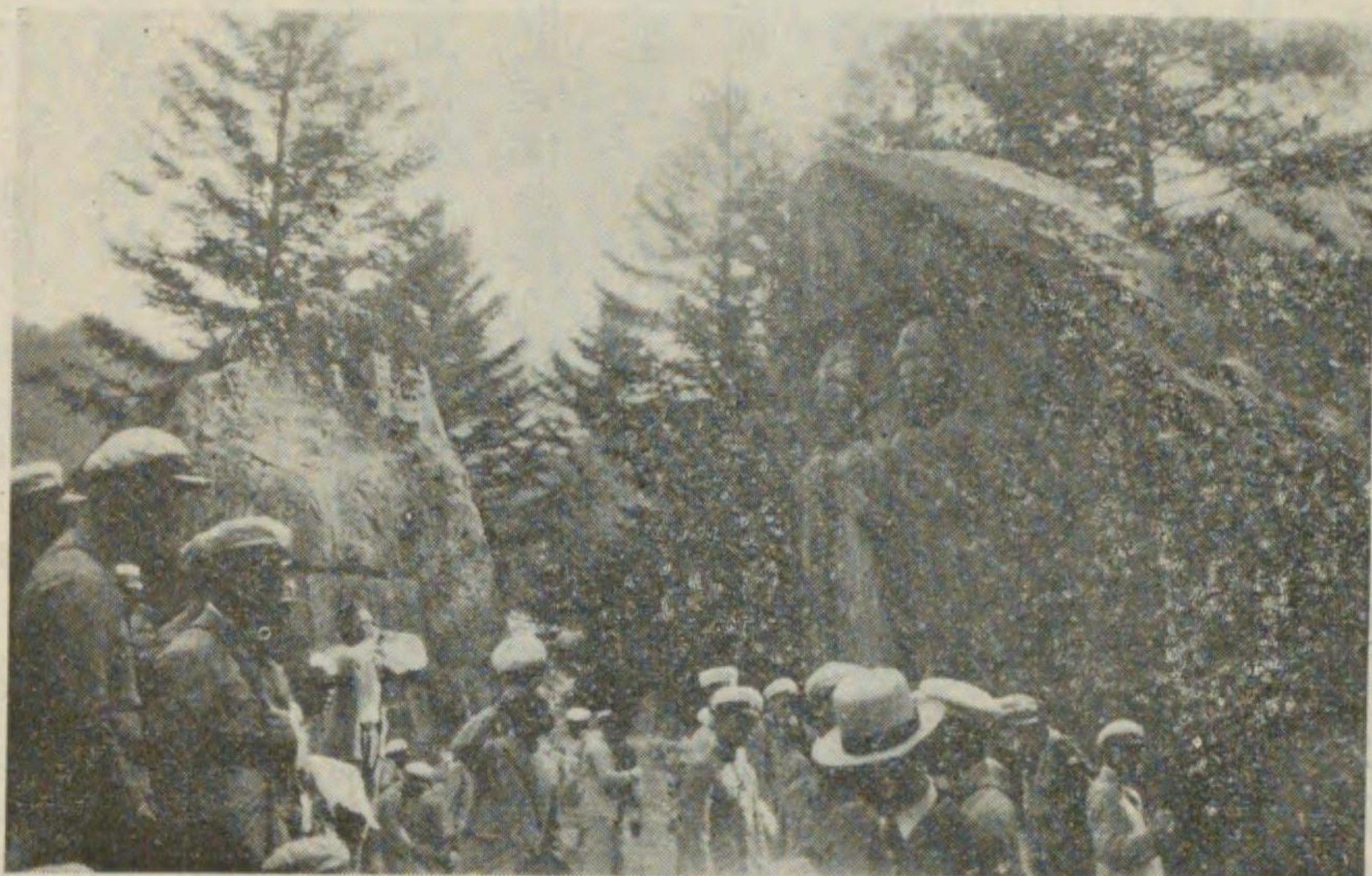
一、長安寺は、約千五百年前の創建以來、法燈度々消えんとしたのを、高麗の成宗王の妃が崇信して重修せられた。其後また元の順帝の皇后が本寺を信仰されて、輪奐の美を加へた。其の後は次第に廢墟となつて了つたが、李朝世祖王は此の由緒深い名刹を廢墟と成すに忍びずと、再建せられて以來、代々李王家の信仰厚く、現今の六殿七閣一門が建ち揃つたのである。彼の文祿の役に兵火にかゝつたといふが、どうも、それは眞實でないとのことである。最近政府は四萬圓を投じて修理した。

二、三佛巖の傳説は、今から約六百年前高麗に懶翁祖師と金同居士と云ふ二人の彫刻家があつた。懶翁祖師の方が技倆が優つて居たので、金同居士は口惜しさの余り、二人で技倆の競争をして、負けた方はあの鳴淵潭に身を投じて死ぬ約束をした。そこで懶翁祖師は前に三佛を彫り、金同居士は裏に六十三佛を彫ることにした。二人は一心不亂になつて働んだが、金同居士の彫つた一尊の耳が落ちて居たので、遂に負けとなり、約束通り身を鳴淵潭に投じて死んでしまつた。其後金同居士の子供三人が父を尋ねて此の山に登り、父の死を聞いて悲しさの余り三人とも亦潭に身を投じた。それらの人が不思議にも、化して石となり、鳴淵潭に鳴る水と共に、限らない恨をのべてゐるといふ。これには異説もあつて、金同居士を立派な人格者とし、懶翁



長安寺

梶野義雄



三 佛 岩

の親戚の奸人のために、自ら運命を觀じて彫佛後、靜かに淵に投じたのだともいはれてゐる。

三、表訓寺は長安寺を去ること二十町ばかり。萬瀑洞の急湍を前にし、青鶴峰を後にし、五仙七星法起の諸峰が周圍に重疊してゐる。門前の凌波樓から見る景は先づ驚嘆に値する。寺は千九百年前新羅文化の面影を残して居るが今は荒れるにまかせ、昨年五月の大洪水で四殿が流れたさうで見るから荒廢の感が出た。

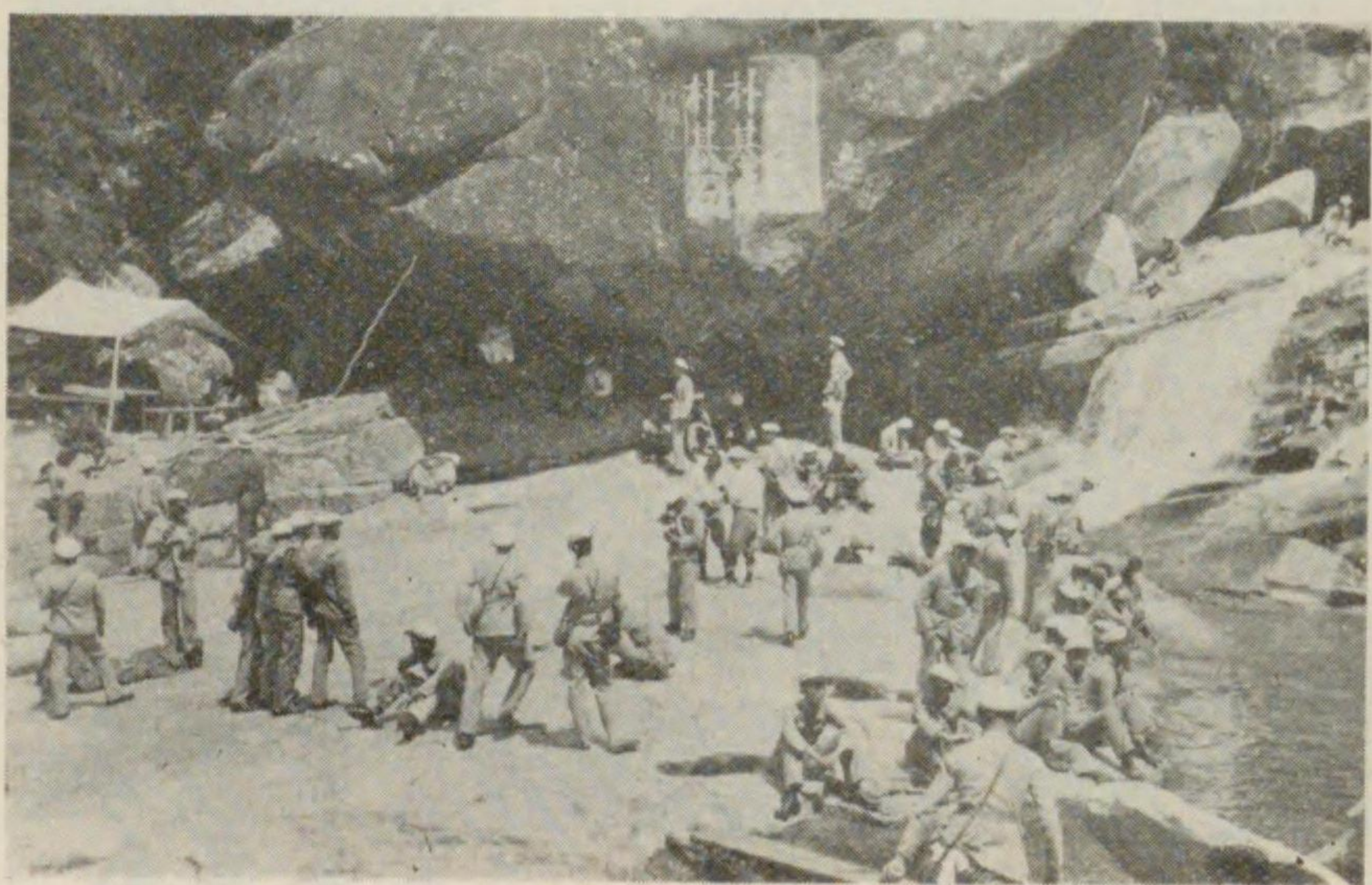
もと、新羅文武王十年に表訓祖師の創建したもので、後、天師三年世祖の時修理され、光緒十六年華山大師が般若寶殿を重修し、同十九年衡雲大師が靈山殿を創建した。斷髮嶺といふ山は、昔新羅佛教全盛時代、佛教を信じないものは國民でない様に思はれて居た、金剛山は其の聖地であつた、入山するものは、皆髮をこ

三 野 堀 郎

ゝで切つたさうである。

四、萬瀑洞は百川江の上流で、表訓寺より上半里に亘る峡谷の名である。四方の谷から落ちる數千の流れが一つになつて此の急湍となるので、亂流廻奔、水聲石に激して四山を震撼してゐる。

此れより上に萬瀑八潭がある。四邊の樹林は楓と檜と松で、蔦かづらが無數に絡みあつてゐる。秋は紅綠映發し、谿山觀望は又一しほであらう。谿中一面の花崗岩で、その砂礫も皆純白であり、溪水は、清冽銀の如くである。白龍潭、影娥池、を経てすぐ向ふの法起峰の懸崖に、一本の鐵柱で支へられた普德窟と云ふ小さい庵に關聯して、觀音様と若い坊さんのローマンズの傳説があつた。普德窟に行く道は凄い岩道でお經を讀む聲や木魚を叩く音を、いかにも靜かに聞いて此



万 瀑 洞